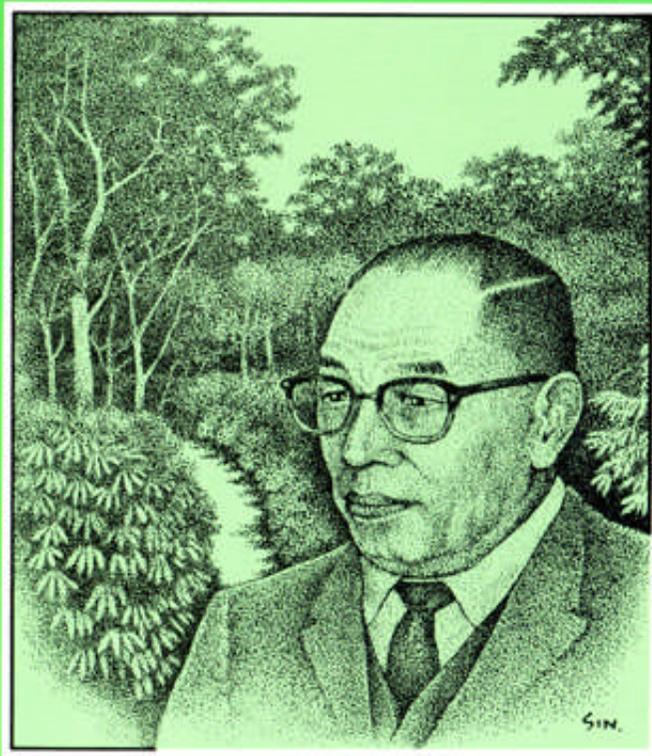


細江静男先生とその遺業



刊行委員会編

細江静男先生とその遺業

発刊のことば

刊行委員長 山本勝造

昨年五月のある日、浅海護也夫妻の訪問を受けて、自分たちをブラジルへボーイスカウトの一員として呼び寄せて下さった、細江静男先生の生き様とその遺された業績を、ブラジル日本人移民史の一環として残して置きたいと、熱っぽく話して行かれました。

それ以采各方面に呼びかけてその輪を拡げて行き、協力を求めました。

何分にもこの国における日本人移住者社会の保健衛生、治療に関する現存のすべての組織、施設の創立に関与しないものなし、と申しても差しつかえない程、故人の四十五年に及ぶ業績を、一冊の本にまとめることは至難のことと思われましたが、刊行委員のメンバーが、各々の分担された分野での絶大な努力を結集することで、不可能と思われたことを可能にして下さって、今日の発刊の運びに到ったものでありまして、お礼の言葉もありませんが、同時に次の古い言葉を想い出さずにはいられません。「人間は一人では何も出来ませんが、一人が創めねば何もできません。」ということですが、私どものやっつて来たことの発端から出来上りまでのいきさつで、これほどピッタリした言葉は他に見当りません。木当にありますが、とうございます。

ご挨拶

岐阜県知事 梶原 拓

岐阜県出身の故細江静男先生の功績を後世に伝える「細江静男先生とその遺業」が、先生を敬愛する方々のご尽力により、この度刊行の運びとなりましたことを心からお慶び申し上げます。ブラジルの医療の向上に大きな足跡を残した日本人医師の活動の記録が、記念すべき日伯修好一〇〇周年にあたる本年に刊行されますことに感慨を覚えずにはられません。

先生は一九〇〇年(明治三三年)に岐阜県益田郡中原村(現益田郡下呂町和佐)で生まれ、一九三〇年(昭和五年)に慶応義塾大学医学部を卒業されると同時に外務省留学医として、当時世界一大きな無医地区といわれたブラジルへ渡られました。以後、一九七五年(昭和五〇年)に亡くなられるまで、四五年の長きに亙りアマゾンなどの奥地巡回診療、病院の建設などに努められ、生涯をブラジルの保健衛生事業の向上に捧げられました。その間、先生は富も名声も求めず、その身その家庭を犠牲にしながら、ひたすら苦しむ人を救うことに努められ、医師として最高の使命を果たされました。その恩恵は不慣れた移民生活に苦しんでいた邦人社会だけでなく、人種を超え現地人にも広く及びました。先生の情熱と偉業に対し心より敬意を表しますとともに、先生を生んだ郷土の県知事としてこの上ない誇りを感じずる次第であります。

す。

先生が亡くなられてから二〇年が経過しようとしておりますが、その偉業を偲び称えようとする人々が、今なお多数おられることに改めて先生の偉大さを痛感いたします。ただひとすじに人に愛され、人の役に立つ人間になることを迫り求め続けた一人の日本人医師の良心と人間愛の記録が長く後世に伝えられ、ブラジル、日本のみならず、世界の平和と医療の向上に貢献することを願って止みません。

いあいさつ

下呂町長 松田正治

日系コロニアの医療保健活動や無医地区の巡回診療に献身的に尽力、多くの人命を救われた、私たちの町の名誉町民・細江静男先生のご功績を称える「細江静男先生とその遺業」が、有志皆様方のご努力により立派に刊行されましたことを心からお慶び申し上げますとともに、大きな感動を覚えております。

細江先生は、本町のご出身で、益田農業学校を卒業後、一時、地元で農業指導に当たられたと聞いております。そうした中で村の窮状に憂慮された先生の胸に「医師になつて人々の役に……」という強い信念が生まれたの

でなかりうかと推察いたします。そして上京、苦学の末、慶応大学医学部に入学されたのであります。昭和五（一九三〇）年、大学を卒業された先生は、その年の夏、外務省の留学医としてブラジルへ渡られました。

ブラジルにおける先生のご功績については、本誌に詳しく紹介されておりますが、バストス村での診療活動、サンパウロ大学医学部での苦学とブラジル国の医師免許取得、同仁会での医療活動、全精力を傾注された日本病院やカンポス・サナトリウムの建設、さらには青少年の育成、ボーイスカウト・カラムル隊の育成、等々に身命をなげうって尽力されたのであります。富も名誉も望まらず、ひたすら日系コロニアの安全と生活を守るために捧げられた崇高な生き方は、「道庵先生」「アマゾン先生」と慕われたのであります。そのご生涯は、正に「移民の父」といふべき偉大な存在であったと存じます。その先生に、日本国は勲三等瑞宝章、日本医師会は最高優功賞を贈ってご功績を称えたのであります。

私たちの町でも先生が亡くなられて二〇年、町制施行七〇周年、新下呂町誕生四〇周年を迎えた今、細江先生のご功績とそのご生涯を顕彰するとともに、永く後世に伝えるべく「ふるさと歴史記念館」に、関係皆様方のご理解、ご協力を得て、在りし日を偲ぶ資料等を展示、公開いたしました。

本誌の刊行と私たちの町の顕彰事業が、奇しくも時を同じくして企画、完成できましたことに、ブラジルと日

本の深い友好と細江先生を敬愛してやまない人たちの恩愛の絆を感じております。これを機に両国の友好親善が益々深まり、そして、新たな交流が始まりますことを祈念し、お祝いのごあいさつといたします。



細江静男先生（1964年）

目次

7

発刊のことば	山本勝造
ご挨拶	梶原拓
ごあいさつ	松田正治

細江先生の歩んだ道

10

細江静男先生とバストス病院	1
細江先生と日本病院	10
日本人同仁会	20
同仁会を中心とした細江医師の活動について	20
細江静男先生と奥地巡回診療	58
サンパウロ日伯援護協会と細江静男先生	63
細江静男先生略歴	73
	83

細江先生の手記

91

開拓地の病気は減った……しかし……
密林は健康地だⅡブラシヨン曾野綾子の説は笑止な話だ
私が考えていること……

私の意見 移住
.....

細江先生の思い出

117

父のこと・母のことⅡ知らなかった日々Ⅱ：細江仙子
父 森口薫 145
自我を捨てた細江 森口幸雄
祖父 森口秀幸
道庵先生 山本勝造 153
細江静男先生の追憶 橋富士男 158
恩人 細江先生 吉田揚助
細江ドクターの思い出 上野正二
亡き細江先生御夫妻を偲んで
..... 橋本暁子 166
細江先生の追悼記念によせて
..... 八木橋裕子
細江御夫妻追憶の記 中村教二
細江先生と私 山下一
細江先生の思い出 小池潔 182
細江先生との出会いと別れ 岩中徹
細江ドクター 成田知子 195
ボーイ・スカウトの隊長さん
..... 大沢愛子
赤飯の一喝 平尾健

細江先生の歩んだ道

細江静男先生とバストス病院

浅海護也

細江静男先生が慶応義塾大学医学部を卒業後、宮嶋幹之助教授の推挙により、念願であった、無医村に働く一村医（外務省留学医）として、渡伯、一九三〇年八月二八日、伯国、サントス港に上陸、直ちに赴任した、サンパウロ州ソロカバナ線ランシヤリア駅バストス移住地は、移住地開設二年目にあたり、倒木、焼け野が原に、日本人開拓農家が点在する、そして、其の周囲はうっそうとした見渡す限りの緑の原始林であった。

此の開拓の緒に着いたばかりのバストス移住地に、間もなく、白亜の殿堂、バストス病院が細江静男先生達によつて建設されるのであった。建設後の本病院は、衛生施設の完備したバストス移住地として入植者獲得の一翼を担った程であったと言われる。

では、先ず、先生が赴任される以前のバストス移住地の保健衛生機関に就いて記述したい。バストス移住地は一九二九年六月七日、ラプラタ丸渡航者一八家族が、第一回入植者として入植し、其の開拓の第一歩を踏み出し

たのであったが、同年、九月、第二回入植者の入植と同時に、内田利藤次医師が海外移住組合より、派遣されて来たのであった。しかして、此処に、医師による医療活動が初めて始まり、病院としての機能も整って来た訳で、従って、バストス病院の初代の院長は矢張り、内田利藤次医師であつたらうか。当時、既に、仮医局がバストス移住地内の移住地事務所に隣接して、設けられており、内田利藤次医師は、熱心に診療に携わつたのであった。又、之に前後して、相沢光三郎薬剤師（東京薬専出、伯国薬剤師有資格者）も仮医局に赴任しており、薬局を担当していた。然し、内田利藤次医師の活躍期間は短かく、約八カ月の後、一九三〇年五月、伯国の開業医検定試験、受験の為に退任し、リオ・デ・ジャネイロ市に遊学した。開業医の資格がなければ医療に従事することは出来なかつたのであった。此の為に、仮医局は一時、医師が不在であつたが、ランシヤリア市在住のマルチンス医師が法的責任医となり、バストス移住地に週に一、二回出張し、移住地内の医療並びに保健衛生上の問題を解決していたのであった。そして、此の内田利藤次医師の退出と交替に、一九三〇年（昭和五年）九月頃、バストス病院、二代目院長として細江静男医師が着任され、此処に、再び日本人医師による活発な医療活動が相沢光三郎薬剤師等の協力のもとに始まつたのであった。

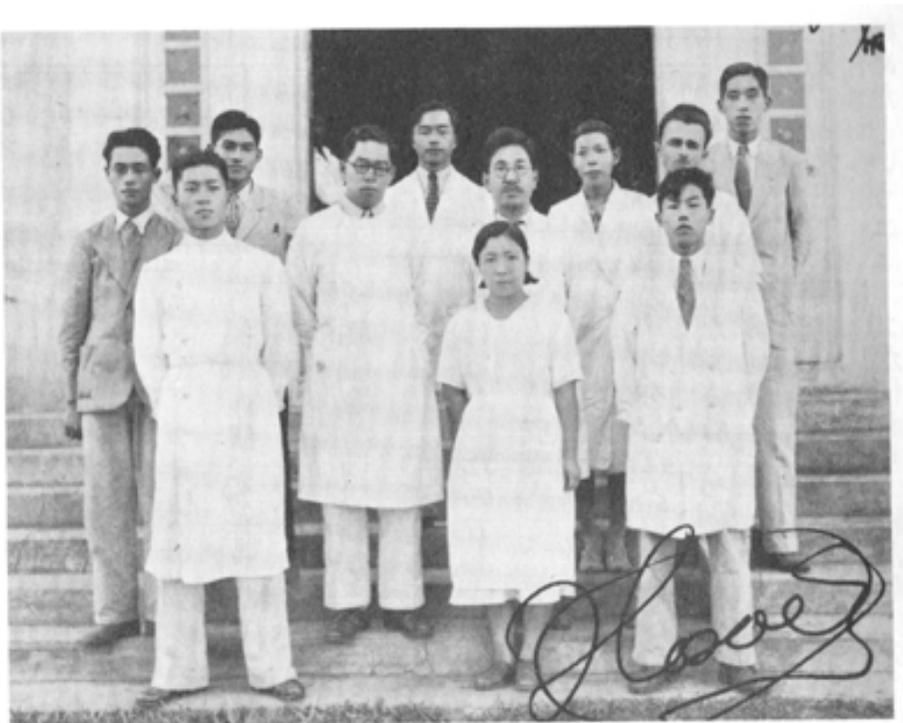
ブラ拓（ブラジル拓殖組合）は、バストス移住地開設当初より、移住地経営の成否帰趨を決するものは、教育

施設と保健衛生機関の如何にあると考へ、バストス移住地開設に於いて、逸早く、仮医局を設置する等保健衛生期間の充実を期すると共に、入植者に対して熱帯医学、殊に、其の予防知識の普及を計り、之等熱帯病の発生を防ぐことに、あらゆる努力をおしまなかつた。着任後の細江静男先生もバストス移住地をして所謂、理想的健康地とすべく、ブラ拓の此の方針に添うて、日夜努力されると共に、従采の仮医局の拡充を叫ばれ、病院の新築を強く進言、遂に其の実現を見るに至つたのであつた。

先生は、当時のバストス移住地内の入植者集団区域から約一キロメートル位、離れた丘の上に将来クワター街道とランシヤリア街道が交叉する十字路になりそうな見晴らしの良い場所を選択、建築予定地としてパビリヨン方式による病院建築に早速とりかかったのであつた。此の病院の設計は先生の出身校であつた慶応義塾大学医学部附属病院に準じ、其の規模を小さくしたもので、先生の指示に従つて、建築家、辻本登氏が其の設計並びに建築に当たり、佐藤福太郎氏が其の工事を請負つたのであつた。当時のバストス移住地の如く、建築材料が整わない開拓地に於いて、かような彪大なる本建築を起工するには非常な困難が伴つたもので、レンガの如き基礎材料でさえ、マルチノーポリス市から汽車やトラックで取り寄せた程であつた。一九三〇年九月に其の建設は開始され、一九三二年に竣工完成したのであつた。

完成したバストス病院は診察室、手術室、四つの入院

患者室（ベッド数は二〇床位）、医局員室、看護婦室、薬局そして、待合室からなり、当時、伯国、最大の農村、移住地に於ける病院であった。
又、当時、同病院に於ける診察料は無料で、往診料は移住地内であれば、どこでも、五ミルレイスであった。



バストス病院時代。病院職員と細江医師。
中央は藤村知子氏（現成田）。

そして、病院建設の完成に前後して、先生の呼び寄せで日本から福場巴看護婦が来任した。福場巴看護婦は中国の済生病院の看護婦長（日赤出）を勤めたという経験豊富な人で先生を援けると共に、後進の指導に当たった。

其の他、細江静男院長のもとに、当時、相沢光三郎薬局主任、佐々木久輔事務員、矢崎秀夫運転手そして、坂根源吾給仕等が働いていた。先生も又、伯国に於ける開業医の免許がなかった為に、内田利藤次医師の時と同様に、ランシヤリア市在住のマルチンス医師がバストス病院の表面上の法的責任医であった。

バストス病院はブラ拓によつて建設され、ブラ拓が経営管理に当たつたのであった。尚、バストス病院建設資金に関する資料は遂に、発見出来ず、不明であった。因みに、後年、二九三九年に日本の皇室の御下賜金を中心に細江静男先生の提案によつて、建設された恩賜病棟の総経費は三四コントス八七四ミルレイスであった。

ところで、一方、当時のバストス移住地の衛生状態はどうであつたらうか。先ず、バストス移住地は元来、健康地であつた。つまり、此の移住地特有の風土病は殆んどなく、夫に加えて、既述の如く、移住地開設当初より保健衛生に対してなみなみならぬ努力が払われ、熱帯病の発生も見ず、環境衛生は至極良好であつた。

想えば、バストス移住地から二〇〇、又は三〇〇キロメートル離れたプレシデンテ・プルデンテ市からポルト・エピタシオ地方に蔓延していた悪性マラリア、海岸地帯や中央線地帯にあつた黄熱病等はバストス移住地にはなかつたのであつた。一番、多発したのはフェリーダ・ブラバ（ライスマニア・テグメンターレ）という皮膚病で、アメーバ赤痢も多かつた。又、気温の変化が烈しく、

喉をいたため扁桃腺炎も多かった。虫垂炎つまり、盲腸炎も多かった。先生はバストス移住地在住五年間に、約一二〇〇例の盲腸の手術をしたと言われる。又、バストス移住地の土質が砂質であった為、風塵によつて、知らぬ間に眼が冒され、急性結膜炎を患う者も多かった。之等の他に、十二指腸虫症、トラコーマ、肺結核等もあった。

又、一九三二年頃、チエテ移住地とアリアンサ移住地に於いて、今までと連つたマラリアが流行し始めたというニュースが伝わり、細江静男先生はアリアンサ移住地へ、そして、武田義信医師はチエテ移住地へ夫々急行し、調査した結果、アリアンサ移住地の森で、猿が黄色くなつて、死んでいるのを先生が見付け、森林黄熱病であることを確認したのであつたが、此の旅行から帰つて三週間もたたぬ内に、烈しい黄疸（だん）と高熱によつて、先生は遂に倒れてしまった。毎日、三九度から四〇度の熱が出、汗、唾液そして涙さえも、真黄色になつてしまつた。食欲は全然なく、唯、薄い重湯と水をすするばかりで、普段は六〇キログラム以上もあつた体重が四五キログラム位に減つてしまつた。然し、其の後は、次第に食欲も回復し、一カ月後には、歩行も可能になり、二カ月後にはすっかり黄疸もとれた。

そして、元通りの健康をとりもどしたのは発病後一〇〇日前後であつた。先生は、此の様な訳で着伯後、早々に森林黄熱病、つまり真性よりも少し軽い黄熱病の自己体験を凶らずもやつてしまつた。然し、此の森林黄熱病に

羅つても死にはしない、助かるのだ。健康で栄養さえ充分であれば、大抵の熱帯病には負けない、必ず、治るものであるという自信を得た事で、先生の其の後の伯国に於ける長い医療活動にとって、何よりも貴重な自己体験であつたかと思われる。

最後になつたが、少し、バストス移住地時代の先生の私的な生活並びに先生の家族の推移について紹介しておきたい。

既述の如く、先生がバストス移住地の村医として働かれた、所謂、バストス移住地時代の先生の家族は先生、静子夫人、薫、バストス移住地生れのルイザ、理佐の二嬢、そして日本から先生達と一緒に渡伯された先生の叔父、細江邦義氏とによつて構成され、夫に坂根源吾少年も同居してバストス移住地内に居住されたものであつた。先生達の住居（ブラ拓社宅）は、バストス移住地支配人、畑中仙次郎氏、そして歯科医、石井恒氏の住宅にはさまざま、一つの井戸を先生の家族と畑中仙次郎氏の家族が協同で使用したのであつた。又、道の反対側には農学士、八木橋豊氏（駒場出）の家族も住んでいた。当時、先生達は米、干肉、塩ダラ、野生動物、川魚、大根、野生パイナップル、そしてピッコンの葉等を食したと言われる。そして之等の内、主要なるものはブラ拓のアルマゼンで購入したものであつた。先生の日課は朝、六時に起床し、其のまま勉強され、午前十時から午後一時迄、バストス病院で采院者を診察、一時間の午睡の後、午後三時から

夕方迄、各地区へ往診されたもので、手術等は夕食後、九時頃になったと言われる。



バストス時代、病院関係者と細江先生一家。
前列中央にかおる、ルイザ嬢。

又、一九三一年五月にバストス移住地事務所内に、バストス移住地開発に関する研究を目的とした会合が設けられ、一線会と名付けられた時には細江静男先生も参加され、毎月、一回集合し、会員相互の親睦も計られたものであった。此の一線会は其の後のバストス移住地発展の為の推進機関として大いに活躍したものであった。此の様に多忙な先生の公的な日々の間にも、伯国での開業

医の免許取得の為に最大の努力が続けられたのであった。つまり、一九三〇年、伯国の開業医の免許取得の為に内科、外科、そして産婦人科の検定試験を受けたが、法律の改正により試験は無効となった。又、一九三二年二月、ブラジル語、地理、そして歴史の検定試験に合格し、同年、リオ・デ・ジャネイロ医科大学の第四年生（本科一年生）の入学試験を予定していたが、サンパウロ市を中心に護憲革命が発生し交通遮断の為に、遂に受験出来なかった。しかして、一九三三年、先生と其の家族はバストス移住地からリオ・デ・ジャネイロ市に転住、先生のリオ・デ・ジャネイロ医科大学に入学する為に、万全の準備を期したものであった。一九三四年四月、リオ・デ・ジャネイロ医科大学第四年生への編入願書を提出し、受理されたが、今回も法律の改正に遭い、又も無効になった。当時、ゼツリオ・バルガス政権下、日増しにナシヨナリズムの台頭する中で、先生の如く、外国人医師の伯国に於ける開業医の免許取得は愈々困難になって来たのであった。

此の間、先生の不在時のバストス移住地には石井恒齒科医が代診として来任されたのであった。

一九三五年頃のバストス病院は名実共に一段と充実し細江静男院長の下に石井恒、相沢光三郎、福場巴、藤村知子、そして坂根源吾の各氏が働き、イリネウ・B・デ・アルメイダ医師が法的責任医であった。毎日、多い日には七〇人位、そして平均三五人前後の来院者があったもの

で、バストス病院の最も華やかな時期であった。然し、同年、先生はサンパウロ市のブラ拓本部に呼ばれ、一時、バストス移住地を去り、サンパウロ市で同仁会医、日本病院建設委員、そして、巡回診療衛生技師として働く様に命ぜられたのであった。そして、先生に前後して相沢光三郎、バストス病院薬局主任も、トレス・バラス移住地（本移住地内の中心市街地をアサイ市という）に転ずることになった。

一九三五年（昭和十年）三月、ブラ拓を辞任、先生は細江邦義、坂根源吾の各氏をつれて、バストス移住地を出、サンパウロ市に転じ、先生の家族、つまり、静子夫人、薫、そしてルイザ、理佐の二嬢も、リオ・デ・ジャネイロ市から帰聖し、ビラ・マリアーナ区、フランシスコ・クルス街四九に居住したのであった。又、後年、住んだオスカール・フレイレ街一四三九に移ったのは、之より一、二、三年後のことであった。

そして、先生、渡伯後、あらゆる努力を払い続けた積年の問題であった医科大学への入学も、一九三五年五月、遂に実現の運びとなり、先生にとって目出たい、記念すべき年でもあった。つまり、サンパウロ大学医学部のベネジクト・モンテネグロ外科教授の心温かい尽力によって、丁度、同大学医学部の入学試験に合格した一学生が急死し、其の空席へ先生は入ることが出来たのであった。

此のバストス病院の建設は伯国に於ける細江静男先生の医師としての四五五年の生涯に咲いた、おそらく最初の

花で、先生にとって終生忘れえぬ事業であつたに違いない。

参考資料

- 細江静男著、アマゾン先生、
並びにブラジルの農村病 上・下巻
水野昌之著、バストス二五年史
清水尚久氏の想い出話
山中三郎氏の書簡文
成田知子氏の書簡文
相原貴余志氏の書簡文

細江先生と日本病院

田 中 光 義

細江静男先生が今から三十数年前に綴つた日本病院建設当時の「あのころ」と題した一文を読んだ。これは、余り世間に知られなかつた道庵先生（私どもは細江先生のことを道庵先生と呼んでいた）と日本病院との関わりの一端をうかがうことのできる貴重な資料である。これを基に六十余年前の道庵先生の奮闘活躍ぶりを想起したい。日本病院は、第二次大戦前、ブラジルの日本移民（コロニア）が一致団結、心血を注いで築きあげた”医療の

殿堂“である。日本側の大きな資金援助、そして現地ブラジルにおいて実務に当たった人々の寝食を忘れての活動と熱意、物心両面あらゆるものが集中されて完成された。総工費およそ百万円。「御下賜金」と呼ばれた皇室からの五万円が呼水となり、日本政府、国民の寄付に力を得、ブラジル在住日本人も零細な寄付を繰り返して、当時のカネで一千二百五十コントの浄財を集めている。

日本病院は一日にしてできたものではなく、その偉容を見せるまでには、長い年月を費やしている。

敷地購入（「几二六年）から定礎式（「几三三年）まで七年もかかり、それから起工式（「九三六年）まで三年、落成式二九三九年）まで三年、開院（元四〇年）まで一年と実に十四年間にわたる大事業だった。地上五階、地下一階、病室七十六、病床二百。それに最新の医療機器など当時ブラジル一を誇る病院もいざ魂を入れる時になって第二次大戦の余波を受け、当初の主だったプランは画餅に終わった。（註Ⅱ日本病院の建物は、現在サンパウロ市ビラ・マリアナにあるサンタ・クルース病院がそれ）

一九三〇年ころ道庵先生は、バストス植民地にいた。先生は「日本病院の生みの親は、内山岩太郎氏であったと思う」と述べている。同総領事はサンパウロに着任し、病院建設の話を本格的に採り上げた。一九三三年、内山総領事主催で「第一回邦人医師協議会」が開かれ、日本病院建設を決議して 当時、サンパウロ市には高岡、サ

ントスには武田、バウルー斉藤夫妻、リンス今田、アラサツトバ菊地、ペレイラバレットのチエテ植民地八木、プルデンテ内田、バストス細江の諸先生がおり、笹田先生は、アマゾン地方ではなかったかという。この医師たちが総領事館の二階で奥地の衛生問題と日本病院についてとことん討議している。

医師会の総合意見はこんなだった。

「今急にサンパウロ市にデツカイものを作らずに各地に五、六十名収容できる小さい病院を作り、後、必要になつてからサンパウロに作つてもよいではないか」。

これに対し、内山総領事は、医師会案の逆を行く案を出し主張した。

「各地に小規模病院を多数作るには、大きな費用がかかる。医師が一人で病院経営できるものでもなく、助手、医者、看護婦、事務員など、単に建物のみではなく、設備費も経営費も計算すると大変なものになる。まずサンパウロ市に大きい病院を一つ建てその後必要に応じて奥地の要所に建設 していこう」

こうしてサンパウロ市内に日本病院が建てられることになった。この時期入植者の多い奥地に小規模ながら病院を建てるべきだとの医師会の総意は間違っていないかと思ふ。しかしこの医師会案とは全く逆な提案をした内山総領事案がすんなり通つたということは、現今とは違いやはりお上の力は大きかったと言えるだろう。

病院建設が決つたころ同仁会医師の陣容は高岡、菊地、

笹田、斉藤四医師を除いて、まだ新しい着伯二、三年しか経たない人々であり、道庵先生はブラジルの医師免許を持たず、免状獲得の準備中で、専門学校検定試験にパスしたばかりであった。

当時、アルゼンチン経由で来伯、リオで開業医の免状をとるためブラジルに到着きたい希望をもっていた河田明博士が同仁会に囑託医として入り、日本病院の設計の仕事に携った。道庵先生も医師免許取得のためサンパウロやリオに旅していた関係で、河田博士とは親しく、その助手として病院建設の手伝いをした。リオ、サンパウロをはじめ、他の都市の大病院見学を仕事とした。ニテロイの臨床病院、ポルトガル病院、ドイツ病院、サンタ・カーザ、その他著名病院の組織、内部設備、助産室、レントゲン装置と至るところを見学し、その報告書を博士に渡している。

それだけのことはやったが、見返りの経済的援助はなかった。そのかわり、病院に関する情報と人脈は誰よりもくわしく、自分のものにする事ができた。一応設計図河田案は作成されたが、博士はその後間もなく病没、同時に病院建設の方は一時中止のやむなきに至っている。そのことがあって病院問題からしばらく遠去かっていた道庵先生にサンパウロの同仁会関係者から呼出しがあった。「日本病院建設に関する医師業務、奥地衛生巡回、夜間無料診療所の開設をしてもらいたい」との要請があり、住みなれたバストスを離れた。好むと好まざる

にかかわらずそうしなければならなかったのである。それは当時のゼツリオ・バルガス政権は外国医に対する検定試験を廃止したので、外国、例えば日本の医師がブラジルの開業医になるためには、専検をパスした後に医大の入試に合格し、一般の学生同様、一学年より六学年まで在学しなければならなかった。

道庵先生は、最も悪い時期に遭遇したわけで、一から始めて六年間、学業に励み所期の目的を貫き通している。

『日本病院の建設に関する医者としての業務、および奥地の巡回、サンパウロ市における夜間無料 診療所の開設、これが私の仕事である。昼は学校へ行かなければならぬので、奥地巡回は祭日か日 曜、診療所は二名の伯人を使って夜間の開業である。』

建築事務、奥地巡回、夜間診療、通学と、正に三人前の仕事だ。朝は五時に起床、六時半に家を出 て通学、診療を終って帰宅するのは毎夜十一時。これを六年間やり抜いた』（細江静男著「アマゾン先生」より抜粋）

月月火水木金金、まさに超人的な奮闘ぶりである。

病院建設には、いくつかの案があったというが、結局は日本の荒垣恒政博士案、サンパウロ日本人会が推す高岡専太郎博士案、サンパウロ医大整形外科教授・ルイス・デ・レゼンテ・ブエツシエ博士案の三つの案を総領事館が検討、この中からブエツシエ案が採用された。ブエツ

シエ博士は、ブラジル政府がいくつかの病院建設のために欧米に派遣研究させたほどの実力を持ったその道の権威者。医学生の手庵先生は、同博士に師事していたこともあって、博士に日本病院設計図提出を申し出たところ快よく引き受けてくれたといわれる。

このブエツシエ博士案が誕生するまでにおよそ二カ年かかっているが、道庵先生は、助手をおおせつかり、さんざん引っ張り回されている。大学の授業も受けねばならないし、仕事は山ほどある。疲労困憊の極にあった。ことに「試験前夜など神経衰弱（いまいうノイローゼ）になるくらいだった」と本人が述懐しているほどだ。汗水流しながら大役に取り組んでいる道庵先生一途の姿勢は、迫力をもって博士の心に深く焼きつけられたと想像できる。

この甲斐あって、博士は、道庵先生の意見を尊重し、その立案の中にかくつかとり入れてくれている。

ブエツシエ博士は、心臓が弱く、無理できなかつたが、自分の病院を建てるような意気込みで熱心に図面を引き、凝り性を余計つものらせた。当時博士は、サンパウロ州の病院監督局長の要職にあり、一方道庵先生は、昼は医大の学生、夜は診療所の主任をつとめているので互いに忙しく、それこそ寸暇を惜しんで設計案に取り組んだ。

ベッドの大きさは、ブラジル人と日本人の各百人を人間生態測定器で測って決定したり、また博士の提案でサニタールームを広く、廊下の幅も可能な限り広くとった。こ

れは日本人にとって外国であるブラジルに革命などの異変が起った場合、必要があればここへ避難できるようにするためだったという。

壁と床とが一つのカーブとなっていて、運搬車を力いっぱい押して行っても決して壁にぶつかる心配のない廊下などユニークなものであった。台所は二千人分の食事を作ることができ、ことに日本食を作るとき、例えば味噌汁、大根漬けなど臭気が廊下に充満するのを防ぐため二階上に設けるようにした。念には念を入れ、細かい点に気を配った画期的な設計だった。

一方、病院ができてからどうするか――その基本となる研究が同時に進められていた。道庵先生は、そのたつき台となる案を提出、同仁会医師たちによって討議された。その主眼となるものは「ブラジルに感謝」から始まっている。

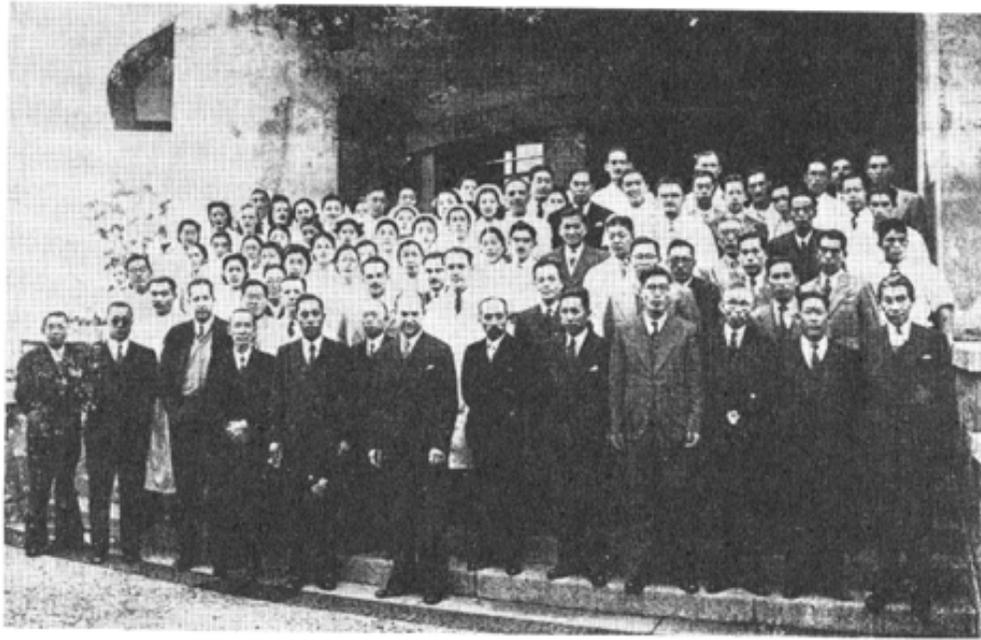
日本移民は、無一物でやって来て、初めは苦勞するがその大部分は何年かの後に土地を持ち、財産も所有し立派な社会人になっていく。これはブラジルだから得られることであり、この点何をおいてもこの国に感謝しなければならぬ。その一つの方法として日本病院を建てる。コロナで経営し、人種国籍を問わず困っている人には、施療患者として無料診察を引き受けよう。

日本から解剖、細菌、病理、生化学、生理など基礎医学全般にわたって著名学者を二、三年契約で招聘し勤務してもらう。さらにブラジル開業医の資格を持つ欧州

系、アフリカ系、日系医の臨床研究と相まって、日伯
合同の医学研究の中心にしたい。―とする方針で臨むこ
とにしていた。

一九三七年、病院建設の原案ができあがった。ブエッ
シュ博士と道庵先生の「汗の結晶」である。

かくして日本病院は、ビラ・マリアナの一角に建築され、
一九三九年四月に落成式、四〇年九月二十四日開院（院
長・ベネジット・モンテネグロ博士）の運びとなった。



開院当時の日本病院関係者。前列中央に武田義信副院長、
ベネジット・モンテネグロ・サンパウロ大総長。後方に
細江医師。

そして翌四一年十二月八日太平洋戦争が勃発、四二年日伯国交断絶により、同年三月、病院は敵性国財産として連邦政府の管理下に置かれ、日系の経営から離れていった。

日本病院建設の計画が持ち上っているころ、細江道庵先生は、ブラジルの医学生であり、少なくともその核心となる設計図案作成の主役ではなかった。一九三三年に建設決定の会議がサンパウロ総領事館で開かれた時は、高岡博士をはじめとする先輩諸氏がいて、その末席に連なる程度であった。

しかし、それが建設設計の段になると大変な力を発揮する。細江案という名で表面にこそ出て来ないものの、河田案にせよ、最終的に採用されたブエッシエ案にせよ、この支柱となる内容のキメ細かい作図は、道庵先生の各地病院の組織と内部施設の調査に裏打ちされたアイデアに負うところが少なくない。

もともと道庵先生は、かつてチエテ、バストス移住地の病院を建設した経験があり、アメリカ、ドイツの書物を片っぱしから読破、学問として病院建設を習っていたのだが、そのようなことはオクビにも出さず先輩たちを立て、自重して常に縁の下の力持ちを任じていたようである。ここに先生のどこまでも謙虚な姿勢をうかがうことができる。

参考資料Ⅱ『ブラジル日本移民八十年史』。香山六郎著『移民四十年史』。細江静男著『アマゾン先生』。週刊時報

社刊 『日本病院が語るコロナアの歴史』。

道庵先生は、“医は仁術”を体現した人、自分の思ったことを堂々と述べて筋を通し、誰はばかることのない人、とくに年寄りを大切にし、若者を可愛がり、人情味あふれる人であった。

エピソードその一―私がパウリスタ新聞社会部でサンパウロ総領事館回りをしていたときだから今より三十年も前の話だ。総領事館は、市立図書館横のドン・ジョゼ・ガスパル広場のビルからブリガデイロ・ルイス・アントニオ通りのビルに移っていた。移民援護協会の話（多分予算申請のことだったかと思う）で来ていた道庵先生が、領事の前で、そんなに小むずかしいことを言うなら、援協はもう総領事館にお頼みなどしない、その代り、頭のおかしくなった青年ら十人ばかりここの総領事館玄関口に連れてきて、放っぽり出しておくからいか様にでもするがよい ― と大声をあげている。これにはビックリした。

コロナア出身の古手館員らが、ま、先生、そんなことおっしゃらずに……となだめるのに懸命であった。そこにたまたま居合わせた私は帰り際に「先生、なかなか粹なタンカだったですね。コロナアに骨のある先輩がいることを知って心強いです」と言った。すると道庵先生は、「おお、キミそんなところで聞いておったのか、こんなこと新聞に書くなヨ」と笑い飛ばした。

その二〇〇いまは移民と呼ばずに「移住者」と呼ぶ。外務省がこれまで使ってきた「移民」を「移住者」と改め呼称するようになったとき、道庵先生は、移民は移民だ。移住者などと呼ばれなくなつて結構だ。移住者と呼ばれたからといって、どこに救われる道があるんだーと語り「キミ、そう思わぬか」と口を尖らせて言ったことがある。地方巡回診療に出かける度に戦前移民と戦後移民の区分けをしなければならなかつた。要するに移住事業団（現在のJICA）に委嘱されて年に何回か実施する巡回診療の予算は、戦後に移住した移民を対象としたもので、戦前移民は外されていた。「でも現地へ行ってみろ、あんたは戦前だから診察できないなんて言えるか！」と悲しげに語つたことを覚えている。ヒューマニズムに徹した医師として最も辛いことだつたに違いない。

（元。パウリスタ新聞編集長）

日本人同仁会

平尾 健

細江静男医師と「同仁会」とは切っても切れない関係としてブラジルに派遣された一九三〇年には、すでに邦人医療衛生機関として稼働していた。

ここでは細江医師が渡航する以前の、いわゆる創設期の同仁会と、彼の活躍の基盤となった同仁会の二部にかけて述べることにする。

一、在ブラジル日本人同仁会の創立とその背景

一九〇八年、笠戸丸で最初の移民がブラジルに到着して以来、ぞくぞくと移住渡航者が増え、一九二〇年までに約二七、〇〇〇人の日本人が渡伯している。(表一)。

初期移民のほとんどは、コーヒー耕地との労働契約を交わし、主にサンパウロ奥地の見ず識らずの土地に入り込み、慣れない気候の下で、粗末な家に住み、貧弱な食事をとりながら厳しい労働を強いられることになった。炎天下での重労働は、体力の損耗もはげしく、加えて(当時としては)わけのわからない風土病におそわれ、健康を害する者があとを断たなかった。しかし、この前線で病気にかかっても近くに医者も居なく、また言葉が通じないためブラジル人の医者にかかることも出来なかった。

表1 日本移民入伯数 伯国労働商工省移民局調べ

年 代	入伯日本人数	年 代	入伯日本人数
1908	830	1931	5,632
09	31	32	11,678
10	947	33	24,484
11	28	34	21,230
12	2,909	35	9,611
13	7,122	36	3,306
14	3,675	37	4,557
15	65	38	2,524
16	165	39	1,414
17	3,899	40	1,471
18	5,522	41	1,883
19	3,022	42	(日伯国交 断絶)
20	1,013		
21	840		
22	1,225	戦前移民 合 計	188,309
23	895		
24	2,673		
25	6,330		
26	8,407		
27	9,034		
28	11,162		
29	16,648		
30	14,076		

(香山六郎“移民40年史”より)

笠戸丸移民から十三年を経過した一九二一年、当時のサンパウロ総領事である藤田敏郎氏が管内邦人農業者を視察訪問した折に、彼等の衛生状態が憂うべき環境にあり、中には一家の大黒柱である戸主や、家庭をとりしきるべき主婦が病に倒れて、経済的にもゆき詰まり、家庭崩壊の危機に瀕している農家も少くないことをまの当りに見て心を痛め、彼等の救済と医療衛生改善の急務を母国に建言した。

これがかきつけかけとなつて、一九二四年、本邦移植民の医療衛生応急策として年額三万六千円の補助金が母国から下附されることとなつた。

藤田総領事の奔走、懇願の労を引き継ぎ、後任の斉藤

和総領事は、当時の主だったコロニア関係者を招集し、医療衛生機関の設立につき意見、協力を求めると同時に、上記補助金の使途について再三協議した。その結果、出席者二十九名全員を維持会員として「在ブラジル日本人同仁会」が設立された。(一九二四年二月二七日)。

表2 1930年頃の日本人同仁会地方医局と医師陣

サンパウロ市	高岡 専太郎	河田 明
サントス	武田 義信	
パウルー	斉藤 等、	和歌子 夫妻
リンス	今田 求	
アラサツバ	菊地 円平	
ペリバルト	(チエテ植民地)	八木 勝郎
P. プルデンテ	内田 利藤次	
バストス	細江 静男	
アマゾン地方	笹田 正数	

表3 同仁会創立当時の役員

第一期役員 (1924年)			第三期役員 (1926年)		
理事長	青柳 郁太郎		理事長	山田 揚之助	
専務理事	山田 揚之助		専務理事	高岡 専太郎	
会計理事	竹本 武雄		第1会計	蜂谷 専一	
理事	高岡 専太郎		第2会計	鈴木 正雄	
"	黒石 清作		理事	鮫島 直哉	
"	鮫島 直哉		理事	杉本 芳之助	
"	三浦 鑿		監査	江越 信胤	

(香山六郎「移民40年史」より)

また、藤田総領事の母国への要請の中に、医学留学生の派遣をうたってあったが、これは一九二三年、四名の医学士(天野幸蔵、渡辺劫、斉藤等、斉藤和歌子)派遣となって実現した。彼等は早々と当国の医師の資格を得て、奥地植民地の医療衛生に多大の貢献をすることになった。

同仁会創立に奔走したもう一人の立役者は高岡専太郎

医学博士である。日本医大第一回の卒業生で大正元年（一九一一年）に渡伯し、進んで伯国の医師国家試験を受け、サンパウロで開業していたが日本政府の委嘱として同仁会の創設に、医師の立場でも、或は事業運営にも献身的に携わった。が、残念乍ら領事館との意見が合わず、ついに同仁会を去ることになるが、その後も積極的に移民の為の医療研究、予防治療を施され、コロニアへの貢献は非常に大きいものがあつた。一時日本へ帰り、再渡航された時にたまたま細江医師と同船となつたこともあり、細江先生も高岡博士から大きな影響を受けた。

「私は一九三〇年七月に、再渡航の高岡専太郎博士と移民船、モンテビデオ丸で同船渡伯した。博士一家はツリストタであり私は移民であつたが、仲良くしていただいで航海中はほとんど毎日、ブラジルの熱帯病について講義をしていただいた。」（ブラジルの農村病、一三三三頁）

同仁全事務所は、創立当初はタマンダレー街の海興支店内におき、その後、一九二六年にリベロ・バダロ街の総領事館内の一室に移し、一九三〇年ガルボン・ブエノ街七十三番地に移転してようやく独立の体制を整えることとなる。

また、この同仁会が社団法人として正式に伯国政府の認可を受けたのは、一九二八年であり、設立からすでに四年を経過していた。

同仁会はサンパウロを本部として、主要な日本人集団地に地方医局を配置し、一九三〇年ころには表二に示す

ごとく九地区に広がっていた。同仁会の主な活動は、この方々が中心となって実施達成されていった。また、本部役員の顔ぶれは表三の如くである。発足当時の主な事業は次の如くである。

(1) 種痘および腸チフスの予防ワクチンを州中央衛生局より無償配布してもらうことに成功(一九二五年)。

(2) 奥地農業者が捕獲した毒蛇、毒クモ、サソリ、蛙等をブタントン研究所へ送り、交換条件として毒蛇血清、クモ毒血清その他 注射器、体温計等の給付を受ける事業の仲介斡旋。(一九二六年)

(3) 当時猛威をふるっていたマラリヤ、フェリダ・ブラバ、トラホーム、十二指腸虫等の調査研究と撲滅運動。

(4) コロニア向け予防衛生書籍およびパンフレットの印刷発行。(表四)

(5) 主要邦人植民地を訪問し医療衛生講習会の開催。

(6) 僻地居住日本人への家庭常備薬無料又は実費配布。

(7) 将来、同仁会事業の本拠地となる「日本病院」の敷地購入(一九二六年)。

(8) 一般健康相談、無料診療、各種検査、入院の斡旋手続き。

既述のごとく、日本人植民地に医療衛生問題が山積みされていたころ、青年細江医師(衛生技師)はサンパウロ同仁会への転勤となった。

「一九三五年、私はブラ拓バストス病院からサンパウロ市の同仁会衛生技師として席を移し、サンパウロ医大本科第一年生として在学しながら同仁会の仕事をする事になった。そして、高岡先生の偉業である奥地の巡回に身をささげるようになった。」（ブラジルの農村病、一八九頁）

二、細江衛生技師のサンパウロ同仁会赴任から日本病院稼働まで

サンパウロ州奥地のバストス植民地で、入植者と辛苦を共にした細江保健衛生医は、村民に最も頼りにされていた一人の医師であった。しかし、医師免状を取得する為にはどうしても村を離れてサンパウロに移り、医大に再入学するより道はなく、一九三五年村民に後髪を引かれる想いでバストスをあとにした。

細江医師をサンパウロへ呼び寄せることに決めたのは、当時の内山岩太郎総領事、ブラ拓の宮坂国人氏、その他コロナ指導層の人達であった。コロナこそって細江医師をサンパウロへ呼び、お願いしたかった項目は次の三点であった。

- 一、日本病院建設に携ってもらいたい。
- 二、同仁会医師として、特に奥地巡回診療に尽力してもらいたい。
- 三、サンパウロ医大に通い、医師の資格を取得してほしい。

サンパウロへ移転した細江医師は弱冠三十五才の働き盛り。体力的にも精神的にも最も充実した時期ではあつたろうが、それにも増して、日本移民を病魔から救わねばならないという使命感に燃えていた。それにしても彼に荷せられた仕事はあまりに多く、本当に寝る間も惜しんで働くことになった。

「朝は五時起床、六時に家を出て、通学、診療を終えて帰宅するのは毎夜十一時、これを六年やり抜いた。」（アマゾン先生、四〇頁）

当時すでに約十五万人の日本人が渡伯し、ブラジルの各地で開拓のクワを振っていた。しかし、彼等が最も不安で心配していたのは生死にかかわる病気であり、家で病人をかかえることは営農に甚大な影響を及ぼし、経済的にはますます苦しくなっていくことになる。またブラジル語の解る人は殆んど居なく自分の体の苦痛を適確にブラジル医に説明することなどとてもできない人達ばかりであつた。そして現実には、我が家は勿論、隣近所病人ばかりであつた。

入植当初、移民を最も悩ませた病気はマレータ（マラリヤ）であり、これにおかされると作業能力の低下どころか一家が路頭に迷う一里塚であつた。

一九二五〜六年にかけて高岡医師が行つた調査によると、訪問家族一六四戸中一四四戸はマラリヤ患者を有しており、わずか二〇戸だけがマラリヤの病魔からまぬがれてゐた。マラリヤ患者を有していた一四四戸の中での患者

総数は五五二人で、一戸当り約四人の患者をかかえていたという憂うべき結果が記録されている。

また一九二六年五月に行った調査では三二六家族（一三一九人）中、マラリヤ患者は七六〇人（五八％）にのぼり、いかに激烈悲惨であったかが推察される。

マラリヤに次いで開拓農民を悩ませた病気にレウシマニオーズがある。これはフエリード・ブラバ、悪性潰瘍、森林梅毒、バウルー病などとも呼ばれサンパウロ州奥地に蔓延していた熱帯病であり、この地域に入植した日本人のほとんどが冒された。或る種のブヨに刺されるとそこから感染して次第におできができてなかなかおらず、終には軟骨までえぐり取ったようになっていくので顔をおかされると非常に醜くなる。そして治癒するまで何年も悩まされるのである。

十二指腸虫、回虫等腸内寄生虫病はブラジル全土に蔓延しており、着伯直後の日本人はその感染率は低かったが、寄生虫卵で汚染された土地で耕作を続けていると、二〜三年でほとんどが感染してしまふ。特に十二指腸虫の感染を受けると、すき透ったように黄色い肌になる（貧血症状）のでアマレロンと呼ばれている。働き盛りの青年層がより感染を受けやすく、皮膚炎（土まけ）から慢性貧血を起し、腹痛、嘔吐、頭痛、せき、全身倦怠等いろいろな症状を呈しつつ、終には廃人のようになっていく。

表5 十二指腸虫病検査（1935年度施行）

検査地区	検査人員	卵保有者	保有率
北巴拉ナ地方	975	534	55.8 %
ソロカバナ線アバレー付近	1,089	777	71.3
アグードス及びパウルー付近	707	501	70.8
ジュキア線イタリリー付近	914	658	72.0
中央線モジ・ダス・クルーゼス付近	547	308	56.4
ドラデンセ線ノーバ・ヨーロッパ付近	704	421	62.0
ノロエステ線プロミッソン付近	975	584	59.8
合計	5,883	3,782	64.4

同仁会が邦人の十二指腸虫撲滅運動に着手したのは一九三三年である。一九三五年に実施した邦人植民地、集団部落等約七〇ヶ所を調査した結果は表五の通りであり、農業者五、八八三名の実に六四％が卵保有者であった。また一九三七年には邦人小学校八十七校の児童三、八四二名の検便を行い、虫卵保有者は二、三二九名と六〇％以上を占め、しかもその殆んどが十二指腸虫卵保有者であった。

このような調査を続けると同時に投薬治療を施し、各地で衛生講話をしては寄生虫病の恐ろしさを教えていった。

十二指腸虫は被催患者の用便から土中に、また土中より

人間へと感染するものであり、当時トイレのないような非衛生的な住宅で生活していたことと裸足での野外労働が主な原因であったが、たったこれだけの改善でさえ、医師と植民者の大変な苦勞を伴ったものであった。

邦人移民が悩まされた重要な病気にトラホームがある。トラホーム患者は移民として入国資格がなかったため、患者の当人はもとより移民船の船医や監督も、船がブラジルに近づくにつれてその対策に苦慮したものである。運よく上陸し目的地に落ち着いてからも、非衛生的な生活環境のもとではこの病気の伝播は早く、地域によっては殆んど全家族がおかされてしまっていた。

集立、トラコーマ技手

見事な成績に衛生局長も感心 慰勞の見學旅行に招待

聖市モツカカのポスト・ネートラコーマに於て催されたトラコーマ講習会は去る廿六日の口頭試問を最後に無事終了したが、試験官はサンパウロトラコーマ中央診療所会長のドトール・パウロ氏で、試験は衛生局マルコンデ氏及び講師ドトール・ヴァレンチン・デ・ネドロ氏立會の上級連に行はれた結果邦人講習生の八名の諸

君は次の様な見事な成績でパスし、試験官に非常な満足をおこした	藤村 知子 一〇 九五
右の諸君は衛生局に登録された邦人最初の「トラコーマ技手」として免状を下附され元氣よく各地方へ歸つて行つたが、衛生局長は邦人の成績の良いのに感心し慰勞の意味で去る廿八日インスベタトールを案内役として一同をサンカルロス迄の見學旅行に招待した程であつた	鳥袋 盛美 三〇 九五
	和川 良一 二〇 八五
	山寺 登 八 八〇
	加藤 忠道 八 八五
	後呂 マスエ 八 八〇
	青山 裕 九 九〇
	奥原 文雄 三〇 八五

邦字紙に出たトラコーマ講習会の記事。

一九二六年、高岡、笹田両医師の調査では奥地植民地小学児童一二八名を検診し、実に一二四名がトラホームにかかっていたという恐ろしい結果がでている。この惨状から同仁会はトラホーム撲滅運動を展開するのである。

日本政府より邦貨一万二千円の指定補助金が下附され、同仁全トラホーム撲滅部が設置されたのは一九二九年である。この撲滅運動は斎藤等眼科医が中心となって各地で治療、講話、講習会を開いていたが間に合わず、日本人集団地の小学校教師等の中から希望者を募り、四日間の特別講習を施して、彼等が植民地に帰り実際の治療に当るよう養成した。特別講習の受講希望が多く各回とも定員をオーバーする盛況であった。ということは、どの植民地でも、急を要する大問題であった。

サンパウロでの講習会は、細江医師の発案、奔走により、講師にブラジル人医師も加え講習内容をより充実させると同時に邦人コロニアがトラホーム対策に真剣に取り組んでいることを伯国当局に示すこととなった。お陰で州衛生局及びサンパウロ大学からの協力を得ることができ、数名の専門医が講師として加わり、約二カ月に亘る充実した講習会となった。ここでみっちり仕込まれた受講生達は直ちに日系移住地に赴き、眼病の治療と予防衛生の徹底に献身、万余の患者が救われることとなった。

当時猛威をふるっていた疾病数種について簡単に述べて来たが、この他に絨江医師自身が罹患し、それこそ生

死の境をさまよったといわれる黄熱病、根治が非常に難しかった悪性カビ病（アクチノミコーゼ、ブラストミコーゼ）、治療法のないシャーガス病、マンソン氏病（住血吸虫症）、アメーバー、チフス、肝炎、難産、乳幼児の各種疾病、栄養失調、アルコール中毒、精神病、ケガ、蛇等害虫の咬み傷等々移住者におそいかかった疾病は数えきれない。

医者にかかりたくとも経済的に許さない、ブラジル人医師に適確に症状を伝えられない、日本人の医者まであまりにも遠すぎる、仕事に迫られて医者へ行く暇がない……。これらの理由で身体の不調を感じながらも、我慢に我慢を重ね、苦しみに苦しみを重ねて、終にこの世を去っていった同胞がいに多いことか、それを思うと細江医師は更に自分を犠牲にし、家族を犠牲にして働かねばならなかった。

夜間診療所の開設

一九三五年、同仁全事務所内に夜間診療所を開設し、サンパウロ市内邦人及び遠方から出聖して来る日本人のため便宜をはかることにした。これは毎夜七時から九時まで受け付け、月水金曜は内科、小児科、精神科、火木土曜は外科、産科、婦人科とし、サンタ・カーザ病院の

Dr. Jose Pedro de Aletto, Dr

Jose Maria de Freitas が担当、

これに日本人の助手と看護婦を配して開院となった。
この夜間診療の实质総責任者および患者との相談役には
細江医師が当たったがすべて無料奉仕による診療、治療で
あった。

初年度（一九三五年）の取り扱い患者は、七三七名（男
四七九、女二五八）、翌一九三六年には実に一〇六二名
（男六九九、女三六三）に達し、非常に好評を得た夜間診
療所であったが、一九三八年十一月、同仁全事務所を新
装なった日本病院内に移すことになり、惜しまれつつ閉
院のはこびとなった。

薬品の実費取り次ぎ及び家庭常備薬箱の配布

日本移民の大部分は内奥僻地に居住し、開拓前線で苦
闘していた。極めて粗末な非衛生的な住いで、貧しい食
事と過激な労働を余儀なくされ、いつもケガ、病氣と背
中合せの生活であった。医者にかかるのは勿論、薬品の
入手にも非常に不便を感じていた。これら奥地移住者を
援助する目的で同仁全では安価、良質、安全な家庭常備
薬を迅速に僻地農業者の手に渡すべく、実費取り次ぎを
実施した。その内容は、常備薬として必要な薬品の他、注
射器、体温計、水枕、包帯等簡単な器具器材まで備え、そ
の数は約七〇種に及んでいた。

一九三六年からは「鉄道駅又は医師所在地より二〇km
以上の遠隔地に居住する邦人農家」という条件に適う者
を対象に、家庭常備薬箱の無料又は割引配布を実施した。

これは、一九三四年に外務省から邦貨三千円の指定補助があつたことと当時の大河内薬化学研究所の好意により実現され、奥地で不便を忍んでいた農民に “天恵の慈雨” と尊ばれ大好評を得た。しかし、次第に政府の下附金が減額されていき、ついに中止されたためこの事業は四年間しか継続しなかつた。その間に二一〇五箱（うち無料配布四三〇箱）の配布となつた。

三、サンフランシスコ・シャビエル療養所

（通称 カンポス・サナトリオ）

一九三〇年代の始めより、結核患者数が激増し、同仁会を訪れて病状を訴える者が、あとを絶たなくなつて来た。当時、これらの患者は同仁会が斡旋して、サンタ・カーザ病院や、他の療養施設に送り込み、何とかその場をしのいでいたが、奥地からやって来る病者は増え続け、その処置に悩まされた。時には患者達が結束して、同仁会にその救済方を嘆願したり、サンパウロ総領事館を訪れて救助を求める事態もしばしば発生した。また、この問題は、州衛生局や伯人医師たちの知るところとなり、「日本人は肺結核には全く抵抗力が無いので、ブラジル移民として不適當ではないか。」という噂までたつた。

この病気の主な原因は、栄養不良の上に過労による衰弱の結果であり、当時、貧しい暮しを余儀なくされた家庭では、肺病人が奥の部屋で寝ているのは普通というほどの哀れな実情であつた。

も早や、結核対策は日本人間で急遽解決しなければならぬ重要な問題となり、当時の菱川副領事は、同仁会、細江医師にサナトリオ建設に適当な場所を探すよう依頼した。

細江医師が最初に見付けた適地は、サンパウロ市トレメンベール区で、街からも近く静かで、気候も良く、ここに民家を一軒借りて患者を収容した。ここに山田忠氏という、療養の意味をよく理解して、四六時中熱心に患者の世話をしてくれる人を管理人として配置し、夜間診療に協力してくれているアレックト医師に一日おきに足を運んで診察してもらうことにした。これで一応体裁が整い、患者も医者も一安心したのであるが、それもつかの間で、落ち着く前にそこを迫り出される破目になってしまった。というのは、当時、この辺りは別荘地であったので、別荘地の持主や地元の有力者達がこれを知って、迫り出しの為の圧力をかけて来た。山田管理人も細江医師も、必死になって地元民の説得に努めたのであるが、事態は益々険悪となり、「出て行かねば、建物をたたき壊す」とまで言われ、ほうほうの体で逃げ出すこととなった。

次の手段で思案に暮れている時、カンポス・ド・ジヨルドンという、標高一七〇〇mの高原で林田久七さんという方が「療友会」という施設を作り、殆んど自費で肺結核患者を収容して療養させているとの情報を得た。細江医師は早速、菱川領事に相談、彼の了解を得て林田氏を訪問視察することになった。このことが後々、カンポ

ス同仁会サナトリオ開設のきっかけとなるのである。

細江医師の訪問を受けた林田氏は非常に喜び、是非とも同仁会の協力を願いたいと共に同仁会からの患者も林田氏の「療友会」に收容することで意見が一致した。直ちにトレメンバーの患者を療友会に移し、細江医師は毎月「療友会」を訪問して診療に当った。この時の医療費用は、同仁会の地方巡回診療及び地方医局費の一部を充てることとしたが、林田、細江両氏の献身的な努力があったればこそ「療友会」の運営が可能であった。

細江医師のカンポス通いが回を重ねるにつれて、静かで、空気の澄みきったこの地こそ、サナトリオ建設に最適であることを彼の身体で感じていった。いずれにしても現状では一時凌ぎの姑息な手段にすぎず、結核患者の増加に応じきれるものではなかった。いずれ近いうちに、本格的な同仁会サナトリオを建てようという考えが細江、林田両氏の間でかたまっていた。

或る日、同仁会サナトリオ建設の趣旨を説明するために、当時のガルボン・ゴンザガ・カンポス市長を訪問したところ、大変よく理解され、協力を約束された。が、市長から結核患者も含め、この町の住民に、充分に野菜を食べさせたいので、日本人の野菜造りを入植させてほしいとの注文があった。細江医師は、バストス、パラナ等で結核患者をかかえている農家にこの話を持ちかけ、結局、カンポス近郊に十七家族が移り来て、患者の療養をしながら、野菜、果樹の栽培に当り、新鮮、安価な野

菜を市民に供給することとなり細江氏は双方から大変感謝されたという。

このころ、時の外務大臣、マセード・ソアーレス氏が、彼所有の広大な土地の一部を結核療養所建設のために各種の病院や団体に寄附していた。細江氏はこの情報を手すると直ちにその土地を訪ねたが、そのフアゼンダの管理人は、たまたま林田、細江両氏の旧友のアンドリンニヨ氏であつた。アンドリンニヨ氏の協力で更に詳細で適確な情報と、土地贈与の可能性を得て、この朗報を領事館、及び同仁会理事会に持ちかけた。

一九三五年十二月五日、市毛総領事、菱川副領事、石黒、福川、大河内同仁会理事等が細江医師の案内で、カンポス・ド・ジョルドン肺療養所建設地視察の途についた。幸い、市毛総領事はじめ全員の賛同を得られ、直ちに、在リオ日本大使館の内山岩太郎参事官を介して正式にマセード・ソアーレス外務大臣に、土地の無償下附の依頼交渉に当り、大臣の快諾を得て、現在地、約八アルケールスの同仁会所有が決つた。土地贈与登録は一九三五年十二月十二日、聖市第一カルトリオに於て行われた。

一九三六年早々、日本病院附属結核療養所という名目で設計にかかり、鈴木威建築技師の手で建設に着手したが、患者の収容に急を要していたため、この事業は設計図を充分に検討する時間もなく、また資金的に余裕のないまま、無理を承知で見切り発車したものであつた。

一九三七年二月一日、市毛総領事、菱川副領事、古谷同仁会会長はじめ各理事、同仁会医師、更に連邦結核局長、サンパウロ州衛生局長等々お歴々列席のもとに盛大な開院式典が挙行された。



1937年2月サナトリオ開院式の列席者。前列左から武田義信、細江、古谷重綱、菱川領事、安田良一、木村義臣。後列左から鈴木威、内山勝男の諸氏。

サナトリオ初代主任に田中秀穂元陸軍看護兵、助手は坂根源吾青年であった。順調に船出したこの療養所も戦争中は敵国資産として日本人の手を離れたが、その間も坂根氏が孤墨を守り、当時の主任、セバスチオン氏も日本人患者によく理解を示し、敵国民として悲惨な思いをすることなく療養出来た。

戦後二十年間はどこからの援助もなく、細江、坂根氏はじめ関係者達のひたすら患者の回復を願う自助努力で細々と経営が続けられた。しかし、この建物は既述のごとく、資金難を覚悟の上で建てた、いわば仮建築であったのと、すでに二十数年という年月を経ているため老朽化はすすみ、補修・改修費も捻出できず、それどころか患者や従業員の維持もままならなくなり、閉鎖寸前までおいこまれたこともあった。

一九六五年、サンパウロ日伯援護協会がこの療養所の経営を引き受け、建物は大巾改築、レントゲンその他内部施設設備も充実させて、再び結核療養所としての体裁を保つようになった。その後、援協が中心となって、新棟（八〇〇2m）の増築に着手、一九九二年には全工事が完成、建築総延面積、一二三〇。m二十五室四十八床のモダンなサナトリオが出来上った。

開院以来この療養所で入院加療した患者は実に三〇〇〇名を数え、その多くが全快し、社会復帰を果しており、病気回復率は数ある療養所中、常にトップを保っている。近年では、結核の他に都会の大气汚染による気管支炎（ぜんそく）患者が増加、このカンポス・サナトリオで治療し早期回復の好成績をあげている。

そして一九七六年、サナトリオ正門わきに亡き細江医師の胸像が建てられ、創設者の名を永久に留めることとなった。

尚、往時のサナトリオでの療養生活の実際については

開院初期の患者であり、その後、生涯にわたって細江医師と親交の厚かった清水尚久氏の手記「故細江静男先生とカンポス・ド・ジョルドン同仁全結核療養所の思い出」に詳しく掲載されているので、是非、併読されたい。

四、日本病院

移民の増加に伴い、医療衛生問題は益々複雑となり、移住者は勿論のこと、移住関係機関（領事館、拓植会社等）にとっても深刻な事態をかもしだしていた。

大望を抱いて渡航して来た移民家族も、病人をかかえることによつて、その作業能力は著しく低下し、経済的にも、精神的にも、家庭的にも負担が大きくのしかかり、その結果移民政策そのものが根本からゆさぶられる原因となつていった。

この時期に日本病院の必要性は全移住者の渴望であり、それ故この病院建設は、全コロニアが始めて一致団結して事に当つた大事業であつた。しかし、コロニア挙げての最重要問題とは云え、大病院を建てた経験者など居る筈もなく、どのように設計し、どのように運営するかとなると、議論は百出しても仲々括まらず、同仁会の全医師とコロニアの有力者を招集した討論会も幾度となく開かれた。

細江医師が病院建設に協力することを目的の一つとし

てサンパウロへ呼ばれた時には、すでに病院建設用地は購入済み（一九二六年）であり、設計図も概よその下図は出来上っていた。しかし、その設計図を検討していくに従い、各所に不都合な点が指摘され、結局、あらためてやりなおすこととなった。

検討しなおすと云っても、これは当時の細江青年にはとてつもなく大きな事業であり、彼の手で解決出来る問題ではなかった。そのころお世話になっていた Dr Monte Negro に相談した。モンテ・ネグロ博士はこの道の大家といわれている当時の病院監督局長であるレジエンテ・プエシユ博士を細江青年に紹介してくれた。博士は日本移民の総意である日本病院建設問題をよく理解してくだされ、積極的に協力することを約束してくれた。しかし、博士はすでに高齢であった上、健康上の問題もあり、あまり動きまわることが出来なかった。そこで、細江医師を補佐として起用し、博士の手足となって走りまわることとした。

細江医師は、プエシユ博士の指示に従い、大病院を訪問して病室、手術室、助産室から食堂、調理場、洗濯場等の附帯設備まで細かに調査し、その設計を持ち帰ってはプエシユ博士と検討し、日本病院設計図に加えていく作業が続いた。学校に通いながら、同仁会医師の仕事を続け乍ら、夜間診療、巡回診療をしながらの病院設計作業であり、本当に寝る暇もない多忙の毎日が続いた。博士と長時間検討を加えた結果を深夜までかかって図面に

書きあげ、翌日それを博士に見せると、また欠点が出て来てやりなおしということも度々で、頑強な細江医師も肉体的にも精神的にも疲労困憊してしまったという。幾多の苦難を乗り越えて、一九三八年、ようやく日本病院設計図原案が出来上った。

日本人同仁会は、その後、新装なった日本病院内に事務所を移転し、事業の内容も徐々に日本病院で行うように移していった。

ナシヨナリズム旋風におびえる日本移民

日本移民のすべてが熱望していた日本病院は一九四〇年九月二十四日、開院式を挙行、稼働はじめるのであるが、その当時から次第にファシズム、ナシヨナリズム旋風が強くなり、戦雲も次第にたちこめて来て、暗く不安な毎日を送るようになっていく。移民史年表からそのころの主なニュースを挙げてみるとその動きを把握できる。

一九二九（二〇月） コーヒー大暴落。経済恐慌はじまる。

一九三三（六月一八日） 日本移民渡伯二五周年記念祭を日本病院敷地で行う。式後、日本病院定礎式。

一九三四（七月一六日） 外国移民二分制限法公布。日本移民は年間二・四八九人を越えてはならない。

一九三五（二月一日） サンパウロ市立中央市場がカントレイラ街に開設。この市場を中心に日本人集団地が

形成される。

一九三六 (四月五日) 日本病院起工式。

一九三七 (二月一日) カンポス結核療養所開所。

一九三七 (二月五日) 高岡専太郎著「ブラジルの家庭医学」発行。当時農村の医学宝典と言われた。

一九三七 十四才未満に外国語教授禁止。外国語印刷物の発行にはその筋の許可が必要となる。

一九三八 (二月二五日) 全日本語学校の閉鎖。主として日独伊の学校が全面閉鎖。

一九三九 (四月二九日) 日本病院落成式。

一九三九 (五月一日) 日伯新聞発行停止。

一九三九 (七月から) ブラジルから引き揚げる帰国者増える。

一九三九 (三月) 第二次世界大戦開戦。

一九四〇 (九月二四日) 日本病院開院式。

一九四一 (七、八月) 聖州新報、ブラジル時報等邦字新聞廃刊。

一九四一 (十二月八日) 太平洋戦争開戦。

一九四二 (一月二九日) 日伯国交断絶。

一九四二 (二月一日) 資産凍結令。旅行に警察の許可証が必要となる。

一九四二 (七月三日) 交換船オグリスホルム号で大使、総領事等公館関係者退伯。

一九四二 (八月二二日) ブラジル対独伊宣戦布告。

一九四二 (九月六日) サンパウロ市コンデ街界隈の日本

人家族立ち退き令。

一九四三（七月八日）聖州海岸に住む日独国民 \equiv 力家族に立ち退き令。

一九四四（九月）多くの同胞拘引される。

一九四五（五月七日）ドイツ降伏。

一九四五（六月六日）ブラジル、日本に宣戦布告。

一九四五（八月一五日）日本降伏。

新装なった日本病院へ移転した同仁会は、一九三九年、名称を”サンタクルス救済会”と改め、事業を続けることとなるが、次第に日本病院がその任を負うことになる。

開戦により、

公館のお歴々は交換船で帰国してしまい、残された数十万人の日本人、日系人は敵国民とみなされ、ブラジル官憲の厳しい規制に従いつつ、遠い春の訪れを待つこととなった。細江医師は外務省派遣の留



日本病院開院当時の医師と看護婦のスタッフ。前列左から藤村知子（現成田）、細江先生。

学医だったので、交換船での帰国は可能であったし随分誘われたが、同胞を見捨てて、のうのうと帰るわけにはいかなかった。

しかし、戦中、戦後の混乱の中で同胞への医療事業も縮小を余儀なくされていった。日本病院の運営が日本人の手を離れると同時に、“サンタクルス救済会”の働きも実質的に停止し、ここにコロニアの医療衛生に多大の貢献をしてきた “在ブラジル日本人同仁会” は消滅した。

さて、日伯医学の殿堂『日本病院』の建設に、若さのすべてを打ちこんだ細江医師は、開院と同時にモンテネグロ病院長の秘書として活躍していたが、暗雲は次第に彼の頭上にも立ちこめてきた。

一九四二年四月、敵国資産の管理、監督をするために、ドクター、ジョゼー・マリア・デ・フレイタスがインテルベントール（非常時に大統領が州に派遣する執政官）として任官、それから間もなく（一九四二年九月）細江医師はこの病院を追われてしまった。幸い、そのころ全く個人的に武田医師とジオバニ・P・フェラリ医師で開業していた診療所「コンスルトリオ・メジコ・ドージンカイ」に席をおくこととなった。場所は中央市場のすぐ脇、カンタレイラ街四〇四番。

細江医師は一九四四年、ついに医師免許を取得、晴れて堂々と開業できることとなった。しかし、同じ四四年

八月、突然官憲に拘引され一か月の留置生活を送っている。

暗い戦争も終わり、一九四七年、同仁会はカンタレイラ街一一六番に移り診療を続けるが武田、細江両医師に木原暢医師が加わり、また一時農田チタ医師も加わって検査、診療、他の病院の紹介から入院の世話まで多忙を極めるが、その合間に巡回診療も行っている。

日本移民には、日本人医師がどうしても必要であったし、また「同仁会診療所」が日本人の多く集まる中央市場の近くにあったため、交通の便利さも手伝って、大変な盛況を見た。

細江医師は厳しい労働で手足の痛みや、肩腰の痛みを訴える患者が非常に多いことから、物療療法（短波治療機）を取り入れ、清水尚久氏がこれを担当したが、これがまた著効をあらわし大変な人気で、開院の朝七時にはすでに長蛇の列を作っていたという。

また、奥地より治療に訪れる病人のために、同仁会の近くにホテルやペンソンも何軒かでき、廉価で宿泊の便宜をはかったので、いつも超満員だった。

一九五八年、日本移民五十年祭が行われたが、そのころは戦後移住の花盛りでもあり、年間六千人もの移住者でサントス港を賑わした。また丁度このころ海協連が主体となって日本移民援護協会（後のサンパウロ日伯援護協会）が設立されたが、もともと海協連嘱託医であった細江医師はこれの設立、運営に積極的に協力した。

日本移民援護協会の初期の事業は、サントスへ入港した移住者受入れのための医療面での協力と、奥地へ入植していった移住者への衛生面での協力すなわち巡回診療であった。海協連はこの事業を同仁会に依頼したため、武田、細江、木原の三医師を中心に、戦前好評を博した奥地巡回診療が再開されることとなった。

そのうちに援護協会内に実費診療所も開設し、上記医師陣が主として診療にあたることとなった。同仁全医師がこぞって援協に協力することになったため同仁会診療所は徐々に事業を援協に移管し、一九七三年、発展的解消をとげる。

以下、細江先生本人の手記で本項を終える。

「サンパウロ実費診療所は、日本移民援護協会保健衛生部のセンターとなっていて、私は巡回以外の日は必ずここに居るのである。この診療所へはブラジル各地から病人が訪れ、ただ診療治療ばかりでなく、重症患者のための専門病院斡旋、貧窮者の保護と無料病院への入院、治療など毎日多忙を極めている。」（アマゾン先生、一九九ページ）

参考資料

- | | | |
|-----------------|----------|------|
| 在伯日本移植民二十五周年記念鑑 | 聖州新報 | 一九三八 |
| 移民四十年史 | 香山六郎編著 | 一九四九 |
| アマゾン先生 | 細江静男 | 一九六三 |
| 熱帯農村医学叢書 | ブラジルの農村病 | 細江静男 |

一九六八

ブラジル日本移民七十年史

移民八十年史編纂委貞会 一九八〇

ブラジル日本移民八十年史

移民八十年史編纂委員会 一九八九

あのことろ 細江静男 手記

清水尚久氏談話 一九九四

サンパウロ年鑑 サンパウロ新聞社 一九九五

同仁会診療所を中心とした

細江医師の活動について

河 添 清

一、細江静男医師とブラ拓の関係

細江先生は当初ブラジル拓植組合経営のバストス移住地の病院の院長であった時もあるようですが、サンパウロに出られてからは、ブラジル拓植組合が一九六〇年二月、業務を閉鎖するまで、衛生面の囑託でした。ブラジル拓植組合（略称ブラトーポ語名Sociedade Colonizadora do Brasil）

da)は、周知の通り、サンパウロ州内ではバストス、チエテ(現ペレイラバレット)、アリアンサの各移住地およびパラナ州のトレスバラス移住地 現在のアサイ市を中心とした地域)を経営していて、産業の他に教育、衛生には特に意を注いでいて、専門家を囑託としていたものです。私はこの「ブラ拓」に日本の海外移住組合連合会から送られて来て、「九三四年六月一日付で入社(ブラ拓の責任者は宮坂国人、加藤好之の両氏)、「九六〇年二月「ブラ拓」が活動を閉鎖するまで、終始一貫全計係りとして、勤務して来たものです。

ところで一九四七年十月頃、細江先生方の診療所は規模が拡張され、会計の方の整理担当が必要となったようです。私にまずお話のあったのは、未収入金(患者の未払金)の整理をしてもらえないかと云うことでした。

この頃「ブラ拓」は敵性国団体としてブラジル国政府の管理下にあり(太平洋戦争開始後一九四二年以来)、政府任命の管理官の意向で勤務時間は官庁、銀行なみの午後のみ、六時間となっていて午前中はひまがあったものです。そこで「ブラ拓」とは関係が深かった細江先生のご依頼であり、私たちもまた、お医者様たちには色々お世話になることなので、当時私はすでに「ブラ拓」の会計責任者になっていたのですが、臨時的業務としてお引受けし、一九四九年七月まで午前中勤務、その後は一九六三年七月まで、毎日の会計の締切りに夕方出頭が続きましたが、その後は一身上の都合で(多忙のため)お手

伝い出来なくなりました。

なお細江先生が「ブラ拓」の囑託であった関係から「ブラ拓」職員、特に井久保治（拓植部支配人）、阿部弥門（井久保さんの後任）、櫻田松麿（庶務係）、松本日出夫の諸氏（以上、何れも故人）、芳賀定一弁護士などが個人的にも出入りさせてもらっていたようです。

二、同仁会診療所

カンタレーラ街一一六番三階にあった「同仁会」診療所は「同仁会」と称する法人があったものではありません。ここの運営は先生方それぞれの個人名義で診療に当っておられます。

戦前の同仁会は、主として移住者を対象に、その衛生、医療面を担当する目的で日本の外務省が設立したブラジル法人のようですが、福川メモ（サンパウロ新聞一九八四年十一月十四日付社説欄）によれば、旧日本病院の設立に当り、サンタクルス救済会に改組したとあります。但し、筆者の記憶では、同仁会診療所が一九四一年にシルベイラ・マルチンス街にありました。

なお、この「同仁会」名の使用については旧「同仁会」の責任者（福川薩然氏と思われる）の了解が得てあるとの細江先生のお話でした。先生方としては、往時の「同仁会」と同じような趣旨のもとに、コロニアの保健衛生につくしたいと思って活動しておられたようです。

私が会計整理の依頼を受けて診療カードを調べてみて、

末払い診察代などはまだいい方で立替薬品代などまで多いのに驚きました。さらに、病人の世話も色々しておられました。一例を挙げれば、地方から出て来た白血病の青年をオスピタル・ダス・クリニカスに入院させ、療養の効果もなく他界した時には、葬式一切の面倒までも見たようなこともありました。

前記番地に診療所が移転したのは一九四七年十月一日でした。その前は同じカンタレーラ街の市営市場卸部の近くにありました。

診療所移転当時の先生方は

細江静男医師 産婦人科、老人科、内科、軽外科、一日勤務。

武田義信医師 内科、午前中。

しばらくして、木原医師（耳鼻咽喉科）が終日診療に参加されました。また一時期、氏原マサアキ医師（内科）が診察に参加されたことがありました。受付には後呂定明（通称ジョアキン）君がいて、受付、記帳、雑務に従事していました。簡単な尿、血液の検査、レントゲン写真などにも従事できるようになりました。

同診療所には血液、尿の一般検査の設備があり、遠来の患者は非常に助っていました。この検査には、一時期、専門の米田フェルナンド栄医師が手伝いに来ていたことがあります。米田医師は後にサンパウロ大学医学部（サンパウロ医大）で、血液学において博士号を取られました。

レントゲン写真は一九四八年一月二十一日始動していますが、この係は当初、サンタクルス病院の山根レントゲン技師でしたが、後呂ジョアキン君が助手を務め、後、後呂君が担当者になりました（申すまでもなく写真の責任者は細江医師です）。レントゲン機の始動に当っては、清水尚久さんも出席していました。

清水尚久さんは、カンポス・ド・ジヨルドン療養所の患者でしたが全快、サンパウロに帰って電気関係（ラジオ、電蓄など）の仕事をしておられ、電気の方では時々顔を出す人でしたが、細江先生が短波治療機を導入された時には、しばらく手伝いに来ていました。この短波治療機の効果は絶大でした。

三、診療所の経営形態

すでに書きましたように診療所の法的運営は各医師個人名義、細江先生と木原先生が終日、武田先生が午前中となっていました。

一九四八年一月十五日から、モジ・ダス・クルーゼス市に出張診療が始まり、武田先生（月・木）、木原先生（火・土）、細江先生（水）となっていました。いつまで続いたか不明です。

さらに移民援護協会実費診療所となった時期もあり、細江先生が移民援護協全（後の日伯援護協会）で診察に従事された時期もありました。なお同仁会診療所は一九七三年四月に閉鎖されました。（細江先生が病気のためと

武田先生の引退のため。

■細江先生の著書

薬名辞典 一九五九年五月二十日発行

性書 (医者代弁) 一九五七年五月頃

性書後編 一九五七年十一月頃

海協連の嘱託医としての奥地巡回後の挨拶状 一九六〇年

第十四号国道沿線調査報告書 団長・細江静男 一九六五年

細江静男先生と奥地巡回診療

浅海護也

細江静男先生の遺業の一つ、先生が最も精力的に取り組まれたと言われる、巡回診療、特に、奥地巡回診療に就いて、回顧し、其の概要をまとめて見たい。

モンテビデオ丸の特別三等クラスの乗客として渡伯した、細江静男医師親子三人が赴任した一九三〇年九月頃のバストス移住地は先生の著書にもある如く、正に、広大な無医村であった。そして、着任した、其の日から、二〇キロメートル、三〇キロメートルと離れた所から、

次々と患者がかつぎこまれ、先生は、伯国の開業医免許がないままに、人道的立場から診察するより仕方がなかった。いずれにしろ、約一二、九三二域（三一、五〇〇町歩強）のバストス移住地内に散在する日本人、そしてブラジル人、五、〇〇〇人の生命を守って、毎日、風の日、雨の日、昼夜の区別なく、一人で医療に従事するのは仲々の重労働であった。然し、其の間、患者の生活に直接、触れる機会を得、彼等移住者の活き様を具に観察することが出来た。しかして、我々は決して、病気をしてはならない。健康こそがすべての発展の基礎であり、母親の病気や、父親の怪我等が、如何に彼等移住者の生活に大きな障害を及ぼすか、一旦、病気になれば、すべての希望は一朝の夢と化す事実の数々を見、移住者の生活には、けだし、予防医学以外に施す手立てはないことを痛感されたのであった。

先生は、かつて、慶応義塾大学医学部に在学中、「海外医事研究会」「予防医学研究会」等に所属し、特別に勉強した経験があり、休日等には、バストス移住地近郊を巡回診療するかたわら、予防医学について、わかり易く、通俗的に話したものであった。然し、此の巡回診療を本格的に始めたのは後年、一九三五年、以降のことであった。つまり、一九三五年（昭和一〇年）三月、先生と家族はバストス移住地からサンパウロ市に住居を移し、当時、日系コロニアで唯一の保健衛生機関であり、貧窮移住者救済の福祉団体であった同仁会の衛生技師として働

く様になってからであった。同年、一九三五年は又、サンパウロ大学医学部への入学も決まり、其の勉学と共に、日本病院の建設委員並びに同仁会の夜間診療所勤務等の多忙な活動の日々、此の巡回診療を実施されたものであった。

其の後、待望の日本病院の完成によって、一九三八年一二月、サンパウロ市、シルヴェラ・マルチンス街二九六にあつた同仁会を新装の日本病院内に移し、一層の活躍を期したのであつたが、不幸にして、第二次大戦の勃発に遭遇し、一九四五年（昭和二〇年）七月八日、日本病院の定期総会で同病院の経営が、実質的に日本人の手を離れ、ブラジル人の手に移るに及び、遂に、同仁会も解散するのやむなきに至つたのであつた。しかして、戦時中はカンタレーラ街四〇四に、コンスルトリオ・デ・同仁会、戦後は、細江静男、武田義信、そして木原暢の三医師による会員制の同仁会診療所をカンタレーラ街一六に開設する等、同仁会は変遷を見たのであつたが、実費診療、医療知識の普及と共に、巡回診療は、終始、継続、実施されたのであつた。

此の様に、先生は、一九三五年、バストス移住地を後に、サンパウロ市に転居された後も、同仁会の衛生技師として、一九四四年、正式に伯国の開業医免許を取得された後も同仁会の医師として、巡回診療に従事され、其の間、之で病気にならなかつたら、夫は既に、人間の力ではなく、神そのものの援助であろうと考えられる様な

極限の惨状を、毎日、見て来たのであった。幾度、絶句されたことか、余りに極端な貧困と過労、不良な環境衛生、かたよった貧弱な食事による栄養不良、多過ぎる子供達、日本との生活事情の相違等、幾多の原因が誘因となり、肺結核、寄生虫症、熱帯病、つまり、シャーガス病、ブラストミコーゼ、フェリリーダ・ブラバ、マラリア、アメーバ赤痢、黄熱病、そして乳幼児の死亡が多発することを知ったのであった。之等の病気によって、何と多くの優秀な同胞移住者が志なかばに倒れ、此の世を去って行ったことか。先生の生涯に於いて、町医者的な活動よりも、日系コロナ全体、特に、奥地無医村移住地の保健衛生、そして、貧窮者救済の福祉面の確立、そして其の発展に重点を置いた活躍が目立ったのも、実に、先生の同仁会時代に実施した巡回診療活動時の涙の実体験に基くところ、想像に難くないのであった。

次に、暫く、先生の足跡の発掘、回顧を置き、初期の日系コロナに於ける保健衛生と其の福祉面の変遷と巡回診療との関係を回顧、整理して置きたい。

一九〇八年六月一日、笠戸丸がサントス港に接岸、最初の日本人移住者が伯国に上陸し、日本人の伯国への渡航（海外移住）が開始されて一六年後、一九二四年（大正一三年）二月二七日「在ブラジル日本人同仁会が創立され、一九二八年（昭和三年）一〇月、社団法人として、伯国政府の認可を受け、日系コロナ唯一の保健衛生機

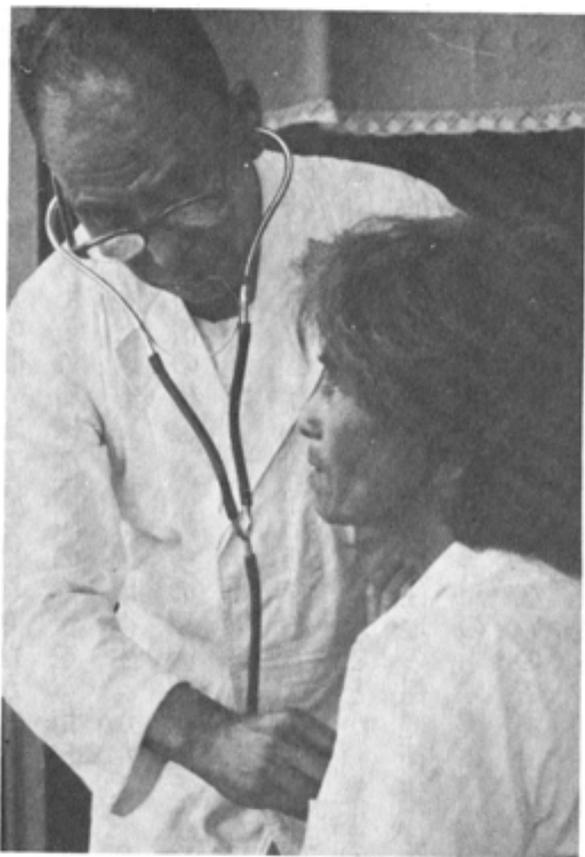
関となったが、其の事業の一環として、一九二六年頃から巡回診療は実施された。然し、当時、即ち、第二次大戦前は、未だ、日本人移住者の大部分がサンパウロ州、パラナ州、南マット・グロッソ州及び、ミナス・ジエライス州の一部にしか、入植分布していなかったため、当時の巡回診療活動の範囲は極めて狭く、限定されたものであった。

つまり、或る地方に熱帯病が発生した場合、其の地所に限り、総領事館又は、海興（海外興業株式会社）から、予算が出て、巡回診療は実施されたのであった。

以上の如く、戦前の日系コロニアに於いては、同仁会が総領事館又は、海興の殆んど、全面的補助、つまり、予算を得て、実費診療（日本病院の出采る迄）貧窮移住者救済及び、巡回診療を実施して来たものであったが、戦時中そして、戦後、つまり、戦前の同仁会の解散後は、総領事館の依頼を受けて、其の福祉面のみ受け継いだ、コンスルトリオ・デ・同仁会そして、同仁会診療所が巡回診療活動を実施したのであった。

ところが、第二次大戦後、所謂、戦後移住者の数が、飛躍的に増加するに及び、救済を必要とする移住者が急激に増え、到底、同仁全診療所の医師達だけの収入では、同仁全診療所の経営は、困難になって来たが、井久保治、伝田寛一郎、河添清、松田松磨の各氏の協力によって、日系コロニアの有力者の援助を得ることに成功し、此の難局を切り抜けて采た訳であった。

然し、安東義良大使、磯野勇三総領事の時分になって、戦前の同仁会とは行かなくても、何とか、補助金をもらう様にしようではないかという気運になり、毎年、予算書をつけて申請して来た結果、田付景一大使、石井喬総領事の時、一九五九年になって、同年、設立、発足をみた日本移民援護協会そして、巡回診療に対して海協連（日本海外協会連合会、後の海外移住事業団、現JICA）を通じて予算が出たのであった。当時、海協連在サンパウロ支部長、大沢大作氏の強力な支援並びに協力を得て、実現したものであった。何故ならば、先ず、大沢大作氏は戦前の同仁会の運営を熟知していたこと、次に、大沢大作氏を中心に在サンパウロ海協連の推進した、全伯奥地無医村移住地へ導入した大量の戦後移住者の定住そして、繁栄へのアフター・ケアの一環として、是非にも、



1966年頃、アマゾン巡回診療でマナウス地方での診察。

彼等の保健衛生及び、貧窮移住者救済を目的とした全伯的な奥地巡回診療活動が必要になって来た為であった。と同時に、日系コロニアの福祉事業も、従来の同仁会診療所から、日本移民援護協会に全面的に移行、継続されたのであった。しかして、海協連、そして、後には、海外移住事業団の経済的な協力のもとに、全伯的な大規模な奥地無医村移住地への巡回診療が始まった訳で、当時、海協連、唯一人の囑託医であった、細江静男先生を先頭に、熱心に企画され、同仁会診療所医師達、すべての参加によって実施されたのであった。

愈々、先生の足跡、最後の発掘、回顧に入りたい。

先生の著書によると、都会から五〇キロメートル以内を近郊、夫から三〇〇キロメートル迄を中間地帯、そして夫以上、つまり、三〇〇キロメートル以上の僻地を奥地と称し、此の地域を無医村地帯と考えられた由で、此の奥地無医村地帯への巡回診療を所謂、奥地巡回診療と呼ばれ、特に、重視されたのであった。

では、奥地巡回診療は、如何に実施されたか。先生の巡回診療日誌等によると、先生、一人で、飛行機、船又は汽車等を利用して、実施される時もあったが、診療班を編成して自動車による事が多かった様だ。つまり、医師が一人又は、二人、助手が二人又は、三人、副手が同様、二人又は、三人、夫に一人の運転手がつき、時には、歯科医も同行したのであった。奥地巡回診療時には、其の移住地の日本人会館や有力者の家屋の一室を借りて、

診察室にしたことが多く、又、農業協同組合、日本語学校の一部を借りたこともあった。食事そして、寝所は、其の移住地の人々に供応されたが、レストラン、ホテルも利用された。早朝より、診察は始まり、夫に付随した諸検査、つまり、大小便検査、種々の血液検査そして、レントゲン検査も行なわれた。夕食の後、夜間に入ると、予防医学、農薬中毒、営農相談、はては、人生相談迄、色々の座談会や講演会が開かれたもので、其の地方又は、其の時代によって、移住者の関心、要求は違い、従って、其の内容が変わって来ることは、屢々であった。

そして、其の巡回診療の期間は、サンパウロ市近郊への日帰りのものから、奥地巡回診療、パラナ州、南マツト・グロッソ州への一週間から、二週間位のもの、更には、東北伯地方、アマゾン地方等への場合は、一カ月間から、時には、三カ月間位の日々を費したものであった。

因みに、次表は、一九六四年一〇月九日付で細江先生自身によって、まとめられた、巡回診療一覧表から引用した、一九六〇年から、一九六四年迄の五年間に於ける先生の巡回診療実施状況である。

先生は渡伯後、四五年間の、伯国に於ける生涯、唯一度、一九六二年（昭和三七年） 帰国、訪日された。夫は、長年、伯国に於ける日系コロニアに対する医療活動、特に、奥地巡回診療活動による功績が日本政府並びに、日本医師会から、認められ、勲三等瑞宝章並びに、最高功

巡回診療実施状況 (1960~1964)

1963年度合計 (1963-4-1~1964-3-31)

巡回地方	診察日数	診療箇所	受診者	男	女
北パラナ州	10	9	510	226	284
マット・グロッソ州	5	2	92	36	56
南パラナ、リオ・グランデ	21	21	655	337	318
パウリスタ延長線	7	6	267	115	152
サンパウロ市近郊	20	20	1,681	846	835
アマゾン地方	8	7	281	143	138
サントス、ジュキア線	9	10	508	226	282
モジアナ線	6	3	318	160	158
フンシャル (リオ州)	2	2	67	23	44
	88	80	4,379	2,112	2,267

1964年度合計 (1964-4-1~1964-8-31)

巡回地方	診察日数	診療箇所	受診者	男	女
南マット・グロッソ州	7	4	266	130	136
南聖地方 (レジストロ市及郊外)	7	1	198	79	119
中央線	4	1	16	9	7
東北伯、アマゾン地方	27	13	683	328	355
ノロエステ線	17	16	840	349	491
サンパウロ市近郊	9	8	696	342	354
	71	44	2,699	1,237	1,462

1960年度合計 (1960-4-1~1961-3-31)

巡回地方	診察日数	診療箇所	受診者	男	女
北パラナ、南マット・グロッソ州	13	14	207	105	102
パウリスタ延長線	9	10	388	169	219
マラニョン、アマゾン地方	40	34	809	374	435
サンパウロ市近郊	7	5	389	190	199
サントス、ジュキア線	8	12	453	213	240
奥ソロ、パウリスタ、ノロエステ	17	15	440	190	250
東北伯地方	8	8	146	80	66
	102	98	2,832	1,321	1,511

1961年度合計 (1961-4-1~1962-3-31)

巡回地方	診察日数	診療箇所	受診者	男	女
アマゾン地方	45	30	1,481	751	730
南マット・グロッソ州	15	20	491	217	274
北マット・グロッソ州	8	7	232	111	121
北パラナ州	12	5	296	126	170
パウリスタ線	6	4	207	66	141
東北伯地方	6	6	183	92	91
サンパウロ市近郊	7	4	151	66	85
リオ・グランデ・ド・スール州	13	15	326	179	147
ノロエステ線	2	2	76	26	50
ミナス州、ゴヤス州	5	5	113	54	59
モジアナ線三角ミナス	13	7	393	195	198
	132	105	3,949	1,883	2,066

1962年度合計 (1962-4-1~1963-3-31)

巡回地方	診察日数	診療箇所	受診者	男	女
南マット・グロッソ	19	13	444	204	240
東北伯地方	13	10	388	192	196
ソロカバナ線	10	5	260	115	145
アマゾン地方	41	22	795	410	385
中央線	6	5	96	47	49
北パラナ州	11	7	396	264	132
モジアナ線	10	7	337	148	189
	110	69	2,716	1,380	1,336

労賞を受章、授与された為であった。又、日本ボーイ・スカウト達盟からも、鷹賞が授与されたのであった。おそらく、細江静男先生の一生に於いて、最良の年であったに違いない。然し、帰伯後の先生は、サンパウロ市近郊への巡回診療は、一九六六年頃迄実施されたが、日本移民援護協会理事としての、サンパウロ市での仕事に忙殺され、先生の長年の信念であった、アマゾン地方、其の他、奥地無医村移住地への巡回診療は、遂に、実現出来なかった。想えば、細江先生には、病気の為に、一九七〇年（昭和四五年）一〇月三二日、日本移民援護協会を引退される迄、渡伯当初、五年間のバストス移住地時代を除いて、実に、三五年間、巡回診療特に、奥地巡回診療の旅を続けられたのであった。

或る者は病床に倒れ、或る者は自らの死を選んで行った。此の無残な万骨眠る我が日系コロニア建設の生々しい歴史を見て采た先生は、一人でも多くの同胞移住者を救けてやりたかった。けだし、巡回診療特に、奥地巡回診療は、細江静男先生にとって、同胞愛並びに、隣人愛に燃焼し尽くした、畢生の遺業の一つであった。

参考資料 細江静男著「アマゾン先生」

「ブラジル農村病 上下巻」

巡回診療日誌、手記等

活水尚久氏の想い出話

平出学治氏の想い出話

山石中 徹氏の想い出話

サンパウロ日伯援護協会と細江静男先生

小畑 博 昭

一、はじめに

サンパウロ日伯援護協会（以下援協とよぶ）は、故大沢大作氏（当時海外協会連合会〓海協連〓サンパウロ支部長（一九六五年病投）、の後継移住者への愛情と、故細江先生の福祉・医療に対する情熱で創立されたといわれる。創立後は、第二代会長故中沢源一郎氏の卓抜な協会運営の才と、熱意により磐石の基礎がかためられ、第三代竹中正会長の十八年にも及ぶ在任中、想像を絶する発展をとげ今日がある。

協会創立三十五周年を迎えた一九九四年の年間予算額は〓一、二五〇万ドル、会員一万五千人、職員総数〓七八〇名を数える大世帯となり、これは恐らくこの種日系公共民間団体としては、中南米一を誇るものであろう。前記、大沢―細江の名コンビについては、創立時の種々の資料によっても、当時から既に、今日の「援協」が発展する姿を予測しておられたかにみえて驚かされる。

ここに偉大な当援協創立者の一人、細江静男先生の活躍を、援協の足跡をもとにのべてみたい。

二、サントス「移民の家」の創設

「援協」は一九五九年一月二十八日に創立総会を経て活

動を開始した。

その端緒は、一九五八年、戦後再開された移住者が、年間五、八四四人にも達し（次年五九年には六、五九八人）、戦後の最盛期を迎え、サントス港に上陸した多くの日本移民が税関検査をまつ間、日中は炎天下にさらされ、夜は冷いコンクリート待合所で寝、倉庫の軒下に雨露をしのぐ苦痛をやわらげ、休息と安住の場所を作りたいという、海協連サンパウロ支部長大沢大作氏の提案が、現地日本移民五十年祭委員会の強い支持をうけ、その記念事業の一つにとりあげられたことに始まる。

時の日本政府も、こうした日系コロニアからの自発的な移民援護のもり上りに呼応して、所要額の補助金が下附されることになり、サントス港、税関にほど近い、サントス市、カンポス・サーレス街六一番地（現在老人福祉施設厚生ホーム）、に適当な家屋が購入され、ここに「移民の家」が誕生した。

しかし、この家屋購入の裏付として、購入費は全額日本政府の助成金をだすが、その後の管理運営に関しては、コロニア自身の手によってやって欲しいとの要請があった。したがって、これらの運営管理を引受ける、在伯日系邦人による団体の設立が必要となり、ここに援協誕生の素因が培われた。

加えて、当時在伯日系人六十万人をこえる中には、比率は少数といいながら、病魔におかされ、配偶者を失い、或いは放浪敗残の身をおく所もない者、貧窮に泣く者が

あつても、彼らに救済の手をさしのべる福祉施設は誠に微弱であつたため、こうした同情すべき現実を見聞するにつけ、コロニア有識者は、前記の単なる上陸者のみの世話と、宿泊所を経営するばかりでなく、更に一步を進めて、広く移住者及び全コロニアの救済援護全般にわたる公共事業に取りくむことになった。

三、日本移民援護協会の創立

こうしてコロニア篤志家による創立総会が開催されて、ブラジル国の法律にそつた民事団体として、当協会の前身「日本移民援護協会」が誕生することになった。

創立総会に発起人として参加したのは二十八名。安瀬盛次氏を初代会長にいただき、二十一名の理事の中には、当時の日系コロニアをうごかす有力者ばかりをそろえ、その中に、細江静男先生も理事の一人、創立会員として、名をつらねていた。

初代専任理事は、海協連の大沢大作支部長、援協創立の提案者であつた。同氏が「移民の家が完成するまで」一六一年援協会報創刊号の一文で「サントス市、港の近くには、家屋購入にあたり、日本政府は、一応整備する資金は補助するが、後の宿泊施設の運営は、コロニアのご協力を仰げというお達しが付随してきた。援協は一面からいえば、日本政府の依頼にもとずいて発足したものであり、他面から見れば後続移民のために、援助をさしのべ

てやろうという同胞愛が実をむすんだものであり、そこに本会の趣旨の尊さがあり、従って磐石の基礎があるわけ、大方の認識を保ちさえすれば、いくらでも発展してゆく性格を持っている。このことは発足当時から最近にいたるまでの、本会に対する世論の高まりが雄弁に物語っている。」と、今日の協会の姿を予言している。「援協十五年史」（一九七四年刊行）に、その大沢さんの名文句がある。「この頃は、雀のなかない日があっても、援協のことが新聞に出ない日はなくなった。」と冗談まじりに書いている。

四、技協創立と細江先生

この頃の細江先生の活躍は、また特筆にあたいますものがあつた。援協創立の以前から、その後も、戦後日本移民が長途の船旅を経て（四十五日から五十日間の航海）、サントス港につく前日には、リオ・デ・ジャネイロに仮碇泊するが、その日時にあわせて、自分の仕事を放ってリオまで出かけて乗船、サントス港までの二日を船内で診療、衛生講話、移住地での心構えから諸注意まで、渡伯移民と膝をまじえて話し聞かせる情熱は、いよいよ明日はサントスに着いて配耕になる新移住者から、不安と動揺をとり、心をやわらげるのにどんなに大きな力となったか、今だに語り草となっている。

援協は誕生したものの、栄養不良児のように、海協連に

おんぶばかりされて、あまり一般の注目をひかなかつたが、移民の家の運営にのりだし、利用度が大いに上つたと同時に、同仁会診療所（細江先生が主となり、他の二医師と共同で運営していた医療機関）、の全面協力と、奥地巡回診療活動の好評のおかげで、活動が徐々に認められ、会員も増加、会運営も軌道にのるようになった。この主動的立場に、いつも細江先生の大活躍があつたことを忘れるわけにはいかない。

当時創立者の一人、沖繩協会の代表であつた屋比久孟清氏の言をかりれば「援協は大沢大作海協連支部長の後継移民への愛情で購入した移民の家と、同仁会の細江医師の情熱がみのつたもの」と断言してはばからない。

五、巡回診療に情熱をかたむける

僻地巡回診療は戦前にもあつた。同仁全医師達により、日本政府からの予算をえて「世界一大きな僻地」に散在した日本移民の医療保護に献身的につとめた。戦後、いち早くこの活動の再興に、のりだしたのは、細江ドクターである。援協が創設した次年、即ち一九六〇年から、この活動実施にあたり、海協連に正式予算がつき、これを援協の委託業務として実施することになった。即ちこうなる数年前から、細江、武田、木原の各医師が、海協連の囑託医師として、特別経費により活動を開始していた。北はアマゾンの奥から、南はリオ・グランデ・ド・スー

ル（南大河州）の果まで、縦横軸夫々五千軒の範囲を、一年に四万軒も、優に地球を一周する広範な地域を踏破したといえる。単なる旅行好き、物好きでは、到底できるものではない。

創立間もない援協は、海協達との巡回診療委託を期に、巡診を通じて、サンパウロと地方をむすぶ事業ネットワークをつくり、各地に会員を獲得し、協会の宣伝と、拡張をはかったものである。医師の無い僻地で、日本語による診療をうけられる開拓者の喜びと感謝は絶大なものがあつた。まるで地獄で仏にあつたようだとの手紙が、数えきれない程まいこんだものである。巡回診療は、今もつづけられている。当時は聴診器一本で行けばよい時代であつたが今では胃カメラ、ウルトラソン、心電計、臨床検査器機、眼科の検診器まで携えて機動化している。これも細江先生の予言通りである。今では毎回少くとも四、五人の医師により、専門・分科した巡回診療は、予算もかさむが、従事する若い医者たちにとっては「医は仁術」を体験する、貴重な機会で、「心のある医師」をめざしていた細江先生の理想にそう事業として、援協の目玉活動の一つとして、いまだにつづいている。

六、細江先生の理想

「援協会報―創刊号」一九六二年八月刊行に「私が考えていること」と題して一文がある。

先生特有の現実にかみ合わない理想論が、しばしばあつて面白い文章である。(別掲) これは文章だけでなく、人の集まり、理事会の席上などで、とうとうと論じられる。遂にはこれを実行して欲しいと理事連にせまる。現実では実現するには金が要る。人材もそろえなければできない。「細江先生にはとてもついていけない」となる。十四年も会長の座にあつて、「知られざる援協」をコロニアの代表機関の一つにまで育てあげた中沢源一郎氏(当時、一大農業協同組合の一つ、南伯産組の専務理事)とは、よくぶつかつた。「石橋をたたいても、渡らない」と言われる程、慎重居士と言われた中沢氏との確執は当然と言える。私は細江先生の口ききで入局した、いわば細江派の職員であるが、どう考えても中沢会長の協会運営の方が今は正しいと判断せざるを得ないことが、しばしばあつた。細江先生に自覚・慎重を迫ることになる。そうなると細江先生との間がおかしくなる。間にはさまつて随分と苦労した。

細江先生の理想論は、その後三十年もたった今日、正論であつたと予言が適中したものもあつたが、ブラジル(或は環境)の極度の発展を考慮できずに、間違つてしまったものもある。しかし、指導者の中には、常に理想を追いもとめ、周囲を自分のペースにまきこむ情熱を宿した人が多いのだが、細江先生の場合も当時なかなか理解できず、誤解されてしまうことがあつたものだ。

七、援協創始期の保健衛生部門

細江先生を中心として、武田義信、木原暢各医師の医師団は、奥地巡回診療の傍ら、同仁会の施設を利用し、困窮者に対する無料診療、病院紹介、収容等を行い、一九六〇年度には 福祉部門と合せて、六、一九六名、六一年度には、六、四八三名もの方々を世話した。

一九六二年四月より、それまで同仁会（カンタレイラ街にあった）診療所で実施しておった「無料医療診療」を、援協の直属として、日本文化センターの中に移転し、本格的に医療援護態勢を整えた。

前記三医師で交代に午前、午後新診療所に来て、無報酬で無料診療を実施された。

こんなことでは何時までたっても、後継医師は育たないと、六四年からは、新進気鋭の優秀な二世専属医師をして、診療に当らしめ、診療所は一段と機能を強化することとなった。その他、この年には細江先生の執筆になる「農村の熱帯病」、「保健のしおり」が出版され、コロナの予防衛生、健康増進に大きく貢献、援協保健衛生部の活躍は注目に値いするものとなった。

細江先生の発案で、コロナの健康を守る診療所が開設されて三十五年が経過。今では「援協総合診療所」として公共医療機関の名が定着し、職員（医師も含めて）七二名が毎日働き、十七科目の専門医療分野を担当（臨床

検査室、レントゲン科、ウルトラソン、心電計、胃カメラ、歯科診療室等も含む）、年間六万〜七万件、一日平均二百〜三百件の患者を受付、盛況である。

つい十五年程前までは「援協診療所」で働く医者たちは、一種の劣等感をもっていたと見られたが、今では「援協」で働いていることに、名誉と、誇りさえも感じているとみられる。細江先生がまいた種子が、今にしてみりつつある。嬉しいことである。

八、むすび

今年（一九九五年）は、細江先生が亡くなって二十年がたつ。世の中はこの間、随分と変わったように、援協も大きくなり、飛躍した。しかし繁日日すればする程、ますます費用が増大する医療・福祉事業の運営については、幸い今まで、日系コロニアの見事なばかりの温かい協力によって支えられてきた。しかし、世代の交代、物の考え方の変化によって、連帯感による、相互扶助などは、いつまでつづけられるだろうか。

援護を要する対象の変化も著しい。一世から二、三世へ、若年層から、老人問題へと大きく変っている。政府による公的福祉、医療体制の確立や、社会政策の整備、豊かな生活環境の実現によって、救援を必要とする人達が抄くなって、「援協」のような福祉機関が不要となる目のあることが理想であっても、なお、道遠しの感が深い。

先に援協も大きくなり飛躍した……といったが、その

中の最大に、活発化したのは「日伯友好病院」であろう。「日系・非日系を問わず、医療を必要とする人たちに、満足できるよいサービスを提供し、健康を、ひいては生命を守り、医療を通じて日伯友好親善の実をあげる」が当病院の建設目標である。幸いこれが順調に進展し、非日系人の多数から、「日系人のブラジルに対する大きな貢献」の一つとして、高い評価をえていることは同慶のいたり。このことの源泉をたどれば、診療カバン一つをさげて、北はアマゾンから、南の果まで日本移民の集団地を、一つ一つ訪ね歩き、病む人がおれば、日伯人をとわず診療し、投薬して歩いた細江ドクターの人間愛が、援協活動の底辺にあり、脈脈とその精神がうけつがれて、ここまでも発展したと見てよいのではなからうか。

「援協」の守備範囲は、今や福祉から、病院経営を通して、現代医学の実践にまで伸張している。

これは亡き細江ドクターの理想実現がなされつつあると言ってもよいのではないか。

天国にある細江ドクターが「ウムなかなかやりよるな」と言ってお下さっているか、「いやまだまだ先があるよ」と気をゆるめず、しつかり頑張れと、相変らずの毒舌をはいておられるか、今は分るよしもない。

（現サンパウロ日伯援護協会事務局長）

細江静男先生略歴

- 一九〇一年 明治三十四年七月四日
細江藤市・ゑん夫妻の長男として岐阜県益田郡中原村和
佐（現在、下呂町和佐一八八五番地）に誕生す。
- 一九〇八年 明治四十一年四月
中原村立和佐尋常高等小学校入学
- 一九一四年 大正三年三月二十五日
同校尋常科卒業
- 一九一四年 大正三年四月
同校高等科入学
- 一九一六年 大正五年三月二十五日
同校高等科卒業
- 一九一八年 大正七年十一月一日
益田郡立農業補習学校入学
- 一九一九年 大正八年十月三十一日
同校卒業
- 一九二〇年 大正九年十一月
上京
- 一九二一年 大正十年四月
私立日本体育会荏原中学校第三学年に編入学。
- 一九二二年 大正十一年九月
私立明治中学校第四学年に編入学。
- 一九二三年 大正十二年四月
慶応義塾大学医学部予科入学。

同年、志ずと結婚。

一九二六年 大正十五年四月

同校医学部本科に進学。

一九三〇年 昭和五年三月二十五日

同校医学部卒業（第八回卒業生）

一九三〇年 昭和五年四月八日

医師免許証を受ける（第六一八六四号）

一九三〇年 昭和五年七月十四日

外務省留学医としてブラジル国に向け、神戸港を出港。

印度洋廻り、モンテビデオ丸にて。

一九三〇年 昭和五年八月二十八日

ブラジル国、サントス港に上陸、サンパウロ州ソロカバナ線ランシヤリア バストス移住地に赴任。着任後、

間もなく、ブラジル国の開業医の免許を取得する為、内科、外科、産婦人科の検定試験を受けたが、法律の改正により試験は無効となる。

一九三二年 昭和七年二月二十九日

ブラジル語、地理、歴史の検定試験に合格、同年、リオ・デ・ジャネイロ医科大学の第四年生（本科一年）に入学を予定していたが、サンパウロ市を中心に護憲革命が生じ、交通遮断の為に受験出来ず。

一九三三年 昭和八年

先生の家族、バストス移住地から、リオ・デ・ジャネイロ市に転住。

一九三四年 昭和九年四月十二日

革命が終り、リオ・デ・ジャネイロ医科大学に四年生編入学の願書提出、受理されたが、法律改正で又も無効となる。

一九三五年 昭和十年三月

ブラジル拓殖組合を辞し、同仁会の衛生技師となり、バストス移住地からサンパウロ市に転居。家族もリオ・デ・ジャネイロ市から帰聖。サンパウロにて、夜間診療所経営（一九三五年四月十五日から一九三八年十一月迄）、奥地の巡回診療、日本病院の 建設等に参画。

一九三五年 昭和十年五月

サンパウロ州立大学医学部本科一年に入学。

一九三六年 昭和十一年

同年、早々、カンポス・ド・ジヨルドン市に、サン・フランシスコ・シヤビエル結核療養所の建設を始める。

一九三七年 昭和十二年二月

サン・フランシスコ・シヤビエル結核療養所（日本病院付属結核療養所）開所。

一九三八年 昭和十三年十二月二十五日

ブラジル国内の外国語学校に閉鎖が命じられる。

一九三九年 昭和十四年四月

サンタ・クルース病院（日本病院）完成。

一九四〇年 昭和十五年九月四日

サンタ・クルース病院（日本病院）開院。

同院院長秘書として医療活動に従事。

一九四〇年 昭和十五年十二月六日

サンパウロ州立大学医学部卒業。

一九四一年 昭和十六年二月五日

ブラジル国籍取得。

一九四一年 昭和十六年八月

外国新聞禁止となり、邦字新聞も廃刊。

一九四一年 昭和十六年十二月八日

太平洋戦争勃発。

一九四二年 昭和十七年一月二十八日

在サンパウロ帝国総領事館閉鎖。

一九四二年 昭和十七年一月二十九日

ブラジル国は日本国との外交関係断絶を宣言。

一九四二年 昭和十七年四月四日

サンパウロ警察の通達により、日本病院の管理経営権は警察の任命した監督官、ドトール・フレイタスに付与される。

その後、問もなく、先生は日本病院を辞去。

ドトール・ジオバニ・パラジノ・フェラリ、ドトール・八木勝郎、ドトール・武田義信等とカンタレーラ街四二一のコンスルトリオ・メジコ・同仁会を開所。

一九四二年 昭和十七年七月三日

日本の大使、総領事等、交換船で帰国の途 につく。

一九四二年 昭和十七年八月二十二日

ブラジル国、ドイツ国、イタリア国に宣戦布告。

一九四二年 昭和十七年十月三十一日

兵役の義務に服す。

一九四三年 昭和十八年七月八日

サンパウロ州海岸地帯居住枢軸国人、一万家族に強制立退き命令が下り、奥地へ移動を始める。この人達に対し、診察、薬品投与を実施する。

一九四三年 昭和十八年七月二十七日

兵役の義務を終了。

一九四四年 昭和十九年

同年、早々、伯国の開

業医免許を取得。

一九四四年 昭和十

九年八月

理由の分からぬままに、一カ月間、留置場に拘引される。

一九四五年 昭和二

十年六月六日

ブラジル国、日本国に対して宣戦布告。

一九四五年 昭和二十年七月八日

サンタ・クルース病院（日本病院）において、サンタ・クルース救済会の定期総会が開かれ、役員十二名の内、十一名がブラジル人となり、病院経営は実質的に日本人の手を離れる。

一九四五年 昭和二十年八月十五日

天皇、ラジオを通じ、日本の無条件降伏を 放送。

一九四五年 昭和二十年九月二十三日



ブラジル国籍取得のため兵役の義務につく。

臣道連盟がサンパウロ市に本部を設立し、正式に発足する。日系コロニア社会、混迷と相克の暗黒の時代となる。

一九四五年 昭和二十年

同年後半、モジ・ダス・クルーゼス市に同仁会診療所出張所を開設し、約二年間、診療に当る。

一九四八年 昭和二十三年

同年年末、医療活動拡充のため、同仁全診療所をカンタレーラ街一一六に移す。

一九五二年 昭和二十七年四月二十八日

連合国の対日講和条約発効し、日伯両国間の国交が正式に再開される。

一九五二年 昭和二十七年九月二十九日

第二次大戦後初の君塚慎大使着任。

一九五三年 昭和二十八年一月十八日

第二次大戦後初の移住者、呼寄せ独身者、五十一名、サントス港に上陸。

一九五三年 昭和二十八年二月

日系二世を中心としたボーイ・スカウト、カラムル隊を編成。

一九五四年 昭和二十九年

サン・ベント・デ・サプカイ郡のバウー地区に、カラムル隊第一修練所と付属農場を建設。

一九五六年 昭和三十一年二月

第一次ボーイ・スカウト青年移住者として、内田克明隊

員等が着伯し、バウー農場に入る。

同年、「性書」一、二編、出版。

一九五七年 昭和三十二年

サンパウロ市郊外、サンタ・イザベル郡の農場を提供して、カラムル隊第二修練所と付属農場を建設。

一九五九年 昭和三十四年

日本移民援護協会設立に参画し、発足後は第一常任理事となり、実費診療所、奥地巡回診療、救急箱実費配布等の諸活動に協力。

同年、「薬名辞典」出版。

一九六二年 昭和三十七年十月二十五日

日本医師会の招聘で訪日（東京着）。

一九六二年 昭和三十七年十一月二日

ボーイ・スカウト日本連盟より鷹賞を授与される。

一九六二年 昭和三十七年十一月十六日

日本医師会設立十五周年記念医学大会において、最高優功賞を受賞。

一九六二年 昭和三十七年十一月二十六日

日本政府より、勲三等瑞宝章を受ける。

一九六三年 昭和三十八年六月

先生の案「研修医制度」成立し、第一回研修医として、片山啓吾医師等訪日の途につく。研修期間は二年間。

同年、「アマゾン先生」出版。

一九六八年 昭和四十三年七月

「ブラジルの農村病」一編、出版。

一九六九年 昭和四十四年十二月

「ブラジルの農村病」二編、出版。

一九七〇年 昭和四十五年十月三十一日

日本移民援護協会の巡回診療、実費診療所を引退し、同仁会診療所のみで働く。

一九七二年 昭和四十七年

同年半ば、同仁会診療所も引退。

一九七四年 昭和四十九年六月二十六日

妻志ず（静子）没、（七十八歳）。

一九七五年 昭和五十年八月二十八日

サンパウロ市、オスカー・フレイレ街一四三九にて没す、（七十四歳）。サンパウロ市のアラサ墓地に埋葬される。

死亡前二年間は医療活動はなく、家の外に出ることは殆どなかった。

本略歴は細江静男先生の女婿の一人、細江修氏によって作られた「細江静男略歴」を基本として、これに遺族の方々に提供いただいた先生の生涯に関する資料、また友人、知人各位に教示いただいた先生の種々の思い出等を参考にして補足し、ここに再作製されたものである。

浅海 護也

細江先生の手記

開拓地の病気は減った……しかし

一昔前にサンパウロに同仁会という移住者保護の意味で、医事衛生面を担当していた団体がありました。

その仕事として治療面では日本病院の経営、衛生面では奥地巡回、係医に助手を同伴させ、まだお医者様のない原始林に近い部落を訪問して、いろいろの衛生相談に応じ、簡単な治療や大小便の検査を行ない、田舎芝居と同様に一カ所を打ちあげると、なごりおしまれつつ隣村へ汽車や或はカロツサ、または二十八年型位のフォードで移って歩きました。こうして広い奥地を毎年一、二回巡回したものです。

日本病院も完成し、衛生、治療相まって、軌道に乗ったかと思つた頃に第二次大戦が突発して、賓の河原の石積みはまたこわされてしまいました。

その当時同仁会の奥地巡回医としてサンパウロ州、パラナ州、三角ミナス、マツトグロツソ州その他の奥地を旅行し、広い意味での村医様の仕事をやりつつあったのですが、カンポグランデ行き汽車の中で宣戦布告となり、カンポグランデの冷い表情に驚いて、ホウホウの態で逃げ帰り、バスタンテ ノスタルヂヤを残しつつこの仕事に終止譜を打つたのでした。

かくして二十有余年。永生きはしたいものです。大勢

の同僚が幽冥境を異にしたのに、吾々蛮人組は生き残つて、また再び奥地の皆さんに親しくお会いして、いろいろ衛生相談の相手をいたす機会をもつ様になりました。昔の同仁会は衣を着換えて、今は移民援護協会と申します。

私がもつと生きのび、この会がさかえてくれましたら、毎年一、二回づつ奥地の不便な所に住んでいられる皆さんと親しく話し合い、いくらかでも私の医術が役に立ちましたら全くの喜びとするものです。

今度、海協連サンパウロ支部長の大沢さんから再び昔の仕事をやってみようではないかという話が出ましたので、喜んで引受け、援護協会の事業の一つとして北パラナからマツトグロツソの一部を巡回しました。

これは物好きやなんかではなく、全く”マタ サウダーデ”でありまして、各地の皆さんが喜んで下さったと共に、私には旧地にかえったような喜びでありました。

何か喧嘩の種はないかと、ケンカに元気のやり場を求めていました三十代はとうの昔に過ぎ去り、今や白髪のとウが立ってケンカもおさめ役の方に廻る年となりました。

その間に奥地はどんどん発展して、真暗闇の中にバナナ色の電燈がブラさがっていたロンドリーナ。駅前にかンテラの灯またたき、土ほこりは視野をふさぎ、百米も

行かぬのにセルカのアラメをはずさねば通行できなかつたマリंगा。日本人だけの村かと思われたカンポグランデ市。二十有余年の歴史は、全く昔の姿をかき消し、堂々たる数階の大建築が天に摩し、サンパウロを小さくした様なものと思えばいい程になりました。

昔あつた有様は五、六百キロ或は一千キロも奥の原始林の傍に行つてしまい、例えばテコテコで空を散歩しても、昔は停車場から五分位隣りはもう原始林だったのが、今それを求めるにはブーツと州境近くに求めなければならぬ程になりました。

そしてマリंगाやカンポグランデのその奥の奥に幾十という、新興都市が現われ、人間、ジープ、オニブスが、さながらアメリカ西部劇そのままに、織るが如き騒ぎである。

パラナバイ、ウムアラマ、ドウラドス市などその代表的新興都市である。我若し三十年若かりせばと、久々に男の生き甲斐を想い出させる姿に出逢い、若い人達にシウメを感じずにはおれませんでした。

町にゴロゴロしている若い人達より 月給取りなら日本の方がよっぽどよろしい。男は度胸、裸一貫この新興開墾地方へ乗り込んで御覧なさい。私は若人の心を慰める希望がそこにあると思つています。

しかし「奥地もいよいよけれど、マレッタの外にいろいろの悪性伝染病がある」と云う人もあろう。それは確にある。熱帯地なのだ。去年の病菌をもつた仲介昆虫は余程

の寒気が来ぬ限り生き残る。またタツ、パガイオ、プレギッサ、コチャなどの宿主も沢山いる。随つて病原は依然として存在する。

なおその他に毒蛇毒虫も沢山いることであろう。これは二十有余年前と少しも変らない。ところが病人は意外と非常に少ないのである。何故だろうか？。全く近代化学のお蔭である。

今度の第二次世界大戦はその舞台が広く、かつ熱帯地で行われた。随つて戦争に勝つためには先ず病原昆虫類群との戦いに勝たねばならなかった。

キニネ源を占領し、人智の啓発は無限であることに気付かなかつた方は戦争に負け、人工キニネ、DDT、BGH等の有害昆虫撲滅剤を発見し蚊やハエその他有害昆虫との戦に勝つた方が戦争にも勝つた。その余恵を蒙つて我々熱帯に住む者共は、昔の緑の地獄も今は楽園、安心した生活を送っているのである。

確に棉作地帯に行つてみると以前マラリアの巣といわれた地方も、完全にマレッタ患者は消滅し、またアノフエレスその他の蚊も殆どいない。DDTやBGHが棉の有害昆虫撲滅に大量に用いられ、その副産物として、我々にとって大切なサニヤメントができたわけで、一石二鳥とはこのことであろう。

しかし括目せねばならぬことは、既にDDT抗蚊が発生しつつあることで、いつかはDDTなどを浴びるほど飲んで屁とも思わないような、アノフエレス蚊がワン

サと発生して、再び多くの地方がマラリアの巢となり、今一度新しい化学薬品のおめみえを必要とすることであるろう。

ここで忘れてはならぬのは熱帯地は依然として熱帯地で、奥地の奥まで大都会にある様な進歩した上水、下水装置まで完成し、人間生活が科学化して止まぬ限り、マラリア、黄熱病、シャーガス病、マンソン氏病、ライスマニア、プラストミターゼ等の病原菌はいつもある。唯目立つ様な病人がいないというだけである。

もし今一日でも奥地のサニヤメントを怠れば、またもとの緑の地獄の再出現は火を見るより明かで、全く冗談ごとではない。奥地に住んでいる人は、それはおカミがやってくれるだろうとノンキに構えず、少しづつでも各地にある衛生局に協力することです。

ほとんど総ての熱帯伝染病は仲介者を必要とする。そこで仲介者は何者であるかを全て知り、それを無くすることである。例えばマラリア、この仲介者はアノフェレス蚊であつてカンポス・ド・ジョルドンの様な標高の高い高原やサンパウロ市の様な完備した大都市、ことに工業都市を除きブラジルのどこにも住んでいるから、私達は其の習性を知り、この蚊の発育せぬ様にすることです。

蚊の幼虫ボウフラは水中生活をする。そしてある時間その気孔を水面外に出して呼吸をし休息しているから、油を水面に散布してボウフラを窒息させると死んでしまふ。次いでアノフェレス蚊は澄んだ水たまりに好んで産

卵し、そこにボウフラが発生するから、総ての水たまりをなくするか水が流れる様にするとよい。

私達がチエテ移住地のマレッタ退治をやった時はこの逆の方法をとり、小川をせき止めて沢山の水たまりを作り、自由に蚊が産卵し易い様にした上で、十日に一度位、セキをこわして育ったボウフラを全部流してしまつたことがあります。そして二三日タンキを乾燥させてからまた水をためるといふ方法を繰返して成功しました。

シヤガス病の病原菌はトリパノゾマクルジと云い、これを仲介するのは俗称バルベイロまたはシュツパンサと呼ぶカブト虫であります。野原に住んでいて血がほしくなると住家や家畜小舎に飛んで来て、夜になってから活動を始め、人間がこれにさされた時に伝染します。そこで、それぞれの家庭で特に泥壁や板壁の家に住む人はガメシヤメ(二一十二号)の如きものをもやしてこれを殺すか、見つけ次第フミ殺すかしてしまふ。奥地の一軒一軒がこれを実行すれば大きな国家的利益であることを知らねばならないと思います。

また全ての保菌者は発見してこれをなくすること、例えば、タツト、コチヤの如きであります。その点、佐藤信淵というお百姓さんが云つたように「上農は草芽ぎらぎるに刈りとり、中農は草芽ぎりて草刈り、下農は草芽ぎるとも草刈らず」と云う言葉は大変な意味深い言葉だと思います。

密林（アマゾン）は健康地だ

ーブラ・シヨン曾野綾子の説は笑止な話だ ー

一九六〇年も半ばで奥地の旅行も終わりました。聴診器一丁を友として北はアマゾンから南はリオ・グランデ州までの旅、見たまま思ったままを簡単に書いてみました。う。

日本人がブラジルに移住し、他国人に侵入感をいだかせず自由に発展出来ますのは日本の十四倍半もあるアマゾン流域以外にない、というのが私の結論です。

この地方は日本人を真に求めています。この機を失せず入植開墾せざれば、必ず悔あらんと信じます。すでに徳川以前、伊達政宗が青年武士をローマに派遣した折、このメキシコを通っているのです。つまり日本人は徳川以前すでに南米を知っていました。然るに太平三百年の夢睡は大正、昭和の時代となり来植したくても排斥されたのであります。近頃もまたそうであります。一億の民をあつ四つの島々に閉じこめて岩戸景氣をたたえています。そしてアマゾンのあることを知っています。まことに然り。北伯の為政者は日本人がチユツタとピメンタ・ド・レーノを発見してくれた。この武器（資金）により、今やアマゾンは開けるのだ、緑の森が黄金化したとき、ブラジルの富は北より南に流れるであろう、我々のホープはこの一世、二世にあると叫んでいるので

す。このチャンスを逃がしては、すでに歴史が語っている様に千年臍をかんでも及びません。

また他方すべての為政家が親日家のみでもなく、また今日の様にサニヤメントが進歩したとき誰でも容易に開拓出来るのでありますから覚醒して事実を認め、太平の夢を繰返さぬ様切望してやみません。

まずアマゾン地域の衛生状態を見ると、私の意見も神田鍊蔵博士の意見も戸田義雄先生の意見も、また各衛生局出張所の勤務医の意見も、更に私の今回の巡回診療も、アマゾン流域は日本人の移住発展が期待できる健康地の一つである、ということであります。

アマゾン流域は古来黄熱病や悪性マラリヤ、黒水病その他いろいろの恐ろしい疾病の地とされ、我々の頭に印されたその痕跡は仲々消すべくもありません。しかしそれは第二次世界大戦前のことでありまして、戦後その様子が全然変っていることを認識いたしました。

最も恐れられていた黄熱病は、有力なワクチン発見以来忘れられた存在となり、悪性マラリヤや黒水病はクロキナ剤の内服容易となるにつれ影をひそめ、私の診た四百名余の同胞にマラリヤ指数は零でありました。

その他シャガス病、マンソン氏病、プラストミコーゼ、ライシユマニヤ病、フラリヤ病は一例も診なかつたのであります。

私は熱帯にある農村の、健康地か否かをきめますのに

都会に少い三十七種の疾患を軽重順にならべ、それを基準としていますが今日のアマゾンにはその重患六つがないのであります。

アマパ直轄地のマタピー耕地の窪田さんの弟息子さんがここの政府の依頼を受けて気温測定をやっています。この人から一九五七年から六十年までの表をもらいました。これによりますと、この四カ年間に平均最高温度は三十三度で最低は二十二度。この間、三十五度以上にのぼったのは三回きりと申しました。私も初め一週間程馴れるまでは暑いと思いましたが微風が常にあり、木陰は寒い位で、ねむれぬ夜などは一回もありませんでした。

また他方、かかる気温であるからアノフェレスは死なずに年越し、マラリヤ原虫をもち得る蚊が年中飛んでおり、油断をすればいつでもマラリヤに罹るわけで、丁度その比較は南伯や温帯で油断をすればすぐ風邪を引き、また簡単に服薬で治る如く、プラキノールやアラレンをのむことで実に容易に治るのであります。ことに一九五七年からアマゾン流域では「ピノツチ法」とて食塩拾瓦に対して四十ミリ瓦のクロロキナを混合せねば販売できぬので、この地方のすべての住民家畜までがこの食塩を食べています。すでにマナオスの同胞の耕地でも「道理で近頃マラリヤが出なくなつた」と言っていました。

同胞にある程度の医薬常識と衛生技術を与えておけば心配はいりません。この地方は安心して働ける楽園なり

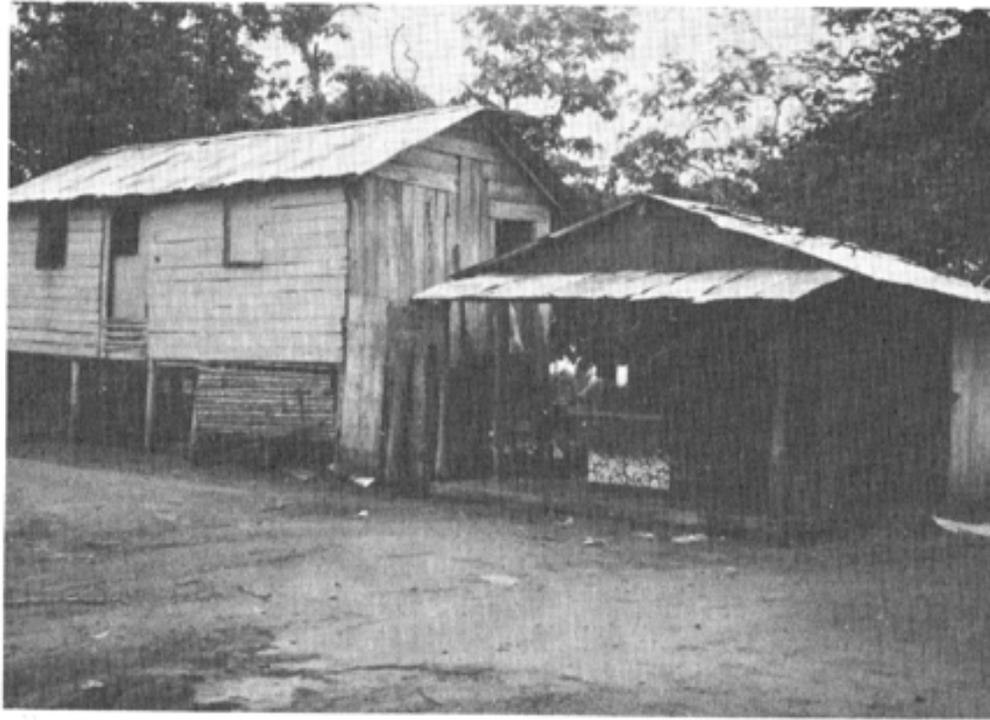
と確認いたしました。そしてムクイン（だに）がいて、緑の森が深かすぎ家もなく海潮がアマゾン上流まで侵入するので、同胞の移住に通せぬとおっしゃった銀座の有閑夫人を嘲笑、このウソつきを無視抹殺することを甚だ光栄と思う次第であります。先入観念と言うものは恐ろしいもので赤道直下、文字通りの炎熱焼くが如しで草木も燃え炎の中に人間も住み、強い光線の下、日本人も衰微しきっているのではないかと考えていましたのに、年中微風あり、そして時折のスクールは実にこの土地を住み易くし、それを示す徴候はこの健康な人々のもつあの皮膚の色であります。カラーのシネマに出て来る程銅色人種そっくりの皮膚の緊張と色合でほればれする程美しく輝き、銅色人種にも同胞がいるのかと疑うばかりの邦人にも出逢いました。

従来昔からあるこの地の食物によく馴れ、胃腸の働きも消化吸収に百パーセントと言う様な体質の人々は栄養状態も優れ、マラリヤ原虫が例え血中においても病気を起こさないのがあります。少し注意さえすれば、日本人はすばらしい体質の継続者であります。アマゾン地帯で私を大いに驚かしたことは、同胞の中に高血圧患者、慢性気管支力タル、気管支ぜんそく、肺気腫（エンフィゼー）の様な病気が非常にすくなく全く老人天国の観があったことで、世界中の老人ホームを赤道直下にうつしたいと想いつづけている次第であります。

次いでサンパウロ州の奥地であります、もうこのあ

たりに参りますと州境まで開拓しつくされていまして、移住者は開拓移民でなくて労働者補給の感があります。多くの移住者は郊外に於ては養鶏や野菜栽培の労働に従事また奥地では荒れたカポエイラ（原野）や捨てられた牧場を開墾し、棉や落花生やミリーヨ（とうもろこし）の栽培などに従事していました。資本をもつてきたある一部の人々が独立農であり、多くの人々は分益かまたは日傭いの労働者であります。

三十有余年前、同仁会の衛生技師としてこの地方を巡回いたしました折、まだこの地方の大部分は原始林で、多くの同胞はフエリダブラバや悪性マラリヤや黄熱病やプラストミコーゼに悩んでおりました。その時分を追憶転々感慨は無量でありました。正にその有様



マナウス近郊の現地人の住宅。

は今日のアマゾン州、パラ州とあの時代のパラナ、サ

ンパウロ州と好比であります。ただ今日のアマゾン、パラ州には、この六つの悪性熱帯病なく、少しの注意ですばらしい健康生活が出来ると言っております。

なお、今日このサンパウロ州奥地にはシヤガス病、プラストミコーゼ、フエリダブラバ、悪性マラリヤ、アメーバ等黄熱病を除く以外の諸病はどこにもあり、この点衛生的注意を必要といたしますが、有難いことに実行力ある州衛生局の不断の活躍でどの農村も無病息災に暮せると言うことであります。

ついで南マツト・グロツソおよび奥北パラナ地方についてであります。この地方はまだ見渡すかぎりの原始林で、開拓魂を燃え立たすに充分であります。しかし、ほとんどが土地会社の手にあり、相当の資本をもって入植せざるかぎり土地持ちになれず、ここまで来て一介の労働者ではつまりません。

而して南マツト・グロツソ、ドラドス市の郊外にウネスコ関係のセルヴィツソ・ムンジアル・デ・サウデが世界有数と言われる熱帯病研究所とその附属病院を建設中であります。熱帯病のない所は研究所建設の好適地たるはずがありません。勿論この研究所があるため、この地方はまもなくすばらしい健康地となるは違いありませんが、我々の同胞はいつも尚一歩前迄いつも森の中で自然界の強敵と戦っているのであるから、この意味でお手伝いせねばならぬのであります。

次いで南パラナ、サンタ・カタリーナ、南大河州であります。風光の明媚なことと気候の温和なことはブラジル第一でありましょう。まるで幾十万のカンポス・ド・ジヨルドン、幾千の箱根、幾万幾千の大菩薩峠を集め、これを迎え見送りつつ旅をするのであって、生きている喜びを満喫しました。

そして現地人も新来移住者もこんなよい所はない、まるで熊本県の様で病人など一人もいないとほめ讃え、さもあらんと同感でした。しかし熊本県に一人も病人はないでしょうか。方々でいたします様にお墓場とサンタカーザ慈善病院を訪問いたしました。

墓場の新陳代謝はよそと変わらず、慈善病院も満員で少し位悪くても慢性病患者は早めに退院してもらおうのだと申ししていました。パラ州ガマのタカジョスにある病院は悪性マラリヤが減ってしまい、ほとんど空室ばかりでカラッポであったのと好対照と存じます。

この地方は北方アマゾン地帯に比べて高血圧患者、心臓異状（シャーガスらしき）腎臓病、慢性気管支力タル、気管支ぜんそく、肺気腫（エンフィゼース）などが増して来るのは興味深いことでありました。腸寄生虫羅患者は五〇%内外で、面白いのは南下するにつれて十二指腸虫が減り、回虫羅患者率が高まって来ることで涼しい日本に似ています。

栄養低調と貧血はいずれも同じ秋の夕暮で健康な現地人や旧移住者の林檎色の頬とくらべ大変目立ちます。こ

れはただ単に腸寄生虫の影響のみと考えずにブラジル食に “えずき” をしていないのではないのでしょうか。つまり日本で食っていた物とここの食品との差が相当あり、且つ本当の調理法を知らぬので、食っても消化吸収が悪いのではないのでしょうか？ また食べかたが下手な為でないのでしょうか、研究の余地が充分あると存じます。

さていろいろ寸言的に述べて采ましたが、以上の要約は決して小生の独善的なものではありません。

あのアマゾン上流殊にリオ・ブランコ附近まで入りこみ、インジオ達から神の如く尊敬されている神田鍊蔵博士の報告、またパレンチンスのアマゾニヤ研究所に二十有余年留まり、同胞や現地人の診療に当たっている戸田義雄先生やその他アマゾン流域各地の衛生局出張所員達の意見を参考にした報告書の要約であり、また南方に於ては小生の巡回日記を多くの各地の学友の意見や慈善病院の報告書に照し合わせて作成したものであります。なお、ここに声を大きくして迫記したいことがあります。

それは移住者の健康は精神の安定と経済生活の健全さと何か関連があるものでありまして、健康ならざる人に勤労精神は発動せず、勤労努力なき所に全くの僥倖を除き、将来の大成は期待できません。

而してこの母体であり原動力は移住者が土地を持つと言ふことでもあります。土地を持たぬ移住は農民に於ては棄民するに等しいのであります。ここに要約いたしましう。

第二 土地を与えることでもあります。

第二、健康であることは、運命を開く鍵を持っていることでもあります。

第三、移住の目的は只単に移住者に経済的安定を与えることを以って足れりとせず、且つまた愛されるブラジル市民を作り上げるにあります。

第四、移住者の保護指導は母国出発より定住、独立の日までつづけねばなりません。幹施所入所から 船中生活が一番大切であり、この間に農民魂が虫ばまれます。そして船中からブラジルの農村の 食物に食い馴れる必要があります。

第五、移住者は既成国家ブラジルの社会へ”新入り”するのであって、例え原始林を開いても神武創業ではありません。養子なのです。養子としての行儀作法を学び覚えましょう。

移住者送り出し国家なる日本も各地に領事館をおき、充分な保護援助をしてやりたいとの親心は充分なのですが、ブラジルは余りにも広く、また移住者諸君が呼び寄せその他の方法でアマゾンの奥から南大河州の果てまで広く粗く散在していますので、この親心がはてはてまでも届く様この出先官庁の及ばぬ場所を移住者の兄貴である我々が手助け出来ます様、新来移住者も旧移民もまた二世も手を握り合って一つの団体を作り、平和の時も不慮の時もいつも話のし合える関係に於て助け合っていきたいのであります。

どれだけこの国の人々から愛されていても今度の大战中、戦後に経験した様な不安、苦悩を出采るだけ少く済む様能うる限り多くの同胞が協力溶和し、この団体により対官庁へもまた社会的にも円滑に動く日がもて、皆そろって有用なこの国から喜ばれる農場主となりたいのであります。

この団体は一九五九年日本移民援護協会の名前で登録公認され、すでに活動を開始しています。皆さんのふるっての参加と協力を願ってやみません。

(サンパウロ日本文化協会

「コロニア」 二七号一九六一)

私が考えていること

日本移民援護協会の仕事は、移民が故郷をはなれる前から移民国の正しいPRより始め、その国に落着き、その国の立派な公民となり、日本民族の一員としての国際場裡ですばらしい活躍が出来るまで蔭になり、ひなたになり後援協力するのが目的でありますから、その一環である保健衛生も、ただ単に貧窮して病気になった人に薬をやったり手術するのみでなく、広く健康を保持し、病気になるって労働能力が低下せぬ様、否向上する様、予防衛生的後援協力をせねばならないのであり、個人的衛生、家族衛生、精神衛生、生理的衛生と、その活動範囲は甚

だ広大なものであります。

而して他方移民福祉部の活動と相まって、車の両輪の如くになってはじめて会の目的が遂げられるのであります。片足では歩行困難なのであります。

また本団体は、日伯両国の仲介に存在しタンポンの役目を果さねばならぬのであります。移住者は、その送り出し国に於ては、教養に於て立派な公民でありましょう。しかし、受入国側に於ては言語に於て、風俗、習慣を知らぬことに於て全く赤ん坊に等しくありながら、受入国につくと一人前のあつかいをされるのであります。技術教養の点に於てすぐれていても、日々の生活の不自由からコンプレックスが生れ、ここに色々の問題がおこってくるのであります。これは社会問題であることもありません。また保健問題であることもありません。

何れにしましても仲介の役目としてのタンポンが必要となつて参りますが、これが本会の活動範囲なのであります。つまり、送り出し国の当局者がせねばならぬと思つていても、外国なるが故に不可能、見殺しにせねばならぬこともありましょう。そこでこの受入国の政府から、公認されている福祉事業団体は、その国の法律にそむかぬ限り、広く、深く立ち入って、いろいろな移住者のための仕事、協力がしてあげられ、当局者の指先きのとどかぬところを指先きになって、働いてあげられるのであります。

それを左記に列記しましょう。

一、奥地巡回診療班の活躍

北はアマゾン流域から南は大河州のシュイ町まで、聴診器と血圧器で活躍しているのですが、日進、月歩の医学におきましては道具さえ完備すれば、奥地の原始林の中にも、サンパウロ、リオ市の一流病院における如く癌の早期発見、熱帯病、糖尿病、肝、腎、心臓病の確実な早期発見は皆可能なのでありまして、癌患者におきまして、死を決してサンパウロに来る前に、なおる時代にその診断が可能となり、ただ単に心配のみでない一番大事な農村の労働能力をおとさぬ内に、診断治療が可能なのであります。そこでアマゾン地方には巡回診療船を、また南方へは巡回診療車数台を入れ、それぞれ日本語のわかる臨床医が協力するのであります。

二、実費診療所の充実と増設について

目下のところサンパウロ市の中央実費診療所と、サントス市の移民の家に併設されているものと、二カ所のみであります。その必要性は奥地巡回の小中心として増々大事になって参ります。とりあえずベレン市およびポルト・アレグレ市にその開設の必要性が切望されております。

三、本会勤務の後継医および技術者の養成

本会の保健衛生部の目的を遂げますには、現役の医者、技術者以外に、新しい後継医および技術者の養成を必要といたします。

四、重症患者の入院、その他の処置について

癌、肺病、諸熱帯病、肝心腎臓病および精神病の様な重患にかかりますと、奥地に於ての静養には限度があり、皆サンパウロ市に出て来られます。金のある人も貧窮な移民も、会員は言うにおよばず、実費診療所を訪れる折は、皆適当な処置を行なっていますが、一番欲しいものは、本会員およびこれらの病人のための特有のホテルであります。この点について特に皆様のご研究とご協力をお願いし、奥地から出聖した会員、および入院まで待合所たる簡易宿泊所のもてる様になりたいものであります。

後継医の養成と産婆技術者の養成

一、後継医の養成、二世医の採用と一世医の移住

二世医は日本語さえ上手に話せば、そのまま採用出来るが、卒業して三カ年位すると、都会に於て百コントス位の収入のある就職が可能となるので、民族的精神に目覚めた二世医でない限り、協力してくれない。そこで卒業して一、二年位のものの中から優秀な吾々の後継者となる青年医（未婚にして、未就職）を選び、日本へ二カ年留学させて、四カ年職務をもたす約束で採用する。

一世医にて、当国に移住し医業に従事したい人。その中で本会の事業に協力出来る人々を採用致したい。これはブラジルの開業資格を得なければならぬ。つまりコレジオ程度に於て、ブラジルの地理、歴史、ブラジル語の試験に合格し、この合格証をもつて医大を訪れ、AⅡ学生として四、五、六の三カ年を修業するか。BⅡこの三カ

年に学習する課目を、検定試験によりとるかである。AもBも金のかかることであるから、大使館の留学生にしてもらって、補助を受ける他、方法はない。

二、産婆の養成

奥地の無医村で一番困る問題は、産婦の処置である。原始林の近くで医者のある市や町から百キロ―三百キロ離れている人々は、全く心細いにちがいない。

そうかといって、正式の産婆は仲々もうからぬ小さな村には行ってくれない。そこで、素人で少々

器用な人々で、覚えたい人々に講習会を開いて、簡単なことだけおしえることである。サカゴか、正常位か、もう生れるか、まだ手間がかかるか、双子か、ひとり子か等々簡単なことでよいと思う。産婆を養成したいことがある。

三、技術者の養成

全伯を通じて、農村人が一番かかり、栄養失調になる原因は、腸寄生虫病であり大体八〇%の人々がかかっていると思えばよい。

これも大体、大便検査で診断が出来、素人でも少しなれば簡単に分る。また安い顕微鏡でよいのであるから、各奥地の農村で、こういうことの好きな人々があったら、集めて講習会を行ない、医学の通俗化の一端としたいと思う。

(一九六二・八 「日本移民援護協会」

会報創刊号より)

私の意見 移 住

移住ということと棄民ということだが、同じであるならば、移住者がほとんどいなくなつて一カ年を通じて百名内外に落ちたということは喜ぶべき現象ではないであろう。また移住ということと、出稼ぎということと同じであるならば、これもまたそう苦にすべきことではない。私達が移住という言葉こそ、喜ばれる同胞の海外発展と考えたとき、海外に出て定住しようとする兄弟姉妹の減少し、なくなるということは、悲しいことと思われ

る。出稼ぎは、どれだけ長く外国にいようが、外国語をいかに上手に話そうが、その生活は母国の延長であり、外国において母国の市民権をもちつづけよう。

母国の選挙権をえようとする考えであつては、これは移住とは大きな違いのあることである。移住とは農業であろうが工業であろうが、また商業であろうが永住の目的をもってブラジルに帰化して、ここで死んで行くことで、市民権を持ち、ブラジルの社会人として生きて行くことで、ここに住んで日本の選挙権を持ちたいなどと考えるのは、出稼ぎ人根性であつて、本当の移民ではない。

いかにブラジル語を上手に話し、ブラジル人の間に溶けこんでいても、この基本的精神が出来ていないかぎり、これは移民でなく、ブラジルの社会を構成するその分子

とはなり得ない。

日本の社会に執着をもち、日本を死に場所と決めてい
る人は、どうしたって良いブラジル人になれない。ブラ
ジルを死に場所と決めることが第一であろう。

移住して来ている人の中には、こんなに割り切れない
人も沢山いることであろう。またその必要もない。

渡伯後三十年も四十年もたつて孫も彦孫まであり、奥
地の原始林に入ったのであるから、これだけの歴史の後
には、幾百アルケールの土地も幾拾万の財産もあつて、
おしもおされぬ奥地の有力者である。こういう人に何の
帰化権が入用であろうか。ここ生れの子供や孫が全部、
代りをやってくれる。

こういう人々が三、四万はいるのではないかと思う。皇
太子訪伯の折り、特にこの感が深かつたものである。

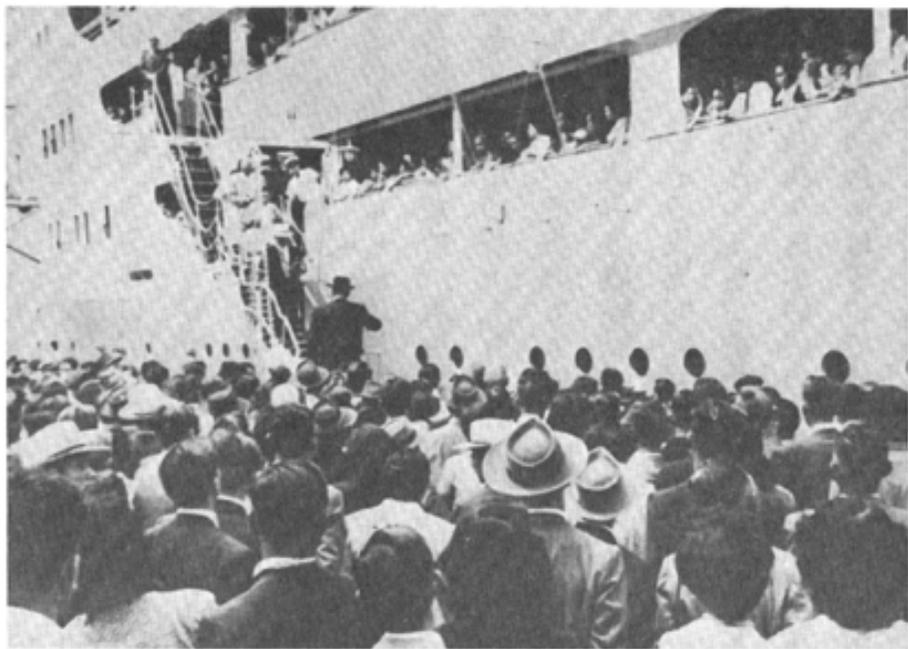
尚、概算して僻地には、二十万近くの日系人が住んで
いる。この中には、六、七万の日本国籍の人々があつて、
この人々の大部分は農業に従事し、ブラジルの生産に貢
献し、ここに生きている百パーセントの義務は果してい
るが、社会人としての権利は何も持っていない。ここで、
この人達に帰化を勧める理由を考えると、この人々がブ
ラジル語を上手に話す、話さないなどということはどう
でも良い。

アフリカのエチオピアの文盲の黒人といえ選挙権を
もっているが故に、帝政を転覆する所まで持つていった。

然るに移民はどちらの市民権も持たないここで、日系

人も出来る範囲で市民権を取って、我々の生活が安泰に保って行ける様、努力せねばならぬ。

ブラジルには、七十万近い日系人が住んでいる。この人々が平和に日々の生活を続けているのは、日本政府の威力のおかげでもなければ、大使や総領事の外交よろしきを得ているのみでもない。只々デモクラチックなブラジルの政治が我々を保護してしてくれるからであり、その基は清き選挙民の一票の集りが政治であるかぎり、そうして欧州系の一票もアフリカ系の一票も日系の一票も同価値であるかぎり、社会人としては誠に心身を保護するにもこの市民権を持つことが必要なのである。



移民船のサントス入港と出迎える人たち（1958年頃）

ブラジル語の習得については、これは国語であるから、これを習める義務はあるが、どの程度までか、その限界はない。そこで我々が僻地に住む二十万以上の同胞に対して全く同情的とならねばならぬのは、学校はなく、保健診療施設なく、電気もない、もちろん環境に住む現地人、カボクロ達も同様であるとはいいながら、これらの子供と同様に五、六万の日系の子供も小学校なく、また日系の教養を高める施設もなく、一般のレベルが低いだから、これにつれられて文盲の中に入りこんで行ってしまう。

日本やあるいはサンパウロやその他文化のある都会に住んでいる血縁の子供達と比べて、五年、十年後にはどんな差が表われて来るであろうか。

今、この奥地でみられる生活状態は日本の徳川時代、平安、奈良時代の農村のそれと、なんらのかわりのない、若しも現在の日本人の子供を標準として考えるなら、七、八百年の退化であろう。

過去の状態は、いつまでもそうではないことは明白である。しかし、原始林開拓を好む日系人は、明日はなおその学校、病院、電気のない僻地へ乗り込んで行くことであろう。ここに我々同胞に対して特に何か別の考慮が入用でないかと思われるのである。

この二十万が文化高き教育のある移住者であったならば、奥地開発にいかばかり役立って行くことであろう。これがまた逆で、奥地のカボクロと同じレベルに落ちて

行くのであれば、ブラジルを良くする為に移住して来た人々が、このカボクロと同じに文盲として、ブラジル政府に二重の世話をかけて行くことになると思う。

日本語はブラジルに於ては外国語である。したがって外国語が通ずるといふことは、それだけ外国文化を導入し易いとゆうことで、ブラジルに大變利益のあることで、日本語で東洋文化を取り入れることは、外の移民では不可能のことである。

そこで我々は日本語の読み書き、話せる人々の生きてゐる内に素晴らしい遺産として、子に孫に残していかねばならぬのに、この奥地の二十万の人々には忘れ勝ちとなり、或は仕事におわれ、または烈しい疲れのため、若い人々は子供に対して、この素晴らしい遺産が残されることが、おこたり勝ちとなる。このため五〇六万に近い日系の青少年は日本人の顔をした、カボクロとなつてしまふであらう。

これは放っておいてよいことであらうか。若し移住とゆうことが、民族の喜ばれる海外発展と定義されるならば、渡伯移民の減少といふことは悲しむべき現象であり、それと共にこの五〇六万の子供達が、特長ある民族的教養の遺産を貰わずに、カボクロ化して行くことは、日本民族にとつても、ブラジル人にとつても、また悲しむべき事実と言わねばならない。

これ即ち我々日本移民の先覚者が熟慮して対処せねばならぬことであらう。これを痛感した我々援協医務部の

人々は、すでに十有余年前から巡回診療班を組織し、奥地の保健衛生の一助と共に、配布する書籍、雑誌を持ちシネマ、スライドを持ち、講演会、座談会を行ない、微力を尽して来ている。

今日になって振りかえってみると、これは間違っていないなかった。そして文化面にもっと力を入れねばならぬと思う。そして出来たら各州の大きな都会に日系人学生のための本格的な寄宿舎を必要に応じて開設し、そこには教育大学出身の舎監をおいて、ただ単に寝かして食べさせるのみでなく、民族的な教養を向上させようとする。この人は先生がするのでなく舎監として日本語を話し、日本人的教養、躰をやってくれるのみで良い。

こういう意味の寄宿舎が方々にあるわけで、家で親のする躰けとこの人が今、少し高い教養で新しい日本に、たてつけてくれるのである。

つまり一言で云えば、移民と云うことは、人を海外へ送り出すのみでなく、定着させ、経済的繁栄をもたせ、母国の外に住む同胞として恥かしくない民族的、教養をもたせ、その国の社会人として生きて行ける様、母国の当局も移住した先輩も協力、出稼ぎでない本当の移住の意義を実現させることであろう。

（ブラジル日本文化協会 「コロニア」

八四号一九七〇年）

細江先生の思い出

父のこと・母のこと

―知らなかった日々―

在日本 細江 仙子

小学校五年生の時（在日本）のことである。作文の時間に「母」という題が出された。私は書くことが好きで、この時も当然よい点がとれると思っていたのに結果は七点であった。何故かわからず不満であったが、先生の読まれた優秀作品を聞いて納得した。そこには私の書いた抽象的な母とはちがいが具体的な母との交流が書かれていた。私には書けないことである。よい点のとれなかった悔しさと共に親のいない辛さを始めて実感したときだった。それまでは物心ついたときから親はいなかったし、何ひとつ覚えておくこともなかった。祖父、祖母、叔父夫婦、姉、手伝いの人たちに囲まれた生活が普通だと思っていた。

父は親しくしていた小学校の校長、川田卓先生に子供の教育を頼んでいったらしい。たびたび先生の家へ呼ばれて両親への手紙を書かせられた。先生の奥さんに教えていただいていたようにか書いたが、何も書くことがなく嫌で仕方なかったことを覚えている。私が小学校へ入る前だと思いが母から来た一通の手紙が残っている。

保ちゃん、ノリちゃんオテガミヲタシカニミマシタ。

ジヨウブデガツコウへ行ツタリアソンダリスルトノコト、
オトウサンモオカアサンモヨロコンデイマス。ソシテ二
人トモ字ガカケルヨウニナツタノデカンシンシマシタ。
保チャンハノリチャンニオシエタノデシヨウ。何デモソ
ウイウフウニシテ二人ハナカヨクシテオリコウニナラナ
ケレバナリマセン。オトウサンヤオカアサンガカエルコ
ロニハ、モットオリコウニナツテクダサイ。

オジイサンヤオバアサンノイウコトヲキイテヨクオツ
カイヲナサイ。ヤンチャヲイツテオバアサンヲコマラセ
テハナリマセン。トモダチトモナカヨクイジワルナコト
ヲイワヌヨウニナサイ。二人トモジブンノコトハジブン
デシテオバアサンノ手ヲカケヌヨウニナサイ。

保チャンノリチャンへ

サヨウナラ

母がどのような思いでこの手紙を書いたか。しみじみ
と読み返したのは何十年の後のことである。

父を身近に感じたのも五年生の時であった。歴史で平
家と源氏が戦いを繰返していた頃を学んだ時間に「新田
義貞は38歳で戦死したが、38歳のお父さんのいる者
はいるか」と先生が言われた。私はすかさず手を挙げた。
平常には意識にない父が急に頭の中へとびこんできたの
である。この頃父はサンパウロ大学医学部の卒業が近く
家の中でも何かと話題になり、私なりの父が形づくられ
ていたのであろう。然し写真でみる父や母、妹たちは遙
か遠い存在で私の日常のなかに止まることはなかった。
32年を経て両親に逢うまでは、祖母を通じて知った言

わば「絵に書いたリンゴ」であった。
一九八四年に出版した歌集「オスカルフレイレ」に次のような一首がある。

父の住む国を地図で知るのみの

分別なかりしとおき日を恋う

「分別なかりしとおき日」とは正に五年生、十一歳のころである。

父母の故里と生い立ち

父母の故里岐阜県は山また山の緑と、豊かに流れる川の青に彩られた山紫水明の県だが、下下（げげ）の国といわれた飛騨の入口に位置する益田郡下呂町（旧中原村）和佐が生れ故郷である。この和佐という部落は殆どの家が「細江」の姓で、古老の話によると先祖は、徳川氏と豊臣氏の戦いに豊臣方について破れ逃げてきた落武者だという。

父は一九〇〇年六月三日、細江藤市、こう夫婦の長男として生まれた。この家の六代目である。生まれた家は通称「山の神」と呼ばれていた。家の近くに山の神が祭つてあったので、いつのまにか「山の神」と呼ばれるようになったというが、定かなことはわからない。藤市もこゝも再婚であった。

藤市は離別であるがこうは死別である。こうの夫は田舎では珍らしいエンジニアで毎日が幸せだった。

二十四歳で死に別れたときは、これで自分の一生も終わったと思つたという。すつかり将来をあきらめ一生独身で過してもよいと思つていたころは、小姑も多く余り条件のよくない藤市との再婚を深く考えないで承知した。その頃和佐の家はどこも萱ぶきの小さな家であつた。藤市家も同じであつたが、父は新築した家で生まれた。そして三年後に生まれた賢二と二人兄弟として、この家で青少年時代を過したのである。

母は父の家から一kmほど離れたところの、貞太郎、きく夫婦の二女として一八九六年四月十一日に生まれた。家は「本屋」と呼ばれて山林、田畑も多く、父貞太郎は部落のまとめ役として有能な人であつたようだ。母には姉と弟がいたが、嗜好も考え方も父親に最も似ており気に入られていた。岐阜女子師範学校に在学中、富士山へ登りたくて両親には黙つて登つた。帰つてから父にいと「仕方のない子やな」といつて苦笑いしただけですんだ。母は「親だからどんなことをしたつて憎いはずはない。きつと許してくれると信じていた」といつた。

後年ブラジルへ発つとき、「私がいなくなつたらどんなに淋しいことか」と心残りだつたという。

貞太郎は渡伯一年後に亡くなつてゐる。

父は母より四歳年下である。このことに父はこだわつていたようだ。今の時代ならなんでもないことだが、夫が権威をもつていた時代に育つたものとしては無理からぬことだろう。母も年が上ということではそれなりの悩み

があつたようである。自分の娘たちには一つでも二つでも年上の人と結婚させたい、と言っていたという。

だが父と母の里が同じであつたことは年を重ねるに従つてプラスとなつていった。里飛驒の話、和佐部落のこと、楽しかったさまざまな行事、同級生たちとの思い出など、共通の話題で話しあえることは何よりも幸せなことであつたらう。

祖母（こう）の生い立ち

祖母（戸籍名はえん、であるが普通には、こうと言つていた）は幼い時に父親を亡くしたので、母、姉と共に下呂町少ヶ野の山林王といわれた中川家の家敷内で育つた。ここで行儀、作法、裁縫、読み書きを教えられたという。また高山陣屋へ行く役人が泊つたり、他県から働きにきたさまざまな人達が入りしたので、世の中の流れもよく知っていたようだ。息子静男がブラジルへ行くことになり、幼い孫二人を預ることになったのは、こうが五十歳を少し過ぎた頃だろうか。私と姉は親鳥の羽の中にもぐりこんだ雛のように、この温かい肌を抱かれて育つた。然し勉強のことになると厳しい人であつた。いわゆる教育ママである。こうには一つの目標があつた。それは両親の元にいる妹たちに負けない子に育てたい、ということである。年度末の総合点が一点さがつただけで叱られ、泣いているとそのようなように悔しかったら何故

もつと勉強しないのか、と又叱られた。それでもいつの間にかべつたりとくつついていたものである。

こうは折にふれよく父と母のことを話した。殊に父のことは幼い頃からブラジルへ行くまでのことを細かく話してくれた。それはいかにも楽しそうであった。いつの間にか、私の頭の中にはこうを通じて父母の像が画かれていった。

こうの思い出話

静男は夜泣きをする赤ん坊だった。泣きだすと舅や姑・小姑に気を使って、暗い家のまわりを泣きやむまで歩きまわったものだ。嫁にきた頃は、義弟や義妹夫婦も一緒に住んでいて気の休まるときは全くなかった。夫（藤市）は長谷川木材会社の出材現場監督をしていて、主として愛知県三河地方で働いていた。時には台湾や朝鮮や樺太へ木材の買い付けにゆくこともあった。一年に一回お正月に帰るだけだったからゆつくり話をする時間もなかった。山林や畑や田は分家だから少なかったが、それでも外へ出て働かねばならなかった。生まれて始めて稲刈りをしたとき、稲がまるで針金を握るように痛かったことは今でも忘れない。また私は味噌汁が嫌いだったが農家の嫁がこんなことでは子供の教育もできないと思ひ、がまんして食べたことも思い出す。

静男が一歳ころだったろうか。お盆に在所へ帰ったことがある。家までは益田川に副って上流の方へ四里（十

六km) ほど歩かなければならなかった。久しぶりに帰るのが嬉しくて背中静男が重いのも苦でなかった。中程までいったとき行者に出あった。行者は立ちどまって静男を見ていたが、この赤ん坊は将来この狭いところにはいない相をもっている。大事に育てなさい、といった。私は本当にうれしくて行者に礼を言って別れた。このことは誰にも言わず自分の心の中にしまっていたが、心の支えになった。静男も賢二も成績はよかったが腕白坊主でいつも泣かされた。あちこちで悪戯をするので何度頭をさげて謝りにいったかわからない。校長先生が学校から帰られる頃をねらって道にかけていた蜂の巣をついたことがあった。先生がさされて逃げてゆくのを面白がってみていたらしい。

この時は身の縮む思いで静男をつれおはぎを持って謝りにいった。

一年生の時だった。修了証書がもらえなかった。それは戸籍の上では実際よりも一年おくれた生年月日なので、現実では一年早く入学したことになり証書がもらえなかったのである。静男は気分をそこねて運動場にすわりこんだまま動かなかった。先生は困って私を呼んで説得してくれるようにといわれた。私は何か紙きれでいいからそれらしいものを書いてほしいと頼んだ。先生は承知して修了証書めいたものを書いてくださったが静男は怒って破ってしまった。

先生は維太郎先生で人格者だった。静男は成長するに

従って先生を尊敬し何事もよく相談していた。

私も自分でどうしてよいかわからぬことがあると、夜間でも先生の家を訪ねて力になつてもらつたものである。

静男が高等科を卒業のとき謝辞を読むことになつた。

これに対して答辞は六年生の代表として弟の賢二の名があがつた。ところが兄弟ではおかしいという意見が出て賢二はおろされることになつた。

このいきさつを聞いた賢二は生采の短気も加わつて静男と取っ組みあいの喧嘩となつた。本当にひどいもので私もどうしてよいかわからずおろおろしていたが、父親の留守の家で自分がおさめられないようではだめだと思い、二人を力いっぱい殴つた。何遍も何遍も殴つた。そのときは私も泣いたが二人も泣いた。それ以来このようなひどい喧嘩はやらなくなつた。

静男が東京へ行きたいと思つていふことはうすうす感じていたが、できるなら思うようにさせてやりたいと思ひ黙つていた。いろいろもめごとはあつたが、無事に東京へ行つたときはほつとした。大学へ入つてからは夏休みに必らず帰つてきた。あの頃は東涼などへなかなか行けなかつたので、友達が珍らしい話を聞きたくて集つてきたものだった。静男は何年東京にいても帰つてくると和佐言斐で話しているので「東京でもこのような言葉で話すのか」と聞いたことがある。あの子は「そんなことは心配せんでもいいよ」といつて笑つた。

静男が静子と結婚したのは慶応大学の学生るときだつ

た。静子は師範学校を卒業して和佐小学校に勤めていたが、休みの日などよく私の家へきて話をしていった。静子は温和でやさしく私はとても気に入っていたので早く結婚式をあげて家へ来てもらいたかった。これは結婚前の話であるが、ある日静子は泣きながら私のところへやってきた。「静男が病院の一人娘のところへ養子にゆくことになったからあきらめるように」という手紙が知らない人から来たという。私は驚くと同時に腹がたつて「この母親の目の黒いうちは絶対そのようなことはさせんから心配しないように」といつてなぐさめた。後に静男から聞いたことだが「田舎娘との婚約などことわって、こちらで上流家庭の娘と結婚した方がよい」と誘った人があったという。

二人の結婚式は静男不在で写真だけの式であった。親類への披露が終ってから静子は一人で上京した。四月のはじめで桜がちらほら咲いていた。その日は雪まじりの雨が降って寒かった。びしゃびしゃした道を傘をさして遠ざかってゆく後姿を見送りながら、私の胸は不憫な思いでいっぱいだった。

静子の新婚生活は七月までだったが、東京での四ヶ月は心満ちたものであったらしい。後々まで東京での日々をたのしそくに話してくれた。八月の夏休みに夫婦そろって帰省したのだが、留守中にあの関東大地震がおきたのである。家財道具一切が焼失してしまったが、東京にいたら命がどうなっていたかわからず、田舎へ帰って

いてよかったとみんなで話したことだった。二学期が始ってからは静男一人が上京した。静子は再び東京へ行くことはせず近くの小学校に勤めて給料の一部を静男の学費にしていたようである。長女の保子が生まれると朝は私にあずけて勤めにゆき、お昼になると乳をのませに帰ってくる毎日であった。通えない学校へ転任した時は子守りをたのんで教員住宅に住んだ。

静子は経済をよく考えて、例えばわかめを使うときは堅いところは味噌汁に、柔らかいところは三杯酢にして食べるというやり方だった。それで静男がブラジルへゆくときも、この嫁がついていてくれるから、と心配しなかった。

静男は気のやさしい子でブラジルへ行くとき独身でいた義弟の邦義を同伴したのも、将来、男二人の面倒を見なければならなくなる私のことを心配してのことだった。年をとってから夫とその弟の世話しなければならぬその苦労を、医者としてよく知っていたのである。ブラジルへ発つとき「あちらでも病人にはやさしくしてやってくれよな」といったら、「親はいつまでたっても親やなあ」といつて笑った。あの子は何もかもよくわかつていたのであろう。出発の朝、開通したばかりの焼石駅まで見送りにいった。保子は一年生になったばかりで学校があるの、私と一緒に駅までだった。汽車がトンネルへ入って見えなくなると胸にたまっていた思いが一度にあふれて二人で泣きながら家に帰ったことは忘れない。静

男は子供を二人ともつれてゆきたかったのだが、父親の藤市は「つれてゆくのだったらブラジル行きを許さない」とひどい剣幕だった。せめて幼い仙子でもとパスポートまでとっていたのだが、それもあきらめなければならなかった。静子は辛かったにちがいないが一滴の涙もこぼさなかった。静子は神戸の港から姉のせいのところへ一通の手紙を出していた。手紙には自分の辛い気持ちを「鳴かぬ蛍の身の辛さ」と書いていたという。せいは「そんなに辛ければなんでこんな小さな子をおいていくんや。つれてゆけばいいのに」と泣きながら話してくれた。

賢二をはじめ親類の若い人たち、それに藤市も神戸の港まで送りにいった。仙子は近くの娘が金山駅までつれてゆき、ここで別れてきたが、別れも平気で近くにあるダムのボートにのりたいと、道の真中で泣いて動かなくなり困ったと話してくれた。港へは慶応大学での同級生だった渡辺嘉津馬という人も送りにきてくれたそうだ。あの頃のブラジルは本当に遠い遠い国であった。保子もせいも静男たちと再会することなく、このときが最後の別れとなってしまった。

父（静男）の追憶より―少年時代・青年時代―

父親（藤市）は一年中働きに出て家にいなかった。そのせいか抱かれたとか、甘やかされたといった思い出がない。一口に言えば冷たい感じを持っていた。特に金銭

のことにはやかましかった。四年生のときの辛い思い出がある。一年間の家の収支決算をするのが私の役となった。暮れになると父が帰ってくるので決算書を見せなければならなかった。十二月三十一日の昼食後、私を前に坐らせた父は丁寧に調べ一厘（あのころ金銭の単位は厘だった）でも間違っていると、決算がきちんとあうまで夕方になってもやりなおさせた。子供だから遊びにゆきたいのに、「以上間違はなく御座候、細江藤市殿」などと書かせる父を本当に冷たい人だと思った。成長してから金銭にかかわることが嫌いになったのもそのせいかもしれない。

母親（こう）は育て方は厳格で決して甘やかさなかった。だが心は温かい人で私はとても尊敬していた。夫が一年中いないので苦労しているのを見て力になってやろうといつも思っていた。そして母にときどき意地悪をする叔父や叔母に少しも好感がもてず、子供心にも母を苦しめる人間は本能的に厭だった。ブラジルへ渡るとき、六十歳にもなる叔父をつれていったのも、年老いてゆく母に苦労させたくない気持からであった。

小学校の頃は三年生ごろから欲がでて一生懸命勉強するようになった。特に算数が得意で高等科にすすむとあの頃の中学校の教科書までやった。時には先生の助手になってわからない生徒に教えたこともあった。相当な悪戯者だったが成長するに従っておとなしくなっていた。

高等科を卒業してからは上級学校へゆきたくても近く

にないのであきらめて、一ケ年ほど弟と共に農家の長男として毎日山や畑に出て働いた。夕方おそくなるまで働いているので心配した母は途中まで迎えにきたこともあった。そのころ、岩瀬又一という少年が家にいた。益田郡朝日村の出身で子沢山の生活苦を見兼ねた父(藤市)がうちで育てるようにとつれてきた子であった。又一とは仲がよく一緒に仕事にいったものである。和佐はどの家も子供が多く生活は苦しかった。山村だから米もあまりとれず、現金収入は一年に三度飼う蚕からだけであった。よく近所の長男たちが集まって北海道移住を話した。よく近所がある。近くの川原で野良猫を殺して御飯を炊き夜おそくまで熱心に話しあった。然し実行した者は遂に一人もいなかった。

高等科を卒業して二年目、六里(二四km)ほどはなれた萩原町に郡立の農学校ができた。毎日学校へ行くのでなく四月から十二月までは農繁期なので実習という名目で家の仕事を手伝い、秋の取り入れがすんだ十二月から三月まで学校へ行って勉強した。家からは通学できないので米持参で萩原の民家に泊めてもらった。和佐方面からは三人入学した。私は向学心に燃えていたのでこれだけでも嬉しかったが、本当はこの学校を踏み台にして、より上の学校へゆくのが目的だった。医者になることはまだ考えていなかった。

農学校時代の思い出がひとつある。朝日村から一人の

青年がきていて私達と同じ民家に泊っていた。評判の大食いで割り当てよりも多く食べ米がなくなってしまう喧嘩したことがあった。朝日村は米が十分取れず少しか持つてくることができないう。私達の米まです食べられては困るので出ていってもらう話がでたが、これからは大食いしない、と謝りそれで治まった一幕があった。



青年時代の細江先生（後列左）

上京当時の思い出

東京へ行く、という計画は農学校時代から次第にかたまっていた。先ず上京の費用を作るため一生懸命に弟と一緒に炭を燃いて売った。弟は将采獣医になりたい希望を持っていたので、その世話をしてやる約束で協力し

てくれた。

出発の時はかすりの着物に股引き、はばき、わらじと
いった格好であった。それに本ばかり入った信玄袋をか
ついでいった。家を出る時は萩原町で行われる青年の弁
論大会に出席するといつて出た。

そのまま岐阜の方へ向つたのだが、近くの金山町で友達
に会つた。後に聞いた話では友達は藤市に呼ばれて、ど
うして止めなかつたか、とさんざん叱られたそうである。

最初の日は愛知県一宮まで行つて泊つた。ここには母
方の伯母が紡績工場で働いていたのでそこへいつて泊め
てもらつた。夜おそく疲れて尋ねていつた私を見た伯母
は可愛想に思つたのだろう。自分の働いた金を十円手に
握らせてくれた。私は炭焼きでためた金の五円は着物の
衤にぬいこみ、ほかに五円もつていただけだから本当に
嬉しかつた。この伯母に元気づけられて翌朝東京へ向つ
て発つた。

東京へついて

東京へ着いての行く先は説田三郎という人の家であつ
た。説田さんは東京から中原村へきて発電会社をやつて
いる人で、既に中原出身の青年が説田家に世話になつて
いた。その家は千住にあるということだったが、駅へ降
りてもどちらへゆくかわからなかつた。駅前派出所へ
ゆき巡査に聞くと「自分はもうじき勤務が終り家へ帰る

が千住の方だからつれていってやろう」と親切にいつてくれた。説田家は士族で三郎さんの兄の八郎さんが当主だった。そしてしきたりのやかましいしつかり者の母親がおられた。八郎さんは私を見て「家出してきた青年を黙ってあずかるわけにはいかない」と難色を示された。巡査はすっかり私に同情して「自分も田舎出身だからこの青年の気持はよくわかる。ここであずからなければ自分がつれていって責任を持つ」といきごんだ。八郎さんは「あずからんといっているんでない。このままにしておけないといっているんだ」とよくよく話された。巡査は納得して帰っていたが、この人とはブラジルへ行くまでつきあっていた。

その後、説田さんは私の郷里までいって父親に会ってくれた。カンカンになって怒っていた父もようやく許すといったらしいが、説田さんはずいぶん説教をされたという。説田家ではしつかり者の老母が私を好いてくれて可愛がっていたのだ。先に厄介になっていた同郷の先輩は、それが面白くないのか、この家を出ていつてしまった。

私は報知新聞の配達をしながら勉強し、荏原（えぼら）中学校三年生への編入試験をうけた。数学は得意で何の勉強もしなかったが、英語は全く習っていなかったので苦勞した。神田の伊藤普及英語学校（夜間）へ通って勉強し受験にのぞんだ。英会話は特に不得手で心配したが幸いに合格し、ここに一年間いた。

その頃は飛騨出身の代議士、牧野良三氏宅に出入りし手紙の宛名書きなど手伝っていた。牧野さんは慶応大学に合格しようと思ったら荏原中学校ではレベルが低い、といわれ明治中学校へ編入するための推薦状を書いてくださった。学校へ持ってゆくと、荏原中とちがってついてゆくのはむつかしいからそのつもりで覚悟して受けるように、といわれた。こんなことを言われると逆に意欲が湧き、闘志を燃やして頑張った。

大学予科受験のときは別の下宿に移っていたが、それはもう必死だった。牧野さんは法科にと希望されたが、私は医科を目ざす気持をかえなかった。下宿では最もトイレに近い部屋で、にぎり飯をたくさん作ってもらい、腹がへるとそれを食べながら夜昼となく勉強した。その結果、大学合格を果したが栄養失調から肺を悪くしてしまった。つまり結核になったのである。入学したばかりに休学になるのか、と心配したが主治医から、通学しながら治療できるといわれ心底からほっとした。

慶応大学予科の時代は医事新報社でアルバイトをして学費をかせいだ。また岐阜県の育英資金からも借りた。郷里からも助けてくれるようになり、順調に本科へすすむことができた。同じクラスに後の日本医師会会長武見太郎君がいたが、彼は良い家柄の出身で私のような田舎出の蛮カラ学生とは違う交友グループで余り意識にない。後日、日本医師会の招待で訪日したとき、大磯に住んで

いた元首相吉田茂氏邸で食事をいただいたが、これは武見太郎夫人が吉田元首相の姪という関係で呼ばれたのだった。

私が結婚したのは大正十二年三月、二十三歳のときでまだ大学生であった。東京にいた私のかわりに写真で結婚式をすました静子は、四月に上京してきたが新婚生活は五ヶ月で打ち切られ、八月帰省して九月の関東大震災にあつてからは再び東京で暮らすことはなかった。

在学中に母と保子をつれて四国の金毘羅神宮へお参りにいったことがある。私が結核になったとき塩断ちして回復を祈ったという母のお礼参りであった。まだ若い母が幼い保子をつれてあの長い石段をゆつくりのぼっていた姿がいまでも目に浮ぶ。

卒業旅行は中国の病院見学であった。病院見学といっても遊び気分で、上海、北京、東北地方、朝鮮とまわった。仲のよかった渡辺嘉津馬や今田兄とも一緒に実にしたのしい旅であった。

昭和八年三月に無事卒業した。牧野良三氏は東大病院の医局へ入ることをすすめられた。東大と慶応の学生は余り仲がよくなかったし、私も官学は嫌いだだったので断った。そして宮嶋先生の話されたブラジル留学を受けることにした。外務省の留学医であるが、実際は日本移民の診察に従事することだった。当時は移民が病気に苦しむ日本人の医師も少なかったのである。牧野さんは大

変きげんを悪くされてそれ以後会うことはなかった。ブラジル行きは自分一人の意志で決定したので、親父は当然許さず静子も寝耳に水で呆然としていた。話し合いの結果、二人の子供は置いてゆく、という条件で許してくれた。子供を置いてゆけば必らず三年で帰ってくるだろうと思っただけらしい。私もこの時は一生いるつもりはなかったのだが……。静子は何を持っていったらよいかわからぬ、といって途方にくれていたが私はブラジルにも人間が住んでいるのだからむこうにある物でやってゆける、何も持つてゆかんでもよい、といったが、妻子ある身としてはのんびりしていたと思う。

卒業してから四月・五月・六月と医局で助手をして出発までを過ぎた。月給五円だった。七月十四日、モンテビデオ丸で神戸港を出港した。印度洋まわりである。移民の最盛期でどの船室もいっぱいの人だった。私は船医の資格で一等船室を与えられたが殆どその室にいなかった。毎日移民の人達の所で大いに移住の話をしたりポルトガル語を教えたりした。八月二十八日サントス港へ着くまでの長い航海生活は移民の人達との交遊を深め、後のブラジルでの活動に役立つた。

ブラジルでの初期の生活

赴任することになっていたバストスは入植がはじまつてから三年目であった。ここには同船者が七、八家族い

て非常によるこんで迎えてくれた。静子はサンパウロ市へ着いてすぐに肺炎になったので、翌年の二月まで家を借り静養した。つれてきた薫も幼いので母親のところに残し私一人がバストスにきたのだった。赴任当時は病院もなく普通の民家で診察や手術をした。その頃はどこの移住地でもマラリヤが流行していたが、バストスには発生していなかった。この点を生かしてバストスへ入る者全員にキニーネをのませることにした結果、マラリヤ流行の難をのがれることができた。やがて病院が建てられることになり、その場所について意見がわかれ討論となったが、私の意見がとおりバストスの高地と決定した。現在建っているはその頃のものである。

バストス病院に三年余り勤めたがブラジルでの医師資格がないので活動はままならなかった。資格をとる試験がありそれを受けたかったのだが、革命後その試験が廃止になった。バストスという奥地に行くわしい事情のわからなかった私は、遂にその機を逸し医学大学へ入らなければならなくなったのである。

ブラジル医師の免許取得についてはすでに、今田、武田、八木、菊地氏らが検定でうかっていた。

この人達はリオに住んでいて早く受けそれぞれ各地に散って開業した。私はリオ市の医大に入るため、叔父邦義はバストスに残し妻子をつれてリオ市に移り住んだ。先ず中学校卒業の資格はとったが欠員がないということではなかなか入学の許可がおりなかった。一ヶ月、二ヶ月

とたちとうとう一年が過ぎてしまった。こんなときサンパウロ大学の医学部に欠員ができてただ一人試験を受け入学することができた。一九三五年のことである。うまくいったのはすべて校長のモンテ・ネグロ先生の好意によるものであった。先生はアメリカの大学で医師の免許をとられたので、帰国してからブラジル医師の免許をとるのにとっても苦労をされたそうだ。この苦い経験から私に対して好意的でなかったかと思う。

在学中は日本政府からもらう二コントスと同仁会の診察を手伝う給料とで家族四人を養った。入学して二年間はビラ・マリアナ地区に住んでいたが、学校まで遠く往復がたいへんなので現在のオスカルフレイレに移った。卒業したら別のところへ移るつもりだったが遂に一生住む家となってしまった。

卒業は一九四〇年で私は四〇歳になっていた。この頃は日本人の医大生は珍らしかったので教師や友達のあたたかい気持に支えられて気持よい学生生活であった。中年になってからの六年間だったが、長い一生から見れば非常にプラスだったと思う。今では友達たちがブラジル社会の指導層に位置し、困ったときは助言し何かと支えてくれる。これが検定で医師の資格をとっていたらブラジル人の友達はできなかつたであろう。

卒業してからは同仁会に引き続き勤務した。今までおられた河田医師が病気で亡くなられたのでその後任であった。同仁会は日本政府からの送金で運営されており、

当然私はこの診療所で働くのが任務であった。

後に約四〇年間開いていた中央メルカード近くの診療所「同仁会」は、私のつけた名前ではない。

日本病院が建設されるとそれまでの同仁会は閉鎖されてなくなったが、名目だけが私についてきてみんな、同仁会、と呼ぶようになっていた。診療所は、武田・八木医師と一緒にはじめたのだが、八木医師は戦争がはじまると帰国してしまった。つづいて木原医師が入り、それから長い間一緒に仕事をしてきた。

私が若いころ携わった仕事で心に残っているのはカンポス・ド・ジオルドンのサナトリオ建設と日本病院の建設である。日本人の結核患者のためには、民家を借りた臨時のサナトリオがあるだけだったが、ときのサンパウロ総領事であった内山さんの口利きで土地を借りることができ、建物は日本政府の出資ということでサナトリオが完成したのは一九三七年一月であった。以来日系患者の静養の地として多くの人々が救われた。所長は私も子供の頃から知っている坂根君で一生この地を離れず頑張っている。

日本病院は私の医学部在学中に建設の話が持ちあがった。費用は日本政府から出たが、設計から建築まで中心となった人はブラジル人の専門家で、私はこの人について働いた。日本移民のための病院の必要を痛切に感じていたので一生懸命に働いた。出来上るとこの病院で私は働くことになった。私のほかに氏原、鮫島氏の二人がい

た。日本からは慶応大医学部系の医師三人、看護婦二人が派遣されてきた。ところが私たちと派遣医師との間でいつも意見の食い違いが多くぎくしゃくしだした。自分のねがっていた病院と次第に異った状態になってゆくことに耐えられなくなった私はしばらくして退職してしまった。そのころ第二次大戦でブラジルが敵国となったため病院は接收されることになったから、当然に私も勤務することはできなかつたであろう。

職を失なつた私は先に書いたように、武田・八木両医師と共に中央メルカード近くで開業したのである。以後四〇年間この場所を動くことなく晩年をむかえた。思えば喜びも悲しみも知っていてくれる「同仁会」診療所である。

思い出すままに

帰化と兵役のこと

一九四〇年開業するため帰化した。そして翌年兵役に服した。入ったのは三五連隊で日本人はたくさんおり、年配の人もいた。私は四一歳だったが……。夜間で八時から十一時までの勤務だった。

はじめ歩兵で行軍が多く疲れたが、後に衛生班の軍医となり一年間で終った。

戦争中の出来事（入獄のこと）

一九四三年八月に診察場から強制的に連行された。最初に中央警察署へつれてゆかれここに一週間いたが、それから留置場へ入れられた。日本人は一部屋に八人でみなリーダー格の人達であった。連行にきた警察官は横柄な態度でなかったが長びくかもわからないと思えば三冊持っていた。

生活は自由で食事も悪くなく、一週間に一回は差入れが許されたので私はすしなど持ってきてもらった。昼食後二時間は運動の時間で日本人ばかりよく話をした。一ヶ月ばかりで出所できたが最後まで何の取り調べも行われなかった。

その当時はサントス港周辺に多くの日本移民が入植していた。ブラジルが敵国となるとその人達は強制的にマリア方面へ移動させられることとなった。夜間だったと思うが、サンパウロへ着いたとき病人が出たというところで薬をもらいにきた。いろいろの薬を与えたが殆ど無料だったので、後に薬局への支払いが二年間かかったと覚えている。

巡回診療の初期について

巡回診療は留学医であった私に義務づけられたものであった。戦前から高岡医師、河田医師と行われていたが、

私をはじめたのは戦後である。他に日系の医師も何人かいたが組織だったものはなく殆ど一人で行った。車がなければから汽車のあるところは汽車でゆき、途中から車をやとったこともあった。

よく行ったのはノロエステ線・ソロカバナ線の奥地でサンパウロ市近郊も多かった。その頃はマラリアやアメーバによる消化器系の伝染病で苦しんでおり、衛生知識も低かった。植民地の生活は苦しく、私たちの泊めてもらえるような家はない時代であった。

(注) 父の追憶は、晩年の父がアルジヤの農場で静養中に



1962年11月、日本医師会の招聘で訪日。医師会最高優功賞を受賞。また日本政府より勲三等を受勲。写真は武見太郎医師会々長と細江夫妻。

私が聞き書きしてまとめたものである。従って内容に父の思い違いなど正確でないところがあるのではないかと思う。

再会

両親との再会は突然にやってきた。日本医師会の招待で訪日することになり、羽田空港へ降り立ったのは一九六三年十月のことである。三十二年ぶりの再会であった。私は不思議に何の感動も湧かなかった。両親を何と呼ぶうか、としきりに考えていた。ロビーで父は大勢の人達にかこまれていてなかなか早く会えなかったが、母はロビーに腰かけていて淡々とした調子で「仙子か、これでは道で会ってもわからないなあ」といった。母はやはり感情を顔に現わさない女であった。

母は訪日をいやがったという。私にはその気持がわかるような気がする。故里へ帰っても両親は勿論、姉も弟も亡くなっており、長女保子もおらず肉親といえれば私人である。

淋しい思いをするだけであろう。それだけでなく又別れてブラジルへ帰らなければならぬ。故里の山や川、顔馴染みの人たちとも最後の別れとなるかも知からない。かつてブラジルへ発ったときの辛さを二度と味わいたくない気持があったにちがいない。

父は時間ができたらきつと訪日するから、という手紙

を何度もくれていた。

父には年老いた母も弟も健在であつたから自と母とちがつた思いがあつただらう。日本に四ヶ月ほどいたのだが、八十八歳になつた母親がきちんと座つて迎えてくれたときは本当に嬉しそつうであつた。

医師会のことだけでなく、移住の話もたのまれてあちこちまわる忙しい日程のなかで、和佐の幼な友達や老人クラブの人達とも心ゆくまで語り合つていた。後で知つたことだが、この頃すでに糖尿病で無理をしてはいけない身体であつた。

在日中は父も母もテレビや講演、インタビューと引っぱり出された。まだ移民の話の珍しい時代でニュースになつたのであろう。いろいろ肉づけされて困つたことも多くあつた。台所からあまり出たことのないような母は演壇に立たされ、何を話したか覚えていないくらい重荷であつたらしい。

「もう一度きつと帰ってきます」と見送りの人達に手を振つて発つていつた父だったが、再び日本へ来ることなくブラジルの土となつた。

私は具体的には晩年の両親しか知らない。三十二年ぶりに会つた親は想像していた親とずい分違つていた。然し父も母も祖母この話してくれたとおりであり、確かに和佐の人間であつた。父は自分を野人だといつていたが田舎育ちの人間らしく内心は気が小さいほうで情にもろかつた。外見は豪放姦落にみえたが明治生まれの人間

にはこのようなタイプが多かったのではないかと思う。世界が一つの国になるのが理想のようにいつていたが、自分の足跡についてはまとめることもなく一生を終えてしまった。



1963年3月22日、訪日から帰伯した細江夫妻。（コンゴニアス空港で）

父が最も力を入れていた巡回診療に私も同行させてもらった。糖尿病で不安ということもあったが、自分がどんな仕事をしているか、見てもらいたかったのだと思う。父親らしいことは何もしてやれなかった、としみじみ言ったことがあるからだ。

移民が巡回診療を必要とした時代に医師として何らかのお役に立ち、一人でも二人でも喜んでおられたならば父も本望であろう。

母はさっぱりした性格であった。お世辞など全く言え

ずぶあいそうな人にみえたが心の中はとても温かい人だった。ブラジルへ渡ったころ、食べる物さえあれば何もいらぬ、といていたそうさ。

子供のころから何でも食べる人だっただけに、一日台所であれやこれやと料理を作るのが好きだったらしい。もう少し広い台所がほしい、というのが望みだったが無理矢理それを押し通そうとはしなかった。母もやはり耐える明治の女であった。

幼いころ父や母は南の島の青い鳥であったが、亡くなって二十年を経たいまでも青い鳥として私の心の中に存在しつづけている。

(細江先生息女)

父

ポルトアレグレ

森 口

薫

父は大変勉強好きな人でした。その勉強している姿を、幼い頃から見ながら育った私たち姉妹は皆、本が大好きです。自然と勉強も好きになり、家でも学校でも、勉強をするという事に全く抵抗を感じませんでした。わかからないことは尋ねたり、本で探したりするようになり、そうすることにある種の喜びのようなものを感じていま

した。

中学校に入ってまもない頃、それほど勉強が好きだったにもかかわらず、学校の成績があまり満足なものではないことに悩んでいた私は、「どうすればブラジル人の友人のように成績が良くなるのかなあ」と考えながら、ある日、父にその月の通知表を見せたところ、父は次のように私に言いました。

「薫は。パイと同じで、あまりいい頭は持っていない。パイも頭はあまり良くない。しかし、いつも一生懸命頑張って努力すれば、できるようになるぞ。パイもそうやって大学を出たのだから、薫も頑張るのだぞ。やればできるのだから：」

それからは、父母に喜んでもらうために、全てのこと「一生懸命努力し、なにをするにも全力投球で一生懸命やるようになりました。

私のような者でも、もちろん神様のお恵みのおかげですが、そのときの父の言葉を常に頭におきながら努力したおかげで、大学へ進み、希望した分野での仕事をさせていただけ、そして主人と一緒に、四人の子供たちを何とか一人前の社会人として育てることができました。

今は、生きる姿勢ともいべき父のこの言葉を折りにふれ言いきかせてきたこの子供たちが、各々社全に迷惑をかけないで、せめて何か少しでも役に立てる人間となるよう努力してくれることを、一生懸命祈る日々です。天国にいる父母も、それを願い、また、喜んでくれています。

ると思っっています。

(細江先生息女)



1940年サンパウロ大学医学部を卒業。
写真は卒業式の記念写真。

自我を捨てた細江

ポルトアレグレ 森 口 幸 雄

義父細江には男の子がなく娘だけだったので、娘カオルの夫である小生に期待をかけていた。それは小生が細江の出身大学の後輩で、医師であるためであった(慶応義塾大学医学部一九四八年卒)。

一九七〇年ブラジルを訪問し、日本の医師免許証のブラジルでの更新試験に合格した小生に、細江は自分の診療所に一室を準備し、自分の後継者としてすべてをゆずる

心算であった。

それが上記の試験に合格した翌日、ポルトアレグレ市の南リオ・グランデ・カトリック大学総長ジョゼ・オトン先生よりよばれ、「我々の大学医学部にラテンアメリカで最初の、老年学講座を創設したいので、初代教授として当大学で働いてくれないか。」と招聘された。当時小生は既に日本での医学博士号をもち、ヨーロッパに三年留学し、東京で大学教授であったことを調べての上での、オトン総長の招待であった。

しかし小生としては細江との約束があるので即答をさけ、ポルトアレグレより空路サンパウロに行き、細江を診療所に訪問し、上記のことを話した。「私はお父さんと約束があるので即答しないで、今相談に采ましましたが、どうしたらよいか、すべてお父さんが決めてください」と細江に言った。細江は「考えたいから十分位時間をくれ、別室で待っていてくれ、また呼ぶから」と答えた。十分以上たって細江の部屋に呼ばれた。

「僕はどうなってもいい。君は是非オトン総長の招聘を受諾し給え。今よく考えたが、君に僕の後継者になってもらいたかったのは、僕のためではなく、ブラジルにいる日本人に奉仕し、日本人のためになってもらいたかったからだ。しかし、ここで僕の後継者になって日本人のためにつくすよりも、ブラジルの大学にラテンアメリカで最初の老年学講座を創設する方が、大きい視野でみて、ずっと日本人のためになるし、またブラジルのためにも

なる。そして日本人がブラジル社会で高く評価される。僕は後継者なしで、くちてしまってもよい。君は僕のことを心配せず、高い立場から考えて、日本人のため、ブラジルのために働いてくれ」と目を赤くして、熱っぽく話した。あの光景は小生の脳裏に焼きついて、まるで昨日の様である。その時の細江の年齢は七十才で、小生の今と同年齢である。

本当のことを告白すると、小生の不遜と不徳のため、それまではあまり細江を尊敬していなかった。

内心では「細江先輩はお人好しだが、大きなことばかり言って世間知らずだなあ」、と思っていた。

しかしこの事があって以来、小生の細江観は百八十度変った。細江は日本人とブラジルを無私なく、こよなく愛している人だと悟り、細江を心から尊敬する様になった。

因みに、小生が初代教授になったカトリック大学老年学講座を基礎にして、日本政府はブラジルにおける最初の日本政府プロジェクトとして、成人病研究所（現在は老年医学研究所と呼称）を設立した。

（一九七三年プロジェクト発足、一九七五年開所）

これはラテンアメリカにおける、唯一の老人病学の研究所である。そして今迄三八九の研究発表（外国で七九）をし、ブラジルおよびラテンアメリカよりの留学生

（十二カ国―全員医師） 三五六人を引きうけ、専門課程

大学院を修了させた。ブラジル内からは、サンパウロからの内地留學生が一番多い。

このことは、すべて皆々様のご厚意ご協力のおかげであり、特に神のめぐみのおかげであり、いつも感謝している。人間的にみれば、あの時の細江の自我を殺しての決断がなければ、研究所の設立は実現していなかったであろう。

（南リオ・グランデ カトリック大学
老年医学研究所長、教授、医学博士）



サンベルナルドみずほ植民地の巡回診療（1955年）。
写真は向って右から小副川良三（歯科）、武田義信
（一般内科）、細江静男（医師）、折本和子（現小畑、
看護婦）。

祖父

ポルトアレグレ 森 口 秀 幸

細江静男は私の母方の祖父である。祖父は私が高校生の頃に亡くなってしまったが、まだ子供の頃は「秀坊、秀坊」と言つてとてもかわいがつてくれた。しかし私が祖父のことを思うとき、私にとって祖父はただ優しかった、かわいがつてくれたおじいちゃんと言うだけではなく、人生の先導者としての尊敬すべき先達の一人という重みを感じずにはいられない。私が医者として今ここにあるのも、この祖父がいたからこそと恩うのである。

私の母はブラジルで育ち、日本の父の元へ嫁いだ。父は祖父と同じ慶応大学医学部を出、当時東京で働いていた。その父が一家をつれブラジルで医者として働く決心をし渡伯したのは、私が小学生四年の時だった。私たち家族はブラジルに着いてしばらくはサンパウロに住んでいた祖父母の家だったが、やがて今住むポルトアレグレへと移った。その際に私の二人の弟妹は両親とともに行ったが、私は祖父の請いで祖父母のもとに残り、半年間一緒に暮らすことになった。祖父母とのこの時の生活は、家族を離れて暮らす寂しさを埋めてなお余りあるものであった。

私はこの祖父母のもとで、学校に通い遊び、そして、色々なことを見聞した。

祖父は私を本当にかわいがつてくれ、どこにでも連れて

いった。日本人の会、ブラジル人との集まり、巡回診療。いやが応でも、祖父の医者としての姿を目にする日々であった。そしてこの巡回診療は子供心にも強烈な印象を与えるものであった。道なき道をジープで進み、人も車も泥だらけになってようやくたどりついた村には、まさに血の汗を流しながら大変な苦勞をして、農作業に従事している様子がうかがえる移民の方たちが、年に一度の祖父の訪れを首を長くして待っていた。

病気になっても医者がいず、遠くの町の医者に連れて行くにもお金も交通手段もないというような人々にとつて、祖父の診察は本当に助かりであり、また安心であるにちがいないと、子供ながらも感じたものだつた。そして、その時、「医者とは何と尊い仕事であろうか、多勢の人を助けてあげることができるのは何とすばらしいことだろう、ぼくも医者になりたい、医者になって病気で困っている人たちを助けてあげたい」と強く感じ、その後の私の進むべき路を決めた。

祖父母のもとを去り、ポルトアレグレで家族と共に生活し始めてからも決心は変わらず、今医師として働かせていただいている。私もライ病村の診療や、日系人コロニアの巡回診療などもお手伝いさせていただいているが、医療器具、交通手段、社会情勢など、色々なことが祖父の頃と比べて格段に良くなつてきているにもかかわらず、具体的にかなりハードだと感じることもある。

祖父の頃には、何もかもが整っておらず、大変であつ

たことを思うと、あらためて、何キロもの診療の旅を続けていた祖父の姿に今更ながら頭が下がるのである。祖父は、ある時私に聞いたことがあった。「秀坊、幸せって何だろう」と。私はその時何と答えたかは忘れたが、祖父はこう私に言った。

「幸せっていうのはね、他人を幸せにしてあげることができるときを幸せって言うんだよ」。おじいちゃんも幸せだったね。

(細江先生の孫)

道庵先生 (I)

サンパウロ 山本勝造

畏友細江静男道庵先生を失った。しかし彼は多くのものを残しておいてくれた。日本病院（現在のサンタ・クルース病院）、バストス病院、同仁会、巡回診療、日伯援護協会、ボーイ・スカウト・カラムルー隊、bauer財団などがそれらである。その他に医学著書数冊がある。

先生は一本の太い直線のような人であった。それゆえにこそあれだけの仕事ができただのである。こうと思いついたらわき眼もふらずひたすら突貫する質であった。そんなときには他人の思惑などかまわないほどの熱中振り

だが、友人の真実の声はよく聞きわけた。晴々した顔で、そうか、わかった、と言われると二度惚れしそうになる。だから友人も多かったが、心よからず思う向もあったかも知れない。敵に廻わすとうるさいが、味方としては頼もしい男であったわけである。

政治は好きな方だったが、どうヒイキ眼でみてもその割に余り上手でなかった。政治は直線に割切れないからだろう。

豪気なところは三田の同期だと聞く、かの有名な日本医師会のボス武見太郎先生が一目おいたそうだからおして知るべきである。その方面の引っぱりもあったのだろうが、最後の訪日ときは、マスコミに乗って大タレント振りを発揮してアマゾン先生、ブラジルのシユバイツァーと称され、勲三等瑞宝章の叙勲を受けるなど、あの年が人生最も輝けるときであった。

後年になって何かくさくさしたことがあると、なんだそんなこと、あんたという人はやりたいただけをやり、言いたいだけを言って、移民としての最高の榮譽をえたのに、これ以上何も言うことないだろうが、とエシヤクなくたしなめると眼で笑ってサラリとしこりが解けたようであった。

いろいろのことで二、三度この手を使ったのも懐しい思い出になってしまった。

心から冥福を祈る。

(七五年九月、パウリスタ新聞)

パウーの山

サンパウロ州の軽井沢、カンポス・ド・ジヨルドンはパラナ松の景勝地、標高千六百メートル、遙かに遠望できる大きな岩山がペードラ・デ・パウー、その麓の登り口にボーイ・スカウトのキャンプ場がある。

今は亡き細江道庵先生の遺業である。現在は財団として、旧ボーイ・スカウト隊員が中心になって維持されている。本年は四百人のキャンプ・ファイアーが焚かれるという。

毎年、集ってシユラスコ会をやるので、去年も行ったが、今年も参加した。集ったのは家族をふくめて四、五十人、みな旧隊員だから和気アイアイ。それらが二十歳台の独身のころ、先生の呼寄せで移住して来て、この山とアルジヤの農園で共同生活を始めた。

医者として盛業中の先生の全収入がこの二か所に注入されて、なお不足勝ちの年月が相当続いた。

あまり金をくうので、経済顧問などとおだてられつつ、何回か訪ねた。いくら贖罪にみても、大飯食うわりに生産が上がっていなかったのはまぎれもない事実であった。

それから二十年の今日、みな男盛りの四十男になって、家族を連れて車でやってくる。それぞれの心中、感懐も多かるう。その間の移り変わり、いろいろのことはあつ

たのだらうが、一樣になんとはなくブラジルにこなれて、各自の城を築いてひとかどのものになってゆく。その生きざまが胸にこたえた。

仲間の一人が言った。もし先生が事業家だったら、一声で二、三十人のものが集ってきてどんな大きな仕事でも難なくやれただらうにと。

私は答えた。もし先生が事業家だったら、ソロバンをはじいて、こんな採算の合わないことは始めなかつたらうと。

夢多き故人は君等青年を愛し、この大きな土地を財団として残していつてくれた。山氣シンシンと迫まるパウーの山に、先生の冥福を祈って、一同、黙禱を捧げた。

(七八年八月、パウリスタ新聞)

道庵先生 (II)

細江静男道庵先生が亡くなって五年になる。命日の二十八日にミサがあるので、ふとその出合いのことを思い出した。

先生はその名の如く細くて静かな男とは正反対に、太くてやかましい男であった。当時痔を患い、辛抱しきれず同仁会へ行つた。戦後も問もないころ、日本人の医者とは同仁会より知らなかつた。そのころカンタレーラ街の

新ときわの上にあつたエレベーターのないビルなので三階まで痛さをこらえて上つて行つた。診療をうけると、痔ろうだから手術しなければならぬと言われた。手術室らしい場所もないのにどうするのだろうと考えるスキも与えず、診察台に油紙を敷いて横になれと命令する。どうしても切らねばいけませんかと問うと、当り前だよキミ、腐つたところは切つて捨てるよりないというご託宣、芋のへたを切り捨てるような言い方、腹をきめてマナ板に乗る。切り始めてから深いぞとつぶやき、ほつておいたら直腸につながつて大ごとになるところだとおどかされ、痛さを我慢した。麻酔がとどいていない深部をえぐられるのを頑張つているのに痛くないかだと、ヤケクソで黙つていたらというより、ものも言えずにいたら、これでもかとはかりにまたえぐる。こんちくしうめ膏汗をかいてひきつたように辛抱しているのがわからんのか、このヤブ医者めと、のろつているうちにすんだ。

電話で家内を迎えに呼んだが、ナカナカ来ない。顔を見せたトタン「なにをボヤボヤしておつたか」とどなつてしまった。誰にでもないウツプンが家内に爆発してしまつた。それから長い長い階段の一段ごとに、痛さでボーとしながら、道庵のバカヤローを心で叫び続けた。そのお陰ですつかり根治して、今日まで再発せず、感謝している。これをケツ縁浅からずというのか。

(八〇年八月、パウリスタ新聞)

(サンパウロ人文科学研究所会長)

細江静男先生の追憶

サンパウロ

橘

富士雄

私は一九三二年に渡伯して温室植民地と言われたアリアンサ移住地で農業実習生を極く短期間やり、すぐ同移住地のブラタク事務所に雇われました。

一九三八年にカーザ・バンカリア・ブラタクからオウリニョスに支店開設を命ぜられ、その支店長をしばらくやりました。サンパウロの南米銀行本店へ移ってきたのは一九四一年のことで、すぐ日米戦争になりました。

私は生まれつき身体が頑健で病氣知らずの健康体でありました。ただ、アリアンサ時代にピストルの暴発で左膝を撃ち抜き傷口がなかなか治らず、アラサツーバに出て菊地ドクターに手当をして貰い、その後一カ月ぐらい家でじつと養生したぐらいで、これが病氣と言えるかどうか。

細江先生を知ったのは終戦数年後であつたと思います。少し肥り気味なので何か故障でもあるのではないかと思ひ、メルカードのカンタレーラ街の同仁会診療所を初めて訪ね診察して頂きました。椅子を持って歩かされたり、片足で何分立っておられるか、と言った調子で何とかと言う病院に行って血液と尿の検査をしる、とのことでした。検査の結果はすっかり忘れましたから大したことではなかつたようです。診療代はブラタク系南銀というこ

とで無料であったことを覚えております。

それからは何かというと細江先生一点張りで、まるで親戚のような付き合いになりました。後年のことになりましたが、私は一時、援協の理事をしたことがあります。理事会で細江先生が病院建設とか経営の問題を提起しては理事長とやり合っておられたことを覚えております。それは日本病院のことであつたようです。先生が亡くなられて幾星霜を経て一九九〇年にニッケイ・ライオンズ・クラブの有志の人たちがサンタ・クルース病院（旧日本病院）の日系コロナへ取り戻し運動を起こし見事成功したのも、細江先生の執念が伏線となり端緒になつたものと思っております。

コロナ四十年史（香山六郎編）によりますと、日本病院建設に当たってはいろいろと紆余曲折があつたようで、ブラジルにおける医師の資格を取得するためリオで入試準備中の先生をサンパウロへ呼び戻し、病院の建設計画に参画させております。又カンポス・ド・ジヨルドン肺療養所の土地選定に当たっては、マセド・ソアレス氏の好意による土地無償提供に終始、斡旋奔走されました。日本病院は立派に完成したものの、今度は日本からわざわざこのために呼んだ鎌田博士はじめ看護婦さんの資格、就業問題で暗礁に乗り上げ先生も大分苦勞されたようであります。結局は日本から来た人々の帰国という事で不本意な終止符が打たれたのです。

戦争になりますと病院は敵性国家財産ということ連

邦政府の管理下におかれ、やがて内国化が行われてブラジル人医師や理事が大勢を占めるようになり、日系医師たちの発言力は弱ってきました。

細江先生は武田先生、木原先生、小副川先生たちと新たに同仁会をカンタレーラ街に開けて、文字通り一介の町医者に徹されました。自ら道庵と称され、コロニアの人たちも「道庵さん」と呼んで親しみました。

敗戦日本の荒廃ぶりにも人一倍心を痛められ、戦災同胞後援会をメルカード界隈の有志と語らい組織されて、先頭に立って活動されました。

他面、日系青少年の将来を慮り、身体健全、精神道徳面の滴養充実にも心を用いられ、日系のカラムルー・ボーイ・スカウトを興され、今日ブラジル有数の模範的な隊に育て上げられました。カーキ色の制服制帽に威儀を正し、孫のような少年に交じって三指の札をされる真面目くさった若々しいお姿が目には浮かびます。

カンポス・ド・ジヨルドンの奇勝。ペドラ・ド・バウーに土地を求められ、ボーイ・スカウトの訓練所として提供されました。

細江先生を知るものには、あたりの山々を畔睨して聳え立つあの一風変わった山容を目のあたりにして故先生の業績を偲び、一入の感慨に耽ることでしょう。

(南米銀行名誉会長)

恩人 細江先生

サンパウロ 吉田揚助

私は1932年 家族移民の一人としてブラジル拓殖組合（ブラタクの世話でチエテ移住地（今のペレイラ・バレット市）に入植しました。

しばらくして、当時ブラタクの最高責任者であった宮坂国人専務のお世話でバストス移住地バストス病院薬局会計助手という辞令を頂戴して今日まで六十年以上に亘るサラリーマン生活の第一歩をふみ出しました。

当時、同病院の嘱託医として勤めておられた細江先生に、はじめてお目にかかったのもこの時です。

それ以後、先生が植民者を巡回診療される時は何時も私が鞆持ちでお供しました。訪問先で出される挽きたてのコーヒーの香り、山盛りのガリンニャ・カイピーラの御馳走に鞆持ちの余得を満喫したものでした。独身の味気ない下宿ぐらしの私には正に山海の珍味でした。

バストス時代という先生を中心にして、いろいろな方々のなつかしい顔が浮かび上がってきます。

私の直接の上司だった三浦博さん、薬剤師の佐々木久助さん、病院長のドートル・イリネウ、同僚の坂根源吾さん、毎度食事のお世話になった佐野食堂のおじさん、おばさんたち。皆もう故人になられました。が忘れ得ぬ人々です。

私のこれまでの長い人生行路で数え切れない程の方々
の知遇を得、恩恵に浴しました。いずれも善意に満ちた
人たちでした。つくづくと人の本性は菩なりという孟子
の性善説は肯けることです。特に細江先生には家族包み
でお世話になりましたし、又奥様からも何時も親身に
なつて心を使つていただきました。私には日本に叔母が
おりまして随分可愛がつてくれましたが、それ以上の親
愛の情をお注ぎ下さいました。先生御夫妻は正に私の師
であり、保護者であり、恩人でありました。

いま、先生御夫妻のあの温顔を思い浮かべ、在りし日
の事ども次々と懐かしく心に蘇り、若かった私ども夫婦
に賜った愛情を恰も珠玉のように童いものに思い出しま
す。

私自身は徒に馬齢を垂ねて細江先生御夫妻より長生き
しておりますが、何時の日か彼岸に辿り着く時には、細
江先生から小っぴどく叱られる傍らで奥様が温かい笑み
を浮かべてお庇い下さると思ひます。

この拙文を綴るに当たり今更ながら感謝の念が油然而
湧き上がり愛惜の情切なるを覚えます。

(南米銀行経営審議会云々長)

細江ドクターの思い出

サンパウロ 上野 正二

細江ドクターを初めて知ったのは、長男が生れる頃妻がつわりがひどく、サンタ・クルース病院に入院した時、ちやうど先生が院長をしておられた当時でした。時々部屋に來られて、「どうか」と声をかけられてすぐに出て行く何日かが続いた一九四〇年の初めの頃と恩います。確かヨーロッパではすでに戦争が始っていましたが、家内はその時二十日近くも入院していたので、先生ともだんだん話す機会も多くなり、親しくなりました。

細江先生はそんなある日、「もし日本が戦争に入れば、ブラジルは米国側につくに決っている。すると、唯一の安全地帯は此処だ。この病院は日本のものだからだ。さあ、という時は思い出せよ」と言われたが、この時がそもそも僕と先生との心のつながりの様になった。

長男が誕生し、僕の住居タバチンゲーラ街の、ほんの道を横切るだけの近くにコンスルトリオが開かれた時、先生にはまたお世話になるようになった。どうしてこんな場所に変ったのかよく知らないままに、長男が熱を出すとかかえて、道を横切って走りこんだ。ある寒い日のことだった。熱の高い長男をつれて行くと、先生は「こんなに巻きこんで」と言い乍ら、すぐすっ裸にして「初めて親になると皆こうなんだ。死ぬようなことはない。

出来るだけうす着に」、と行って笑われた。あの日のことは忘れられない。

その長男が今は五十三才で、二人の子供の親になった。ということは、あの日のことも、既に半世紀も前のことになったわけである。

その後二人の子も皆サンタ・クルースの病院で生れたが、この病院の経営陣はすっかり変ってしまっていた。

先生が武田先生、木原先生と三人で、メルカード近くにコンスルトリオを開けられた頃、僕は三十七、八才だったが、体の調子がおかしくなり、このコンスルトリオに通う日が多くなった。先生は「お前の病気は大したことはない。わしのシャカラで野菜をよく煮て食べて、一、二週間休んでこい」と言われ、言われるままに行くことにした。

私の店はドン・ジョゼー通り、電話局の前あたりだったが、先生は店に何か変ったことはないかと立寄って見て来てくれ、「心配はいらん。もうしばらく仕事のこととは忘れて、此処でのんびりしておればお前の病気はなおるよ」と言ってくれた。あの人間味たっぷりの先生の顔が、いまもすぐに頭に現れて、忘れられない。

丁度先生のシャカラに居候していた頃、大雨で池で繁殖していた鯉が全部流された。二三日してからその一部の鯉が登って来るのを綱ですくって、また元の池に戻したあの当時が、今でも目の前に見える。

五十才前後の張り切っていた先生は、前進また前進で、特に二世の将来については、非常に気をつかい、心配しておられた。戦後の日系人の心の動揺に気を使っておられる先生の気持が良くわかった。

ある時先生は、「なあ上野君、これからはボーイスカウト運動だ」と、ロテリアでもあてた時のようにひとり嬉んで話された。そして、早速数人の日本のボーイスカウトを呼び寄せ、サンパウロへ着いた彼らを一端シャカラで休ませ、順次来るスカウト達のためにと行って、カンプス・ド・ジョルダンのペードラ・デ・バウーの土地を手に入れ、スカウト訓練の基地にした。僕も何度か足を運んだが、それは長男と二男の子供二人が、カラムルー隊員だったからでもあった。しばらくして私は理事長におされたが、先生は「立派な社会人を造ることだ。君も頑張ってくれんか」と、心からの言葉を言われた。その言葉は僕の心の中に深く刻みこまれ、機会あるごとに思い出された。簡単ではあるが、ボーイスカウトの本当の目的はそこにあることを思いながら、スカウト集合の度に、この先生の言葉を必ず繰り返し、十三カ年の理事長の役を続けた。

(アエロブラス社主)

亡き細江先生御夫妻を偲んで

在日本 橋本 暁子 (旧姓八木橋)

昭和七年(一九三二年)、亡き父の仕事の関係で渡伯し、最初にまいりましたのが、ソロカバナ線のバストス移住地でした。

父はかつてのブラジル拓殖組合の農業技師として派遣され、最初の任地バストスに入り、一番先にお世話になったのが細江先生でした。私たちの住いは、先生のお宅の斜め向い側に建てられた、同じ木造の職員住宅の中の一軒でした。

当時、先生のお宅は、先生ご夫妻と二人のお嬢さんと、叔父にあたられるご老人、それと一人のお手伝いさんとの五人家族のようでした。

なにしろ、昔々そのまた昔のこと、あれからすでに六十年の歳月が流れております。私は小学三年、妹の裕子が一年でしたから、あの当時の記憶はだいぶ薄れてきています。

細江先生は体格のどっしりした、恰幅の良い、いかにもドクターといった感じの方でした。後程先生のご家族は、サンパウロに移られました。

お住いはピニエイロスのオスカル・フレイレ街の一四三九番地でした。私たち子供に父は、この住所の番地の読み方を次のように覚えれば、絶対まちがいに覚えられないと言って、一四三九を「石を裂く」と教えてくれ

ました。なるほど、がっしりとした体格の、さながら偉丈夫といった先生は、いかにも「石を裂く」と呼ばれるに相応しい方と、子供心にも感心したものでした。

一方私の家族も、バストスからアリアンサの第三移住地に移りました（一九三四年）。第三移住地に父が転勤して間もなく、バストスで生まれた幼い長男を病気のために失いました。当時は大変な山奥で、病院はむろん医療設備も不充分であったために、手遅れとなりました。

こうして最愛の長男を失った両親の悲しみを、逸早く先生は心にとめられて、その後たびたび父に「子供たちのために田舎を引きあげて出聖するように。近くにいれば、いつでも必要な時にすぐ手を差し伸べてあげられるから、ぜひサンパウロに出てくるように」と、再三温かいお心を伝えてくださったようでした。子煩悩であった父は、先生の温かいお心に感激し、その後サンパウロに移り、再び近くで家族同志の交わりができるようになりました。先生のお近くで、私たち家族はいろいろな面で、どれほど先生のお世話になったことかはかりしれません。時を経て、私たちは事情があって終戦直前第二次日米交換船で帰国いたしました。

さて、先生は渡伯なさる前に、長女の保子さんと次女のり子さんのお二人のお嬢さんを日本に残していかれました。戦時中は音信不通となり、お互いの消息がとだえた間に、長女の保子さんがご病気で他界されました。妹のり子さんは、お姉さんの死をご両親に伝えるすべも

なくいらした時、修道院にいた私の妹が伝手を得て、終戦後間もなく、そのことを先生にお知らせする機会をえて、大変感謝されました。

先生ご夫妻にとって、祖国に残されたお二人のお嬢さんのことは、片時も忘れることなく、常にお心のなかに大切にされていたことでしょう。医師として、ご自分の愛子の最期を看取ることの叶わなかったその悲しみは、如何ばかりであったことかと察せられます。

先生は医師としての資格を日本で取られて渡伯なさいましたが、また同時にブラジル人としての医師資格を獲得されるために、大変な努力をなされたようでした。

先生がブラジルの社会で、日系同胞のみならず、ブラジル底辺の病める多くの人々のため、医師としてご自分の生涯を捧げられたことは、本当に尊い一生であられたことと、心から尊敬と感謝を捧げる者です。

私は立派な偉大な細江先生のご生涯の陰に、亡き静子夫人の素晴らしい内助の功を称えずにられません。夫人は、先生とはまったく反対の、小柄で物静かな、大変控え目な方でした。お留守勝な先生のために、しっかりと家庭を守り、お子さんたちの教育にたえず心を傾けられ、常におだやかで、心の温かい、つつしみ深い典型的な日本婦人であられました。

何年……何十年位前であったか忘れましたが、先生受勲の折、ご夫妻で来日された時、亡き母と二人で荻窪団

地の森口家（次女かおるさん宅）に、お二人をお訪ねしたことがありました。相変らずご多忙な先生はお留守で、残念なことにお目にかかれませんでした。奥様とは帰国後何十年ぶりの再会に、お互いの無事を、手を取りあつて喜びあいました。この時が最後となり、その後お二人相ついで他界されたお知らせを受け、深い悲しみを覚えました。

この度、先生の生涯をかけての医師としての大きな使命を立派に果された、その功績が称えられますこと、私たちにとりましても、このうえない大きな喜びです。先生ご夫妻はいま天国で、きつと豊かな報いを受けておられることでしょう。私たちも造か遠い日本の地より、ご夫妻の永遠の安息を祈りつつ、拙いペンを置かせていただきます。

（慈生会、聖家族ホーム・シスター）

細江先生の追悼記念によせて

在日本 八木橋 裕子

最初に細江先生のご家族と知り合ったのは、昭和七年に父がブラジル、バストスのブラタクに派遣されて、家族が先生のお宅の近くに住むようになった時からでした。

まだバストスは小さな町で、学校と病院は有りましたが、教会は無く、一年に何回かアルバレス・マツシヤードから巡回して来られる中村神父様は細江先生のお宅にお泊まりになり、毎朝応接間でミサをなさいました。その時は近所の子供が呼ばれ、大きなソファ―に腰掛けて、訳も分らないラテン語のごミサに退屈し、足をブラブラさせながら終わるのを待っていたおもいでが懐かしく思い出されます。一年後、父は第三アリアンサに転勤になりましたので、その後は五、六年たってサンパウロに移動するまでは、あまり先生とのかかわりは記憶していません。

サンパウロに住むようになり、小さな妹や弟が度々病気になる、時には夜遅く具合が悪くなると、いつも細江先生の所に母は駆け付けていました。又他の専門家にかかる必要があるときには、親切に紹介状を書いて下さいましたので、健康面では本当に助けて頂きました。

第二次世界大戦が勃発し、父が日本へ出張中でブラジルへ帰れなくなりましたので、家族は一時サンベルナルドの瑞穂植民地へ移り、私は細江先生のお宅から学校に通った時期がありました。その当時、先生は日曜日になると、チイロ・ダ・ゲ―ラの制服を着て、義務を果たしに行っていたお姿が目には浮かびます。

先生はがっしりした体格で、心の広い方でしたが、言葉はあまり丁寧ではなかったようで、他の事は覚えていませんが “オセー、オセー” と話かけていました。

最後の交換船で家族はブラジルを急に去ることになり、日本へ帰ってから残した土地売買の事などで、細江先生からは母の所へ度々お手紙を頂いたようです。先生の奥様は小柄で静かな無口で、飾り気のない親切なお方でした。

日本へ帰ってから三十五年ぶりでブラジルへ宣教者として再渡航し、懐かしい細江先生ご家族と再会出来る夢をもっていました。アラサー墓地に先生と奥様を訪れた時には、感慨無量でした。

今でも、森ロカオルさんに会う時にはよく似ているので先生を思い出し、東ルイザさんに合う時には奥様を思い出します。

細江先生がブラジルの日系社会の為にご自分を与え尽くし、医者としての使命を全うされたその報いを、私達の感謝をこめて、神様が永遠にお与え下さいますように。

(シスター)

細江御夫妻追憶の記

モジ・ダス・クルーゼス 中村 教 二

初めての出会い

今思い出すと、今から六十一年前のことである。つまり「一九三三年十二月二日着伯二日目、目的地のバストス

移住地（当時ブラ拓経営）に向うべく、汽車でサントスからサンパウロ市のソロカバの駅に着いた。途端、窓から颯爽たる青年紳士が大声で呼びかけられ、「中村君じゃないか？ 実は君の叔父さん（八木橋豊）からことづかってきた」と言つて、二通の封書をわたされた。これが奇しくも細江ドットールとの、生涯の出合いである。

ついで、「君、奥地に入つたらなかなか出てこれないから、二、三日サンパウロ市内見物でもしたらどうかね。案内は旅館の少年にたのんでやるよ」と、駅前の旭旅館に案内された。全く若気のいたりで、翌日当の叔父がわざわざバストスからランシヤリアの駅に出迎えるのも念頭にうかばず、とうとう二日間旭旅館に泊りこみ、市内見物と洒落こんでしまった。

その泊った隣りの部屋がドットールのお住まいで、のぞいてみると、お住い兼勉強部屋のようで、沢山の本を積んだ机で、一心に勉強されていた様子が、ありありと目に浮んでくるようである。

その頃、バストスの病院の院長をされながら、サンパウロ医大で勉強をしておられ、月々移住地と聖市の間を往来されていたのである。たしか、その多忙の間にチーロ・デ・ゲーラにも夜間ゆかれ、正規の医師となり、心底から永住して、移住地の建設を心がけておられたのである。移住地に着いてみると、市街地の一区画にドットールの住宅とデンチスタの石井さんとが隣り合わせ、

その向いが私の落ちついた八木橋の住居で、この三人は同じ「ブラ拓」務めだが、意気投合の親友関係に見受けられた。

今は移住地の様子もどんな状態か想像も出来ないが、その頃この三人や村の信者関係者が、市街地の入口の高台に、木造ながら当時としては立派なカトリック教会を、移住地建設の象徴の如く建てられたのである。

そして時々、アルバレス・マツシヤードから、当時有名な中村長八神父が見えられ、布教にあたっておられた。ドットールが何時頃から帰依されていたか知らないけれど、移住地の将来を、当時から見とおされていたことがうかがえる。

私は着いて間もなく、仕事もないまま、その教会の管理に二カ月ほど



バストス時代。

毎日通い、帰途には折々ドットールのお宅により、夫人や幼かった二人のお子さんや、同居のおじいさんと大へん親しくさせていたことが、まるで昨日のことのように目にうかんでくる。

移住地に着いて一カ月後、夏の盛りのこととて、新開地に建てられた教会の周囲の空地には、一面にはびこつた西瓜畑にゴロゴロと実の洪水のようであつた。新米の私はこれ幸いと、たたき割つてはよく食べた。効果はてき面、ものすごい下痢に見舞われ、早速医師の手をわずらわすこととなつた。

折よくドツトールが在移住地であつたので、早速診ていただいた。

その時にいわれたことがふるっている。「若い者が腹下しぐらいでなんだ。胃や腸はどしどし食つて、鍛たえにや駄目だよ。そんなことじゃ、これから原始林(やま)びらきも出来んぞ」と、一喝された。恐らく若年の私を氣通つて、氣合をかけられたのであろう。これがドツトールと私の、以後ドツトールがお亡くなりになるまでつづいた、交際のはじまりである。

移住地に着いてからたつた三カ月のお付き合いの後、一九三四年一月末、私は叔父一家と共にアリアンサ移住地に移転し、再会までまる二カ年のお別れをした。

二回日の出会い (一九三五年九月)

私の在アリアンサは一年八カ月で、ほとんど病いと療養の身であつた。ようやく小康を得て出聖し、早速ドツトールをおたずねして、今後のことを相談し、診察してもらつたところ、セントラル線のモジ・ダス・クルーゼ

スという日本に似たいい気候の処があるから、その辺で百姓でもやったらどうか、と懇切な助言をうけた。早速モジの郊外に土地を求め、ぼつぼつ農業をはじめ、それからお亡くなりになるまで叔父、叔母のように、家族同様なご交際をいただいて、オスカル・フレイレ街のお宅にも、わが家のように出入りさせて下さったことが、昨日のここのようにしみじみと思い出される。特にご家庭に自由に入入りできたのも、夫人の大へんわけへだてない気さくな心だてによるもので、よくお好きな煙草を喫いながら、私の如きものを相手に、よく世間話をされたものである。

ドットールは見るところ豪放な一面、大へん律儀な方で、私が奥地で結婚式を挙げるべく、モジからアリアンサへ出かける時は、わざわざご祝儀と日本酒一本下され、また一九四五年十一月終戦間もなく、私の弟が当地で結婚式を挙げた時など、寸暇もない多忙な時間をさいて、それも自身で例のジープを操縦して、みずほ植民地の松本龍一氏と共にお出になり、披露宴には丁重なお祝いの言葉をいただいたこともある。

また長男が五つぐらいの時、サン・ジョンによばれ、お伺いしたところ、花火を沢山用意され、ドットール自身が二階の窓から花火を打ちあげ、幼い長男の相手をされるという人柄でもあった。

モジ・ダス・クルーゼス市に診療所を開設

一九四六年の二月頃、今の鉄道の駅の近くに同仁会の診療所を開設され、武田医師と週間二回交替で実費診療に尽力されたことは、今もなお当地の古老の語り草になっている。一九四七年の末頃まで、二カ年の間通つてこられ、惜しいかな都合で約二カ年で止められた。その間都合がつけば、例のジープで単身不便な田舎にまで出張診察されたことは、今の医者などには夢のような話である。

次に一九六〇年のことである。風邪がもとで妻が倒れ、一カ月程モジの医者にかかったが衰弱するばかりで、近所の人は肺病じゃないかと噂をするようなしまつとなり、思い余つて出聖、診療所にドットールをたずね相談したところ、タクシーを頼んですぐ連れてきなさいということで、とつて返し衰弱した妻を連れて診療所にかけてこんだ。一目見るなりこれはひどい、まごまごしていたら命のない処だと言下に言われ、これはアマレロンに違いない、すぐに検便と輸血だと、ただちに血の提供者を呼びだされ、すぐ実行された。一方検便の結果はものすごいアマレロンが検出され、血液の方は平常の四十五ポルセントしかなく、すでにとり返しのつかない危機状態であつたという。それから二週間、同仁会の向いのペンソに療養中も毎日診ていただき、無事全快することができた。その問費用は、輸血代をとつていただいたにすぎない。全く地獄で仏とはこのことではないかと、今も妻と当時を思い出し感泣している。

こんなことを書きつづっていたら、次から次へと思ひ

出はつきない。昔仁術、今算術といわれる世のなかに、つくづくと思い出されるのは、ありし日の道庵細江ドットールの風貌である。

今この迫憶の一文を綴っている机の傍に、表紙の色も槌せた古びた書物がある。即ち一九五六年頃ドットールがあえて編纂刊行されたものである。当時多くの移民が、未開の地に烈しい労働と無知な知識、貧しい生活のうちにおける性生活、妊娠、避妊、産制、人工中絶等々について正しい認識を啓蒙、指導すべく、それこそ人間愛に燃えて書かれたものである。むろん非売品であり、本来に必要な人々に読んでもらおうという先生の篤志のあらわれである。その「性書」の扉に 贈呈 中村君
一九五六年九月四日 H O S O E と署名がある。これが現在唯一の形見となった。

このように書き綴っていたら、次から次へと思えばつきない。ドットールが逝かれてもはや十九年の歳月が過ぎた。ここに迫憶の一端を述べさせていただき、なつかしいドットールご夫妻のご冥福を祈るばかりである。

(農業)

細江先生と私

サンパウロ 山 下一

細江先生と私の出会いは、おそらく先生にとってはだ不満足なものだったのではないでしょう。先生は理想家であつたしボーイスカウト運動に、相当な情熱を傾けておられた。その理想と情熱がたぶんに現実から掛け離れていた部分があつたとしても、やはりその気持の純粹さには尊敬の念を抱かせずにはおかないものがありました。それにひきかえ戦後派の私と云えば、そんな情熱とか理想にはほど遠い感覚しか持つていなかつたのですから、最初から話がうまく噛み合わないのが当然。とどのつまりは先生もお手上げになり、バウの農場に三月、アルジャーの農場に三か月合わせて半年で「永の暇」を賜つて「サンパウロ新聞社預け」の身分になりました。サンパウロの街でウロウロダラダラの生活を始めて以後四十年近く、途中仕事こそ変わったものの結局はブラジルで人生を終えることになりそうですね。

そもそも私が、細江先生の呼び寄せでブラジルに来ることになつた動機がすこぶる不純でした。ボーイスカウト運動の発展とかブラジルの青少年の健全な育成の一助といった、高邁な精神に基くものとはおよそ掛け離れたものでしたから。当時の日本で海外に出ていくことは、たいへん困難な事であつてよほどのコネでもなければ不可能だつたんです。ところが幼い頃からどういふものか

海外に対する憧れが強く、なんとかして日本脱出をした
いとのお思い入れがあった私にとって、ある日ボーイスカ
ウト日本連盟で聞き込んだブラジル行きの可能性は、
願ってもないみみよりな話だったのですね。そこでダボ
ハゼよろしく前後も考えずにとびついてしまった。した
がって私の頭の中にはボーイスカウトやブラジルが、今
後の人生にどのようなことになるのかなど一切無
かったのです。そんな私をサントスに迎えに来て下さっ
たのが小畑氏（現援協事務局長）で、のっけに出た話が
「我々はブラジルを第二の祖国と思つてブラジルに尽く
し、骨を埋める覚悟だが君はどうですか？」といった、い
たつて硬派の発言、こちらとしてはとてもそんな立派な
覚悟など頭の隅にさえあるわけがなく、すっかり鼻白ん
でしまい「私はべつにブラジルに永住覚悟で来たつもり
はなく、気に入れば永住と言うことになるし、あるいは
その内どこかもつと良い国を見付けて、そちらに行くか
もしれない」といったような内容の返事をしてしまった。
どうもこの生意気でしかもチャランポランな発言が先生
に報告されて、その辺りから先生の意識の中に、これは
とんでもない奴がとびこんで来たナといった困惑が生じ
てしまったようなんですね。

それでも最低給料生活者としては、いくら当時の物価
が安かったとは言え、何時も財布の中身はなきに等しい
訳ですから、先生のお宅にはちよくちよくタダ飯を食べ
に押し掛けたものです。又、同仁会の診療所には悪所通

いの報いがないかと、しばしば検診をしてもらうために通ったものでした。

こうして異端児とは言え先生にはお世話になり続けたのですが、同じような経緯で来た仲間と比べるとしつくりした関係には、ついに最後までなれなかったような気がします。先生から私が頂いたもので「元禄ざむらい」という渾名があります。ようするに元禄時代の「さむらい」は武士の本分を忘れて町人風の華美を競い、魂とされる刀も細身で華奮なおよそ実用に適さないような代物を腰に専ら遊興に耽っていた。お前の生活態度はまさにそれだ。と言うことなんですね。ところがこれが私としてはいたく気に入ってしまった。もともと戦争中の武士道精神とか、忠君愛国といったスローガンにアレギーを感じていたのですから、日本が世界に誇れる文化は町人文化じゃないか「元禄ざむらい」おおいに結構とにったりしている。これでまたまた評価を下げちゃった。これはもうバカにつける薬はないと匙を投げられていたのではないかと思っています。

ところでこの文の初めで先生の理想と現実について触れましたが、大切な事なのでこの機会に説明をしておいた方が良いでしょう。

先生がカンポス・ド・ジオルドンのバウにボーイスカウト農場を開かれた真意については当時次々と日本から呼び寄せられて、農場に入れられた仲間たちは誰も理解していないのではないのでしょうか。

私自身もついで説明らしい説明は受けた記憶がありません。この農場は結局五年程で閉鎖する事になるのですが、最大の原因はリーダーに適材を得なかった事で、先生の理念がきちんと説明されなかった事でしょう。若くて血気にはやる青年たちは人里離れた山奥で、何のためにこのような無駄な時間を過ごさなければならぬのか、また自分たちの将来はどうなるのかと、精神的に不安定な状態で鬱々とした日々を送る結果になった。つまり二十代の希望あふれる青年達に明確な将来のヴィジョンを示しえなかったのです。さらにこのような事業を継続的に行うためには、当然のこととして経済的な裏付けが必要になります。ところが、リーダーからして実質的には農業についてはロクな経験のない素人集団だったので、先生の考えた農業をしながら維持費をだしていく方針は砂上の楼閣にしか過ぎなかったのですね。ですから先生はずいぶんと身銭をきられたのではないかと思えます。先生が晩年に見た「大きな夢」の崩壊をもたらしたのはこの二つの要因と言えましょう。この点で私は先生の掲げた理想とご苦勞には大いに敬意を表するものの、あまりにも現実離れしたものだだったと、残念ながら言わざるを得ません。

しかし、当時は先生だけでなく私財を投げ出して世の中に尽くそうと、大きな夢を持った方々がコロニアの中に随分おられた。振り返って見るとまさに隔世の感です。

(会社役員)

細江先生の思い出

カンポス・ド・ジヨルドン

小池 潔

先生の家庭に、約十年出入りさせていただけました。家庭では、皆にとても優しく、奥さんにはママイ、ママイト、呼んで、実に居心地の良い家庭でした。いつも面白い話をして、みんなを笑わせて、仕事中の先生とは別人の様でした。学生や、若者が、いつも、ゴロゴロしており、私もその一人でした。家事は、奥さんが、切廻しておられました。が労力的にも、経済的にも、大変な事だったと思います。奥さんは、無口な人でしたが、心の暖かい人で、家族と他人の差別なく世話され、住みよい家庭でした。

私が先生に出会ったのは、一九五七年、コチア青年移民として渡伯し、イビウーナの、佐々木農場で、就労中、なれない仕事と、暑さで、病気になって、先生に、お世話になった時からで、同郷の岐阜出身であった故か、自分の所で、働く事を、進められました。ボーイスカウト、バウ農場の事を、熱ぼく、話されて、協力を、求められました。コチア産業組合の、了解を得られれば、手伝うことを、約束しました。

先生は、熱心な、カトリック信者で、毎日曜日、ミサには、必ず御夫婦で、参列されていました。

仕事の面では、大変きびしい方でした。毎朝五時起床、

六時前には、仕事場につかれた。五〇年型のジープを、運転して、本と資料を山と持ってゆき、又持って帰られる、こんな毎日でした。診療所では、仕事が、始まる八時三〇分までは、新しい医学の勉強をされており、沢山の手紙も、毎日書いて、おられました。日本の知名人の方と文通があり、手紙は、全部カーボン紙を使って、コピーを取って、保管してありました。

仕事場に入ると、先生は、人が変わった様に、気むづかしい人であり、先生のそばで働く人は、大変のようでした。ほとんどの人が、長年先生と共に働いて来た人達で、先生の弟子で、故坂根源吾氏、斉藤氏（旧日本病院以采の、サンタクルース病院の事務局長）等は、自分の親以上に、慕っておられました。

先生は、保健衛生及び医者としての仕事以外に、色々の活動もされ、私の知っている一つに、北伯の、ババスー開発調査がある。ブラジリヤ、ベレン間の、国道が、開通すると同時に、北伯に、無限の様に、自生しているババスー（椰子の一種）の実より油を取る目的で、ババスー開発を、日本人の手でやろうと、発案し、日本政府にも働きかけて、各分野の日系専門家によるババスー開発調査団を結成され調査が行われた。当時は、ババスー開発なんて、誰れも、本気にしなかった。調査後、約三〇年へて、ババスーは開発され現在ババスー油は、工業用として、使用されている。

先生は、非常に先見の目のある人だった。いつも大き

な視野で物事を見、行動され、一般の人には、その意図を、理解することは、むづかしかった。日夜奔走して、つくられた移民援護協会の場合も、先生の意見が理解されず辞して、去られた。

先生は、私と同じ飛騨の山育ちで、一本気で頑固で、とても慶応ボーイには、見えなかった。私を、いつも馬瀬の山ザルと呼んでおられたが、先生も私と同じ山ザルの仲間の様であった。口が悪くて、人付き合いが下手で他人に誤解される事が多かった。

私が共に、働いた財団法人ペードラ・ド・バウは、カンプス・ド・ジョルダンのペードラ・ド・バウのふもとにあります。

先生は、カンプス・ド・ジョルダン結核療養所建設当時から山に魅せられていたようで、ボーイスカウト運動に参加されてからは、バウのふもとに、キャンプ場を造り、青少年教育の場作りをしたい一念でおられた折、バ



ペードラ・バウ訓練キャンプ場で青年スカウト達と細江先生(中央)。
背後に標高2,000メートルのペードラ・バウをのぞむ。

ウーのふもとの農場が、売りに出されている事を知り、さつそく土地購入に当られた。当時先生個人では、資金調達が出来ず、坂根源吾氏、亀山文二氏の三名協同で購入された。それから間もなく、日本より、ボーイスカウト青年移民を引受け、小畑氏を隊長として、ボーイスカウト・バウ訓練所が、発足しました。当地では、青年スカウト達は、農業をしながら、スカウト精神を身につける方式で経営されました。

私がバウ訓練所に入ったのは、第一回の収穫中の一九五八年三月であった。コチア青年移民で渡伯した私は、ボーイスカウトの仲間入りをして、先生に農場の責任者をおしつけられてしまいました。

その後先生は協同組合をつくる様にいわれて、小畑氏が奔走して、バウ生産組合の名称で、正式に登録されて発足しました。私はどうして組合が必要なのか良く解らなかったが、組合が発足すると同時に、事業団から資金を借りて、土地を組合で買う事に決められた。

細江先生、坂根氏、亀山氏協同の土地とその辺りの土地、三十二アルケールを、組合名義で購入した。組合が発足して二年後には、ボーイスカウトの仲間の一部は、独立し、一部はアルジア農場に移り、バウ農場には、私共夫婦だけになった。留守番をしながら、キャンプ場としての整備をすることになり、バウ農場の生産組合は組合員が無くなり、土地だけが残った。先生の目的は、土地の確保にあった様でした。

次には、財団法人を、つくると言われ、私は三田勝美弁護士に協力をいただき、フンダソン・ペードラ・ド・バウーの名称で、発足し、組合の名義の土地その他の財産は、財団に移し、先生が、望まれたキャンプ場の基礎が出来上りました。私はバウ管理人として十年をくぎり、退職させていただきました。

将来も財団が、カラムル・ボーイスカウトの手で永久に、キャンプ場として利用続けられる様に願ひ、先生最後の事業ともいえる、バウー・キャンプ場に十年余り共に、働いて、先生の雄大な構想と、山の雄大さが重なり合ひ、その心と事業が、受けつがれてゆく様にと願ひものです。

(養鱒業)

細江先生との出会いと別れ

サンパウロ 岩中 徹

細江先生との出会いに入る前に、私事になりますが、少々奇異な我が家の移住の経緯を述べさせて両親と高校中退の私、それにまだ幼い二人の弟という家族構成で、移民船アフリカ丸に乗りこんだのは一九五九年四月末でありました。船は太平洋を横断、パナマ運河を越えてブラジルの最初の寄港地ベレン沖に停泊したのは神戸出港

から一月余りも経っていました。私達七家族だけが此処ベレンで下船、入国手続きを済ませた後、今度はアマゾン河を往復している定期船に乗り、この雄大な河をさかのぼること実に六十日。行き先は、ブラジルの地図を見てもさい果ての地、ペルーとの国境に近いアクレ州キナリ植民地。その土地の名は教えられていましたが、どんなところなのか、そこで、どんな将采が私達を待ち受けているのか知る術もなく、船が奥へ奥へと航行するにつれて、同胞は不安と心細さで次第に無口になっていきましました。

不安と心配は適中し、未知の国での大自然との闘いは想像をはるかに超えたものでありました。安全ランプがかすかに灯る粗末な住いで質素な食事、灼けつくような熱暑の中で強いられる厳しい労働、入植者達は肉体的にも精神的にも疲労の極みに達し、病に倒れる者、ケガをする者が続出、耕地に見切りをつけて離れていく者もありました。

入植した翌年（一九六〇年）、こんな山奥へ海協連（現在のJICA）嘱託医であられた細江静男先生一行が巡回診療にやって来ました。

細江先生の診療とは、病人を診察して適当な薬を与えるだけと想像しておりましたが全く異り、健康で幸せな生活が出来る為の予防衛生の指導が主で、その為の食事の摂り方から、住居の改善まで非常に有意義なお話を夜中までしてくれました。ブラジル滞在三〇年、この道ひ

とすじの先生のお話は実には的を得ており、すっかり引きつけられて、我々入植者の生活目標が見えて来たような気がし、ずい分勇気づけられました。

しかし、細江先生の適切な指導の甲斐もなく、私は一九六一年、六二年と続けて不幸に見舞われ、両親を失ってしまいました。当時二〇才そこそこであった私は、まだ手のかかる二人の弟をかかえて絶望の崖ぶちに立たされてしまいました。これからどうすればよいのか、どうやってこの苦境を切り抜ければ良いのか、突然おそいかった悲運に押し潰されそうになり途方に暮れていました。

そんな或る日、海協連の谷さんという方を介して細江先生が愛の手をさしのべてくれました。「その青年と第二人は私が責任持って面倒を見るから、兎も角、サンパウロへ来るように。」

私は地獄で仏に会った心境で、先生のご厚意に甘えることとし、急遽、悪戦苦闘した土地を整理し「数年後には必ず迎えに来ます」と亡き両親の墓標に約束して植民地をあとにしました。

(注) 市営墓地は数年経つと掘り起されて無縁仏となってしまうので、その前に墓所を購入するか分骨しなければならぬ。

サンパウロでは、アルジャの細江農場に身を寄せ、今後の対策を考えることにしましたが、多忙な先生も親身になって相談にのってくれ、結局、第二人は日本の叔父

叔母に育ててもらおうこととし、私は志なかばにして他界した父母の遺志を継いで此処に残り、細江先生の家族の一員として面倒を見てもらうことになりました。そうと決った翌日からは、もう過去を振り返って涙を流している暇などありません。農場での仕事は、早朝から夜半まで多忙を極めたし、時々、先生に呼び出されて巡回診療の助手兼運転手をつとめることもありました。

私はチョコマカとよく動き、先生の小間使い役としては適していたのか、重宝がられ、そのうちに専属の助手として四六時中、近くで仕えることになりました。私如き者が、命の恩人である細江先生に認めていただいたのは、この上なき幸せであり、ご恩に少しでも報いたいと一生懸命働かせてもらいました。一日中、先生と行動を共にするのですから、いろいろ教えられることも多く、今想い出すと、有り難い教訓や、懐しいエピソードが私の脳裏をよぎります。

私が先生の助手を勤めるようになったころには、すでにコロナ医学界の重鎮であり、先生の毎日は多忙を極めておりました。平日の先生の一日は、朝五時の起床から始まります。おばさん（夫人）と共に、簡単な朝のカフェーをして、六時には家を出て、まだ薄暗い霧の中を同仁会診療所に向います。診療所内は、しんと静まりかえっており、ここで患者がやって来るまで読書、勉強に勤しみます。八時半の診察開始からはトイレに行く暇もない忙しさです。

昼食後は一時間ほど昼寝をする習慣がありました。先生の仕事は診察後、入院治療を要する患者には、適当な病院を紹介し、その入院手続きから、費用の相談、残った家族の生活指導まで、時には薬品代から入院費用の立替えまで面倒を見ていました。恐らく、自分のポケットマネーで立替えていたのでしようが、後々督促したり返済してもらっているのを見たことはありません。はじめから返してもらおうとは思っていなかったのでしょうか。一日の診療が終ると、仕事の整理をし、次の巡回診療の計画を樹てたり、会議の準備をしたりで帰宅は九時。でも予定通り帰宅できる日は少なかったと思います。

すでにコロナ医学界の第一人者であったので、領事館、移住事業団（海協達）、援護協会等々の会議も多く、激論に疲れ果てて、しかも先生の主張が要れられなかった夜は、帰りの車の中での秀囲気で、すぐにそれを察することができました。

しかし、一旦、家庭に帰ると、外での苦言は一切口にせず、食卓を囲むといつもなごやかで、いろんな話に花が咲いたものです。「今日は腹具合が良くないから軽く食べておこう。」と言いなながら、四杯目のお茶漬けをおかわりして、みんなを驚かせたり、「いい加減にしなさい」とおばさんに叱られたり、いうもほほ笑ましい光景がみられました。就寝は十一時ころでしたが、部屋には専門誌の他いろんな本が、うず高く積み重ねられ、本を読み乍

ら寝る習慣でした。「本を読みなさい。著者が一生かかって得たものを数時間で教えてくれるのだよ。一日にページづつ読んでも、一年に三六五ページ。それだけ知識人になるんだよ。」と教えられました。

奥地巡回診療は大変な重労働ですが、先生が病気で引退するまで続けられました。久し振りに、奥地コロニアの会場（主に会館か学校、時に個人の家）に着くと、千秋の思いで待っていた移住者達の歓迎を受けるのが嬉しくてたまらなく、眼を細めて相好を崩すのが常でした。診療班一行は先生の指示に従い、訓れた手つきで検便、検尿、血液検査、レントゲン撮影等を行い、その結果を各人のカルテに書き込んでいきます。ぐづぐづしていると先生の怒号が飛んできます。先生はそのカルテを見ながら、一人一人懇切丁寧に診察し、適確な助言を与え、必要な場合は入院加療の指示も与えます。

ちよつと時間がかかり過ぎる患者さんとの会話を盗み聴きすると、診察とは関係ない肥料の使い方から嫁姑問題の相談にまで及んでいます。心配顔で入っていったご老人がニコニコ顔で出て来る。正に”医は仁術”を何度も 見せつけられました。

奥地の真夏の太陽は、朝からカンカンと照りつけて、診療開始前から体中が汗でびっしりになります。そんな日に、長蛇の列を作る人達を診るのは大変な重労働です。漸く全員の診察を終えたころには、もうすっかり陽が西に傾き、真っ赤な夕焼けで大空を覆っています。茜

色に染った先生の横顔には、流石に疲れたという様子と同時に「今日も人助けが出来た」という満足感がにじみ出ているような気がします。

しかし、まだ先生の一日は終わらないのです。夕食後、もう一度コロナア全員に集ってもらい、衛生講話から始めて、衣食住の改善、より豊かな生活のための家族計画、ブラジルの経済の動き等々、話し出したら止らない先生の話術に乗って、有意義な集会は深夜におよびます。

診療はコロナアからコロナアへと、一地域を一巡するのに、長い時は一ヶ月以上かかりますが、この間、一日の休暇もありません。移動の車の中でコックリ、コックリするのが、先生の休み時間なのです。

どんな山奥でも、どんなに路が悪くても、少々体調がすぐれなくても、先生の来訪を首を長くして待っている同胞を恩うと、行って診てやらなければなりません。先生はこれが神からさずかった“聖職”と心得ていたのです。

先生は冒険心、好奇心の強い方で、旅行中に珍らしい話、変わった人、食物、風俗習慣等に遭遇すると、非常に興味を持ち、時間を忘れることがしばしばでした。また、先生は お年寄りや病人には、いろいろと食事療法の指導もしていました。自分ではあまり気にせず、脂肪っこいもの、甘いもの（これが特に好きでした）、塩辛いもの、少々酸化、腐敗のすすんだ食べ物まで頓着なくよく

食べる方でした。何でも見てやろう、何でも食べてやろうが先生の信条だったのかも知れませんが「医者の不養生」を地で行っているきらいもありました。

マットグロツソ州を巡回診療中のある日、最後の集団地の巡回も終えホツとした夜、「マトリンシャン」という鮭によく似た赤身の魚の刺身にありつくことができました。私もお相伴させてもらいましたが、確かに口の中で溶けるように美味しかったです。生魚ですし、旅行中に体調をくずしては巡回班に迷惑をかけると思い、二〜三キレ食べて遠慮しておきました。

先生は、「これは珍らしい。これは美味しい。」と大喜びで、このマトリンシャンなる刺身を大皿で二皿も平げ、その後デザートのパイナップルも一皿ペロリと食べて、ご満悦のご様子でした。

次の集団地までは悪路を数百キロ走らねばならないので、翌日早朝出発しました。二〇〇kmほど走ったところで、例のように助手席で居眠りしていた先生が突然、意識を失って倒れてしまいました。

丁度、日本から来て間もない中谷医師が同行していましたが、車を道端に止めて、応急処置をしましたが、いっこうに恢復の兆が見えず、殆んど無意識のうちに、吐く、下すの大騒ぎとなりました。

昨日のマトリンシャンの中毒です。病院のある街まで三〇〇km、路は悪く、急患を連れてはとても無理と判断し、近くのブラジル人の住んでいる掘っ建て小屋に担ぎ

込み、そこで手当てをすることにしました。

意識不明で蒼白になった日本人が、冷や汗をかきながらゲーゲー吐いているのを見たカボクロはびっくりして、湯タンポを貸してくれたら、薬草を煎じてくれたら、ここで死なれたら困ると思ったのか、一生懸命介抱してくれましたが、殆んど昏睡状態のまま、その夜を過しました。こんな山の奥では、どうにもならないので、万が一のことも考えて飛行機で大きな街へ運ぶことを考え、その手配に当たっていた二日目の夕方、漸く意識を回復し、一同、胸をなでおろしました。むっくり起きあがって、「きれいな花畑をさまよっていた」と平気な顔で話すものですから、私達巡回班もあきれてしまったのと、安心したのと、ひよっとしたら、ひやっとする瀬戸際をさまよっていたのだと思うと恐ろしくなりました。巡回旅行はその夕方から、何事もなかったように続けられました。先生は若い頃患った結核を時々気にかけておられました。先生は若い頃患った結核を時々気にかけておられましたが、もう一つの持病である糖尿病が次第に悪化し、終りに引退して養生することになりました。夫人の献身的な介抱にも拘らず、糖尿はゆっくりと、しかし確実に先生のあるゆる器官をむしばみ、退化させていきました。次第に衰えていく先生を昼夜看病していた夫人は七四年六月、突然、この世を去ってしまいました。そして一年後、先生も静かに、その人生の幕を閉じる時が来ました。先生が亡くなる三ヶ月ほど前から、私は同室に寝て看病しましたので、闘病生活に疲れ果てた先生に、最後の日は

近づいているのを感じていました。

臨終の間際に、そっと握った先生の手は、すっかり痩せて、ごつごつしていましたが、この手で、何万人の人達を病苦から救ったのでしうか。日系移住者の健康を希って、ブラジル中を駆けまわった、その足も、骨と皮だけに見えました。いつころからか頬骨も目につくようになりました。しかし、死期のせまった先生の顔は”聖職“を全うした満足感に満ちているようであり、苦悩の色は見えませんでした。

アマゾンのシュバイツァーと尊敬され、私の生涯の恩人であった英雄、細江静男先生との永遠の別れに立ち合せていただいたことに感謝しつつ、コロナからまた一つ、巨星が消えていくのを、じつと見つめていました。

(商社員)

細江ドクター

リベイロン・ピーレス 成田知子

「あれはわしの先ぱいの娘で、よう働くええ子や」ドクターは私を人に話すとき、こう仰言いました。

明治の人の律儀さでございましょうか、折目正しい礼儀をわきまえた方でした。毎年暮には「日頃ご無礼いたしております」と言ってお歳暮の包を抱えて父の所に挨拶

拶に来て下さいます。小さな妹や弟たちは「ごぶれいさんが来た」と言って喜んでいました。

「ヴォセラ、いそがしい、いそがしいと文句言うけどな、いそがしいということは、世の中のため人さまのために役に立っているということやで、文句言わずに働くんやで」。

エンリケと私は「ほんとだ！」と思って一生懸命働きました。現今もその教えをかたく守っております。

開拓初期当時のバストス移住地は、他の植民地のような風土病こそは少なかったけれど、あらゆる病気、事故、殺人、変死等々全て医局に持ち込まれるので、四六時中仕事の中にあるのです。ドクターが使命感にもえて働かれる姿を目の当りに見て、医は仁術なりを会得したものでございます。

後年ドクターが長い年月を苦勞なさった伯国の資格かく得のいきさつも、一人の患者を救うための一週間の差違にあつたことを知っている人は極く少ないのではないでしようか。

木目も新しい白木造りの教会ができあがって、中村ドミンゴス長八神父様が来て下さいました。教会での初ミサ、そして最初の洗礼の人たちでにぎわっていました。私と妹と二人は、ドクターのアフィリヤーダ第一号でございます。セシリアとローザ。

医術はいうまでもなく、総てに熱心に尽されるドクターは、若い層に大へん信望がございました。

それはボーイ・スカウト・カラムル隊の生みの親であることでも伺われると思います。またカンポスの基地造りの担手でもあり、アルジャの基地を育てたのでもよく知られていることだと思います。

日本病院建設についても、大へんな努力をされたことも、私は第一回邦人医師協議会議事要領というものを持っておりますので明りように判っております。菱川領事とはかつて、カンポス・ド・ジヨルドンにサナトリオを造った時は、日本移民にとっては全く夜が明けた思いであったと察せられます。

それまでは、ジナ・デ・ケイロス女史の小説 “山の花々” に出てくるような療養者たちでございましたから。

とまれドクターの偉業は何とかいう勲章に値する（勲章とくらべるのは失礼かもしれませんが） よりも、勲章では表わせないほど偉大だと思えます。

マット・グロツソ州の奥地リオ・フェーロから出てきた青年が、いみじくも言いました。「私がマレイタで寝ていた時、細江先生がジープであるの山奥まで来てくれた時は、神様よりも有難かったですねえ」と。

最後にお目にかかった時は、もう完全に視力が弱っていらっしやいました。手さぐりで応接間に出ているらっしゃる姿に私は啞然と立ちつくしてしまいました。小母さんが一つ一つ説明してくださると、「わかる、わかる、セシリアのは声でわかるよ」と涙ぐんでおられました。

自分の生き方を天命だと信じ、行動し、生き抜いたドクター。

ご冥福を祈りつつ一九七七年十月一日、胸像除幕式の日。

(元日本病院看護婦)

(パウリスタ新聞七七年十月六日号)

ボーイ・スカウトの隊長さん

サンパウロ 大沢 愛子

細江先生と言うと私にはボーイスカウトの正装をされた澁刺とした先生が眼に浮ぶ。私だけの思い入れかも知れないが、ボーイスカウト姿の先生は他の何処におられた先生より先生らしい。先生と私共とのおつき合は長いのにいつも切れ切れであった。と言うのは先生もお忙しいし、亡夫も忙がしかったせいでもある。何処かのパーティでお目にかかっても、先生はせわしそうに動き廻られて誰彼とお話をされていた。その内容は解らないけれど声が高くご機嫌が良かった。その頃の先生はお体もよくて良く召し上がった。「今の私はやっと一人前で足りるようになった」と仰せだったので「以前は」とおたずねすると、二人前で足りず三人前も食べた事もあると言われた。

先生は甘い物が好きだった。時おり私宅をお訪ね下さった時にお出しするお茶菓子を、二つも、四つもと言いたければ、ど器が空になる事もあった。糖尿病もありときいていたのではらはらした事も再三であった。

先生は大変勉強家であった。眼の手術をされたとお聞きし

たので、診療時間には間がある時に伺った時に、お机の上の小さなスタンドをそばに置かれ、部厚い本をレンズを片手に読んでおられた。

「先生」と声をかけたら「あんたか」と言われたが、人の気配にもお気付かぬ程本に集注しておられた。凄く厚い眼鏡をしておられたので、視力が弱っておられたと思うので、このようなご本の読み方なさってはいけないのではないかと申し上げたけれど、自分にはこれしかないと思仰せになった。

夫が先に逝き先生も逝かれて久しい。月日を経ても先生の事を思うとなつかしい。色々な思いを残して下さった



ボーイ・スカウト、カラムル隊本部で、向って左端が細江先生。右端小畑博昭氏。(1956年)

と思うばかりである。

(故大沢大作元海外協会連合会

サンパウロ支部長 夫人)

” 赤飯の一喝“

サンパウロ 平尾 健

ボーイスカウトのはしくれとして呼び寄せていただいた私は、先生の意に反して、アルジャーの細江農場を一年そこそこで飛び出し、コチア産組に就職してサラリーマン生活を送っていた。

先生のもとを離れたとは言え、何かにつけて機会を作り、親代わりの先生御夫妻宅を訪問するのが当時唯一の楽しみであった。但し、食事時間を目がけての訪問を習わしとしていたのは貧乏チョンガ青年の「生活の知恵」であったに違いない。

「オバさん、また来ました。」(私達は細江夫人を親しみをこめて”オバさん”と呼んでいた。) 私の訪問は空腹を満たすためのものであることを百も承知のオバさんは、「おお、よう来たね。さあ入って昼ごはんでも食べていきなさい。」といつもあたたかく迎え入れてくれた。

その言葉にホツとして、我が家に帰った気持で玄関をくぐり、ほの暗いサーラ(応接間)の可成り由緒あり気

の椅子に腰かけ、くつろぐと、フエジョンのおいしそうな香りがただよって来ることがしばしばであった。

一九六五年、日本から妻を迎えることになり、先生御夫妻に報告をかねて仲人をお願いにあがると、大変喜んで快くお引き受け下さった。オバさんは田舎者の駄目息子に「お前は、いつもしよぼくれて貧乏くさい格好をしているけど、嫁さんを迎えに行く時は身なりをきちつとして行きなさい。床屋にも行って、靴も磨いて、胸を張って……。背広はあるのか？ 身分証明書は持ったか？ 金はあるのか？」ひとつひとつ親切に気を使ってくれた。

花嫁を乗せた船は、ゆっくりゆっくりと、太平洋を横断、パナマ運河を越え、四十余日の航海の末、十二月〇日、ようやくサントス港に接岸。私はうきうきしながら彼女を迎えに港までおりた。

しかし、日本側の手違いだったのか、移住渡航者全員が名刺判の胸部レントゲン写真しか持っていないなく、大判を撮りなおさなければ下船入国できないとのこと。また、その日は金曜日だったので、レントゲン写真は土、日と休んで月曜の朝でなければ出来ないという知せを受けた。

降って湧いたような三日間の休日に、私は将来の妻と極楽トンボよろしくサントスの海岸を飛びまわってうかっていた。サントスの真夏の太陽は、若いカップルにこの上ない幸せの陽射しを与えてくれ、私達は何もかも忘れて新婚旅行気分で有頂天になっていた。

ようやくすべての手続きを終え、めでたく自由の身になった彼女を連れてサンパウロへ向い、細江先生の家のベルをおした時には、もうすっかり暗くなっていた。

「只今帰りました。」と告げるや否や、玄関で仁王立ちして迎えてくれた先生の怒声が飛んできた。

「この馬鹿が、三日もどこをほつつき歩いていたんだ！」

ママイ（おばさん） はなあ、ずい分お前達のことを心配して、赤飯を炊いて今か今かと待っていたんだぞ！

その晩も、次の晩も来ないので赤飯はなくなってしまう、また炊いたんだ。ママイの気持がわからないのか、この馬鹿が「あつ、そうでしたか。どうも済みません。実は……」「しようがない奴だ。そんなところにつつ立っていないでまあ入れ。二回も赤飯を炊いて心配しながら待っていたママイも大変だったが、三日も赤飯ばかり食わされたワシの気持にもなってみろ！」奥の方で家族の笑い声が聞えた。

先生の怒声に免疫になっていた私は、アツまた愛の一喝と悟り、カエルの顔に小便でケロッとしていたが、初対面の妻は、しよつぱなからの怒声に足の震えがとまらなかつたそうだ。

叱られたあと二人は、こそこそとあがって夕食の赤飯をいただいたが、みんな食傷気味。おいしい、おいしいと言つて、おかわりをして食べたのは私一人であった。

当時は、日本からの花嫁移住が華やかなりし頃で、見ず知らずの男女がサントス港で初めて顔を会わせても、

うまくいかないカップルもたまにあり、三面記事の恰好のネタとなって新聞紙上を賑わしていたので、オバさんも私のケースを大変心配しておられたのである。

「あの子は何処へ行ったのだろうか。何が起ったのだろうか。嫁さんとうまくいかずに途方に暮れているのではなからうか。どうして電話をして来ないのだろうか。」と本当に我が子同様に心配してくださっていたとのこと。

そのころ田舎者の私は、一度も電話などかけたこともなく、かけ方も受話器の持ち方も知らなかった。

私は先生の家から十数キロ離れたコチア産組の試験場内に住んでいたのも、あまり遅くならないうちにおいとましようとしたところ、「お前はもう帰れ。嫁さんは結婚式の日までワシが預る。」「アレー」さっきの怒声よりもこの一言は私にずしりとこたえた。

待ちに待ってようやく土曜日の夕方、サンゴンサーロ教会で、ささやかながらもおごそかに結婚式を挙げてくれたが、白い背広の細江先生、濃紺のスーツに帽子を戴いた、いきなオバさんのカップルは実に堂々としていて、お似合いで、こちらの花嫁花婿は圧倒されてしまっていた。特に、いつもお勝手に立っている普段着姿のやさしいオバさんしか見ていなかった私は、始めて正装した細江夫人の凛々しい気品と教養を見せつけられた感じがした。

式が終って、もたもたしている私の方に、先生がつかつかつと寄って来て、大きな手をさしのべて、「おめでと

う」と言葉をかけられ、その感激に胸がつまった。その手は大きく、柔かく、暖かく、しかも全身全霊をこめて力強く握ってくれていた。日本に居る親兄弟以上に親身になって私どもの結婚を祝福してくれている先生御夫妻のやさしさが、暖かい手を通してほのぼのと伝わって来、新妻は感激の涙を抑えることができなかつた。

「先生、オバさん、ほんとうに有りがとうございました。もう、三日も赤飯を食べさせるようなことは致しません。」

あれから何年経ったのだろうか。私も人並みに人生の紆余曲折を経験して、たまたま、先生御夫妻の眠るアラサ墓地の近くに居をかまえることとなった。忙中閑を見つけて、家内とお墓の前を散歩する時、いまでも想い出すのは、あの赤飯の一喝である。

(サンスター杜々長)

恩師 細江静男先生

モジ・ダス・クルーゼス 浅海護也

想起起す時、あの日、細江静男先生の訃報を知り、茫然自失、驚きと悲しみの中に、仕事先のパラナ州から、急遽、出聖、冬季にも拘らず、否に、ぽかぽかと小春日和の日、多数の会葬者の一人として参列し、サンパウロ市のアラサ墓地に埋葬された先生に、無言の御別れをして

以来、既に、来年一九九五年で二十年になる。其の間、星霜は移り、人も去り、最近というよりも此処、数年来、先生の風化は愈激しく、忘却の彼方に將に消え去らんかに見える様になった。私自身も、此の間、すっかり、小成に甘んじ惰眠をむさぼる一方、為す術を知らない、一不精忘恩の徒に等しかつたこと、正直に告白したい。

時あたかも、我々日系コロニアは、自らのアイデンティティの確認を急ぎ、来たる二十一世紀への再構築が迫られる昨今、明日そして、未来への展望は、我々日系コロニアの過去、歴史の根源への深い認識から生れることを知るならば、恩師、細江静男先生の生涯を発掘、回顧し、先生の遺業そして知られざる先生の素顔、人間性を綴り、其の追悼回想録を上梓することは、時機を得たものかもしれない。そして又、日系コロニアの若い世代が先生の先例に学び、先生の遺志を継承し、二十一世紀に於ける、ブラジル国の日系コロニアの一層の発展と秩序を望むことが出来るならば、故、細江静男先生の御喜び之に勝るものはあるまい。況んや、口舌の人ではなく、決して、私利私欲の徒でもなかった、常に、日系コロニア全体の前途を憂い、悲惨な同胞移住者の医療救済に全身全霊を投じられた、恩師、細江静男先生のブラジル国に於ける四十五年間の生涯、我が日系コロニアの建設の歴史に於いて、特に、保健衛生の分野に貢献された其の功績は余りに大きく、そして、尊い。

既に、昔のこと、記憶と忘却とが、半ば、交錯し、今

一つの不安を隠し切れないが、可能な限り、真実の細江静男先生像に迫って見たい。私、細江静男先生に生前、格別の御交誼と御縁をいただいたボーイ・スカウト青年移住者の一人として、之により、先生への報恩と慰霊の一端を果たすことが、可能ならば、身に余る快事と言える。

では、細江静男先生に、日本で初めて、御会いした時から、始めたい。夫は、一九六二年十二月中旬、寒い鈴鹿嵐の強い夕方、先生と長い間、友人関係にあつた、三重県津市在住の竹中太郎医師の住宅に於いてであつた。竹中医師の紹介で、色の黒い恰幅のいい、眼鏡の奥の眼が精悍な、一中年の紳士に会つたのが、細江静男先生であつた。之が初めての出会いであつた。其の日は、先生の南米事情、特に、ブラジル国そして日系移住者の活躍ぶりを、具体的に、先生から御聴きし、すっかり感激し、其のまま、先生と御一緒し、竹中医師宅で、夕食を御馳走になつたのであつた。翌日は、もう一度御会いし、渡伯したい旨を話し、先生は確か、其の日、津市を去つたと思われる。夫は、丁度、先生御夫妻、勲三等瑞宝章受勲の為、帰国された一九六二年末の多忙な日々、其の一日、三重県津市を訪問された時のことであつた。

私は、当時、三重大学農学部に在学し、海外移住問題研究会なるものを、同志の者達で結成し、日本学生移住連盟にも加盟し、海外移住の重要性を認識、強調していた頃で、ブラジル国、そして日系コロニアの事情も、大體理解していたが、先生の話によって、愈、ブラジル国

に行くことを決意した次第であった。唯、郷里の父母に、其の意向を伝えた時は、大変な驚き様で、特に、母親からは長男であり乍ら、家を棄てて、海外移住とは何事か、先祖に対して申し訳が立たない、海外移住等は止めてくれと、渡航準備に帰郷中は、夫こそ、毎日、事ある毎に泣きつかれた。苦心惨憺、之弁明に努め、母親の機嫌をとり、何とか、其の準備を完了し、神戸市生田区の海外移住幹旋所に入所したのは、一九六三年十月下旬で、細江静男先生に呼び寄せ主になってもらい、友人、父親そして妹弟達の見送りの中、移民船アメリカ丸に乗船し、約二百人前後の同船者達と共に、神戸港を鹿島立ちしたのは、どんよりとした曇天の一九六三年十月三十一日午後であったと記憶している。

そして、波高き太平洋も、無事に横断し、パナマ運河を通過、神戸港出港、四十五日後、一九六三年十二月十四日、ブラジル国、サントス港の埠頭に到着、接岸した日は、暑い朝であった。多数の出迎えの日系人の見守る中に、午前九時過ぎから、上陸が始まり、我々、移住者の健康状態の検査に来ておられた細江先生と再会し、堅い握手をしたのは其の直後で、おお、よく来たとの、先生の懐しい声を御聴きした次第であった。其の時の、先生の御様子、自信にあふれ、元気そのものであった。税関手続きも、簡単に終わり、間もなく、サンパウロ市に向ったが、先生宅に着いた時は、とつぷりと日は暮れていた。おばさん、つまり、細江静子夫人に初めて、御挨拶

拶をし、家族の人達にも、紹介していただき、夕食を共に御馳走になり、其の夜は、そのまま、先生の家泊めてもらった。其の翌日も、天気は上々、快眠の後、ブラジル国で初めてのコーヒーを飲み、先生の家の上の方にあったアラサ墓地を見学に行った。つまり、ブラジル国に一生を託するにあたり、永眠の場所を、先ず、見に行つた訳だが、其の墓地の明るい、そして大がかりな手のかんだ作り、其の風情に圧倒され乍ら、やはり、異国に来たなあとの、一樺の強い感慨と共に覚悟に似たものを感じたのを、今も覚えている。

そして、其の日、昼食後、岩中徹君の運転する古いトラックに乗せられ、サンタ・イザベル・ボーイ・スカウト農場に向つたのであつた。以上が、日本国とブラジル国に於ける細江先生との最初の出全いの経緯であつたが、要するに、先生との之等の出会いは、呼び寄せ主と雇用移住者の関係、そのもので、サンタ・イザベル・ボーイ・スカウト農場に配耕され、就農した一年有余の間は、大体、此の状態が続き、朝から夜遅く迄、唯働くだけで、先生の内面深く、触れる様な機会は、殆んどなかつたと思う。そして、一年有余の契約労働を無事に終了後、先生の了承のもとに退場し、勇躍、サンパウロ市に出た。

初めは、ポルトガル語を習得する必要から、知人に紹介してもらい、或る、ブラジル人の法律事務所の受け付けとして働き、夜はサンタ・イネース夜間学校に通つた。其の後、色々と職をかえて働いたが、マリリア市で、産

業組合中央会に勤務中、身体がやせるのが、ひどく、朝
疲れて遂には起床することが出来なくなり、当地の慈善
病院にかつぎこまれ、診察を受けた結果、流行性肝炎と
診断され、其のまま入院したのであった。ボーイ・スカ
ウト農場を退場後、日本食からブラジル食への完全なる
移行、そして産業組合中央会に入る前に働いた、サンパ
ウロ市での朝市商人時代の過労等によって、体力が極端
に落ち、感染、発病したのではないかと思考された。其
の後、三週間前後で退院出来た。

然し、歩くのがやつとで、勤務を続けることは不可能な
状態で、到頭、サンパウロ市に戻り、先生の家地下室
に静養させてもらい、予後の治療を受けることになった
のであった。

大体、二カ月間位であったが、此の予後の治療期間、要
するに、一日、何もせず、先生に食べさせてもらい、先
生から時々、注射され乍ら、ベッドにひっくり返って、山
と積まれていた先生の蔵書、朝から晩迄読ませてもらっ
た。幸いにも、身体の回復は思ったよりも早く、最初、先
生に国援法を適用してやるから、日本国へ帰れ等と驚か
されたりもしたが、間もなく、朝、起床時の疲れは完全
になくなり、黄壇の症状もとれ、衣服が黄色くなるのも
なくなつて来たが、やせた身体はすぐには元に戻らな
かった。然し、何時迄も居候し、無為徒食も心苦しく、先
生に軽い仕事ならしても宜しいとの、最後の診察結果を
もらい、先生の家を辞去したのであった。此の先生に、一

文の支払いもせず、一方的に御世話になり、先生宅の地下室に寝起し、静養・治療させていただいたのが、私には、先生との第二回目の出会いとなった。つまり、第一回目は外側から、皮層的な先生に出会った訳であったが、今回、此の二回目は内側から、先生の素顔を見、肌に触れ合う機会を得、先生思想、人間性等を知ることが出来たのであった。言わば、初回は形而下、そして今回は形而上の出会いであった。

当時、つまり、一九六六年頃の先生は身長、一メートル六十八センチ位、体重は八十キロ位、御歳は六十六才前後であったろうか。朝六時には岩中徹君の運転するジープ・バンデイランテに乗って、同仁会診療所に出勤されたもので、多忙な油の乗った毎日であった様であった。そして、夕刻、七時過ぎには、大体、帰宅され、家族の人達と食卓をかこまれた。尚、当時の先生宅、つまり、他界される迄、居住されたが、レボース大通りから、百メートル位、引込んだ、クリニカ病院の下側、オスカル・フレイレ街、一四三九番地にあった。閑静な住宅街であった。住宅は地下室も入れると三階建てで、其の敷地は下の方にあった野菜畑、洗濯干場も入れると、結構、大きなものであった。即ち、夕食は玄関から入って、最初の応接間の次の室、丁度、家の中心であったと思うが、此処にあった大きなテーブルを使用し摂られた。

食物はおばさんの手製のものが多かった。先生御夫妻、山国、飛騨の出身の所為か、食物は一種山家料理的傾向

が強く、常時、保存食をおき、目刺し、つまり魚の干物等先生の好物の一つらしく、よく食べておられた。日伯混合食、一汁二菜といった内容であった。美味しく御馳走になったが、決して、美食といったものではなかった。私も含めて五人か六人のもので、楽しく、賑やかな食事をしたものであった。尚、先生が飲酒されることは、かつて見たことはなかった。私はよく食べ、よく話した。話題も豊富であった。特に、日曜日の昼食後等、お茶を御馳走になり乍ら、先生の時局談、移住論、時には哲学、日系コロニアの将来像迄、よく拝聴したものであった。又、先生の、此の名調子に、私等、渡伯後、三年前後の、めくら蛇におじない元気さで、反論し、水をさす様なことを申し上げ、其の都度、先生に手ひどく、此の馬鹿がと、どなり返されたもので、先生の段違いの貫線と口の荒いものには、全く閉口したものであった。

そして、此の様な時には同席し、先生の側で、静かにお茶を飲んでおられた、おばさんに必ず、おお、パイ、そしておい、坊、と仲裁に入っていたもので、今は懐しい、おばさんの名判官ぶりであった。おお、パイは、パイ、何も知らない青二才には夫位いにしなさい、そして、おい、坊とは失礼な主張、いい加減にしなさいとの言外の意見であったかと思う。全く、おばさんに仲裁に入っていたかと、丁度、早天に慈雨とでも言おうか、ほっとした安堵感を味わったものであった。本当に飾り気のない、素朴な夫でいて、気品のあった、こ

がらなおばさんで、剛直で、他人の意見等、眼中になかった感の先生も、此のおばさんには、一目おかれた御様子、おばさんに言われると、おお、そうかと率直に下がられたものであった。先生には、此の様に、一時的に、感情的になられることはあっても、後はあっさりとしたもので、所謂、根に持たれるということは決してなかった。今にして想う時、先生には、私如き、新参者に対しても、暖かく、よく相手していただいたものと思う。そして又、先生達は二人三脚の御二人、御似合いの御夫婦であったと思うのであった。先生のあの遺業、縦横の活躍も、おばさんの先生を良く理解された内助の功に負うところ、甚だ大きかったこと痛感されたのであった。

其の昔、師範学校出の若かったおばさんが、先生の突然のブラジル国へ行くとの、暴言とも言える言葉にも、一言の苦言もなく、従容、運命を共にされ、サントス港に上陸して以采、激動の昭和の時代、開拓初期のバストス移住地に、そして第二次大戦下のサンパウロ市に於いて、先生の長い留守宅を守って、渾身の生涯、明治女の控え目で、しんの強さを拝見したのであった。我々、ボーイ、スカウト青年移住者にとって、おばさんの存在は先生と同様、誠に大きく、将に我々の慈母であった。其の他、我々の結婚の時には、代父代母になつてもらい、又、披露の宴も催していただいた。先生に呼び寄せていただき、徒手空拳、渡伯移住し、色々と多難であった移住当初の数年間、無事に、生を全とうし、今日、まがりなり

にも、我家、五人が元気に此の国で生活しているのも、偏えに、先生、そしておばさんにいただいた、此の御援助に他ならなかったこと、深く、感謝している次第である。

此の三件が、私にとって、細江静男先生の想い出の主要イベントであるが、私、先生御夫妻が他界される迄、毎年、二、三回は、季節見舞いに、伺候させていただいた。其の間、先生の家庭の様相そして生活態度は、終始、変らなかつた。先生の住宅内は、いつも、階上、階下を問わず、本業の医学書は勿論、哲学書、宗教書、農業書、ボーイ・スカウト指導書、日本の名将、武将言語、夫に月刊、週刊誌迄、幅の広い学術、そして思想を主とした書籍の山であつた。誠に、憧憬の念、禁じ得なかつたことを覚えてゐる。先生は、夕食後、九時前後には、必ず、階上の書齋に入られ、全くの読書三昧、夜半遅く迄、執筆を好まれたものであつた。そのかわり、趣味、つまり、ゴルフとか、釣り等には関心はなく、多忙な仕事一辺倒の毎日、家族の人達と日本映画、特に、時代劇を観られた位であつたらうか。唯、先生の若い頃は、所有しておられた農場には、よく行かれたとの由であつた。又、日曜日の午前中は必ず、おばさんを同伴され、近くのカトリック教会のミサに出席された敬度なカトリック信者でもあつた。確か、先生の洗礼名はイグナチオ、そしておばさんはテレーザと言われた。

先生は着伯早々、ゼツリオ・バルガスの革命に遭遇し、ブラジル国の開業医の免許をとるには、ブラジル国の大

学に入學し、ブラジル人學生と同様に、一年生から六年生迄、大学で勉強することが義務づけられ、其の卒業後、兵役も課せられ、一九三〇年、サントス港上陸以来、一九四四年、ブラジル国の開業医免許を正式に取得する迄、多大の努力が払われたもので、此の間の先生は、毎晩、四、五時間の睡眠しかとれなかつたと言われる。然し、先生は頭脳明晰、思想に強い人で、此の長年月の勉學と相まつて、何時も斬新な発想、万策が生れたものと思われ、先生の生涯を通じての一大傾向であつた、青年の如き、一途な理想主義者的言動が多かつたことも、一つには此処に其の根拠があつたのではないかと考えられる。又、当時、私が伺候しましたが、不在の時が多く、先生はサンパウロ市の同仁会診療所で診療にたずさわる一方、海協連（日本海外協会連合会）のブラジル国唯一人の囑託医として、各州に散在する日系移住地を駆け巡られ、特に、奥地巡回診療、つまり、無医村移住地の診療には、力を入れられたもので、道庵先生と親しまれ、貧富の差なく、人種の別なく、どの様な人にも医は仁術であることを実践されたものであつた。夫にしても、長期間、家庭を留守にして、初老の先生が、飛行機、船、ジープを乗り継いで、広大な奥地に診療の旅を続けられたことは肉体的にも、又経済的にも、先生には、大變な犠牲を強いられたことと思われる。そして、先生の専門分野は産婦人科であつたが、内科、外科、老人科、万の分野を担当されたものであつた。

此処で、暫く、先生の若かりし頃を振りかえって見たい。

細江静男先生は一九〇〇年（明治三十三年）六月三日、岐阜県益田郡中原村和佐（現在、下呂町和佐）に、農業、紳江藤市・こう夫妻の長男として出生され、弟が一人いた。少年時代は腕白坊主であったとか。然し、和佐尋常高等小学校の高等科に進む頃には、よく勉強される様になり、やがて、益田農業補習学校（現在、益田高校）に進学された。先生の幼少時代の飛騨の山村は大変、貧乏で、農家の娘達は十八才頃になると、糸取りと言つて、他県の紡績工場へ出稼ぎに出、間もなく、肺結核に罷り、家に帰つて来ても、よい治療法もなく、二年前後、病んで死んでいったものであった。どの部落にも、大抵、一、三人は此の様な娘がいたもので、先生は、此の様な悲惨な状態を見乍ら成長し、如何にしたら、自分達の村はもつと豊かになるか、そして同時に、無医村に生きることの如何に心細いかをつくづく感じたと言われる。

先生は北海道への集団移住を考え、村の青年達に呼びかけたこともあった。然し、夫も両親、親戚の者達の強い反対に会い、実現せず、遂に、一九二〇年（大正九年）、立志、東京に出た。二十才であった。其の後、新聞配達等で生活費、学費を稼ぎ乍ら、苦学を続け、慶応義塾大学予科に合格、医学を勉強することになった、之は、医者になつて、郷里、飛騨の無医村を救済しようと思つた為と言われる。そして、一九三〇年（昭和五年）、慶応義

塾大学医学部、本科を目出たく卒業された直後、恩師、宮疇幹之助教授に呼ばれ、世界一大きな無医村、ブラジル国で働いて見ないかと誘われ、外務省留学医として、先生は渡伯することになったのであった。其の後の先生は、恩師、宮嶋幹之助教授の推挙に答え、爾来、四十五年間のブラジル回に於ける先生の生涯、一貫して無医村に生きた村医で、開拓初期二年目の無医村バストス移住地に新品の村医として赴任して以来、サンパウロ市に住居を移して後も、日系コロニアという無医村に我々、同胞移住者の生命を守って、医療救済に、其の生涯を捧げられた。南米、ブラジル国の大地の匂いが骨肉にしみついた、一大村医であった。

そして、バストス病院、チエテ病院、日本病院（現在、サンタ・クルス病院）、カンポス・ド、ジヨルドン郡のサナトリオ等々の建設、そして、日本移民援護協会の設立又は、研修医制度の設置、どれ一つとっても、先生を抜きにしては語れず、先仕一流の気合いと高い識見、そして其の参画によって、初めて、あの時、あの場所に成就し得たと言っても過言ではなく、強烈であった明治男の使命感のなせる偉業であった。先生の之等、町医者的名利を求めず、ブラジル国の奥地、無医村開拓移住地に常に、病者、貧者の味方として、己の理想を迫り求めた、此の村医としての働き、之こそ、日系コロニアの医療救済、保健衛生機関確立の先駆者と私が尊敬する所以である。

次に、細江静男先生と日系コロニアの若い世代に就い

て述べねばならない。周知の如く、我々、ブラジル国の日系コロニアは、第二次大戦後、祖国、日本国が米国に勝った、負けたという所謂、勝組と負組の対立、抗争という、其の建設の歴史に於いて、最も不幸な問題に直面したのであった。つまり、第二次大戦中、外国語の新聞等、其の発行が禁止され、正確な第二次大戦の結果が分からないままに、日系コロニア全体がデマ宣伝の横行によつて、妄信と無知のコロニアになり、残虐行為つまり、殺害事件が続発した痛ましい事件であつた。

そして、此の時期の日系コロニアは祖国、日本国の第二次大戦、負戦によつて、混沌として、無秩序な世相が続き、一世層の勝組、負組の問題の他にも、一世の父親と二世の子供達との間、そして二世層間に於いても、夫々、反目、対立が発生し、我々は支離滅裂、日系コロニア全体の前途に暗雲がたちこめていたのであつた。其の間、先生も随分、心痛されたが、この勝組、負組の問題は飽く迄も一世層だけのもので、決して、二世層、三世層は関係してはならない。二世、三世の者達は、従来通り、仲良く其の生活の場を此のブラジル国に築き、日系コロニアの一層の発展と秩序を共に計らねばならないと考えられ、先生は日系コロニア、特に、若い二世、三世層の融和と団結の精神と実践理論をボーイ・スカウト運動に求め、日本ボーイ・スカウト連盟の指導のもとに一九五三年、阿部弥門、大竹潮、小副川ルイス良三、其の他の諸氏と語らい、サンパウロ市にエスコテロー・カ

ラムルー隊を結成されたのであった。

其の後、エスコテロー・カラムルー隊の充実化と共に、第二次大戦後の日系コロニアの復興も著しく、一世層間の勝組、負組の問題、一、二世層間、そして二世層間の反目、対立も緩和し解消されて、現今の日系コロニアの発展と秩序を得たものであった。又、先生は、山国飛驒の貧しい山村に生まれ、苦学力行された人で、貧困な環境に苦闘中の人々とか、若い青年男女には、常に暖かい援助をおしまれなかった。先生のバストス移住地時代から晩年に到る迄、多くの若者達が先生の家には御世話になった。或いは病気を治してもらい、学校に通よわせてもらい、或いは生活の仕方を教えてもらい、大学を卒業し、立派な社会人となり、そして、若い娘さんが結婚していったことか。又、一九五六年頃から、日本全国各地より、五十人前後の青年移住者をボーイ・スカウトとして呼び寄せ、サン・ベント・デ・サプカイ郡 又は、サンタ・イザベル郡のボーイ・スカウト農場に保護し、就農させて、ブラジル国の風土に馴れた社会人として養成し、送り出した、其の意義は特筆される。

裸一貫で渡伯して来た、若いボーイ・スカウト青年移住者達を、先生御夫妻は夫こそ、親鶏が雛鶏達を育てる如くに庇い育てて、彼等の勉学、就職、そして結婚迄、あらゆる面倒を見、其の経費の大半は、先生の私財から出たのであった。先生には大切な人生の蓄財期に、彼等の為に私財を使い果たされた訳で、あの山国飛驒の貧乏な

生活からの脱出を夢見て、医者になられ、学生時代には幾度か、カール・マルクスの資本論を読まれたという先生、経済学、資本主義の如何なるものかは、百も承知であつたにも拘らず、他界される迄、経済学白紙に徹せられた、私は、先生の此の心意気に、強い感動を覚えたのであつた。

確か、先生が他界される、二、三年前であつたと思つたが、サンタ・イザベル・ボーイ・スカウト農場に、かつて先生に呼び寄せていただいた、ボーイ・スカウト青年移住者達と其の家族が多数、参集し、先生御夫妻を囲んで慰安会を催し、旧交を温めたことがあつたが、当時、先生は糖尿病、老人ばけ、そして肺結核等を併発し、相当に、進んでいた。動作はにぶく、表情も全く暗かった。身体も一回り、小さくなり、あたかも子供の如きであつた。先生の元氣であつた往時を知る私には、先生の此の変貌、一挙一動、何とも身につまされ、感慨無量であつた。後日、聞くところによると、先生の晩年経済的に大分、困窮したものであつたとか。己を顧みること薄く、日系コロニアの建設に邁進した、恩師、細江静男先生の此の変りをはてた姿。私の心の琴線に触れ、二度と離れることはなかつた。そして、私にとって、先生に御会いし、御話しを拝聴出来た、最後の日となつたのであつた。尚、先生は一九七〇年、日本移民援護協会理事を引退された後、約一カ年位は、末だ診療にたずさわられたが、其の後は、すつかり、自宅に引込まれ、人前に出ることは、殆ん

どなかつたと言われる。

掬て長々と今迄、先生の素顔、人間性に就いて、書いて来たが、此処に、最後の先生の発掘、回顧に入りたい。先生は、記述の如く、幼少期、山国飛騨の無医村に住む人々の貧しく、そして悲惨な生活を見乍ら育ち、青年期に於いて、明治の一大思想家、福沢諭吉の創立した私学、慶応義塾大学医学部に学んだことは、先生の一生、既に、決定されたと言っても過言ではなく、先生は、自ら、熱帯病に苦しみ乍らも、ブラジル国の奥地、探く分け入つて、無医村移住地に奮闘する同胞移住者を勞らい、彼等の医療救済に情熱を注いだ野人であつたことからわかる様に、小心翼翼々、机上の帳簿に一喜一憂、我利我欲を追求する所謂、資本主義の優等生であることを好まれず、其の時代に忠実な官学の世界にも程遠く、私は老子のわかるカトリック信者であると、先生の著書にもある如く、世の土にまみれ、自由に、独立自尊、理想を追い、強引に走つた、革命家型の人生を選択された様に思う。従つて、此の世の虚偽、仮面の人を嫌われ、之等に対しては、痛烈な毒舌を飛ばされたもので、裸を愛され、ヒューマニズムに生き、同胞愛に燃えた医者であつた。そして、最後に、青少年期に形成されたと思考される、先生の此の様な素顔、人間性を決定し、そして、先生の人生の根底に流れた、其の基本精神は何であつたか、私は次の如くに答えるのに躊躇しない。つまり、先生は至誠一路、人間信賴の精神に生き、將に、先生のブラジル国に於ける

四十五年間の生涯、此の一語につきると。

先生御夫妻の波瀾の人生にも、愈、其の最期が迫った。先生は、一九七五年八月二十八日、二十三時、そしておばさんは、一九七四年六月二十七日、三時、夫々、息を引きとられたのであった。

以上である。不肖、精一杯の私観、恩師、細江静男先生像である。想い出は未だ、つきないが、以下は割愛し、一応、之にて、摘筆したい。

眼を閉じれば、今も、先生、そしておばさんは、私の心の奥に臨在しておられる。此の拙文を草し、我が恩師、細江静男先生を迫悼し、先生、そしておばさんの御冥福、心から祈念したいと思う。

尚、文中、細江静子夫人に対するおばさんとの呼称、御許しを得たい。何故なら、私にとって、おばさんとは、懐しい尊称である故に。

(養 鶉 業)

細江先生を偲び

パラ州アカラ移住地 菊地 朝 治

私の渡伯は一九六一年十一月、サンパウロ州サントス港上陸に始まり、同志八家族と共にモジ・ダス・クルー

ゼスの呼寄せて下さった先輩それぞれの処に着きました。私の家族は種鶏場経営の大先輩滋野様方で、お世話になることになりました。

日本を発つ時は十二月の冬、着いたブラジルは真夏の季節で、実に良い処に采たと思いました。養鶏の仕事は始めてのことばかり、先輩の指導で少しずつ馴れて参りました。

一日同志が集まって、将来について相談し、先輩の方々に今やっている仕事の将来について意見を伺ったのですが、皆さん呑気で、特別な話は何もなく、良い返事は得られませんでした。ブラジルに馴れると、こうも気長になれるものかと、不思議に感じました。

私としては、将来独立せねばならず、また男の子が四人もいるので、将来を考えると現在の仕事にはあまり興味を持たず、大資本なしで経営できるものはないと考え、他の農家に移りました。元々日本では畑作農者だったので、仕事は始めてでしたが、鍬や斧を使つての仕事なので、直ぐ先輩たちに負けずに働けるようになりました。

しかし、この農業も野菜類を主作とし、果樹や養鶏との混合営農で、相当な資金を要します。地域の同業者がほとんど同じような農業者なので、一生懸命に働いて豊作な年程欠損になる。レポリーヨなど、収穫費が出ないといつて収穫せず、畑の中に切捨てられていて、聞くとこの方が肥料になるので得だと言う。から元気の鬱憤か

もしれないが、とても私にはついていけそうにない。多少の財えがあっても、土地代は、べら棒に高く、とても手が出ない。同志間で、ああだこうだと意見をのべ合いながら、それでも仕事の方は忠実に勉め、七月になりました。

これからが、細江先生にお世話になった次第を述べることになるのですが、拙ない筆で先生の温情を充分申しあげ得るか心配です。物足りない点は、ご容赦ねがいます。

隣りに住んでいた同志の浦山久尾氏を訪ねると、彼が「お医者さんの細江氏が、遠くアマゾンの不便な地域に住む日本人移住者の巡回診察に行かれ、トメアスーその他、車の通らない処には歩いて実行され、その記事を邦字新聞で読んだ」ことを話された。結果として二人で先生を訪ねることとなった。

広いサンパウロ市内で、右も左も禄に解らない新来者二人が一苦勞して、先生が同仁会の診療所におられると教えられ、廻りめぐって同仁会にたどり着いたら不在！それが二度。三度目によく私たちの熱意が通じてお会い下さることになり、お話をうかがって、是非アカラ移住地に住みたい希望を申しあげ、先生が真面目に受け止められました。その時のお話は大略次の様なものでした。

「トメアスー移住地は既に入植して二十年経っていて、立派な植民地が構成されているが、アカラ地区はまだ入植

二年目で、皆が夢中で鏑を削っている最中。まだ生産物がないが、海協連（海外協会連合会）より融資を受け、自らの力で道を造り、真剣そのもので開拓作業に従事している。幸いマラリアなどの病気がなく、その入植地はアカラの町から出かけ、手前に六家族入り、少し離れ（私有地の中）た先に十四家族が入植して頑張っている」。

話を聞いた私たち二人はすっかり魅せられ、この話を他の仲間に聞かせた後、再度お伺い出采る約束を得、躍る気持で帰りました。

それから他の仲間とも話し合い、その結果を報告すべく、先生に日を定めていただき同仁会に伺いました。先生は私たちの真剣さを認めて下さったものと思えます。今度は「良く来た」と笑顔で心良くお会い下さいました。そして、海協連が世話しているアカラ移住地は、ブラジル政府が一戸当り百町歩（一六〇ha）無償で交付していることも伺い、増々希望が膨らみました。

その時先生は「まず君たちの代表者が一度現地を視察することだ」と申されたので、是非そう致しますと確言して帰り、一同で話し合った結果、「代表は浦山久尾と決め、費用は各戸別人数、運送荷物数等を勘案し、合わせて二百コントスを計上、出采れば一週間後決行したい」と、その旨を先生に申上げました。先生は早速ベレンの海協連支部越知栄氏（おちさかえ）と連絡され、出発は八月、期間は二週間に決まりました。

浦山さんは言葉解らずの一人旅で、苦労されたことと

思います。コンゴニアスから出発し、ベレン空港に着きますと、私たちが日本から来た船中、移住者助監督であった海協連ベレン支部職員の上村正治さんが出迎えてくれたので大助かり、感激だったと視察後の報告会で浦山さんの話でした。

彼は海協連職員の案内で（上村氏も参加）河船（モーター船）でアカラの港に着き、海協連のジープで移住地の宮崎氏宅に着く。アカラの町から植民地の入口まで十八キロ。それから先の道路は全て、移住者の働ける者全員で造ったものであることを知らされた。（全長二八キロ）その夜、宮崎氏宅に移住者の家長全員が集まり、歓迎会が催され貴重な実情を聞くことが出来、翌日から各戸別に訪問、現地作業を見学し、皆さんから「一日も早く移って来られたい」とのことでしたと、二週間の旅をおえ無事サンパウロへ帰った浦山さんの報告でした。

これで一層一同の決意が固まりました。アマゾンへ行くとなると、船便か航空便のいずれかで相当額費用を覚悟せねばならず、全員の費用捻出が可能ではありません。自然実行できる員数が少なくなりました。

細江先生は私たちの経済的苦衷を察せられ、それらのことをサンパウロの邦字新聞紙上に発表され、同時に当時サンパウロ市会議員であった京野四郎氏に協力を頼み、大統領ジョン・ゴラール閣下並びに空軍大臣と直接面談するために二度ブラジルに飛んで貰ったと聞きました。

私たちのアマゾンへの移住許可と、空軍機で移動ができるよう、計っていただいたのであります。

京野先生は、細江先生と同様、私たちの大恩人であります。

空軍機で、しかも無償でアマゾンに移住ができるなど夢想だにしなかったことで、天にも昇る気持で先生方に、またブラジル政府に感謝いたしました。

アマゾン行が決ったので、そのことを農場の主人に話し、自分たちに代る人を探されるよう申し入れましたところ「出発まで安心してここにいてよろしい」と言われ、あまりにも幸せ続きでこれで良いのかと空恐ろしい気持ちで、これまでに感謝の心を引締めねばと心に誓いました。

ところが出発目がなかなか決らないので、移住をとり止める人がでて、実行者は一人去り二人去り、浦山さんと今野さんは十二月四日に転職しましたが、互いに移住の決心が固く動じませんでした。そして細江先生には、時々の情報を伺い続け、ついに年を越えてしまいました。

ようよう三月三十一日、待望の出発時が報されましたが、その時には、悲しいかな私と浦山さんの二家族になつてしまいました。私はお世話になった皆さん宛、お礼とお別れの挨拶に「何時このご恩返しができますやら今は確信がありません。しかし努力してアマゾンで人様並に暮せるようになりました、と申しあげ得る日を期待いたします。有難うございました」と挨拶いたしました。

出発の日はコンゴニアス空港に京野先生が見送りくださいました。

出発が十一時になったので、コンゴニアスに一泊することになり、翌四月一日午後四時ベレン空港に着きましたが、一般の乗降場所ではなく、軍の基地でした。一日遅れたため昨日来られたという海協達からの出迎えがありませんでした。それでも浦山さんが一度来て事情が解っていたのでタクシーでベレン市内の鈴木旅館に着き、荷物は空軍の車で届けてもらいました。

翌日海協連事務所に向い「ようよう着きました。ご心配かけて相済みませんでした」と挨拶し、日本総領事館にも出頭して手続きを済し、再び海協連事務所に戻り、いよいよ入植の話となりました。

サンパウロで私たちのアカラ移住につき、あらゆる手をつくし、達成の道を開いて下さったのは勿論細江先生であります。なおその上に、私たちの入植のためベレン海協連支部長越知栄氏と万事お打ち合わせ下さいました。無事ベレンに到着、四月五日には海協連の方に付そわれ、船便で待望のアカラ港に着きました。

昔、私が親に連れられて北海道に移住したのは十三才の時で、まだ肌寒い五月のことでした。現地に行くためには、馬車の行止りから、年齢に応じた荷物を背負わされ、三里（十二キロ）の細道を歩いた記憶があります。が、アカラ入植では、地区代表の方三人がすでにカミ

ニヨン（貨物自動車）で来ておられ、出迎えられたのには驚きました。

入植地に向う道路の十八キロから先は、入植者の方々に切り開かれたもの。先輩たちのご苦勞に頭が下がりました。二十七キロの処に建てられて間もない小学校と職員住宅があり、その住宅に二家族が部屋割りして、そこに住むことになり、自分たちの住居が出来るまで、約二カ月居住させていただきました。

先に申上げましたアカラ港（町でもある）から植民地に向い、最初の六家族の入植地から次の十四家族の入植地までの間は私有地があつて、この私有地を私たちに買いとらせ、将来日本人の所有地をつなぐよう、すでに細江先生と越知支部長の間で話が進められていたのであります。このように細江先生はお医者さんであるに止まらず、未開地（原始林）の中に建設する移住地の将来発展の行く先まで計画を進めておられたのであります。

この私有地は地図面で二千町歩となっていました。実際には完全に測量されておらず、実測との間に大分差が出采ました。それやこれやで大分時を過し、七月にようやく売買契約が成立しました。

この土地を浦山さんが東側半分、西側半分は私にと分割しました。奥行の長い土地であります。

売買成立以前、すでに仕事に取りかかり、まず住居となる仮小屋を作ったのですが、これには先に入植された青年たちの手伝いがあり、僅か一日で雨の漏らない小屋

が出来ました。板材が足りないので壁の上半は椰子菓茸
きで風通し良く、下半分を板張りにしました。働く者は
その小屋に移り、翌日からまわりの森林伐採を始めまし
た。

七月八月と約二カ月がかりで息子二人（長男十九才、
次男十六才）に助けられ、三人で七町歩の伐採が出来、
充分乾いた十一月に入植者の手伝いを得て”山焼き“を
しました。文字通りの焼畑開墾ですが、幸い良く焼け、整
地も順調に進んで、新年を迎えることになりました。

ピメンタ（胡椒）を植える場所を残し、その他全域に
陸稻（オカボ）を播種し、中に少し糯米（モチ米）も
播いたのでした。それがまた大豊作で大喜びでした。私
は農業出身ですが、四十六才まで米作の経験がなかつた
ので、嬉しさは格別でした。ピメンタ栽培（苗の移植）も
三月一杯で三千本植付けを了えました。

こうして主食の米があるものの、ピメンタの収穫が始
まるまで三年を要することから、また他にほとんど収入
がないので、僅かな手持ち金で三年過すのは、生易しい
ものではなく、厳しい節約が強いられる生活でした。

こうして二年が過ぎ、三年目の六月、細江先生が再び
婿さん同伴で巡回診察に采られました。私たちの初歩営
農状況を視ていただき「ヤア、良く頑張っていますネ。私
も本当に嬉しい」と有難いお言葉をいただきました。私
は胸が一杯で返事に戸惑いました。その時、先生が屋根
だけの小屋に、まだ手不足で穂付きのまま積んであつた

中から五、六本穂付きの餅米粉を抜きとり、持ち帰られました。

先生は二日間にわたり地区全員の診療に当られ、夜は一条さん宅での衛生講話、植民地ほとんど全員が集り、ランプ明りの部屋で約二時間、お疲れの様子もなく、大変有益なお話でありました。

翌日は浦山さんと私の土地境の山道を六キロ歩いて、アカラ河に至るまでの実地調査をされましたが、帰り道は流石の先生も、ややお疲れの様子でした。当時先生は六十才であったと聞きおよんでおります。

その後二年程して、日本から医療調査団で来られた二人の博士の案内役として訪れて下さいましたが、これが先生との最後の別れとなりました。

浦山さんの東隣りに若い長瀬さん兄弟二家族が住んでおります。この方たちも私たちより少し遅れ(ボーイ・スカウト関係)、細江先生のお世話でサンパウロから入植されたのですが、この方から、サンパウロで細江先生が急にお体が不調になり、意外に早くご他界なされたと伺いました。私たちの悲しみは一入でした。ご冥福を心からお祈り致す次第です。

私は二通ほど先生からのお便りを戴いており、先生ご健在の折は、私も欠かさず毎年お便り申上げ、こちらの事情をお伝え致しました。京野先生にも同様便りを欠かしませんでしたが、住所が変更されたとか、手紙が返送されて来て、その後はご無沙汰になりましたが、この恩

人もまたお若くして亡くなられたと伺い、悲しいことでもあります。

浦山さんも存外早く亡くなられ、この方が私より先生とは深く接しておられたので、彼が存命であれば、もっと資料の纏った便りが綴れたのではないかと、残念に存じます。浦山さんの家族は末亡人はじめ日本に行っていて、今はほとんど文通がありません。

以上、まことにお粗末な思い出の文となりました。

(農業)

先生の思い出

ベレン 大江 牧 夫

小生アマゾンに住む大江牧夫と言う者です。私はグアマ植民地に入植して以来、現在も当地に住んでおります。去る六月二十四日付のサンパウロ新聞に、細江医師の偉業をまとめ、記念誌を発刊するとの記事があり、どんなことでも良いから参考資料にしたいので、とあったので、参考になるかどうか判りませんが、細江先生から非常にお世話になったので、一言書いてみました。

私は学校（麻布獣医大学）を卒えてすぐに、アマゾンに采ました。当然ながら無医村で、若かった私は、入植して営農よりも医療に関心が向いました。入植一週間前後には、飲水からか全員がアメーバ赤痢にかかり、マラ

リヤが本格的に入って来たのは、二、三年後でした。

営農よりも健康が心配だった頃に、元の海協連からの派遣で、細江先生が日本人の医者として巡回診療に采られました。当時はすでに入植地からの脱耕が相つぎ、入植者数も五分の一に減っていました。

今のように道路はなく、全てが船でした。入植地で先生は、健康診断のほかに衛生に対する話もされました。たしか三回か四回くらい来て下さったのではなかったでしょうか。

最初の巡回診療の帰りの船の中で、言葉をかわしたことを今でも覚えております。(私は熱帯地にては、睡眠不足が一番こわいこと)。

二年続けて来られてから、先生は新聞にアマゾン巡回診療記(題は忘れました)を書かれ、小生のことを青白きインテリ青年と書き、二年目の巡回診療の時には、もう日本に帰っていないだろうと思つて来たら、一段と遙しくなつて頑張つていた、と書かれていました。

また、日本医師会より功労彰を受賞された時、先生は日本全国を講演して歩かれ、その時、私のことも話されたが、誰も知っている人は現われなかつたと、何回目かに来られた時に、私に話されたことを憶えております。ある時は菓をどっさり置いて下さいましたが、何につかうのか解らず、解釈に苦労したこともありましたが、

(アマゾンニア日伯援護協会理事)

細江静男先生のこと

モジ・ダス・クルーゼス 浅海 喜世子

ブラジル日系移住地の医療衛生に、身を捧げられた、細江静男先生が、ブラジルの土を踏まれた頃は、ちょうどジェツリヨ・バルガスの政治が始まる少し前で、今から六十四年昔の一九三〇年であった。そして、今から十九年前にブラジルの土になられた。

先生は、岐阜県益田郡下呂町和佐に誕生された。先生は、この土地について、次の様な思い出を記述して居られた。

私の故郷は、日本アルプスの奥深く、御岳の飛騨側で畑や田が非常に少ない、岩山の多い、清流と雪と四方に連なる山々の美しい所であった。どこへ行くにも何里もの峠をいくつか越さねばならない不便があった。明治、大正になって、国道が飛騨を縦貫しても、その街道に出るためには、渡し舟かかごの渡しと言うものにたよらなければならなかった。

従って、あちこちに小さい田畑ばかりあって、そこからの収穫物である芋やとうもろこしやかぼちやとか、ふき、栗、柿、わらび、ぜんまいなどの山の幸か、峠を越して、背負って采た食物が山国の人々の食を支えていた。菜飯、あわやひえの御飯、麦飯が主食であった。冬は山で猟をし、夏は小川や谷で小魚をとり、食事にそえた。雑木林から炭焼きをしたり、養蚕も貧しい村人の生活源で

あつた。

村は貧しく、五、六十軒の半数以上が、女子は、織物女子工員として、男子は、出稼ぎ人夫として村を離れねばならなかつた。雪にうもれたお正月ともなると、方々から帰郷する人々から、愛知県の一の宮や瀬戸などのニュースを聞いて好奇心をもやした。これらの青年男女の中には、結核や脚気になつて倒れるものも多く、悲話も後を絶たなかつた。

私は、一才位までは米の粉と肝油で育ち、普通のものが、食べれる様になると御飯に味噌汁、たまに鰯干し、サシマを食した。年中欠かさなかつたのは、大根とかぶらの漬物であつた。

以上、先生が述べられた様な厳しい山国の風土と生活が先生を人一倍の努力家にし、病む者、貧しい者を援助すること、いわゆる博愛の精神の原動力となつていた様に思う。

先生が、村で過ぎされた間、心からの相談相手になつて下さつた、小学校長、田口惟太郎先生から受けた慈愛や東京に出られてから、苦勞された中で色々受けられた人々の慈愛を忘れられることなく、他人に施こされた様に見える。

先生が他界されてから、十九年後の今、残り少なくなつてゐる先生縁の方々とお会いすることができた。多くの方々のお世話と援助をされたことを聞くにつけ感心する。普通の人にはできない事であつた。ある老人は、

「もう、ああいう人は、いないでしょうな。」と、つぶやかれた。そのつぶやきが深く心に残っている。

貧しい人々には、無料で医術を施され、富む人々には、協力を呼びかけて人を動かされた。

先生は、家に塀や、錠まえを作られなかったかの様に見える。御自宅に多くの人を招き入れ、病人や若者のお世話をされたり、若者が、農村などに住んでいて、学問することが不便の時には、先生の所から学校に通っていた。その数には、驚くのである。この家を訪う人たちは、そこで食事を共にするのが自然のような雰囲気であった。そこには、だれからも、「おばさん」と呼ばれていた、細江静子夫人の不思議な力があつたと思う。

私も移住した時、結婚式までの十日位の間お世話になった。初めての日、私は、奥様の呼称を使用する積りであったが、それでは、家の雰囲気に溶けこめない気がして、「おばさん」と呼ばせていただくのが良いと考えた。一九六九年二月、細江夫人は七十才を過ぎていらした。多くの人々のお世話をされ、家庭を守って来られ、耐えることを覚られた様な何とも尊厳な感じで時に泣き笑いの様な表情をされる中に、本当に御苦勞の多かつた移住地の年月を思わせるものを感じた。小柄なからだから、吐かれる煙章のけむりの中にも、ストレスの多かつた、年月がうかがわれる思いがした。ある意味では、家庭を犠牲にして居られたかもと思われる、先生のがむしやらかな行動のそばで、均衡を保って生きられるためには、忍

の一字であつて言うに言われない苦しみを小柄な中に、しまいこまれて、生きぬかれた古風な日本女性でいらしたと思う。「おばさん」「おばさん」と 母親に甘える様に皆から慕われていた。きつとお一人になられた時は涙を流された事もおありだったと思う。大変、御苦勞の多かつた細江夫人の毎日も、細江先生の同胞愛と理想実現への使命感と情熱によつて、支えられたのではと思う。ここに、「おばさん、ありがとうございますございました。」と申し上げたい。

わずかの間、同居させていただき感じた事は、きめ細かな配慮が生活の隅々までいき届いていらした事、例えば、朝市から帰られてもきちんと整理され、野菜の茎に至るまで上手に利用されたり、マッチも毎回すらない様こよりをつるしておかれるとか、ガスが一番安いからと電気釜などは使用されなかった。漬物や加工品もこまめに作って居られた。本当に質素な中に潤いのある生活を見せていただいた。私共の代父母になつていただき、手作りで祝宴もしていただき、ブラジルでの出発は、幸福の中であることができた。後日、長男が生まれた時、ピンク色の湯船を持って、私共の荒屋に采て下さった静子夫人の事が、今でもはつきり思い出される。

去年、私がブラジルに生きて二十五年が、過ぎていた。柿の実が色付く頃、細江先生と御縁の深かつた、カンポス・ド・ジョルドンの援協結核療養所主任をしておられた、坂根源吾氏をお訪ねした。

秋冷の療養所の前には細江先生の胸像が立っていた。坂根氏は病身で居られたが、白衣姿で応接して下さった。彼の愛犬らしい、いかついボクサーが、側を離れず寄りそっていた。

坂根氏は、十三才の時、バストスで先生と会われ、感受性の強い十三才から十九才までを、先生の家で働きながら過ぎたわけである。その間、彼は、看護夫の仕事を覚えた。先生の家族から多くの人生観を学ばれた事と思う。坂根氏は、先生が仕事の後も夜遅くまで勉強されるのをいつも見て過して居られた。ある時など午前二時頃、友人と遊んで帰って来ると、ガラス窓越しに先生が書物に目を通して居られた。彼がおそる、おそるはいって行くと、先生が、「熱いお茶でも飲んで寝なさい。」と言われたのには参ってそれからしばらくは、おとなしくしていたとの思い出を語られた。先生は、大変良く叱った。けれども思いやりのある方であったとのことである。

坂根氏が十九才の時、先生は彼にカンポス・ド・ジョルダンの結核療養所へ任務に赴く様に言われた。彼は「ぼくはそんな所へ行きたくない。」とお断りをした。しかし、先生の、「おまえが行かなくて誰が行く」とのお言葉によって、それからカンポスの人となり、療養所では、レントゲン係と看護主任として出発、それ以来五十数年間、一九九四年に亡くなるまで結核患者と共に歩まれたのであった。

その間には、終戦直後の日系人迫害の時にあった経営

困難、勝負組での対立等による動揺、又資金不足下での療養所維持のための募金運動等々、彼自身、心臓病で三度も手術台に上りながらも仕事への一念が病魔を退けて生き貰かれた感がする。

移民七十年祭に御来伯された、皇太子御夫妻から、日系コロニアの福祉事業に献身された中の一人として、坂根氏は出席された。一九七九年勲六等旭日章を授与されている。

結核療養所と言う所は病気の性質上、入院が長びき、精神的にも経済的にも大変問題の多い所だと思う。こう言う中で彼が頑張り通すことができた陰には、細江先生御夫妻の影響が少なからずあった様に思われる。

坂根氏の長男と次男が、大学入学期になった時、細江医師は、御自宅から通学する便をはかり、経済的援助もされて、長男は医者になり、次男はI.T.A航空大学を卒業後、教授となり、ロンドンに三年の留学をしたと聞いた。

細江医師の誠意と熱意と慈愛が、周囲の者に及ぼす様は、細江先生と言う大木に生い茂る枝の様に思われる。

さて、日本移民が母国を離れ、異国に住み、人間らしい社会生活をするためには、多くの困難があった。日本とブラジルでは遠く、政治的援助や交信も容易ではなく、食生活も風俗、習慣、風土など非常に異っていた。言語の違いは、すべての面で支障をきたし、成人であっても、その能力は発揮できず、生活の知恵も役立たない事も多かった。

多難の移住地に外務省留学生として先生が出発されたのは、大学卒業後四ヶ月目のことで居られた。移民と共に船中行動をされ、この中で芽生えた友情は、その後の長い移住地生活まで続いたのである。

熱帯医学を学ぶことを夢見ての出発であったが、バストス村で働いていた医師が辞任して、二百家族の日系移住者は無医村で途方にくれていた。その村医として実務を果さねばならないはめになったのである。

見知らぬブラジルの地に大学を出たばかりの経験のない医者が、大きな責任を果さねばならないのである。そこに生きる動植物も、生まれて初めて見るものも多く、ブラジル特有の病気もある。それらを敵にまわしての戦いである。私は、産婦人科専門医ですなどと言っては居られない。万の病気とつきあわなければならぬ。医者と言うものは、良くなつては喜ばれども、悪くなれば非難が待っている。この大きな責任を果すために先生は、日夜、学ばなければならなかつた。ブラジルでの医師の資格もとらねばならない。

先生は、日本移民がブラジルに落付き、この国の立派な公民として、国際間で活躍ができる様になるために、一番必要な事はブラジルにおける衣食住を研究して、この国に順応し、病気を防がねばならない。健康こそがすべての発展の基礎であり、病人のいる移住者家族がいかにか生活が困難であるか、すさまじいファイトの持ち主である開拓者でも、いったん病気になると、その希望も計

画も一朝の夢と化するのである。病んではならない。同胞の予防医学が必要である。日本人移住者が奥地やその他の無医村に散在してしまった。この人々を文化と保健地帯の外におくわけにいかないと、力説された。

奥地巡回診療、衛生講話、農業雑誌や新聞への医療案内記事の投稿、相談を受けた手紙の応答と、朝早くから夜おそくまで超人的に頑張られた。そして先生は多忙の中に、薬名辞典、ブラジル農村病一編、二編と性書、一、二編、アマゾン先生の書を世に出された。すべてこれらは、ブラジル語の不自由な移住者への医療案内であり人生案内内であると思う。

先生は、質素な生活をされた。ガタガタ揺れるジープに乗られ自家用車を持たれることはなかった。食生活も質素でいらしたが、非常に好奇心の強い方で、旅先などでは何でも食され、時には下痢をされた事もあったそうである。手相から易にまで興味を持って居らした。

田舎出身者特有の郷土愛は、非常に強く持っていていらしたにもかかわらず、四十五年間のブラジル生活中、ただ一度だけ訪日された。その時、敬愛するお母さんが老いに負けず、待っていてくれた事は、先生の大きなお喜びであったにちがいない。

自称、野人と言われた先生が、あらっぽい言葉使いをされたと言うのは多くの方から聞いた。私はなぜだろうと考えて見た。もしかしたら、周囲の人と親近感を持つ

方法ではなかったか、あるいは男の人の照れであったのかもかもしれない。

ある初産婦が、母乳の分泌が悪いので、先生に質問に行った時、先生は、「マリード（夫）に吸ってもらいなさい。そしたらいくらでも出ます。」と言われ、赤面して帰ったとのことであった。初産でびくびくしていた人への力付けであったのかもしれない。

昔の医者の中には、感染をおそれてか、馬の上から診察をした様な事もあって、これを馬上診と言ったらしい。先生は、移住者と共に歩かれ、共に笑われ、共に怒られ、共に泣かれたお医者さんでいらしたと私は思った。

青年の理想を持たれたまま、ブラジルの移住地の人間の試験場に入られ、身をもつて学ばれたのであった。人間生活の中で食生活と性の問題の重要性を、強調された。

キリストや孔子の反対を説く老子にも心を傾けられ、たまには聖者顔した人に、仮面をとれと挑戦されたりした反面、高僧のおだやかな顔に澄んだ目の宿っているのを羨望されたりしていた。東西の書を求められ、人間とは、如何なるものかを、問い求められた人生であった。

第二次世界大戦中、引揚船で帰国する様に大使館から先生のもとに勧告があったにもかかわらず、私が帰国する時は最後の移住者が引き上げる時だとブラジルに残られた。その先生が好まれたと言う「ガンジー」の本を読んで見た。ガンジーがインド国民を愛した様に、日本人

同胞を思われた、細江先生のお姿が浮んでくる。

かつては、貧しかつた先生のふるさとも、下呂温泉と言う湯治場や観光地となり、変つて豊かになった。その中に郷土の偉人として細江先生の名は生きて居られる。又多くの移住者の心の中にも生き続けられることである。

(主婦)

先生の蒔かれた種は、立派に成長

サンパウロ 松本 淳子

細江先生御夫妻は、私達の大切な仲人です。そして、息子の名付親でもあります。

ウーゴとイナシオという、アフィリヤードが幾人もいるという事は、先生の親心が、コロニアの人は、皆、自分の子供だとのお考えからでしょう。その親心でお世話になった人達は、何千人いることでしょう。

今、私の目に浮ぶ先生御夫妻は、お茶漬けをさらさらかきこむ先生。必ず事前に香ばしく倍じた番茶をついで下さる、小母さんの平凡なお姿です。終戦前に、職のないドイツ人のアジュダ(手助け)の一端にと、ドイツ語を習うから、君も一緒にしよう、今は亡き主人を誘われ、婚約中、半年ばかりの土曜の一時間、お宅に伺いま

した。これはその後で夕飯をよばれる時のお姿です。あの頃はおじいさんも居られて、色々と言話もお聞き出来ました。

お宅の雰囲気は、地味で暖かい小母さんの、丁度我が家に居る様な、らかな気分で、いつも二、三人の青年が一緒でした。先生のお仕事も、御自分の家庭のみでなく、大勢の青年達をお世話された、母の様な方の内助の功のお蔭と思います。

先生はときに子供の様なところも、おありでした。これは私の家に関する二、三の思い出話です。

「自分の家は三軒長屋の一つだから、隣を買いとって、木下君と江村君、一緒に住もう」と言われたり：（三人同じ一九〇〇年の生れ）、父がひきとっておもらいしたアルジャの土地の中を流れる川の名（リオ・ゾー）を「江村君の名だね（良造）」言われたり：、アマゾン巡回診療の旅で、「あんたのお母さんの手料理が楽しみだった」とのお世辞等です。

さて、先生が亡くなられて十八年。直接、間接に創設されて、私共コロニアに残された数々の遺産のうち、日本病院（サンタクルース）は伝田さん達、カラムル隊も花城さん、三宅さん達、（現在私の孫も四人お世話になっています）、日伯移民援護協会の小畑さん等、子飼いの人達の手で、着々と再建又は盛りたてられております。

先生！ 先生が蒔かれた、五、六粒の麦の種は立派に生長して、伯国に、コロニアに役立っています。一代で

終らず、永久に続く事業、こんな喜ばしい事がありましようか？ 私にはお墓の中で満足していただけるお二人のお姿が目に見える様です。 (主婦)

私と細江先生

長谷川 百合雄

私の細江先生とのお付き合いは、一九五五年甥の森口幸雄が、伊太利に留学中、休暇を利用して、こちらに遊びに来させた時に、はじまります。

約二週間の滞在中、一過間は私共の家に過ごし、一週間をサンパウロに過ごしました。その折、森口はホテルの人に細江先生を紹介され、先生のお宅にも招かれ、先生のご息女かおるさんに会い、お互い一目惚れ、そのまま、日本で結婚、今に至って居ります。まことに不思議なご縁と申すしか、言いようがありません。

その後一、二年して留学をおえて婚約のため森口は再度来伯、その折細江先生とかおると森口とで、私共のバラック小屋に來られました。そして、細江先生が「長谷川さんと私とは、ブラジルでの一番の親戚だから宜しく頼みます」と申された事を今もって忘れません。

先生は周知の通りサンパウロの名士、私共は一介の開拓農。でも先生はあの様なお人柄、その後は甘えて、サ

ンパウロに行く度に、健康診断をしていただいたり、泊めていただいたり、一方ならずご夫妻のお世話になりました。今もって有難い事と思つて居ります。

その当時、先生は日本から、沢山のボーイスカウトを呼び寄せて居られましたので、私もその仲間にいれられ、ボーイスカウトの方も私共の家に来られり、私も若かったので、いろいろ話し合ったり、ずい分楽しい思いを致しました。今はボーイスカウトの方々も、社会の中堅として御活躍のことと存じ上げます。

少々私事になりますが、私共生かされて生き、満八十五才になりました。昨年九月にはダイヤモンド婚を祝つて貰いました。今は、二人の息子が、あとをついで、農業に従事して居ります。私共は隠居、孫達と楽しく余生を送つて居ります。

ここ二十年、毎年一回ポルトアレグレに行き森口に健康診断をたのみ、二三日力トリックの篤信家のかおるさんとあうことと、話し合うのを、楽しみにして居ります。

細江先生ご夫妻の靈に感謝をこめて。(農業)

細江医師に感謝

サンパウロ 青池 孝

サンパウロ新聞一九九四年三月二十五日の金曜読者
ルーム欄で、細江静男先生夫妻追悼回想録の記事を見ま
して、私の家族と先生との思い出を少し書かせてもらい
ます。私が先生と初めてお会いしたのは四十余年の昔に
なりますが、早いもので良男が今年四十四歳になります。

皆さんもご同感と思いますが、ブラジルに移住してき
て、家族の家長である人に亡くなられることは、戦争で
親を亡くした子供たちと同じだと思います。叔父夫婦が
養女を連れて、私たち兄弟と家族構成でブラジルに移住
し、五年目に叔父が亡くなり、私たちはそれでも皆様の
助けをかりて、細々ながら生活をしてきました。そして
彼女が十四歳の時に私と一緒にになったのであります。そ
れは叔母と私は血のつながりがなく、彼女は養女で、も
ちろん血のつながりはありません。

そのため、日本から来る時、叔父は私の父に、私を養
子にすると決めて采ました。それで叔母は、どうしても
私と一緒に暮すため、早く叔父の思いがかなうよう、彼
女が十四歳で私が二十四歳の時に、一緒にさせたもので
す。

ところで世の中なかなか思うようにいかないもので、彼
女は十八歳になっても妊娠しそうになく、そのため叔母
が彼女を連れて、細江先生の所に行くようになったので
あります。二、三回通いましたところで、細江先生が言
われますには、今のところ娘さんには問題がありません。
それで一度ご主人をよこして下さいとのことで、私も先

生に診察していただいた結果、君のはほとんどムダ玉のようだと、二回か三回通った後に、先生にそう言われたのであります。

叔父夫婦が願いをこめて養女と早く一緒にさせたことがむだになりそうなので、叔母はまたあわてて細江先生の所に行ったのであります。そして、何か良い助言をされたのかニコニコして帰って参りまして、先生が私に来るよう言われたと申しますので、私は先生にお会いに出かけたのであります。

先生の言われますには「君、いくら若いからといって、ムダ玉ばかりうたず、大事につかいたまえ」と。それから色々助言下さいまして、その日は先生と別れて帰宅しました。先生の叔母への助言は何んであつたか知りませんが、彼女十九の春に、それこそ本当に十九の春、不思議と妊娠したのです。

叔母の驚き悦びは大変なもので、これで叔父に申しわけが立つと言って、細江先生に感謝したものであります。

私が三十歳になった七月、それこそ玉のような男の子が生まれました。清い子になりますよう澄雄と名付けました。村の人は、それは蛙の子だと言って、皆んなが見に来たものでした。

叔母は細江先生に報告に参りました。先生は大変に喜ばれて、「それは良かった、良かった」と言って喜んでくれたそうです。

それから二年おきに次男、三男と生まれまして、家庭が

にぎやかになり、十年おいて四男が生まれました。叔母は大変に悦こび、八十二歳の時に、明るくほがらかな、そして健康な家庭ができ、幸福のうちに孫たちに見取られながら亡くなりました。細江先生のご恩を忘れることのないように、と言って幸せの内に感謝して逝きました。

家内も子育てで苦勞しましたが、子供たちが良く、母親を信頼し尊敬して、とても素直で明るく、素晴らしい子等に育ち、その子供たちに看取られながら、自動車事故により、六十歳の時に、常に細江先生に感謝しながら亡くなりました。

不思議なご縁で、先生に色々とお世話になり、良い子供たちを授かり、ありがとうございます。

(無職)

故細江静男先生とカンポス・ド・ジヨルドン

同仁会結核療養所の思い出

サンパウロ 清水 尚 久

細江先生と私の初対面は一九三〇年末近い或る日、バストス移住地、市街予定地の入植者収容長屋の末端、小学校教室に使用されて居た所の前で、半袖白シャツ、白ズボン、ハンテング帽、首に聴診器を下げた若き日の先生との出会いでした。

当時、二十九才の粹な青年医者、細江静男先生は田舎移住地では、見馴れない姿で、私が挨拶いたしましたら、先生は一言、二言、冗談を浴せて行きすぎられました。「ああ、此の人がバストスの新しいお医者さんだなあ！」と合点致しました。

当時は、幸いに、私も同行してくれた老父も元気で、先生の診察を受ける事もなく過ごしましたが、一度、私達の耕地にも訪問され、暫く、父と歓談して行かれましたが、其の時、先生が慶応医学部御出身と聞き、十八才で、渡伯し一年足らずの私は大変懐しく、親しさを感じました。

慶応義塾と私達の母校「同志社」は共に私立、特に、ラ

グビーでは毎年、定期戦を交え、日本では共に明治年代よりの伝統校で、私の同級生の一人も慶応に入学しましたし、先方から同志社に入学して来る生徒も有り、知人も多く親しみ深い学校でした。其の後も、先生の御姿は見かけましたが、親しく御話を伺う事もなく、先生は伯国医師開業免許取得の為、バストス移住地を引き上げて、サンパウロ市に住まわれ、バストス病院には助手であったイリネウ医師が院長となり、細江先生時代から病院支配人であった石井恒先生に御世話になりました。

一九三七年、父は老年の為、帰国を決意し、呼び寄せた母と共に帰国致しました。当時、私は牧畜業を修業中で、奥田民蔵氏が手広く其の方面で活躍中で彼との牛馬の仕事も、大変忙しく、過労の続く日々でした。そして、「悪い風邪を引いた」と思っていたのが肺結核である事を知り、パトロンの奥田氏に同行して戴いて、聖市、シルヴェーラ・マルチンス街の同仁会、夜間診療所に旧知の細江先生を訪ね、改めて診察を受けました。レントゲン写真も撮って戴き、診察の結果、「君は少し肺を悪くして居るから、カンポス・ド・ジオルドンと言う風景絶美の高原で空気も良く、気温も涼しい所に、同仁会結核療養所ができたので、其所で2カ月間程養生して来る様に。君も知って居るだろう。エンリキも其所で働いて居る。是非そうしなさい。」との事。同行の奥田さんも、「それは、好都合だ。バストスの仕事の方は、私が適当に処理するから心配はいらぬし、二カ月はすぐ過ぎる。全快治

癒に努めなさい。」と勧められ翌朝早々、リオ行き一番列車でピндаモニヤンガバ駅迄行き、其所でカンポス行き高山電車に乗り替え、二時間余りでカンポスの高原町、アベルネシア駅（商業町）に下車、駅前のタクシーで同仁会結核療養所に午後二時半頃つきました。

病院内は、昼寝の安静の時間で静かで、人の気配も無く、受付けに一人、目良さんと言う事務員が居られ、早速入院を申し込み、入院料一ヶ月分と保証金も同額、合計三百ミルレースを支払い三時のレポーズ（安静）終了のベルが鳴り渡ると、支配人、田中秀穂氏が事務所に来られ、細江先生よりの紹介状、レントゲンフィルム等、お渡しし、田中氏よりは、入院患者の心得を言い渡され、同氏の案内で、大部屋（十人用）の隣りの四人用、二号室に入院致しました。この部屋には既に二人の重症患者が居り、二人共に喉頭結核の声の出ない、床に着いたきりの患者で絶えず、喀痰して居ました。

私は自分自身が重い患者で有る事も知らず、この患者達と同室である事を不快で気味悪く思いました。当時、全患者数は満員の半数に足らぬ四十人以下であったと恩います。

其の後、二三日して、昼寝の時間中未だ眠れず、同室の二人の患者を見て居ますと、若い方の患者が静かで咳もせず、喀痰もしない上に身動きもしないのに気付き、其の患者に近寄って見ますと既に息絶えて居ます。驚いて事務所に行き、田中氏にその旨通知したところ、すぐ

車付きベッドを押しして室に来られ、患者の死体を持ち去られた。三時のベルと同時に私の所に来られて、「すみませんでした。初めての事で驚かれたでしょう！。もうあぶないとは思って居たのですが、油断をして御迷惑をかきました。」との挨拶をされました。私も余りに突然の人の死を目前にして、一寸驚きましたが、其の後院内で次々と出る死人、応急手当での場面等を経験するに従い馴れて行きました。

午後三時から、熱の少い患者はオープンエアで日陰のヴェランダに寝椅子を並べ、毛布を敷き、毛布をかけて安静を保ちますが隣りの患者との雑談は主として、自分の病状、養生の経過、手術について、又患者達の死因に付いて等、皆病気の話でした。

此の患者達の経験談によりますと大部分の患者が三、五年の療養経験者が多く、同仁会療養所開院（一九三七年始め）前は、個人経営病人下宿、他の伯人経営のサナトリウム、療友会等から入院して来た人々で、サナトリウム以外の人々は、デスペンサーリオ（政府無料診療所で小手術も無料）に通い比較的自由我が儘な養生生活を送って居た人々で、一方色々な患者と知り合い、お互いの教育で、自分なりに自分の病状を良く知って居り、「誰々の病気は、片肺に空洞があり気胸療法を始めたが、肋膜に癒着がありジャコベウの手術の必要が有る。」とか、「あの患者の病状は絶望的だ。大咯血で終るだろう。」等、又整形手術で肋膜を数本除けて、肺の空洞患部を圧

する手術の話（コステーラと通常呼んでいる手術）等、初入院患者には、シヨツキングな話題を平気で話し合っていました。

私のレントゲンフィルムも既に見て居て、「君の両肺に大きな空洞があり、今の所安静以外にほどこす術は無い。長期養生を要するだろう」との事。

しかし、月日の経つに従い、其の眞実を知り、患者間で教育しあい結核が如何に長期養生を要するか、又全快と言われるケースの少い事を知らされた。病状停止に成れば、カンポスの様な好条件の地で永住養生も一法であり、又外科手術により全快の例も有る事、入院中に学ぶ所多く、患者達各々、自分の将采を計画して快復の日を待つ気持ちに成ります。

此所で私の入院当時の有様に付いては、一応筆を置き、此の療養所建設前後の事情、又細江先生が如何に、此の問題に対し熱意を持ち、建設に努力されたか。私の知る事実を述べ、其の後の療養所の経過を申し上げます。

当時の奥地移住者達は、慣れない気候、過労、栄養不良等の悪条件の垂なりで、農家、特に新移住者家族内に結核患者が多く、伝染病の隔離も出采ず、家族内伝染で一家全滅と言う例も少なからず、又私の様に聖市同仁会夜間診療所を訪ねる患者も数多く一時は、同仁会で市郊外、カンタレーラ区に普通の住宅を借り、此所に隔離養生をさせて居た事も有ったとの事ですが、周園の住民が其れを知り問題化して、其れも解散させられ、「此の問題

は放任できない、同仁会経営の結核療養所を建設する必要がある」と、同仁会理事会で考える様に成り、モジ・ダス・クルーゼス近郊に其の目的の敷地も買った様です。

当時、細江先生は伯国医師開業免許取得の目的でサンパウロ大学医学部に入学、一医学生として勉学され、一方日本外務省派道医の義務として、同仁会夜間診療所で「衛生技師」の職名で伯人外科医、ジヨゼー・マリア・フレイタス氏（モンテネグロ教授推薦）及びペードロ・アレト内科医人セレスチーノ教授推薦）と協力、御自分でも奥地を含む一般邦人の診療、治療にあたられていました。

ある時、中村神父に同仁会で、結核療養所建設問題の急務で有る事を話された時、同神父が結核療養所なれば中央線ピンダモニャンガバ駅から高山電車に乗り替えて約二時間登ると、海拔一千七百米の高原、カンポス・ド・ジオルドンと言う町があり、此所には療養所も多く、又高原で夏も涼しく、空気も澄み、別荘地帯としても有名な、丁度スイスの様な所で、日本人で、永住の林田久七氏と言う人が責任者で、「療友会」と呼ぶ結核患者の自治団体もあり、私もそこを訪ね、患者達にも会って来た。是非視察に行つて見なさい、と勧められ、総領事館に出張許可を願ひ、カンポス・ド・ジオルドンを訪ねられました。

さて、先生は此の地が結核療養所建設に最適で有る事を知られ、各サナトリオ訪問をされ、林田さんの紹介で

当地の有力者の方にも会われました。一方療友会の衛生不備、病人の我ままな日々等知られ、「同仁会は此の地に正式の結核療養所を建てるべきだ」との結論を得られ、とりあえず、前例により先ず、隔離を目的とする為、早速、療友会の向い側の二軒の家を借り、夜間診療所で発見された結核患者を送り込み、一時は林田さんに管理・指導を委任、近くのデスペンサリオ（政府の無料診療所）を利用、又、先生は毎週一度訪問され監督・指導にあたられたとの事でした。

其の上、領事館関係者や同仁会有力理事達を誘い、其の臨時收容所を見学し、之では病人の養生にはならないと言う一同の認識を探め、カンポス同仁会結核療養所の建設計画促進の気運を盛り上げる様に努力されたのでした。

一方、先生はカンポス訪問毎に各サナトリオを視察され、殆どすべての此の地のサナトリオの敷地は当時ブラジル国外務大臣、マセード・ソアレス氏の寄付されたものである事を知られ、同氏のカンポスの所有地の管理を任されているアンドリユー氏と言う露系伯人の土木技師を知られ、彼に面会し、同仁会の結核療養所建設の急務、そして同仁会の窮状をうったえ、協力を求められたところ、同氏も先生の意を了解され、マセード・ソアレス氏に寄付の承諾を得る迄、取り運んでくれ、愈々、其の確定事実を同仁会理事会に発表し（先生の独断との批判も

あつた様でしたが)、無事、其の土地の寄付を受ける用意が出来、総領事始め、主だった関係者で、其の敷地予定地を視察し、パラナ松林、美しいスロープ、清らかな湧き水を視て、一同、大賛成で決定した訳でした。然し、愈々、建築の段となつた時、余りに突然の決定で、充分な予算がなく、一方、マセード・ソアレス氏の方からは、寄付してから一年間で病院を建てることという条件が付いたので、領事館から、一応、七十五コントスの補助金が出る事になったが、そんな金額では必要な建物は出采ない(鈴木威氏談)、ではどうするか、地主の方からの条件もあること、ぐずぐず出采ないとの相談の結果、会計領事の兎に角、建て始めよ、後は何とかなるとの決断で建築は始まつたのであつたが、外部の壁の煉瓦を積んだところで、資金はなくなり、建てかけて、ほつては置けないと追加予算で再度、七十五コントスを総領事館から補助金としてもらい、無理に、無理を垂ねて、一九三六年中に落成し、翌年、一九三七年二月、開院の運びとなつたものの、前述の如く、病院の建物としては、不備な所が多く、先生は地方衛生局の了解の取り付け、又、名門出のガヴィオン・ゴンザガ市長の協力を得ること、初代院長に、地方で、最も有力な医師、クローヴィス・コレア氏に就任の承諾を取り付ける等、大変な御骨折りでした。

若き時代の先生の活躍振りが想像されます。

開院後も、衛生局からの度々の注意、又市会内の苦言

等も、当時の市長の大変な好意によって助力いただき解決したとの事でした。

又、前計画のモジ・ダス・クルーゼス市への建設計画を覆えし、遠地のカンポス・ド・ジヨルドン市に変更した事にも一悶着あった様でしたが、之が正しい、と決断されて、其の目的に突進された先生は美事でした。

さて、カンポス同仁会療養所は前述しました様な事情で、始めから資金的にも、人事も不備の儲で発足致しました。

私は開院の年、一九三七年八月、入院番号、六十九番で入院しましたが、其の当時の療養所の人事について述べて置きましょう。

支配人兼看護長 田中秀穂氏

此の方は軍隊時代からの看護士の経験者でアマゾンの植民地でも医者代理を勤められた経験者で、当時としては人物も立派で、当療養所では得難い適任者であった。当所退職後はパラグアイ拓殖の植民地に行かれ、医師の免許を取得され、一方、牧場主と成られたと聞きました。

事務員 目良氏

四十才台のインテリ型の人で、入院受付、其の他の事務を担当していた。私の入院後、数カ月で退職され、其の後任には平田三吉氏が就任した。彼の夫人は既に当所の入院患者でした。

看護士 坂根源吾氏

伯名「エンリキ」を名乗り、少年時代、バストス移住地で細江先生の保護を受け、出聖後はサンタ・カーザで看護師を修得した。当所では、田中看護長の下で病人看護、ラボラトリオの仕事をした。

外部の仕事 板村氏

以前、療友会で養生、快復後は同所の患者達の世話、買物係り等を担当した。当所では、外部の仕事（警察への届け、郵便物の発送・受取り、一般買物等）を行い、退職後、後任として高橋金策氏が来た。

事務助手 近藤氏

未だ、患者であった。入院せず、院敷地内に自分で小さい住宅を建て養生していた。

賄い方主任 味野芳江氏

入院患者及び職員の仕事の責任者であった。

賄い方助手 大森夫人

味野氏の助手、慶応義塾大学医学部教授、大森博士の弟さんの夫人で、御主人死亡後、夫人は退職された。御主人が入院中であった。

看護師助手 高橋とら氏（一九三八年）

高橋金策氏の夫人、アマゾンで看護婦を実修した。

雑役夫・雑役婦 数人

以上

私は入院当初、二カ月間は気候の寒い事と身体の疲れで、毎日、食事、診察、注射等の時間以外は、床中に横たわり安静を続けましたが、段々、微熱状態となり、喀

痰の量も減り、気分も良くなり、体重も増え、疲れ切っていた肉体もやや回復して、時間があると床中で眠り続けました。

入院後、二カ月の院長の診察で驚く程、空洞が小さくなり、院長自身、此のフィルムは此の患者の物ではないと言われたとの由で、私に貴君はどんな養生をしたのかと聞かれ、注射はカルシウムの血管注射とビタミン剤の注射をして、後は一日中、床中で眠り続けておきますと答えますと、今後も、今迄通りの養生を続けなさいと、大変、嬉しい結果の診察でした。

体力もつき、熱も下り、気分も良い日々でしたので、ぼつぼつ、ヴェランダの寝椅子の仲間入りを始めた頃でした。

養生期間の長い先輩患者達は自分の長い療養生活の効果も、余り現われず、自棄気味も有ったのでしよう、何かと不平が多く其の気持ちをサナトリオ経営者達に持つて行く人々が有り、職員の状態が不親切であるとの不平を田中支配人に持ち込んでいた様であった。夫は段々、問題化し始めた。

田中支配人は開院間も無くの事で、人事には充分な経験がなかったところへ、病人の方からは不平を持ち込まれた訳で、おとなしい人でしたので、私達、新入患者達は事情が解つて来るに従い、田中さんに同情的でした。

田中さんはついに辞職の意を表わされ、我々、田中さ

んの辞職後の不安から同意見の者達で田中さんに留任される様に御願いに上り、思いとどまって戴き、其の問題の主謀者が退所して行き、事無きを得たこともありました。

一九三八年に入り、当療養所も其の存在を細江先生の絶えない努力によって、又良き理解者の人々の御陰で、段々世間に知られる様になり、インテリの患者も次々と入院して来る様になった。

日本新聞社の支配人、菊池禰四郎氏（上野音楽学校、ヴァイオリン科卒）、リオ市より、大使館員、岩富博氏（書記生）、又、同市より、伯系造船所在の日本人技師（名前は忘却）、チエテ植民地からも学校教員、高橋由友氏（サツポロ農大実科卒）等、院内も賑やかになり、色々な面で、明るく感じる様になり、細江先生も療養所にチャンスある毎に有名人を連れて来られました。

私の記憶にある有名人の訪問は、先ず、マセード・ソアレス氏が突然秘書一人をお供にして来所され、田中支配人の案内で所内を見られました。多分此の訪問は、自分の寄付された土地に建った病院の、内容確認の為に恩われました。

其の他、日本病院の院長就任の目的で渡伯された鎌田博士（慶応医大三回卒）を、細江先生がお供して来所され、先生御自身の案内で所内を視て行かれました。其の他、正月には、宮坂国人氏、伊久保治氏、青木拓務官等、当時のスナップ写真や記念写真に残って居ます。

此の頃、聖市総領事館勤務の拓務官、南定（さだむ）氏が入院患者として来られました。此の方には、私の室が近かったからか、大変親しくして戴き、氏の病いも幸い快方に向い、帰日されましたが、其の時、「大変お世話になった。帰国したら何かお送りしたいが、希望の物は無いか。」との事。我々菊地氏の指導で音楽を楽しんで居り、楽譜の不足で困って居た所で、楽譜をお願いして、沢山送って戴いた記憶が有ります。

一九三八年末頃でしたか、パラグアイ殖民地の会計主任、細江一雄氏が入院して来られ、この方が当時パラ拓で日本人医師の退職後、適任者がいないとの話しをされた。当所田中支配人は、前々から療養所を退職希望があり、細江一雄氏の推薦で、突然翌年（三十九年半ば）療養所を退職され、パラグアイに行かれました。あちらでは、大変喜ばれ、すぐ医者免許をとられたとの事を平出学治氏から聞きました。

其の後当所は支配人不在の時代で、年長者の板村氏が支配人代理を勤められました。この間、細江先生は度々不意に来所される姿を見受けました。この期間は、細江先生の最も心配された時期であったと思います。

少し前後しますが、田中氏が職中、平田、高橋夫妻等が療養所の職務に就かれ、又院長クローヴィス博士もカンプスの全職務を退かれ、院長は同博士の助手を永く勤められ、既に当地では名医として知られて居た、ギレルメ・ジュルーツ医に変わりました。

後日伺った事ですが、療養所は前述の通り日系社会の情勢から急を要し建設されたので、不備の多いまま開院した様な有様であった。その上、一般日系社会、特に農家の経済的に苦しかった時で、入院料も伯系サナトリオの半額、しかも支払いの遅れで療養所経営は、赤字が続き、事情の良く解っている領事館は、其の月々の不足金額を補助して居たとの事で、療養所の会計報告も出采て居なかつた有様だったそうです。

此処で私個人の病状の経過と、共に歩んだ療養所の経過を述べます。

一九三八年頃、クロヴィス院長から、私の病状の見通しに付き、古谷重綱氏宛、「此の青年は、死期は明言できないが、社全復帰は不可能だろう。」との報告があつたと、後日古谷翁から聞かされた私が、今日（一九九五年）八十三才の老期を迎え、細江先生の書き残された、思い出の記「あのころ」を読みつつあります。「あのころ」の七頁末尾に、「しかし前述した様に、此のサナトリオは、とりあえず、兎に角建てようと大急ぎで建てた物で、よくも二十年余りも持ったと思われる。世間で騒いでいる様に、いずれ近々改築されねばならないであろう。其の時は単なる建築のみでなく、此のサナトリオを建てた時の理想を今一度思い出してもらいたい。

一、弱い貧しい患者を主として預かる。

二、フオロー・アツプ・システムで治るか？死ぬか？最後迄面倒を見る。

三、快復期の患者に、社会復帰のための職業教育をする事。此の小さいサナトリオでも病気を治療するだけでなく、患者の社会復帰迄考えた物にしたい。あわてることはないから、本格的なものが生まれる様骨折ってもらいたい」。以上、前述の所を読み、あの苦しい経営の中でも可能な事は理想に添い続けられた先生を再認しました。其の療養所の一例である生き残りの一人の私の口から、私自身の歩んだ過去の事実を述、へ、細江先生の御恩に感謝の意を表わすと同時に、如何に先生が正しいと認められた理想に従い、実行されたかの一例として、御一読願う次第です。

前述致しました様に、私は二カ月間養生の予定で入院致しまして、其の後先生のお勧めの二カ月間と言われたのは、病人の私に精神的動揺を与えないための言葉であり、私は入院後自分の病状の事実を知りました。その後二カ月の近づく頃、田中支配人をたずね、私の個人的事情のため、退院してバストスに帰りたい意を申し上げます所、田中氏は驚いた表情で、「今、貴君がバストスに帰る事は、生命を捨てると言う事に等しい。再度入院されても取り返しはつかない。」即ち、「今、帰ることは死ぬことだ。」に同じ意を言葉を変えて、御忠告下さったわけです。私も「必ず死ぬ」との意味を解し、その時、ドキリとしました。では一晩考えさせて下さい、とお願いして室に帰り、良く良く考えて見ましたが其の時の私の事情では、他に方法は無く思い、覚悟をして翌日事務所

に氏を訪ね、「色々考えましたが、他に方法は有りませんので退院する事に決心しましたが、帰宅後すぐ死んでは困ります。何とかバストスでも長生きできる方法を教えて下さい」とお願いしました所、田中支配人は、私の決意の固い事を感じられてか、静かに、「貴君は、世界一の怠け者になりなさい。例えば、枕元の物を右側から左側に置きかえたくとも、それを行わない様」、との事、私なりにこれは絶対安静と言う事だなと受取り、帰ってから大きな沼のほとりに、（この沼は一アルケール以上の広さ）サツペ小屋を建てさせて、涼風を受けながら、友人に私の代りをやって貰って居る排水工事を見ながら養生を続けよう。生命がどれ丈持つかは不明だが、一応自分の目的は全うしよう、と計画も考えつつ、以後は夜も良く眠り、心落付いて退院の日を待ちました。所が思っても見なかった事が起りました。

退院予定日の二日前、私のパトロンである奥田民蔵氏が突然見舞に来られたのですが、私はもう決心もつき帰る心算で、「後二日で帰ります」と申しますと、奥田さんは、「元気そうになったね！それは丁度良い。私も二日泊めて貰って、一緒に帰りましょう。先ず田中さんにお会いして、お礼を言つて」と事務所に行かれ、支配人から、私の病勢を聞かれ、「清水さん、今貴君は退院してはいけない。仕事は、私が適当に処理するから心配無用、今、退院しないで居なさい」との言葉を残して帰られました。

其の後又、二一カ月は過ぎ、私も一日一日と気分壮快、目方も増え順調に養生して居るある日、聖市より友人からの電話連絡があり、私の弟の身の上の事で、無理でも聖市まで来てくれとの事、びつくりして大急ぎで出聖しました。

弟を入院させねばならぬ状態で、私の友人三人が来てくれて居り、奥田さんも来て戴いて居ましたが、友人達にはどうにもならぬ有様で最後の手段として、私を呼んだわけでした。私も金は無く、頼む人も有るわけは無く、当時、故郷の先輩であり、学校も同じで、父母とも親しかった、古谷重綱氏が、総領事の依頼で、サンパウロ法科大学で、「日本文化」の講義（日伯民間外交として）をして居られる事を思い出し、日本人会館で南京陥落の祝賀会の会場に面会に行き、すぐ古谷氏宅に同行し、未だ重病の身で昼食を共に戴き、ゆっくり私たちの現状を申し述べました所、「それでは、今夜、夜間診療所に細江氏を訪ねて、専門家の意見を聞いて、見よう」との事で、改めて夜、シルヴェーラ・マルチンス街の夜間診療所にお供して、先生に面会、色々説明を承り、古谷氏は、私に、「私は今迄貴君の不幸を知らなかった。弟さんの入院は、私が引受けるから、貴君は自分の養生に専心しなさい」と言われ、又お別れする時、「今度はお金も使つて不自由だろうから」と私にも当時の三カ月分の入院料のお金を戴きました。

私は帰所後、四十度を越す高熱もでしたが、問題解

決後の事で熱も気にならぬまま、下熱平常に帰りました。この時、私の不在中に大部屋に移室、これは友人保木君が取はからってくれて居ました。

大部屋は十人収容の室で全員病状の落付いた、散歩も許された人達のみで、病室は明るいものでした。

既に五十七年も前の事で明確な年月日の記憶はありませんが、一九三八年、細江先生が日本病院初代事務長原口七郎氏と共に訪所され、平田事務員を通じて事務所に来る様にとの事で、事務所内に入りますと、細江先生と原口事務長のみでした。先ず、細江先生から事務長に私を紹介戴き、私の家庭の事情、病状等説明され、私も事務長に御挨拶申しまして、二、三質問を受け、「貴君は、今後何も心配せず、療養全快に努めなさい」と有難いお励ましの言妻を戴きましたが、此の時が、正式に施療（無料）にして戴いた時であろうと今も思っています。其れ迄の入院料は、入院一カ月迄は私自身が支払いましたし、パトロンの奥田氏の訪問を受け、彼の取計らいで養生を続けましたので、その後の数カ月は、奥田氏より直接に送金が有ったものと思えますが、既に私と弟の二人が病気を御迷惑をかけて居ましたので、一九三八年に入り数カ月後に施療にして戴いた事と思えます。

其の後、弟の病状、その他は聖市在の友人が、定期的に私に報告してくれて居ましたが、快方に向い古谷さんも彼を帰日させ、父母のもとにやるのが良いとお考えで、山下汽船（古谷さんは当時同会社のブラジルの代理

人) の船長に相談し、私達の友人一人を付添いとして帰国の運びと成って居ましたが、其れも医者への許可なく、一九三九年に亡くなりました。其の弟帰国中止の報を聞き、安心しきっていた所でしたので、多少、心の動揺もあり突然に、私は、初めての喀血をして、以後は体温の上下が多くなり、毎日安静に努めましたが、体温は落付かず、日に日に体も衰弱が進み、数ヶ月の努力にもかかわらず悪化は進みました。当時の療友達の友情は今も忘れません。毎日毎日弱って行く私を心配して、慰め、励ましてくれました。其の時の私の心境は少し諦め気味で、「もう今度は快復には向かわないかもしれない。このまま死に向かうのなれば、くよくよしても仕方がない。余生を意義ある生活で送ろう」と体温測定を止め、思うがままに、音楽の楽譜も写し、読書も気が向けばする、疲れれば眠ると言う日々を送りました。喀血から一年後、シユルツ医師の診察で良い方向に向って居ると知らされ、新たな希望を持ち、以後は順調な快復の道を歩みました。これは諦めによる心の安静を得たこと(自棄でなく)が、この結果と成ったので、決して立派な行為でもなく、勧められる生き方では有りません。

当時であったと思います。八木八郎先生(慶応卒・日本病院外科部長)の訪問があり、患者一同がヴェランダで先生を囲んで質問会を行った事がありました。遠慮のない患者達の質問に、何時も笑顔で答えられ、一同に大変喜ばれました。その時、一例として、「清水君は快復し

でもバストスには帰れない。今の時間の充分ある時に、社会復帰の計画を立て、その職業勉強をして置くと言い」と言われました。私は、其の時まではバストスの以前の馬乗での仕事は不可能でも、其の仕事にかかわる仕事以外に生活はないと、心に決して居たのですが、八木先生の此の御言葉で其れ以外の人生道をも考える様になりました。

その後私は健康も回復に向かい、軽い院内の労働を始め、今迄は一般患者と同室であったのですが、仕事を始めた時、レントゲン室の前の別室を、使用させて戴く事に成り、当時、私一人で毎朝の一、二時間の労働を終え、自室の掃除もして、体の温まった状態で床に下半身を延べ、上半身は起こして楽しい読書の時間を持つことができました。その当時の思い出として、突然に、バストス時代の旧友井上新一氏（バストスの農業指導者で一時帰日、再渡伯にて拓務省の役人として一般農業指導）のお見舞い訪問を受け、久々の面会で夜の九時迄私の部屋で旧談にふけりました。彼は後日に日米戦争で戦死しました。

又、古谷雅之氏（当時十七、八才）が御父母代理との事で見舞い戴き、二泊して行かれました。

其の後間もなく、井上龍馬氏（当時USP医学部卒業前の学生）が入院され、養生しつつ、卒業の用意の勉強をして居られ、此の人は、立派な学者はだの人で、余暇にはシユルツ院長につき結核患者の診察もされ、又特に

私には結核に関する知識を与えてくれました。スイス高原療養所のブラジル語訳の本を貸して戴き、読ませてもらいました。此の頃の少し前に、昔パラグアイ殖民地で会計主任をしておられて、入療中だった細江一雄氏が亡くなられた。一九四〇年と記憶している。

聖市在住でUSP医大生の氏原正明君も、卒業前に一カ月間、療養所内に泊り色々実地を学んで行き、その間、毎日散歩したり、雑談したりで、彼の人物を知り得、又交友を深めました事は、その後の私の人生に良き友人として、有難い事でした。

私は、既に述べました様に、安心して養生を続けられ、又必要な日用品は年末のクリスマス前に毎年、古谷重綱氏の御厚意で送って戴き、幸福な療養生活を送って居ました。

一九四〇年の中頃のある日、バストスで旧知の石井恒齒科医が、読書中の私の室にお顔を見せられて驚きました。「どんな御用で？」とおたずねしますと、「当所のフオゴンの薪が不経済で困って居るから改良してくれ」と細江先生からの依頼で其れを見に来たとの事。先生は、渡伯以前は東京歯科医専官立の卒業後、母校の教職の勉強を続けて居られた立派な歯科医であり、事もあるうにフオゴン（かまど）の改良とは？と不信に思いましたが、先生はバストス時代も、移民の栄養や生活の改善の問題で、良く我々バストス青年達を教導されて居ましたので、これも先生の生活改善かと了解しました。久々の再会で旧

談から、私の発病当時の事等お話ししましたが、その時、私の部屋の本棚の横光利一全集（此れは、良友遠藤保三さんから戴いた本で特に私が同所内で読書を始めた動機が横光作品「春園」であった事から、私が望んで戴いた本でした）に目を止められ、「貴君は横光のどんな所が気に入ったのか。」との御質問を受けました。

私は元来読書をしない男でしたが、療友の数人から勧められて、「春園」と言う本を一読し、私の当時の環境も有ったと思いますが、大変興味を持つ様になり、横光全集を全読いたしました。横光の作品のどこに引かれたともわからず、其のままを申し上げますと、「それでは私に読ませてくれ」との事で、仕事の暇に読まれ、「貴君の横光作品に引かれた理由は、彼の作品には一本「正義」と言う物が、通って居る。それだろう」との事。成る程そんなものかと思うのみでした。その時、「読書は、むやみに乱読してはいけない。大切な時間の浪費になる」と教えられ、「それではどんな本を読むべきか、御教示下さい」と申しますと、「それは、貴君自身で選ぶべきだ」との事。「私自身に其の知識がありません」とお答えしますと、少し考えて居られ、「では、次の便で良い手ほどきの本を一冊持って居るのでお貸ししよう」と其の本を貸して戴きました。大変古い本で、「現代文学の思潮」栗原白秋著と言う明治末期から大正初め発行の本でした。其の時の私には大変有難い読書指導の本で、三回繰返して読ませて戴きました。以後、私なりに読書の方向を定め

読み進みました。日本の叔父の若い時の古本を送って貰って、熱心に勉強しました。ブラジルに移住して、健康で働き続けて居たら、私はこんな道も知らず通した事と思いません。無駄話して本道はずれました。

さて、毎夜の楽しい石井先生との雑談も、先生のフオゴンの仕事が終わると同時に終り、帰聖されることになりました。其の時、「実は、私は、友人長谷川武氏を通して、細江先生の希望で此のサナトリオの支配人と言う職を勧められていたが、バストス病院支配人経験からだけでは、此所の事情も良く分らず、決断仕かねて居たが、このフオゴン改良と言う名目で約一カ月、当所の雰囲気、職員達の有様等観察できて参考になった。未だ決断は良く考えるが、もしかしたら、再会する様に成るかも知れない」と言い残して下山されました。

其の後、二カ月位で正式な当所の支配人として采られたと記憶しています。石井新支配人は、先ず、院内で患者個人に接しられ、各々の病状、性格等を調べられ、その上で身の上話を聞かれ、家族の事にも耳を傾けられ、「今度の支配人は少し今迄とは違っている」と、皆の患者は言い、段々皆から親しまれ、特に若い患者からは慕われ、年長者からは相談相手になられ、病室は以前と変り明るく成って采ました。一方、職員の方も良く働き、協力をおしまない様になりました。先生御自身、忙しい時は、患者に注射をするのを手伝ったり、専門の知識をもつて注意されました。

其の後、私の友人の保木君は、入院患者でありましたが、職員として採用されました。彼は病人の時から、クリスチャン・グループの指導者的存在であり、温厚な人物で、患者達からも、「安さん」の愛称で呼ばれていました。四国の農学校卒業生で庭造りにも役立ち、大変良い人でした。彼と私は同郷で、入院以来大変お世話に成った友人でした。

確か、高橋金策夫妻は、子供の教育、生活環境の不適當（幼子の結核患者と近い生活）等の理由で退職され、其の仕事も引受けて居ましたが、アベルネシア町への用件も時には私もお手伝いして居ました。坂根看護士の助手としては、伯国免許所有のエンフエルメイロ・ベネディト君が入りました。

こうして居る時、私の健康もかなりの労働に耐えると思われたのか、私に田舎の患者家族で入院料不払いに成って居る所を回り、清算、整理する仕事を命じられました。

これは、本文の初めにも述べた様に、農家の経済状態の悪い中での発病で苦しみ、入院料未払いの人が多く、其の度に領事館から補助金の形でお金を貰い、それで赤字を埋めて来たのがたまっていました。領事館の方では国際情勢悪化の時、何時、領事館引上げに成るかの不安もあり、一応、今迄の補助金の会計報告をまとめて出す様、其の上でまとまった資金を療養所の方に補助金として渡そうとの意向があったとの事でした。幸い私は、

開所当時から入所して居まして、入院患者の殆んどを知って居たので、都合が良いとの事情もあつた様です。

先ず、パウルー市近郊から始め、マリリア周辺、バス
トスに回り、ランシヤリアに出て、プ・ヴェンセスラウ
迄回りました。丁度綿の収穫期で、町の商人から田舎の
生産者の所へ、集荷に行くトラックに便乗させてもらい、
車を下りてからは、畑の人々に、求めている家族の住い
を聞いて、場合によると暑い田舎の砂遺をトボトボニキ
ロ以上も歩いた所もありました。支払い能力のある人か
らは現金で戴き、不可能な所では借用証書を作り、其の
地方の南銀（当時のブラ拓銀行）に取り立てをして来る
仕事でした。相手が患者さんの家ですから私は誰からも
笑顔で迎えられる、泊めても戴きました。其の間、パウルー
の旅館で旧友の井上新一さんに会い、彼のバストスの留
守宅訪問を約束し、夫人と二人の子供さんに会いました。
パウルーでは、私が四年目に、元気相な顔を見せたと聞
き、私の以前住んでいた区の十家族余りの人々から歓迎
の夕食を招待されて、感激をしました。又、家族の肺結
核患者を隠して居る人々を説得して、カンポスのサナト
リオへ入院させる仕事等、予定以外の有意義な仕事も有
りました。私が、現に重症患者で有った者ですから、其
の説得も有効でした。此の仕事が無事終了し、帰所しま
した。

そこに待っていたのは、日本病院出張をして、レント

ゲン技術修得を命じられ、日本病院の武田副院長の室に出頭しまして、八木勝郎博士の御案内で主だった部署に案内されました。その後、レントゲン技師の山根英治氏に紹介して戴きました。山根氏は日本で慶応病院の技師、その上、外務省がブラジル日本病院及び療養所に、島津製作所製のレントゲン二台―診察用、一台は探部治療用の機械を送りましたので、特に山根氏は島津製作所で機械の実習を受けて来られた人でしたから、其の下で、教えを受けました事は、その後の私の職業のためにも大変に役立ちました。高圧発生の理論、其の取り扱い方、高圧測定法等、他の病院のX線技術者では扱えない物も知る事ができました。

レントゲン技術を修得してカンポスに帰り、私もタウバテ労働局に職員として、登録して戴き、以後は、レントゲン装置の責任者、医者来院時の診察助手等を命じられ、聖市よりレントゲン学と言う立派な英文の本を送って戴き張り切って学びました。以来、三年余り、レントゲン装置を一人で扱い、退所する迄、無事に責務を果せました事は、山根技師の良き御指導の賜物でした。

石井支配人の就任から、日米開戦数カ月後、ブラジルが日本に宣戦布告をする迄の療養所は、患者も八十人を越し、日本病院と療養所間の連絡も良く、患者一同も一番落付いた療養生活を送った時で、細江先生も以前から気心の知れた石井支配人に、任せられて、一安心された、小期で有ったと思います。

此のサナトリオの平安も長くは続きませんでした。日米間の国交悪化は、遂に両国間開戦迄発展（一九四一年、十二月）、其の当時は、伯国は中立を保って居ましたが、ドイツ潜水艦のブラジル商船攻撃沈没事件を期に、伯国も、アリアード側に参加して、日本に宣戦布告、日本人も敵国民と扱われる様になり、聖市の日本病院も、サンタ・クルース慈善病院となつて、連邦政府より、病院内事情の詳しい、ジョゼー・マリア・フレイタス医を、監督官として任命し、以後は人事、経営共に変わりました。

カンポス療養所も、日本病院との連絡のために出聖中の石井支配人も、そのまま帰所されず、一九四二年始めの一夕、突然にカンポス警察署長、エンゾ・トリポリ氏が来所して、全職員を呼び集めて、「今日より、当サナトリオは、同仁会療養所ではない。名もサナトリオ・サンフランシスコ・シャヴィエルと改名し、支配人は、ネルソン・ボージェス氏と成つた。ネルソン氏を私の代理人と心得、以後彼の命に従う様、又今後は院内で日本語使用を禁ず、又所敷地の外に出る時は、ネルソン氏の許可を求めよ、電話使用も同様」と命じ、「鍵を全部支配人に渡せ」との事。一応職員心得を述べた後帰りました。此の時、患者は八十人位でほぼ満員の状態で、前述の通り入院料支払いの遅れている人も多く、患者間では不安の気分が、広まりました。其の後の出来事は、チャンスある毎に、先方の事情不明のままに、日本病院の細江先生迄報告しましたが、これは、事情不明であつたとは言え、

御迷惑をおかけした事でしよう。

此の事件の発展は、私達遠地の職員には知るすべもなく、私達の知らぬ間に細江先生は日本病院を出られ、未だ無免許のまま、カンタレーラ街四一番に責任医伯人、フエラリー氏の名前で、コンスルトリオ・メディコ・同仁会を開かれ、細江先生、ドートル・フエラリー、武田先生（半日、午後は日本病院勤務）、八木先生も交換船で帰国される迄は参加等、其の内容は始めから個人経営でしたが、我々は戦前の同仁会の意志を継ぐ者の意と戦前、同仁会の医者達がブラジル全土の日系人によく知れ渡っていたので、此の名称を形容詞として使用したとの事でした。

私はカンポス療養所内では、レントゲン装置管理、診察日の医師の診察助手（レントゲン透視）等が主とした職務でしたが、当時の事情でエンフェルメーロの手助け（注射、喀痰試験、其の他の看護）、町に出て警察の届等、何でも屋で人手不足を皆で協力、カヴァーし合っておりましたが、新伯人支配人となって一時自分の職務以外は手を出すなど言われ、大変手持ち無沙汰の時期もありましたがレントゲン室で静かに勉強出来たことは私には幸いです。

当時、院長はシュルツ氏（戦前と変わらず、其の態度は立派でした）、助手医はオゾーリオ・ピント氏、そしてカマリニヤ医師と交代の時代もありましたが、どの医師も日本人入院患者に親切な方々ばかりで幸いでした。

戦時中、入院患者の病勢末だ悪いままで、聖市病院に運ぶ仕事をネルソン氏より私に命じられ、其の時、最初の時は八木勝郎先生の交換船での帰国の前で、サナトリオ内の事情を直接に聞いておきたい、との事で、一夜、先生の住宅へ石井先生のお供をして伺い、夕食を戴きながら報告しました。又、もう一度は、夜の大雨の中を石井先生の御案内で、スペイン総領事館内、日本人權益部勤務の安藤潔（全八氏）氏宅を訪問し、聞かれるままに療養所内の邦人患者と伯人職員間の事、カンポスの警察との問題等をお話ししました。

当時、細江先生は、伯国への帰化のための兵役（チロ・デ・ゲーラ）で軍医として夜間勤務中でした。

療養所経宮も、日系人が敵国人と扱われる様に成ったため、増々経済的に苦しくなり、入院患者も減じて経営難から、職員減らしも有り、又、以前の様に何でも屋の形となり、町から、荷馬車（カロツサ）で荷物運びとか、雨降りには、療養所への道が悪かったために、シャレットで院長を迎えに行きました。此の仕事は、我々のみでなく、ネルソン支配人自身も行かれました。

一九四四年、七月、突然聖市の細江先生から私に、「療養所を辞し、聖市の診療所で働く様に」、との連絡を戴き、七月三十一日に所を辞して出聖しました。

其の当時の所内は既に、一年前の緊張した気分はゆるみ、ネルソン支配人の突然の退職、事務員も退職、警察署長エンゾ・トリポリ氏もローレーナ市署長となり、カン

ポスは代理署長と、官憲の圧力もゆるみ、日本病院の看護婦長、藤村知子女史も静養をかねて、療養所内で自由勤務をされ、新支配人も英人ステラ女史と代り、ずい分患者達の気分もやわらいで居ました。

私は出聖し、カンタレーラ中央メルカードの近くに下宿、同仁会診療所で働かせて戴く事となりました。当時は武田先生は、サンタクルース病院に半日勤務をされていました。先生は日伯国交断絶以来、日本病院内の日本側の代表として、外務省との連絡のつく迄は勝手に辞することはできない様でした。細江先生は既に伯国医の免許を取得され、帰化人となり、伯人医と同等の権利がありました。

当時から、此の同仁会診療所の実権を持たれ、事務受付には学生上りの後呂定明君が、先生を助けていました。私の就任期には、フエラーズ医師がしばらく通って居られました。開業されて出て行かれ、武田先生不在の午後の時間は、ペードロ・アレト医師が勤めて居られました。看護婦さんも後呂さん、藤村クララさん（知子女史の妹）が働いておられ、戦時中でしたが、日本人の患者や訪問客も多かった其んなある日、（確か私の就職した八月中と記憶している）、突然刑事数名が現われ、細江先生を連れ去りました。此の事件は、其の理由もうやむやのまま、一カ月の先生の拘留で、その間、何の取調べもないまま無事に終わりました。私は出聖早々、此所の事情も分らぬ時の出采事で、私の始めた物理療法の仕事も、

先生不在では仕事もなく、先生のお宅との情報連絡及び、先生の友人の伯人医に相談してみたりしましたが、原因不明ですので誰も意見も無く、唯無駄な日を過ごすのみでした。

先生の御留守宅は御夫人、叔父さん、かおるさん、末娘のルイザさん等で、斉藤儉太郎君と言う、日本病院の職員がポロンで同居していました。此の人は夜遅く帰宅するのみでありました。其の先生の留守中、末の娘さんのルイザさんが、肺炎で発熱し、静子夫人はその看護につきつきり、私が応接間に泊めて戴き、玄関番をつとめました。が、予定通りルイザさんの熱が下らず、武田先生に相談の上、細江先生に面会する事とし、当時、二十才位の木下先生事務所勤務の京野四郎氏に手続きして戴き、京野氏、私、かおるさんの三人連れで面会に行きました。面会場で日系社会の有名人達多数に御目にかかり、又、其の雰囲気明るさ、先生の少しも変らぬ顔を見、先生も薫さんから家庭内の様子を聞かれ、安心された様でしたが私達もすっかり安心し、ルイザさんの病状も御話し先生から指示も受け、帰宅後、静子夫人、叔父さんに報告し安心して戴きました。

当時の日本語を話したと言う理由で引っぱられた人々と大差なく、多分、日本人の出入りが診療所に多かったことが影響したものと思われました。

其の間、当時は一般に日本人宅は相互に余り訪問し合わない様にしておりましたが、或る夜、十時頃、宮坂国

人氏が一人で事も無く留守宅を訪問して戴いた事は忘れられない事であった。先生の友人、伯人医師達も数人見舞いに訪問して戴いた。

又、カンタレーラ街の診療所にも沢山の日系人、伯人達が見舞いに来てくれましたが、其の中には、癌センターのプレジデンテのプルデンテ・モラエス医師もおられ、武田先生から、其の前後の事情を聴かれた様でした。

細江先生が釈放された後は、大変順調に診療所は発展し、全盛時代には患者のフイーラが二階にあった診療所から階下迄続き、カンタレーラ街の歩道迄延びるのは毎朝でした。

漸く、旅行も自由になった時期で聖市在の人々の他に、郊外の人々も多く、ドン・ペードロ公園周辺の日本人ペンソンは其の患者及び付添い人の為に、満員の有様が続きました。

細江先生は、早朝、サンタ・カーザの患者を見廻り、自分の患者で個人病院に入れてある患者も見廻り、診療所に着かれてから、御自分の勉強をされ、私の出勤した時刻は何時も、既に自室で勉強中でした。

当時、私も朝七時過ぎには出ましたが、受付待ちの患者の列はカンタレーラ街の歩道迄延びておりました。当時、私は自分が大病後の体でしたので、こんなに超人的な先生の活動は健康に害はないものであろうかとよく考えたものでした。当時の先生は、波に乗った充実した、最も活躍された時期であったと思います。

物理療法の新しい機械も次々に買って貰い、本も買って私に読ませて戴きました。又色々看護夫としての仕事や、ラボラトリオの初歩も学びました。当時、リオの医大卒業後、帰化手続きの遅れから開業出来なかつた米田医が、半日ラボラトリオで働き、半日は細江先生の紹介でU S P 医学部に、研究の為通っており、私と同じ下宿で生活していました。又当時、患者対医者と言う関係で自由に日本語が詰せる場所でしたので、日系社会のインテリの各氏が多く、情報交換やら、暇つぶしを兼ねた訪問者が多く、私に其の相手をさせられました。それは、私に取って大勢のインテリの方を知り、情報も得、個人的交友を広げ、種々の書物等戴き勉強になりました。三十三才頃の当時の私にとっては、有難い日々の雰囲気を与えられました。

終戦の御詔勅は、早朝にJ O A K 短波で聞きました。先生が、私の仕事室と診療室との間のドアを少し開き、一寸小声で、「清水君、戦争は負けたぞ」、と言われると同時にドアを閉められた時、初めて聞いたのですが、しばらくは茫然として仕事も手につかぬ有様でした。

終戦後は、全て自由に成り、診療所も増々発展に向いました。イタリー戦線から帰国した旧友、氏原正明医師も先生のお骨折りで、当診療所で働く事になり、毎日顔を会わせる事になりました。武田先生が病院に行かれる午後の部を彼が内科医として診察する事と成りました。彼は、一時日本語を使わぬ事にして居たので、日本人の

患者相手では困る所から、私に、出来るだけ日本語会話を
する様と先生から指示され、以采、彼とは日本語で話
す習慣になり、最近迄私とは電話でも、私が下手なポル
トガル語で話しても、彼は日本語で返事をする様になり
ました。彼と私との友情が深まるにつれ、彼も心を開い
てくれた結果であったと思います。

米田ドクターも私の健康には、良く気を使ってくれま
した。先生は、私の特別収入を与える為、ペンソんに住
んで通う患者の三時間毎のペニシリン注射の仕事を下
さったのですが、夜十二時以後の注射は彼が必ず、寝ず
番して私を寝かせてくれました。

私は、カンポス時代に耳を悪くし、難聴の度も相当進
み、その為、人（患者）との折衝に骨折れ、雑音の多い
場所では特に頭脳の疲れを感じます。それと私の受持つ
物理療法の機械からの影響も馬鹿にはできない疲れの原
因となり、私自身の将采を考え、私は自由業で、静かな
職業を持ち、体調の良い時は思い切って働き、悪い時は
自由に休める職と言う条件で、無線通信器を考える様に
なり、当時その方面の良いテキストの無い時代、米国の
戦争中、通信兵教育に使った本を見つけて、それを勉強
しはじめました。その本には、直流理論、交流理論、発
振理論、受信理論とあり、私の当時の物療短波治療器や
直流治療機械等の扱い上でも、その知識は役立ちました。
やはり、七年前、クローヴィス博士が言われた通り、私
の健康は常人の様には成れなかったのです。

私は思い切って、細江先生に私の将来の職についてお話しし、今の仕事を辞したい希望を述べました。

大目玉をくらう覚悟で話したのですが、先生は、案外静かに、「清水君、思い付いたらやってみよ！しかし、世間は君の思う程あまくはない。駄目だと思ったら、又帰って采い」と言われ、以後一カ月間良く仕事の分る看護婦に機械の使用法を説明と同時に実施に立ち会い、その期間も終る頃、私は急性肺炎で高熱を出し、丁度細江先生が往診で外出中に下宿に帰りました。三時頃に氏原医師が来てくれ、診察してくれて左肺尖に浸潤あり、兎に角ペニシリンを打って貫えと言う事で、米田医師の帰宅を待っている所に、細江先生が来られ、「ねま着と齒ブラシ、タオル持参で采い」と言われ、そのまま先生の御宅で一カ月間、応接間のベッドで養生させて戴きました。時間毎のペニシリン注射を受けました。その間の静子夫人の有難いお言葉は今も忘れません。この事は、私が我ままを言った後の出来事であり、穴あれば入りたい気持ちでした。熱も落付き、平熱となり、肺炎の病後の養生の大切な事を先生から論され、以後、空気の良い瑞穂殖民地の松本さんの土地に疎開されていた石井先生のお宅で一カ月余を、養生させて戴き、大事に至らず無事動く様に成りました。以来、先生のお言糞通り、苦難の生活を通りましたが、その間、先生は私の健康について何時も気を使って戴き、危ない所を何時も手助け、指導して戴きました。

其の後、何とか私の夢の人生を細々ながら歩める様になり、結婚しまして、次々と子供を持ち、其の間も夜迄働いた日もあり、一日寝ていた日も有ったと言う生活で、段々と体も馴れて十年間位はテレビサーヴィスで夜十一時まで休みなしで、サーヴィスで歩き廻りました。その間も、良く診療所に伺ったり、お宅にも参上したり、温かい労りを続けて戴きました。

今、振返って私の人生の歩みを見ます時に、先生とのつながりが如何に長い人生で有ったか。何時もあきらめず、私を見守って下さった様に思います。

又、お供してカンポスに行った回数が多かった事、その中の一度は、ルイザさんの岩にも三回お供しました。その中の一度は、変危険な山登りに、目に入れても痛く無いの形容通り可愛がられた末の愛嬢を同行され、ルイザさんを私と先生の間において、少し進む毎に先生から、「ストップ！」の号令がかかり、呼吸を整え、又登ると言う繰返し、良くお供させて戴きました。が、あれは、私の体力の回復程度の試験をして戴いた様に思います。

私は何の間違いか今年満八十三才を越し、八十四才に近づき、確かに老人にはなりましたが、同年の老人に劣らない健康を持ち続けています。又、五人の子供、上が四十六才で下が三十三才で全員健康で社会人に成ることを得ました。この様に家庭健康保持ができたのは、細江先生なくしては、今日有り得なかつたと思います。家族

一同、お陰様で健康を保ち生活しております。せめてこの事実を申し述べ、先生御夫妻のお亡くなりになる迄の四十数年の御温情への感謝の心を表したいと思ひます。

(元同仁会結核療養所職員)

細江先生の思い出

サンパウロ 佐藤 嘉藤治

一九三〇年七月、私は他の独身青年（友人）三人と共に、大阪商船会社のモンテビデオ丸にて日本を出発し、ブラジルへ移民として渡航の途につきました。私たち三人の引率者は伝田寛一郎氏（伝田耕平現南米銀行社長の厳父）で、細江静男先生ご夫妻も、私たちと同船でともにブラジルに向け渡航されました。

伝田さんは細江先生ご一家と親交があり、私もまた何十年にもわたり、先生には病気をするたびに、お世話になり、感謝の気持ちは、終生忘れえざるところであります。

私と家族は、病気にかかればすぐにメルカード（公設市場）の近くにある同仁会の診療所に駆けつけ、細江先生、あるいはまた武田先生、木原先生に診ていただき、日本語でなんでもお話できるので、私ばかりでなく、多く

の日系人がどれだけお世話になったか、計り知れませんが。

第二次大戦最中のある日、私は当時ブラ拓（有限責任ブラジル拓植組合）のアリアンサ移住地第二アリアンサ事務所に勤務していましたが、次男が突然疫痢にかかり、地方の病院二か所で急ぎ手当てを受け生命はとりとめたものの、快復がはかばかしくなく、病児と長男、家内を連れ、サンパウロに出て早速、細江先生に診察していただきました。

先生は「注射のあとが化のうした大たい部の患部は、このままにしておけば治るのに、二年ぐらいはかかる。すぐに手術しましょう」とのことと、直ちに手術し、程なく快復し、アリアンサに帰ることができました。

先生は「手術料は無料にしてあげたいのだが、他の患者とのつりあいの関係もあり、ほんの名目だけにしましょう」とて、わずかばかりの金額をお支払いしました。サンパウロに出るまでの間に、前記二か所の病院などで当時の私としては、かなり高額のおかねを費消してしまっていたこととて、とても大助かりでした。

常々先生は「医師があまり高額の治療費を患者から受け取れば、患者の生命を助け、健康を回復させることができて、患者の財政を破たんさせかねない」と言っておられました。「医は仁術」を先生は文字通り実行していたのです。

前記三人の友人のうちの一人が言うには、細江先生は、小児外科の専門医でもあるとのことと、次男を先生に診

ていただいたことは、幸いだっただと思っっています。

先生よりは先きに亡くなられたしず夫人は、お宅へいつも私たちが訪問したときには、温かく迎え入れ、長話しにいやな顔もせず、よく私たちの言うところを聞いていただき、世間でも、先生への内助の功厚き賢夫人であると評判の高いかたでありました。

どこからか持前の大きな声で先生が「きみたち、日系コロニアのために、また日伯両国の親善のために、全世界の平和のためにしっかりがん張ってくれ」と激励しているように思われてなりません。

(元ブラ拓アリアンサ移住地支配人)

細江ドクターとカンポス・ド・ジヨルドン

カンポス・ド・ジヨルドン 春名 宏文

カンポス・ド・ジヨルドンはサンパウロ市を東へ隔たる百六十キロの地点で、マンチケーラ山脈の中に位置し、標高一千六百五十メートルの高原の町で、現在は人口四万人あると言われている。

気候は年間最高二十七・八度、最低零下八度、国立公園に指定されており、水は清例で高い処にも水が湧き、有名なミナルバ飲料水はカンポスの山から湧く自然の清泉である。

カンポス・ド・ジヨルドンが肺結核の療養に適していることが発見されたのは、昔奴隷時代にパライバ沿岸のコーヒー園主が、自分のファゼンダの奴隷が結核に侵されて使いものにならなくなると、マンチケーラの山の中に捨てたのが、自然の中で自活している内に病いが癒えて元気になって出て来るのを見て驚き、肺結核療養地として開発されたのである。

昔はバンデランテス達がミナス州へぬける道しかなかったので、カルゲイロ（荷馬）二頭に担架を渡して病人を乗せ、山を登って来て患者を療養させたと言われている。

ピンダモンニヤンガバの町から鉄道が敷設されたのは一九一四年であるが、現在ののような電車になったのは一九二四年からである。この鉄道がピンダから四十五キロ、現在の道路SP123号が開通したのは一九七八年でD U T R A 街道まで四十七キロである。

一九三四年頃より日系コロニアにも風土病や重労働のために肺結核患者が激増して、カンポス・ド・ジヨルドンにも「療友会」と言う共同宿泊所があつて患者達が療養生活をいとなんでいた。会長は林田久七氏であつたが何時も利用者は三十名以上であつた。

細江ドクターは同仁会の衛生技師であつたため度々この療友会を訪れ患者達の療養生活を見て、林田会長と共に医療施設のととのつた日系療養所を作ることが急務であることを感じ、時の市長であり医師でもあつたガビオン・ゴンザガ氏と親しくなり、その頃すでに幾つかの療養所はあつたが、それに入院出来ない患者は町のペンソン等にあふれ、さながら結核患者の町であつた。

カンポスにはDISPENSA RIO (施療所)と言ふのがあつて、何人も医者居り、誰でも無料で治療を受けることが出来た。「療友会」の者達も此処で治療を受けたのである。

すでに政府のそうした施設もあり、高原の清例な空気と水の豊かなこの地を措いて他に療養所を作ると言うことは考えられなかつたことである。

細江ドクターは林田氏ならびにガビオン・ゴンザガ市

長と計って、時の外務大臣ジョゼ・カルロス・マセド・ソアレス氏がカンポス・ド・ジヨルドンに宏大な土地を所有して居り、幾つかの慈善団体に土地をあたえているのを知って現在の地を扱んだのであるが、マッセド・ソアレス氏にはカンポスの土地を管理している代理人があつて、その人との間にある程度の合意を得てから同仁会の大河内専務、菱川領事等をともなつて同地を視察させたのである。

実際にマッセド・ソアレス氏と交渉に入つたのは、リオ大使館の内山岩太郎参事官と同仁会の古谷重綱氏などとの間で進められ、無償交附の正式手続きがなされたのである。

寄贈された土地は町の中心から西へ四キロの地点で、広さは十九万二千百十平方メートルであつた。譲渡の条件として森林は保存し特にパラナ松



後列左から、木原暢、武田義信、梅田松磨、芳賀貞一、細江、氏原正明、山根英二、後呂定明、河添 清。 前列左から木原夫人、藤村クラ、土井コトエ、伊藤マリア（現三浦夫人）。

は切ってはならないことと一カ年以内に療養所を建設すると言うのがあった。

同仁会としては中央線のスザノあたりに療養所を作りたい、カンポスは遠すぎると言う意見があつてまとまらず、細江ドクターは鈴木建築技師と計り、サンパウロ総領事館に相談したが、時の総領事市毛孝三氏も申し出が突然のことでそれに当てる予算はなかつたがこの必要性を認め、土地も譲渡されたことでもあり特別会計の中から七十コントスの補助を承諾されたのである。

鈴木技師としてはとてもその程度の金では出来ないとわかつていたが、細江ドクターが強引に鈴木氏を承諾させて療養所の建築に着手させた。しかし、その金は土台を作っただけで終つてしまい、再び総領事館に陳情すると言うような事で、結局二百三十一コントスでこの工事が出来上つたと言われている。

現場の監督は鈴木技師の義父若月操氏が当られたが、細江ドクターも毎週のように現場に出張して工事の進行に関与し、建設発案者としての責任を果されたのである。その頃のカンポスは交通の便が悪く、汽車で来ればピンダから一日二回しか電車はなく、自動車は中央線の各町を通つて、サンジョゼからマンチケーラ山脈に入つてミナス境を通り、二百キロ以上の道程であつた。

細江ドクター達は現場にテントをはつて、野宿しながら仕事をされたと言われている。

落成式が行われたのは、一九三六年九月十五日で、開院して患者を収容するようになったのは、翌年の三七年二月一日からとなっている。

同仁会肺結核療養所の初代院長はDrクロービス・コレイア教授で、細江ドクターは同仁会本部の仕事をされて居り結核患者とは直接関係はなく、年に何回か巡察に来られていたようである。

太平洋戦争がはじまって不穏な空気を感ずるとブラジルが交戦国となる前に同仁会はサンタクルース慈善団体として登録し、療養所もサンフランシスコ・シヤビエルと改名したのであるが、戦争は日本人の旅行も集会も出来なくなつてサンタクルース慈善団体の理事であつた日本人達は出席することが出来ず、自然に放棄した形になりブラジル人の手に渡つてしまつたのである。

しかし療養所には細江ドクターに少年時代からついて勉強させられて来た坂根源吾氏が療養所開設と共に医務職員として派遣されて来て居り、何かと連絡は取つて来たのである。

戦争が終つて日本から外交官や政治家が来ると、細江ドクターは日程のゆるされるかぎりカンポスに連れて来て療養所を見せたり、高原の風土を紹介されていた。

細江ドクターはブラジルのスイスと言われたカンポス・ド・ジヨルドンが好きで戦前からラジアードに小さな分譲地を持っていたが、戦後はペドラ・パウの近く

に土地を買ってボーイスカウトの青年達を日本から呼び寄せたりしていた。bauerにボーイスカウト修練所が出来たのは一九五六年頃である。

修練所が出来ると細江ドクターは毎月のようにカンポスへ来られるようになり、来ると必ず療養所に立寄って病気の相談にも入り、坂根氏宅に宿る時は必ず患者達を集めて座談会を開き、医療面のことだけでなく、精神面では心の持ち方が医療の上にどんな影響があるか、死に直面した時の医者として、患者としての心の持ち方、時には療養所の土地をいかにして貰ったか、予算のない中で療養所の建物をどうして建てたかと言うような苦心談も度々されて居り、医者であり、カトリック信者である細江ドクターの話は患者達を飽かせることがなかった。

細江ドクターの考えには日系医療王国の一大構図があつて日本病院を中心に各日系集団地に出先医療機関を置いて、飛行機・ヘリコプターによつて急患を運搬し、平時はオニブスに医療機具とシネマの映写機を乗せて、日系集団地を廻り、昼は医療に夜は娯楽によつて日系社会を一つにまとめるという構想があつた。ボーイスカウトの青年達を呼寄せて将来は日系社会の指導者になつてもraitaiと願つたのも、その構想の一端であり、一九五九年に日本移民援護協会を発足させたのもその一つであつた。

その頃から細江ドクターは自分のジープで顕微鏡と聴診器だけを持って奥地の無医村地帯を巡回診療に歩き、

遠くアマゾンの果てまでも度々出張して来たのである。

後年日本医師会全長の武見太郎の招聘によつて日本を訪れた時、巡回診療用にと近代的な医療機具一切を調べた大型オニブス三台を寄贈するという話を持つて帰つて来たが、その頃の援護協会にはそれを受入れる地盤が出来ていなかったたので切角のチャンスもふいになつてしまった。

そのように細江ドクターの考えには何十年も先きのことを考えて居たので現実主義的な者達には受入れられない点がままあつた。

しかし細江先生の医療福祉構想も時代の変換とともに形をかえてはいるが一步步進められて居ると言うことが出来ると思う。

追記

戦前の日系コロニアの経済状態では毎月の入院料百五十ミルが滞りなく支払える者は殆んどなく、特に農業者の場合は年に一回しか収穫がないので、入院しても一カ月か長くて二カ月も養生すると途中で退院して行つた。特効薬のなかつた時代は結核は死の宣告と同意語であつた。

初めてエストレプトマイシンが此処で使用されたのは「九四七年で、ヒドラジードとパスが出来たのは五一年である。

今迄病気が悪化・死亡した者が七〇%近くあつたが、特

効薬が出来てから、死亡と全快率が逆転して良好・全快する者が七〇%を越えるようになった。さらにシクロサル、ピラジナミードが五七年、カントレックス、ミヤンプトール等が出来て、使用方法も幾つかの薬を併用するようになる。効果は益々顕著になって九〇%以上の良好・全快率になり、もう結核では死なないと言われるようになった。

特効薬が出来ると、その人の経済状態によって薬の使える患者と使えない患者が出来るようになった。細江ドクターは領事館や救済会にお願いして、坂根氏を中心に患者の救済運動として薬品援助をはじめた、コロニア社会からの援助もこの救済費に向けられるようになった。

良い薬が出来て患者に希望が持たれるようになる。入院患者の数もふえて八十名以上の患者が居るようになった。が、療養所の経営状態は益々悪く、サンタクルス慈善団体の役員達もカンポス療養所の経営には匙を投げて、発足して間のなかった援護協会にその経営を依頼して来たのである。

細江ドクターは医師としての立場からサンタクルス慈善団体のDrフレイタス等と親交があり、サンタクルス病院とのつながりも切れていかなかったため療養所経営委託の話合いが出来、援護協会の中沢会長を動かすことが出来た。

はじめは土地八アルケールと建物設備一切を二十年間の無償借款と言う契約で「九六五年九月一日から援護協

会の経営となったが、サンタクルス慈善団体は病院の経営が悪くなると、カンポスの土地を売りたいと言う意向で、療養所の建物をふくむ土地二アルケールを無償譲渡するから二十年間の借約を解消して欲しいと言つて来る。一九七五年その登録をすませ、療養所は名実ともに援護協会の所有となる。

細江ドクターの奔走によって手に入れた、八アルケールの土地も、二アルケールは一般カンポス市民の住宅地として市が開放し、残り四アルケールは一九九二年療養所の新病棟が落成した時に、マッセド・ソアレス氏のお孫さんの出席を得て、サンタクルス慈善団体より無償譲渡されたのである。此処に全域が日系団体である援護協会に帰することになった。

細江先生は、ある時は患者を叱りつけたりするような処もあったが、いたって涙もろく困っている者には自分を犠牲にしても助けてやるといふようなところがあつた。

何時か昔のサンパウロ総領事であつた内山岩太郎氏が、戦後神奈川県知事として訪伯された時、カンポスにも同道されて、患者たちを集めて内山県知事を紹介するのに、涙で言葉がつまつて出なかつた、というようなことがあつた。それ程、細江先生は内山総領事に恩義を感じておられたようで、大切にされていた。

なお、サナトリオ正門にある細江静男先生の胸像は、一九七六年十一月九日に除幕式が行なわれた。

私の記憶では、木原暢先生が胸像建設委員長であつたと

思う。

(カンポス療養所々長)

(編集部注) 内山岩太郎氏が一九三一年七月、サンパウロ総領事として着任するとともに、それまで沈滞気味であつた病院建設運動がにわかには活発になつた。早速「聖市日本病院建設期成同盟会」を組織し、私財を以て期成箱百六十個を作成し、建設資金の募金を計ると同時に、三三年一月には総領事主催のもとに「日本病院建設準備委員会」を設立。同年六月二十八日、邦人渡伯二十五周年祝典挙行之当日、既に購入済みであつた病院敷地において、定礎式を行なつた。病院建設に多大な努力をした内山氏に、細江ドクターは大いに恩義を感じておられたものと思われる)

命の恩人

南バイア州 鈴木 喜司男

第二次大戦をはさんで、戦前、戦後、日系コロニアにあって、道庵先生と親しまれた、故細江静男医師の追悼回想録が、今度、上梓される運びになった由をうかがい、大変、嬉しく感じております。

あの大恩ある細江先生が他界されて久しく、既に、二十年の歳月が流れる今日、有志各位の熟情によって、かかる機運が生じましたことに、大きな驚きと共に湧き出づる強い感動をおぼえずにはおられませんでした。誠に、大慶に存じ上げる次第です。そして、又、この日系コロニアの歴史に偉大なる足跡を残された先覚者、故細江静男医師の生涯を綴る、かかる試みに、草深い、この南バイア州の奥地から参加させていただく栄誉を与えられましたことに、深甚なる謝意を表する者であります。

然し、何と言いましても、私が細江先生にお会いしてから、三十年の長い年月が経過しており、私も随分、歳をとり、かつての記憶も、大分うすれてきているのであります。御期待にそうべく、当時の日記や諸記録をひもとき、慎重に私と細江先生との初めての出会いを中心に、先生の奥地巡回診療中の御活躍のひとこまを御伝えし、併せて、私の細江先生に対する今も変らぬ心情の一端を御披露したいと思えます。

先ず、始めに少し、自己紹介させていただきますと、私

は栃木県出身で、最初、サンパウロ州のチエテ移住地（現在、ペレイラ・バレット市）に家族十名と共に自作農として入植し、三十年間、農業に従事しましたが、日本移民五十年祭、並びに、チエテ移住地入植三十年祭の後、期するところありまして、この南バイア州に転住して来まして、再度、農業にたずさわり、現在、二十七年になる者であります。

さて、私達が二十七年前、転住し、再び、農業を始めた、この移住地はサンパウロ市から、一三〇〇キロメートルの奥地に位置しており、共に入植した多くのコチア青年移住者、そして私等は人に言えない苦労をして来ましたが、ブラジル語が不自由であった関係もあって、医療保健の面の不安は一入でした。殊に、農薬中毒で倒れる者が続出した当時は、この問題の直接の責任者として、私は農薬中毒者の救済及び、その予防対策について、日夜、思案に暮れる毎日でした。

かかる時期、一九六八年八月九日、巡回診療に采られ

た
江
生
初
て
会
す
こ
と
細
先
に
め
御
い
る
と



カンボス療養所の中庭に建つ
細江静男先生の胸像。

が出来た訳でした。正に、地獄で仏に逢うとは、この様な事情であろうかと思えます。そして、先生の適切な処置を得まして、本問題も、解決に向い、私達、移住地の医療保健、一般も徐々に改善されて行ったものでした。

又、その時、先生から日本移民援護協会、並びに、一九六九年に挙行される、その設立十周年祭についても詳細な説明をいただき、この日本移民援護協会の確立、発展こそは、我々、日系コロニアにとって、目下、最大の課題で、之が達成には皆さん、一人、一人が全員になつて是非とも協力してもらわねばならないと教えられ、その場で、早速、農薬中毒者として先生に診療していただいた十六名は普通会员に、そして、今は亡き大沢達三氏と私は賛助会員にしていたものでした。尚、この時、農薬中毒者として先生に治療してもらつた者達は、間もなく、快癒し今は立派に、成功されておりますこと付記しておきたいと思えます。

又、前述しました如く、細江静男医師並びに日本移民援護協会の温かい御指導によつて、その後、私達の移住地の医療保健の事情は、日、一日と改善されたのでしたが、その途中にあつて、忘れることの出来ないことは、先生によつて日本語で書かれた「ブラジルの農村病」等の熱帯医学に関する書籍を多数、送つていただき、皆で読ましていただいた事でした。

奥地に住んで、終日、農業にいそむ日々、不備な医療保健の生活にあまなじなければならぬ、初期の移住

地に於いては、この日本語で読めた熱帯医学の解説書、文字どおり、私達、各家庭の宝物でした。寸暇を惜んでは読んだもので、熱帯病、つまり、マラリア、黄熱病、其の他から既述の農薬中毒にいたる迄、それぞれの予防対策を講じる時、必要欠くべからざる座右の書として、広く活用させていただいたものでした。今も大切に保存している本書の黒く古びてしまった表紙を見る度に、本書と共に苦労した、往時が思い出されると共に先生の温顔が迫憶されるのであります。蓋し、当移住地の我々にとつて、故細江静男医師は、命の恩人と言つても決して過言ではなかつたのであります。

その後、先生に初めて御会いした後も、数回、巡回診療に采られる度に御会いし、診療の他にも、人生の師として、色々と御指導を受けたもので、日頃の苦闘をねぎらい、励ましていただき、特に、我々の移住地の将来像等については夜のふけるのも忘れ、議論し、御高説を拝聴したもので、今も昨日の如くに記憶に鮮明であります。あの頃を思いおこす時、あの悪路を、あのお歳で、よくぞ、この奥地迄訪ねていただいたもので、さぞや、御苦労なことであつた由と恩われます。之、偏えに、先生の我々同胞移住者に対する強烈であつた医者としての使命感、そして、同胞愛そのものであつたかと拝察いたす者であります。

甚だ、簡単でありますがこの一文を草し、ここに、先生の御偉徳を偲び、御霊のとしえに平安であれかしと

祈念する次第であります。

道庵先生、色々と有難とうございました。

(農業)

ボーイスカウト移民

サンパウロ 内田 克明

一、ボーイスカウト移民のはじまり

(最初に一九五一年当時、日本ボーイスカウト連盟総長であった三島通陽氏の文章を引用させて頂きます) 『日本のボーイスカウトは戦前は世界連盟にずっと加盟していたが、戦前、時の政府の命令によって解散させられて以来、世界の同志仲間とは、ずっと音信不通になっていた。ところが終戦となると各国のボーイスカウトから、大なる声援を得、とくにアメリカのスカウトには大なる援助を受け、イギリスにある国際事務局よりは、大きな導きを得て、日本の子供達のために、この運動の再建が出来ました。そして国際復帰も他の国際団体より、いち早く認められたのであります。

それで復帰後はじめての国際的集りに、なんとか出席して、世界の兄弟に礼を述べねばならぬ立場でありました。また国際的の新しい空気にも接しないと日本は遅れてしまうことにもなるわけですが、しかし当時の日本は

貧乏国であり、それとまだ各方面に理解がなくなかなか困難しましたが皆さんのお蔭と、それにブラジルの在留邦人の援助でやっと国際大会に参加することができた次第です。

(注Ⅱ 一九五一年、第七回世界大会ジャンボリー、オーストリア国にて開催。また当時、日本では海外旅行の航空券購入に関し、海外居住者からの援助が必要であった) この国際大会の帰りにアメリカに寄って本部を訪ね、日系二世ボーイスカウトの実に優秀なことを知り、私がブラジルへ行った理由の一つともなります。

ブラジルには三十五・六万の日本人がいます。その多くは農業移民として成功していた。これらの人々には当然、子供らがいることで、これをボーイスカウトにすれば、日伯親善が子供の時より出采るわけです。なぜならスカウトは世界団体でブラジルのボーイスカウトになることは、同時に日本のスカウトとも兄弟になることになるし、スカウトに関する限り日本のスカウトは世界中で相当の敬意を表されていますし、アメリカにおけるが如く、ブラジルにおいても二世がスカウトになれば、きつと優秀な成績を得ることは明白であります。』

(注Ⅱ 以上は、三島通陽著、一九五八年十二月発行 “音なき交響楽” より抜粋したもの)

それで先ず、三島氏の国際大会参加を可能にしてくれたブラジル邦人間へのお礼と日系コロニアの間に真のスカウト運動を知ってもらおう目的で来伯されたのが、ブラ

ジルで、はじめての日系ボーイスカウト・カラムル隊の一九五四年創立並に一九五六年の初の日本ボーイスカウト移民に繋がるわけであります。

当時、コロニア有識者の間では、子供の躰で何か良い方法はないものかと模索していたようです。

誰れもが子供の時から日伯親善ができて、同時に日本の子供達とも兄弟になれ、このスカウト運動に入って心身の訓練をうけさせることは大賛成で、これから日本からもスカウト指導者に来てもらい、ブラジルのスカウト運動を発展させて行こうと考え実行されたのが細江先生でした。

そこで、先ず第一番に協力者として、細江先生に面識を得て意気投合して参加したのが小畑博昭氏（現日伯援協事務局長）でした。

彼は一九五四年頃、農業移民として采伯しサンパウロ・サンミゲールの阿部種鶏場に勤務しておりましたが、当時、附近に居住しておりましたスカウト指導者のアデルギ・ピストン氏（後にサンパウロ州スカウト連盟主事）の紹介で細江先生を知ったそうです。

小畑氏の参加により細江先生の目標が一步近づいたことになり、実現に向けて加速することになり、先生所有のバウ農場（カンポス・ド・ジオルドン市 サンパウロ中心から二〇〇キロ米、起伏の多い山岳地帯、一九四七年、先生は故郷・岐阜県を思い描いて、白系ロシア人の

老夫婦より購入したと聞いている)を第一訓練所として一九五六年からのボーイスカウト来伯者に提供されることになる。

二、細江先生の訓練所計画案

(注Ⅱ一九五六年三月に記した計画案、原文のまま記載する)

バウ訓練所を中心としてスカウト運動の今後について、大体目鼻のつくのは自立まで三ヶ年、世間に認められるのに七ヶ年とにらんでゐます。

我々の希望する訓練所のモットウは……

第一、すべての人間は友であり、すべてのスカウトは国境、社会的地位、宗教、財産の有無にこだわらず兄弟である。

第二、独立自尊を持し、相より、相働く。

事業としましては、センターキャンプの完成に大体五六年、五七年の二ヶ年をかけ、本年度の第一になすべきは貨物自動車の購入、センターキャンプ場の地ならし、ポンプのすえつけ、そして細江、小畑、内田、オサム、大和田五人名義のCAVERNA (GRUTA) を造ることとであります。

来年度はセンターキャンプの完成、カベルナの増築、山頂までの自動車道路の完成などやります。

他方、自立自営の為に、果樹、野菜、家畜をやりませう。他方、日本スカウトの呼よせについては即ち七ヶ年間に百五十名呼よせ、これを我々のスカウト運動の中核といたしませう。

一九五六〳六名、一九五七〳十名、一九五八〳十七名、一九五九〳二十名、一九六〇〳二三名、一九六一〳三四名、一九六二〳四十名 合計百五十名 若し事業が順調に行すれば五年に短縮出来ます。若し思う様に行かねば拾年計画と変更いたしませう。本年度到着の連中を除き、あとの人々は二ヶ年間で、小畑の下で、ブラジル語の修得（公話）ブラジルの風俗、習慣、気候に馴れ、日系一世人の心理を理解し、夫々の希望により、或は奥地へ、或は市街地へ活動の天地を求め巣立ちする。而して、彼等は、その誓に従って社会人としての生活とスカウトとしての生活を併有した生涯をもつことになる。

丁度、カソリック教のパードレの如く、スカウチズムを実生活にとり入れて行く理論と実行の教師であると共に、バウ訓練所を中心とした共同経済生活の一員でもあるわけです。自分のポストについて自活出来るまで共同体、即ち我々が応援する。彼らが自活し、余有がある様になれば共同体に貢献すると云うシステムで、よきもあしきも兄弟として共存共栄して行くわけです。百五十名が調和一致して歯車に狂なく働く様になれば、もう政府の貸付金などあてにせず我々の手の中でやって行けると存じます。

数字的に、これをみたとき土地代、センターキャンプ、カベルナ（グルタ）の建設費、貨物自動車購入費、ポンプ掘付、五六年度全部、五七年度は部分的、即ち自立自営出来るまでの維持費、以上は細江の責任であります。一九五八年は一切の支出を細江、小畑外十六名で、一九五九年度は三十五名で、一九六〇年度は五十五名で、一九六一年度は七十八名の同志で、六二年度は百十二名で、六三年度後は百五十二名で押して行くわけであります。

第八年目より来る呼よせスカウトは本訓練所で自弁して行くものである。（注Ⅱ当時ブラジル移民は神戸ーサントス間の船賃を日本海外協会連合会より渡航費貸付契約により六年据置の年利五分五厘で借りて来た。一金十万二千円也であり、当時の一ドル三六〇円とすると、わずか二八四ドルの貸付金であった。）そして、第三年度以後に到着したスカウト諸君も経済的協力もボツボツ出来る様になり、キャンプ場も使用出来、その方面からの収入もあるであろうし、又果樹、野菜、家畜の方面からの収入もある様になることと思えます。

かくして、一九六五年以後はバウ訓練所を本山としたスカウト教の地盤がサンパウロ州を中心に、どっしりと尻をすえるわけで、本年到着の六名の弟子と我々二人は開山の主となるわけであります。

五七年にはアルジヤの農園もスカウトに提供いたしませう。

三、日本ボーイスカウト移民実績

「九五六年二月、日本よりボーイスカウト移民として、第一陣二名の東京出身スカウトが到着する。

当時二十一才と十八才の夢多く、若き青年であつた。続いて……

一九五六年五月に三名、七月に一名の計六名〓愛媛、鹿児島、熊本、東京出身。

一九五七年 計五名〓東京、山梨、熊本出身。

一九五八年 計七名〓岡山、東京、鹿児島出身。

一九五九年 計四名〓愛媛、東京出身。

一九六〇年 計七名〓東京、宮城、徳島出身。

一九六〇年五月に四人来たのが、最後で合計二九名であつた。

内一九五六年度、着伯者一名死亡、一九五八年度、着伯者二名永久帰国。

その間、直接のボーイスカウト移民ではないが現地で同志となつた者 計六名。

一九六二年、細江先生訪日後、スカウトではないが、先



ボーイスカウト姿の細江先生

生呼寄せによる永住者 計七名を入れて、合計四二名である。

四、何故、訓練所は完逐出来なかったか

一、第一訓練所が所在したカンポス・ド・ジヨルドンのバウは風光明媚な標高一九〇〇米の山岳地帯で、傾斜、石の多い土地で、農作物をつくる場所も限られており、朝晩、霧が多く、農作物の病虫害が多く発生した。

病気に強いといわれるムラサキ・キャベツ、リオ向けに良いという蕪（かぶ）も植付けたが販路がなく苦労したのを思い出す。

二、全員、農業の素人であったが、当時、山を越えて、一番近くに住んでおられた日本人（旧移住者）の方に、人参、ジャガイモのつくり方を教わりはじめたが、本当に十分の収穫あったと記憶しているのは二年目のみであった。

三、カンポスは他所と違って、特殊な気候（高原地帯）だったので、当時、農作物人参・ジャガイモも、他の生産者とは異った時期に出荷でき、サンパウロ市場にての販価も良く、少い出荷量でも採算が合った。

その内、三角ミナス方面から、カンポスと同じ時期に出荷されるようになり、少い出荷量の上に、きびしい値段の競争となった。わずかの牛・馬も飼育していたが、到底、収入源までには行かなかつた。

四、よって、ボーイスカウトが自活目標を達成しながら

ら、訓練所を建設して行くという計画は、先ず自分達が食べていくためだけでも困難になって来た。

五、細江先生の医業活動による収入の一部をボーイスカウトの生活費に充てるが多くなり、その期間も長く続いたと思われる。これが原因で、最後には、細江先生ご家族の財政面まで相当に圧迫したと思われる。

要は、伯国並に日本ボーイスカウト連盟の応援もなく、個人の力のみで、夢を実現させて行こうとしたところに無理があつたのかも知れない。

六、当時、ボーイスカウト移民の現地に於ける指導者として従事した小畑博昭氏は熱情家で有能であつたが、近代的経営管理並に若者の心理を理解出来ず、常に発生した運営上の疑問と質問に対し、信用の諾否を問うやり方で片付けて来たので、相当の反発があつたし、若者たちの訓練所離れの一因ともなつた。

七、一九六〇年頃より、日本経済は池田内閣が所得倍増計画を打ち出し、高度成長期へと突入して行く。日米新安全保障条約も調印され、日本の復興と共に移民の希望者が激減して行った。

五、後記

ボーイスカウト運動は社会教育運動であり、かつ青少年の彼等自身の国際平和運動である。「そなえよ常に」の標語をもち、三つの「ちかい」を心の源泉―生活信条―

として、十二カ条の「おきて」を日常の物さし―生活規範としている。

十二カ条の「おきて」の中で、三条に「スカウトは人の力になる」という項目があり、スカウトは、いつでも人を援ける用意がある。同じく四条には「スカウトは友誼に厚い」スカウトは全ての人を友達と思い、すべてのスカウトを兄弟として、正しい明るい社会をつくる。

細江先生は五四才頃にスカウト運動を、三島通陽氏を通じて、はじめて識り、日系二世のカラムル隊創立一員となるのみでなく、更に前進（スカウティング）して「おきて」通り、人のためになる理想郷を実現させようと自分を投げ打って努力し、犠牲を払いました。多くの人が五十才を過ぎると、若い頃の熱情も気力も醒め、自分のからの中に閉じこもる人達が多い中で、先生の行動力は、真に貴重で尊敬の念をいだくものです。

先生が、夢見たバウ訓練所はボーイスカウトのセンターキャンプ場として完成できませんでしたが、現在もバウ財団として残っており、夏・冬休みには、若い人達が利用しております。

また四十年前、先生とのご縁でブラジルにくることが出来た四二名の内、残念ながら、一人死亡しましたが、あの頃の若者も、みなすでに六十才前後になりました。先生の薫陶を受けた残りの者はブラジルあるいは日本にて、それぞれ活躍しております。

（元クボタ鉄工職員）

細江ドクターの想い出

パラナ 上野 アントニオ義雄

日本語に “ 出合い ” という、表現の仕方がある。勿論ポルトガル語にも相応しい単語があり、特にどうと言う事は無い訳であるが、長い人生を語るとき、この言葉の意味合いが出会い以降に与える影響力の大きさに驚く次第である。細江ドクターの場合、まさに私の人生における最初の” 出合い ” として、常に心の奥深くに一角を占有しており、半世紀をたった現在も影響力を与えつづけているからである。

と、言ってもあまりにも古い事であり、又当方が少年から青年になり掛けの言わば判断力も白意識もあまりない頃の思い出であるため、当方のその当時の状況を想定することから始めなければならない。まず、年齢は一七才の誕生日を迎えた頃の筈であるが、北パラナのカンバラで生まれて父母が原始林を相手に汗を流して開拓する背中を見ながら成長、地元の小学校を卒業したものの、更に上級に進むには当時クリチーバ市に行かないと周辺には無かった。その頃父（米蔵）はカンバラで農産物仲買業上野商会を経営していたが、仕事のはうは姉みどりの婿に任せてもっぱら教育普及会、北パラナ青年連盟等の創設、運営に熱中していたと記憶している。

ともあれ、上級学校に進学する目的で単身衣川先生を

頼ってサンパウロに出てきた訳であるが、既に原始林から村落に変貌していたとはいえ、カンバラ村以外に世界を知らなかった当時の一七才である私にはサンパウロは外国に来たような大都市であったに違いない。遊学とはいえ自活をせねばならず、恐らく親父の差しがねでブラ拓（ブラジル拓殖組合）サンパウロ事務所に就職することになった。

身分は見習いと言う事で正式に職員となれたのかどうなのか判らない状態で、事務所にいくとすぐ細江ドクターに健康診断をして貰ってこい、との指示を受けた。後で考えると当時は健康であることが唯一の入社資格であったのであろう。

前置きが随分長くなったが、この健康診断行きが細江ドクターとの “ 出会い ” である。先ず先生に関する予備知識が有ろう筈はないが、一見してドクター風の先生に意外に優しく応対して頂いた事である。多少オバーに表現すれば生まれ初めて一人前の男としての扱いを受けて感激してしまった。

これが、先ず先生の第一印象である。上半身を診察してそれでお終いだったと記憶しているが、その後で “ 君は将采何を志望しているかね ” “ お父さんは君に何を期待していると考えているかね ” “ …… 確か、その様なことを尋ねられたと記憶しているが、それに何と答えたかは覚えておらず、多分にしどろもどろになってるくなく返事もできなかつたはずである。記憶にあるのは、その帰

途優しい先生の顔を思い出しながら、この広いサンパウロに頼りになる味方を得たような、えもしれぬ自信と満足感を抱いて興奮状態にあつたことである。仕事柄、初対面の人或いは又若い人に会うこともかなりあるが、その都度その時の印象が思い出され、知らず知らずのうちに実践している。

現在のニッケイ・パレス・ホテルから約五〇米位上方に、ブラ拓の独身寮があり、ここから昼間事務所に通いながらアルバレス・ペンチアード校に通学する数年間、細江ドクターには数回お目に掛かり健康診断ならぬ精神診断をしていただき、礼儀、節度、忍耐、寛容等の日本独特の精神教育を受けたわけであるが、これを身に着けるには日本語を知ることが不可欠と言われ、独学で必死に勉強したものである。その時の訓導がその後の私の人生、特に政治活動に少なからず影響を受けていることを常に感じており、この “ 出会い ” を大切にしている。

(連邦下院議會議員 パラナ日伯商工会議所会頭)

同郷の大先輩

サンパウロ 山田彦次

細江静男ドクターについて、何か書いてほしいという依頼を受けた時、実はなにかから書けばという事と、どれだけあの偉大な細江医師について知っているかという不

安で、なかなか筆がすすまなかった。

つまり、郷土の大先輩に失礼があつてはならない、と言う事が最大の原因であつた。

細江ドクターの年表を調べてみると昭和五年の渡伯となつており、したがって私はまだ生まれてもいなかったことになる。

一九三八年（昭和一三年）サンパウロ市の中心地、コンセレーロ・フルタードの一旅館で、十五、六名の岐阜県人が集まり在伯岐阜県人親睦会がスタートした事になつてゐるが、この発足の三年ぐらい前より、細江静男ドクター（ブラジル岐阜県人会三代目会長）を中心に何名かの人達が県人会を作ろうと話合つて出来たと聞いている。

戦後移住の私がサンパウロに来た時には、細江ドクターのご尊名は誰もが知っており、新聞などにはたびたび登場されていたことを記憶しているが、生前のドクターに会う機会はついに一度も無かつた。

私が細江ドクターを身近に感じるようになったのは、実はずいぶん後になつてからの話になる。

つまりブラジル岐阜県人会とかかわりあいを持つようになり、郷里を尋ねたおり細江ドクターのご息女、細江仙子氏（日伯協会副会長）にお会いしてからである。

今では仙子氏より度々お便りをいただいたりしているが、又こうして細江静男ドクターについての一文を書くころとは、夢にも考えたこともなかつた。

誠に不恩議な因縁といわざるを得ないが、この度は関係者の皆さんのご努力で、細江静男先生の伝記が出版されること聞き、何はともあれブラジル岐阜県人会を代表して、おめでとうと申し上げたい。

(ブラジル岐阜県人会々長)

編集後記

故細江静男先生の追悼回想録の上梓を思い立ち、同志の者達が、一九九四年二月二十七日、アルジャー市の日本カントリー・クラブに初めて発起人会を持った後、本書の表題を「細江静男先生とその遺業」と決定、サンパウロ市の南米銀行本部の会議室に十名の参加者を得て、正式に二十二名のメンバーによる刊行委員会を組織したのは、同年六月二十二日であった。

爾来、重い病床にありながら、刊行を気にする山本勝造委員長の叱咤激励のもと、十二回の会合を重ね、ここ

にすべての脱稿を見るに至り、漸く、細江静男先生の七十四年間の生涯が朝日に輝く氷山の如く、その全容を我々の眼前に、再現する運びになったが、如何にせん、先生の没後、既に、二十年の歳月が経過した今日、先生のかつての友人、知人も少く、氷山の水面下の部分の完全なる解明は至難の業で、途方に暮れた点もあつたこと事実である。

従つて、今後とも読者諸賢によつて、この種の解明、そして修正がなされ、細江静男医師の実像がより忠実に復活されるならば、それは、私達、刊行委員会にとつて、何ら恥辱ではなく、むしろ、望むところである。

故細江静男先生の親友であつた、山本勝造氏を刊行委員長に選出後、同氏を中心に、先生のかつての門下生であつた伝田英二、小畑博昭、そして平尾健の諸氏と私、それに元パウリスタ新聞社の田中光義氏の刊行委員達が結束、先生の主なる遺業の発掘作業を担当し、それに、人文科学研究所々長宮尾進氏と先生の長年の知人であつた清水尚久氏の暖かい御指導が加わり、寄稿者各位の絶大なる御協力を得て、本書の上梓は進行し、約二年弱の年月を費して、その完成を見たものであつた。

今回の、この無謀とも思えた私達の企画が、滞りなく、全作業を終了出来たことに、私達一同、ほっとすると同時に、これは偏に、我がコロニアの皆さんからいただいた、終始変らぬ、格別の御声援の賜物に他ならず、改めて、万腔の敬意を表するとともに、特に、資金面に於い

ては、山本勝造氏を初め、有志各位に多大なる援助を仰いだこと、そして先生の御遺族の方々にも、先生に関する貴重な資料を提供していただいたことをここに明記し、垂ねて、深甚なる謝意を表したいと思う。

先生の没後、二十周年の本年は奇しくも、日伯修好百周年にあたる。この記念すべき、一九九五年に本書「細江静男先生とその遺業」が無事に、編纂、刊行され、故細江静男先生、並びに、故静子夫人の御霊前に捧げ得たことに、無量の感慨を催すものである。

浅海 護 也

刊行委員会メンバー

委員長	山本勝造	吉田揚助
委員	浅海護也	伝田英二
	平尾健	花城アナクレット
	石井久順	神田大民
	小池潔	河添清
	森口幸雄	小畑博昭
	小副川ルイス	大和田誠一郎
	清水尚久	坂根源吾
	橋富士夫	田中光義
	上野正二	後呂ジョアキン
	内山勝男	山内登

(ABC順)

細江静男先生とその遺業

発行	1995年8月
編纂	“細江静男先生とその遺業”刊行委員会
発行責任者	浅海護也 Rua Benedicto Servulo de Santana, 577 Vila Lavinia Mogi das Cruzes - SP CEP 08735-430 Brasil
表紙イラスト	田中慎二
印刷・製本	トッパン・プレス印刷出版会社 Rua Muniz de Souza, 655 Cambuci - São Paulo - SP
